第28回 RYLAセミナー報告

国際ロータリー
第2670・2680地区

“生 き る”

超我の奉仕
2005-2006年度　国際ロータリーのテーマ

2006年3月23日～26日
神戸YMCA余島野外活動センター

目　　次

ＲＹＬＡセミナーの方針・ねらい …… 3
スケジュール …… 3

１日目

開講式
　出席者紹介
　　ディーン　松崎　和博 …… 4
　ガバナーあいさつ
　　第2670地区ガバナー　掛水　俊彦 …… 5
　　第2680地区ガバナー　石井　良昌 …… 8
　ごあいさつ
　　元国際ロータリー理事　今井　鎮雄 …… 9
　オリエンテーション
　　「ロータリーがRYLAに期待するもの」
　　顧　問　深川　純一 …… 11
　プログラムスケジュール説明
　　ディーン　松崎　和博 …… 18
　注意事項説明
　　副ディーン　秋山　紀史 …… 18

オープニングパーティー
　キャビンタイム
　ロータリアンの夕べ …… 22

２日目

講義「自分の人生から感じたこと」
　　学校法人　穴吹学園理事　宝山　秀逸先生 …… 40

レクリエーションタイム
　キャンプファイヤー
　ロータリアンの夕べ …… 70

3日目

講義「環境を通じて、ボランティア活動の実践」
香川大学院地域マネジメント科教授　関　義雄先生 92

思索の時間

バズセッション報告 116

フォーラム
第2680地区パストガバナー フォーラムリーダー　深川　純一 124

4日目

講義　「新たな社会へ生きる」
元国際ロータリー理事　今井　鎮雄先生 147

閉講式
第2670地区ガバナー　掛水　俊彦 157
第2680地区ガバナーエレクト　加藤　隆久 159

参加者感想文 162

参加者名簿 174

第28回RYLAセミナー運営委員会 176

ＲＹＬＡセミナーの方針・ねらい

ＲＹＬＡセミナーのねらいは、受講生の皆様に次のような５つの特色を味わってもらうことにあります。

1．高レベルの講義と討議
2．キャビンタイム（親睦の熟成）
3．自由と規律
4．余島の自然
5．カウンセラーシステム

恵まれた自然に囲まれた余島で、今回のテーマである“生きる”を、講義、キャビンタイム、思索の時間、バズセッション、フォーラムなどを通して徹底的に学び、語り合い、考えていただきたいと思います。

スケジュール

3月23日(木)					集合 (14:00)	開講式 オリエンテーション (15:00)	オープニングパーティー	キャビンタイム ロータリアンの夕べ
3月24日(金)	朝食 (7:30)	講義 宝山秀逸氏 (9:30)	昼食	レクリエーション ヨット、テニス、ソフトボール、アーチェリー、陶芸など			夕食	キャンプファイヤー 親睦の夕べ キャビンタイム ロータリアンの夕べ
3月25日(土)	朝食 (7:30)	講義 関　義雄氏 (9:30)	昼食	思索の時間	バズセッション		夕食	フォーラム キャビンタイム
3月26日(日)	朝食 (7:30)	講義 今井鎮雄氏 (9:00)	閉講式（11:30） 昼食 離島					

8　9　10　11　12　1　2　3　4　5　6　7　8　9　10　11　12

開講式

開講のあいさつと出席者の紹介

ディーン　松　崎　和　博
（高松グリーンRC）

このライラは今年で28回目ということで全国でも歴史のあるライラセミナーであります。そのためわれわれライラのスタッフが一年間を通じて如何に中身のある講義ができるか、受講生のみなさんが喜んで頂けるか、いろいろと企画させていただいております。今回は「生きる」というテーマです。明日の講義では宝山秀逸先生、三日目には関義雄先生に講義をいただきます。今日講師の宝山先生が、皆さんの様子を一日前からきて見たいということで、今おいでいただいてます。宝山先生、ご起立お願いします。そして最終日に今井鎮雄先生にまとめということでお話いただきます。この中で皆様方にいろいろと考えていただき、また考えるだけでなく、ギャビン、フォーラムを通じてそのことについて徹底的に討論していただきます。普段の自分を超えるくらいしゃべっていただいて、またみなさん仲間といっしょに話し合ってください。そうすることでまた新たな発見があり、多くの友人ができると思います。三泊四日のセミナーですが、皆さんどうか頑張っていただきたいと思います。それでは出席者のご紹介をさせていただきます。

2670地区ガバナー、掛水俊彦様です。

2680地区ガバナー、石井良昌様です。

2670地区顧問の三宅洋三先生です。

2670地区ガバナーエレクト、飯忠悟さんです。

2680地区ガバナーノミニー、三木明さんです。

2680地区でスタッフでもあります、また顧問の深川純一さんです。同じく安平和彦顧問です。アドバイザーの本山新三さんです。2670新世代委員長の岡内紀雄さんです。2680地区新世代委員長の井奥寛泰さんです。それと今日受講生のお世話をしていただきます、A班のカウンセラーの福島さん、女性の方が、永田さん、B班のカウンセラーをしていただく、白石さん、それとB班のカウンセラーをしていただく、吉岡さん、C班のカウンセラーをしていただきます安行さん、高橋さんです。D班の徳梅さん、石川さん以上のカウンセラーに班毎にまとめていただきます。またいろいろと、もし分からない部分があれば、カウンセラーの人に聞いていただけたらと思います。最後になりましたが、わたくし松崎と副ディーンの秋山が今回のライラセミナーの進行とお世話をさせていただきますので最後までよろしくお願い致します。

それではさっそくですが、2670地区掛水ガバナーよりごあいさつをお願い致します。

ガバナーあいさつ

国際ロータリー第2670地区
ガバナー 掛 水 俊 彦
（高知北RC）

みなさんこんにちは

ご紹介いただきました2670地区の掛水と申します。よろしくお願い致します。ようこそ余島ライラへと皆さんを歓迎申し上げたいと思います。目的は改めていうまではございません。若い人たちのリーダーをどのようにここで養成していくかチャンスを得られるかどうかそういうことを主題にしましてこれから三泊四日、皆さんといっしょに考えていきたいと思っています。この地区は兵庫県が2680地区、四国が2670地区といいます。この２つの地区が28年も前からこういった形で協力しまして、みなさん若い人たちを指導できればということで頑張っているわけでございます。どうかみなさんを応援していただきたいと考えております。今年はロータリーが出来ましてから101年になります。去年で100周年でございます。一世紀をえました。去年の７月から101年目に入りまして、二世紀の最初の今日はライラということになります。といいましても特にどうということはございませんが、まあスタートの年だということを皆さんご理解いただきたいと思います。ライラといいますのは正式に取り上げらるようになりましてからは35年でありますが、ここの地区では先程いいましたように28回目ということでございますけれど、非常にユニークな運営をしておりまして、日本の地区の中では34地区ございますが、そのなかで最も高い評価を受けているライラでございます。そういうこともご理解の上でお話を聞いていただきたいと思います。わたしは今日ここでこの会議が２つの大きな目的があるのだということを皆さんにお話をしてみたいと思います。その２つとはいうまでもなく青少年の指導する養成者をどのように指導していくか、教育するかということがまず第一点、それから第二点はまずロータリーを皆さん知っていただく。ロータリーを理解して頂きたいということも大きな目的といたしました。

みなさんにお聞きしたいのですけれどロータリーということをご存知ですか。先程ローターアクトの方もいらっしゃいましたが、ロータリーの事を知っていますか。ロータリーの本で今年の一月号にロータリーってなぁにというようなテーマで世界の若者たちの意見を聞いたアンケートがありました。車の方向を転換する環状道路というようなのが出ていました。決してそうではございません。またロータリーはお金持ちのお昼ご飯を食べる会でしょう。ということも聞いたことがあります。そういうことではございません。決して我々ここに並んでいる方はお金持ちでも何でもございません。そのこともご理解いただきたいと思います。皆さんがここに来るまでにロータリーの事をここに来ることになって初めてロータリーという言葉を聞いたというかたがいらっしゃいましたら手を上げてください。何人かいらっしゃいますね。そういう人たちにとってわれわれだってもロータリーということは完全にわかっていない。わかっていらっしゃるのは前にすわっている深川先生ぐらいじゃないかと思います。本当にむずかしい奥

域のあることでございますのでぜひひとつ一生懸命勉強してください。ロータリーの詳しいことについてはこの深川先生、それからもうひとりふたりの柱になる先生がいらっしゃるのです。そのふたりの先生は今日いまお見えになっていませんですが、今井鎮雄先生、ＲＩ国際ロータリーの理事をなさった方でございます。それからいま申し上げました深川純一先生。このお二人がこの会の精神的な支柱であるというように私は考えております。私ども兵庫県と四国がいっしょになってやっておりますけれど、本当にお世話いただいているのはこの兵庫県の方のロータリアンの皆さん、ということで我々は理解致しています。どうかひとつその辺につきましては、ご指導いただきたいと考えております。

ただ一点私は、ロータリーについて強調したいことがございます。それはロータリーは人づくりを最も大切にする団体であるということであります。ロータリーは数多くのプロジェクトを組んでおります。人づくりに係わるのが大変多いです。ちょっとあげておきます。インターアクト、ローターアクト、これ皆さんわからないかも知れません。それから長期、短期の高校生の外国との交換、それから国際親善奨学生これは大学生、社会人の親善大使として外国に行って勉強して貰うのを応援する。それから外国からきている学生を応援する米山奨学会というのがございます。それは毎年千人近くの学生を応援しております。そういうことを主塔にやっておりますが、その中で理解していただきたい。たったひとつだけ例をあげていただきたい。何をやっているのか、社会のプラスになることをやっているということを知って貰いたい。

この世の中には20年前まではポリオプラス、ポリオというのは小児麻痺ですね。これが毎年30万から40万人の子どもたちがそれにかかっておりました。1985年20年前になりますけど、これに対してなんとかしなければと立ち上がろうとこの地球上からポリオを追放しようとロータリーが立ち上がりました。多くの団体の協力を得て、20年たった今、35万、40万の患者が出ていたのが、１年間で1,000人足らずのところまで追い込んだ。世界でですよ。今年中に一人も発生しなかったらこれから３年間経過を見て、小児麻痺が一人もでなかったら完全に撲滅ということになる。前にも実は2000年のときに一回やったのですが、失敗したのです。二度目の挑戦をしております。そういうことをやっている団体ある。後一歩でこの地球上からポリオを小児麻痺を追放することができる努力をしている団体であるとその一つだけ皆さんにご紹介をしておきたいと思います。

もう一つの目的についてお話をします。

先程いいましたように青少年の指導者を目指す若い人たちを育成するということでございます。本来今日のライラの最大の目的でございます。しかし現実的には非常に難しいということを皆さん、我々感じております。その辺をどうするか、何が一番いいか、私が考えたら、やっぱり素晴らしい人に会って、長期間お付き合いして、そういう人のいいところを吸収するというのがやっぱりいいのではないかと思います。しかしそれがなかなか難しいのです。

ただしつい最近、素晴らしいお手本といいますか、理想像が出ました。それは皆さん何だと思いますか。アメリカでつい先日、野球がございました。ＷＢＣですか。その時に日本は崖っぷちまで追い詰められた。それがアメリカが負けて息を吹き返して、優勝までいった。その原動力になったのは、何だと思いますか。私はそのリーダーシップを持った人が二人いたと思います。一人は王監督、それはやっぱり素晴らしい監督だと思います。発言なんかも大した物だと思います。王さんは青少年にしてはちょっと歳がいきすぎています。もうちょっと若い人、それはイチローです。イチローが素晴らしい活躍をした。彼がい

なかったならば、おそらく優勝は無理だったのでは、と考えております。最近本当に若い指導者はこういうようにあるべきだというようなお手本を彼はプレーの中で見せてくれました。思いがけないアメリカチームの敗退ということにも救われましたが、日本のチームの優勝は、イチローなくしてはなかったということでございます。

日頃、私イチローに対しては非常に彼らに対して球道、球を求める道を求めるといいますか、あわせてボールの球、球を求めるといいますか。球道という点で非常に尊敬しております。姿勢というものを。ある意味では松井なんかは足下にも及ばないぐらい彼は素晴らしい物を彼は持っているのではないかと思っております。しかし今度の大会では全く別人のようにリーダーシップを見せてくれました。そのひたむきさには誰もがおそらく感動したものかと思っております。そんなことあまり言い過ぎましたら批判があるかも知れませんが、イチローに若き指導者の鏡を見たと私は考えております。ライラの皆さんの人間像であると私は思いました。今日から4日間ライラが開校致します。みなさんは若者らしく、のびのびこのセミナーに入っていただきたいと思います。そして、余島の春を楽しんでいただきたい。その中で指導者には何が必要なのか、というもののかけらでも結構です。何かをちょっとでもつかんで帰っていただきたい。そして将来、年をとりましたときにここの余島の4日間どのような記憶に残っているか、どうかひとつ素晴らしい記憶になって残るように心からお願いしまして私のごあいさつとしたいと思います。どうもありがとうございました。

ガバナーあいさつ

国際ロータリー第2680地区
ガバナー　石　井　良　昌
（尼崎西RC）

みなさんこんにちは。いまいろいろライラセミナーの目的、いい呼び物につきまして、全て掛水ガバナーがおっしゃっていただいたとこのように私は思います。

ロータリーというところは出会いの場であり、喜びと感動と幸せを与えてくれるところだとこのようにある先輩がおっしゃいました。わたしもその通りだなあと思っていままで21年間ロータリーと共に暮らしてまいりました。私はこのライラセミナー、これも同じ事だと思います。皆さんとの出会いそして、喜びそして感動、そういったものが後々の幸せに繋がるのだなあとこのようなお考えを持っていただけたらいいなあと思っております。先程、掛水ガバナーがおっしゃったように我々は、このみなさん方がいいリーダーを育てることを目的に致しております。

私は尼崎西ロータリークラブというところなのですが、今日出席している板倉さん、この方が、是非ライラにいってみたいとこのような志願をされまして、私共のクラブのところにいってこられたというのが事実でして、私は素晴らしい方だなあと思ってましたら今日は船着き場で偶然会いまして、この一番前に座ってる方ですが、京都大学に通っておられるお嬢さんですけれども、これもひとつの出会いだなと私は思いました。

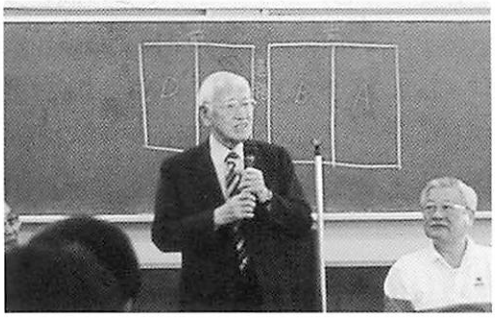
そして本日のセミナーのテーマというのが、「生きる」ということですが、私はこの「生きる」ということは自分自身を生かされて生きるというような意味にとっております。親が子どもを殺したり、また子どもが親を殺したりというような本当に、いま皆さん方もご存知の嫌な世の中だと思います。こういう時だからこそわれわれこのロータリーで人に対する思いやりとか人のために尽くすといったような精神を私たちは持っておりまして、それが奉仕の理想とか超我の奉仕ということでございますけれども、そういったものを大切に致しております。せっかくこの世の中に生まれてきたんですから、世のため人のために役立つように貢献できるように生かされて生きていきたいとこのように私自信も思っております。

こういった社会貢献とか、活動の根底となっていくことは何かといいますとこれは人間愛であるということを心に刻んで今後とも取り組んでいって欲しいとこのように思っております。如何に人のために生きることが出来るかということを考えて今後の活動に活かしていってほしいと思いますし、活かされて生きていって欲しいとこのように思います。

今回のライラセミナーで生きるということの大切さを皆さん再認識していただければ幸いだと思っております。簡単でございますけれども、この4日間素晴らしい研修になりますことをまた有意義な研修になりますことを祈念申し上げましてご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

ごあいさつ

元国際ロータリー理事
RYLAセミナー顧問
今　井　鎮　雄
（神戸西RC）



初めての方もおられますと思いますが、ここにおられるパストガバナーや先程のごあいさついただいた掛水ガバナーあるいは石井ガバナー、いろいろお話いただきましたけれども、私実は1980年のガバナーでありまして、その時にライラをしようじゃないかと先程からお話のあった、たぶんあったんだろうと思いますが、深川さんともお話した、まだしていない、ちょっとタイミングがくるっていますが、深川ガバナーがその時もですね、青少年の委員長をしておられたので、ぜひ若い人たちといっしょに新しい時代を担おう、そのために若い人たちといっしょに生活をしようと、いままでバラバラじゃなくて一緒に生活をしようということで始めたのがこのライラであります。

私はここに来て一番大事なことは、みなさん方世代が随分替わりました。ことにこのごく最近この２、３年の間にまた少し時代の価値観が違ってきましたね。たとえばニューヨークのツインタワーが壊されたという事件がありましたが、アメリカという国は、はじめはみんなの民主主義の国だといって、一生懸命やっていました。ところがあれからアメリカもよそから攻撃されて人が死ぬことがあるのだと考えたときに、もう民主主義なんていっておれないと、国益だといってですね。イラクやアフガニスタンに爆弾を落とすということになって、すっかり価値観が変わってきました。もっというと時代が何を求めていいかわからなくなってきて、どうして生きていっていいかわからなくなってくる時代であります。

こんな時代の中で今回のテーマは「生きる」という題をつけて、みんなといっしょに話し合おうといって、私もう数え年だと87ですよ。満85過ぎました。そういう私は生きるということをあんまり考えなくてもいいのですが、みなさん方はそうじゃなくて、どう生きて新しい時代を作るのかという大事な仕事があるのです。私たちはそのことをみんなと一緒に考えるということをここでやっていきたい。そして是非、先程からたぶん掛水ガバナーや石井ガバナーがこのライラをした理由っていうようなことについて、或いはロータリーがこんな使命を持っているというようなことをいったと思いますが、それらを皆さんが引き継いでいただいて、是非新しい世界、新しい私たちの将来に向かってどんな地球社会を作るのか、どんな国際社会を作るのか、どんな国を作っていくのかということについて真剣に考えていただけるような機会になれば私たちは大変ありがたい。

私もつい先ほど11時まで、体の不自由な大変ひどい障害を持った子どもたちの幼稚園の卒園式に行ってきました。みんなお母さんにだっこされないと自分では歩けないような子どもたちがみんな来て、そしてあなたは元気でいいですね。保育園を卒園しましたね。そして小学校へ行っても新しい社会に大事な人間として生きて下さいね。みんなと友達になって下さいね。というようなことをいってきました。世界の全ての人たちが何か違った形でそういうことを考えるこ

とが必要たと思います。どうぞこの間いっしょにいますからみんなと是非仲良くしていただきたい。最後になりましたが、今井と申します。どうぞよろしくお願いします。

ロータリーがライラに期待するもの

元国際ロータリー理事
RYLAセミナー顧問
パストガバナー　深　川　純　一
（伊丹RC）

どうも深川でございます。

いま今井先生が、28年前にこのライラを始めたとおっしゃいました。私は28年前に今井先生に導かれて、このライラに参加した訳でございます。それ以来多くの事を学ばせていただきました。今井先生の言葉はいつ聞いてもあったかいです。みんなを抱擁していく力があると思います。今日はディーンがロータリーがライラに期待するものというかたちでしゃべれということでありますが、まずロータリーということを先程ちらっとお伺いしたら、知っている人がちらちらとおられるぐらいで、あまり詳しい知識はないと思います。したがってまずロータリーの話から入っていって、最後にライラというものがどんなものかということをお話したいと思います。

先程、掛水ガバナーがロータリーってお金持ちのクラブでありませんというのをおっしゃいました。いままさにその通りなのですが、ただ、日本のロータリーは昔はかなり事情が違っていました。アメリカのロータリーが始まったのが、かなり事情が違っていた。戦争に負ける前の大正から昭和にかけての日本のロータリーのことをちょっと紹介しておきますとこれはまさに大金持ちの人たちの集まりだったんです。米山梅吉先生という方が三井銀行の常務をなさっておりましたが、その方が日本のロータリーを初めて作られて、大正9年の10月20日に東京の銀行クラブという丸の内にありますが、公称物当然たる建物の中で、ここの声を上げた。これが日本のロータリーのはじまりであります。そのころは正に億万長者の人たちがメンバーに入っておりました。どれぐらい金持ちかといいますと半期のボーナスが一万円、いまなら大したことないと思いますが、その当時、大正の始めの一万円というのはですね、大学卒の初任給がだいたい60円だったころです。その時の一万円でありますから、いまジャーナリストが計算してみますと大体半期のボーナスが10億円くらいだといいます。それが半期です。そして給料はそのほかにあるんですね。そのぐらい巨万の富を持った人たちばかりが集まって始まったのが、日本のロータリーです。

ところがいまはそうじゃないのですよ。戦後は民主主義になりまして、資本主義も修正されましたからそういうことはございません。先程掛水ガバナーがご紹介されたように、みんなコツコツ汗水流して働いておる本当に真面目な人たちの集まりになっておりますけどね。昔はそうだった。そういうことをちょっとご紹介しておきます。アメリカのロータリーはそうじゃなくて、はじめは全く貧乏人の集まりだったのです。いまから丁度100年前に1925年の2月23日にポール・ハリスという青年弁護士が、3人の友達とお話し合いをしてそしてクラブを作ろうじゃないかということで始まったわけであります。当時のシカゴの町は不況で、いまの日本みたいなものでございまして、大変厳しい経済状況で

あったのですが、みんながお互いに助けあって仲良くして、そしてみんなで隆々栄えていくような楽しいクラブを作ろうじゃないかといって出発していった訳であります。

まずひとつどのような人たちを会員としていれようかという問題が一番最初に出ました。ポール・ハリスという青年弁護士はお互い資本主義の社会では同業者というのはお互いに食うか食われるかの競争をしているのでどうしても心を開いて仲良くできない。だから同業者を省いて、一つの職種から一人だけ会員を選ぶと同業者がいない。そういうクラブであればみんな仲良くできるだろうとそういう形で、例えば魚屋さんから一人、お医者さんから一人、弁護士から一人とそういうようにして一つの職種から一人だけ会員を選んでクラブを作っていった。これがロータリークラブの出発点だったのであります。そして豊かなお金持ちは一人もいなかったのです。大学を出ていたのは、ポール・ハリス一人だったのです。そういう状況で始まったのが今のロータリーのそもそものはじまりでございました。

やがて反省が出てきました。みんなお互いに助けあって豊かになってきた。どんな反省かといいますと、ドナルド・カーターという人にロータリークラブというのはみんなが助けあって豊かになって楽しいから君も入らないかといって勧誘したのです。そうするとドナルド・カーターがロータリーの話を聞いておりまして、しかし一つの職種から一人しか会員を取らないんだろう。そしたらロータリークラブに入れない人、同業者はいったいどうなるの。それから君たちは職業人の集まりでしょう。みんな職種を持っていますから職業人の集まりでしょう。じゃあ職業を持っていない一般地域社会の人たちはどうなるのか。自分たちはこの地域社会に生まれて、地域社会でお世話になって、そして育てられてきた。このお世話になっている地域社会に対してなんらの恩返しもしない。そして自分たちだけがお互いに助けあって、隆々と栄えて楽しくやっていく。そんなエゴイズムのようなクラブは、永続性がないだろう。自分はそんなエゴイズムのような人生を送りたくないよ。といってきっぱりとロータリークラブに入ることを断ったのです。

その話を聞きまして、いたく反省したのが、さきほど申し上げた、ポール・ハリスという弁護士だったのです。カーターのいうとおりだよ。クラブのいき方を変えようじゃないか。そこからロータリークラブというのは世のため人のためのことも考えるそういうクラブに変わっていったのであります。

そしてロータリークラブができて3年ぐらいたって、この世のため、人のために働こうよ。とこの世のため、人のためといいますとサービス、奉仕という形で集約をしたんであります。世のため、人のためのクラブであれば、何もシカゴにだけあるべきすじあいじゃないだろう。世のため人のためのクラブであれば、これは社会にとって有用なのだから全アメリカの地域社会のクラブを作っていこうじゃないか。とこういう形になって、ロータリーを拡大していこうよという運動につながっていったわけでございます。

そしてロータリークラブが、最初のシカゴクラブができて、3年目にクラブナンバー2のサンフランシスコロータリークラブができました。そしてこのようにして次々、ロータリークラブができていきまして、現在では、全世界で3万を超えるクラブがあります。そして120万ぐらいのロータリーのメンバーがいます。ロータリアンといいますが。こういう巨大な組織になってきたわけであります。日本でもやはりいま2千3百くらいクラブがあります。会員数が10万余りだったと思います。ところでこのシカゴクラブをはじめ、次々次々クラブができていったのでありますが、たくさんの人たちが集まってきた

だけではそれは烏合の集であります。たくさん集まってきた人を合理的に管理していくことができなければ、ロータリーという一つの運動体として発展することはできない。

そこでロータリーは1910年ロータリークラブができてからだいたい5年がたったときに、この各ロータリークラブの間を連絡調整していく、こういうひとつの連合体をつくったのであります。全米ロータリークラブ連合会、当時全アメリカに16のクラブがありまして、それが連合体をつくったわけであります。やがてイギリスにもできます。カナダにもできます。ロータリークラブができていきました。こと国際的になったっていうので、全米ロータリー連合会を国際ロータリークラブ連合会と名前をかえます。そしてさらに10年たって1922年に国際ロータリーという形で名前をかえましてね、たんなるクラブの間の連絡調整だけではなくて、そういう連合体が各クラブを直接監督する機能を付け加えていったので、ちょっと難しくなりましたが、ごめんなさいね。

そんな形でようするに全世界にロータリークラブが広がっていった。これが現在の状況でございます。現在では全世界に3万余りクラブがありますが、それを50クラブぐらいずつ40クラブから50クラブずつ、グルーピングを致しましてそれを地区といっております。今全世界には530の地区があります。そしてその地区に国際ロータリーの役員であるガバナーを一人ずつおいていきます。ということは530の地区でありますから530人のガバナーが全世界にいることになりますね。そしてガバナーその役員がその地区内の50から70ぐらいのクラブの連絡調整にあたらせておるということになるわけであります。

いま申し上げました全世界にある530の地区の一つでありますこの2670地区っていうのはこの四国四県をもって一地区とする地区であります。そしてその地区のただ一人の役員として掛水ガバナーがおられるわけであります。そして2680地区というのがありまして、これは兵庫県全体を一地区とするものでありまして、石井良昌ガバナーがその役員として、着任をしておられます。

ガバナーというのは一年任期です。一年毎に交代していきますそして無報酬です。いわゆるボランティアですね、報酬はいっさいいただきません。そういった形でこのロータリーの世話をしておるわけであります。つぎの年度、今年の7月から就任される方をガバナーエレクトといいます。そして再来年ぐらいから就任される人をガバナーノミニーといっております。そしてガバナーを済ました人をパストガバナーといいまして、今井先生がもちろんパストガバナーでありますし、私もパストガバナーで、今井先生は1980年のガバナーでございますし、私は丁度それから10年後の1960年にガバナーを致しました。丁度今井先生とは10年違うのでありますが、還暦の年にお互いにガバナーになった還暦ガバナーであります。

パストガバナーとはそういう意味でありまして、ガバナーを経験した人とこういうふうにご理解をいただきたいと思います。そこでだいたいロータリーの組織のことを簡単に申し上げました。ロータリーですね。そうするといったいどのような活動をしておるのかということを申し上げたいと思います。

20世紀の初頭1905年当初ですね、非常に素朴な奉仕活動をしておりまして、たとえば冬の寒空にですね、新聞売りの少年が新聞が一枚も売れないで困っておる。そこを通りかかったロータリアンが、おじさんがいいところへ連れてって上げようといってね、その子どもをクラブの例会場に連れていって「おーいみんなこの子どもが困っておるから助けてやってくれよ。何をやったらいいか、わかるだろ。」みんなが「、わかったわかった」といってそして新聞を買って

やり、そして中にはジャンパーなどを着せかけてやる。少年は本当に嬉しそうな顔をして「おじさん達ありがとう」といって帰って行く。その後ろ姿をみんなは見て、ああ世のため人のための奉仕をしたんだなあと納得をする。こういう素朴な奉仕活動をまずやっていたんであります。

それからまたお金がなくて、苦学をしている苦学生に対して、奨学金を出したり、それから先ほど今井先生がお話なさいましたが、身体に障害のある人に身体障害者の養護学校をつくる運動をしたりですね、それから台湾で地震が起きたとかそういう災害が起きたときに救援活動をしたりしております。そういう形で困った人を助ける運動をしておったわけであります。やがてロータリアンは職業を持っている職業人でありますからそういう困った人を助けるそういう弱者救済だけではなく職業を通じて、自分の職業を通じて、私なら私の職業は弁護士でありますから弁護士という職業を通じて世のため人のため奉仕をするとこういうことを考え出したのであります。

たとえば職業人として自分の業界を改善していくとか、あるいは賄賂をおくってはダメだよとか。汚職をしてはダメだよ。とかそういう世のため人のためにですね、成すべき事、成すべからざる事をお互いに誓い合う。いわゆる倫理の提唱をしていく。こういう形になっていったわけでございます。従って弱者救済、困った人を助けるこれも大事なこと。それで一方は世の中に倫理を提唱していく。道徳のある人間を育てていく。そういうこともやっておったわけでございます。

それからまた青少年の若い人たちを育てようという形で高校生の年代の子ども達で組織するインターアクトクラブというのもつくりました。これは1962年につくっております。それから更に6年後には1968年には18歳から30歳までの青年男女を持ってローターアクトクラブというのもつくっております。このように致しましてこの今回のライラもですね、このような青少年、若者たちを育成する、育てていくプログラムの一つなのであります。

それからこのロータリーはちょっと特殊な活動をしておりまして、それはロータリー財団、ロータリー財団というものをつくっております。この活動はですね、ロータリアンがいろいろな寄付金を出して、そしてつくられた団体でありまして、この団体の活動は非常に多方面にわたっております。例えば台湾で地震が起こると救援資金を出す。全世界的にポリオの撲滅を目指して運動を実施しております。全世界の若者を対象に奨学金を出して、ロータリー財団奨学生というものを育てていく。

このようにロータリーの活動分野は非常に広うございます。そしてこのライラもですね、このロータリーの開発したプログラムの一つなのであります。ライラというのはお手持ちのあれに解説があると思いますが、ロータリーのR、ユースのY、リーダーシップのL、アバーズのAこれを頭文字をとってライラといっているわけであります。日本語では青少年指導者養成セミナー、養成計画というふうに訳されております。青少年のリーダーとして青少年を指導する立場のある人たちを養成する、青少年のリーダーとして青少年を指導していく。そういう人たちを養成するプログラムであります。ライラの発祥はそれもお手持ちのパンフレットに書いてあると思いますが、1959年であります。かなり古うございますが、オーストラリアのクリーンズランド州という州がありますが、その州の創設100周年記念式というのがありまして、その時にオーストラリアのブリスベンロータリークラブが、イギリス王女と同年代の青年男女を集めまして、社会教育プログラムを実施したのです。これがはじまりでございます。

その後このライラというのは全くなかずとば

ずでありまして、あまり発展しませんでした。しかし1974年にですね、アメリカのワシントン州のタコマで開催されてから正に草原ののびのように全世界に広まっていったのであります。1974年、それから4年たって、1978年に今井鎮雄先生が企画されたこのライラが始まったわけであります。

このライラはアメリカで始まったオリジナルなライラと若干趣を異にしております。といいますのはオリジナルなライラってのはですね、18歳から24歳までの青年男女を対象にしておりますけれども、このライラが対象としておるのは20歳以上の青年男女でございまして、上限はありません。昔は60歳近い方も受講生として来ておられます。

その理由とするところは何かといいますと、日本の現状を考えますと青少年の指導者として訓練するには18歳から24歳まで、こういう年齢ではあまりに低すぎて指導者として適当でない。今井先生はこういうふうに考えられたのであります。そこで今井先生の発想によりましてオリジナルなライラを日本の実情にあわせてアレンジしたのがこの今回のライラでございます。このライラは受講者の皆さんがいろいろキャンプファイヤーの燃やし方だとか縄の結び方とかいろんな技術的なことは既に修得されていることを前提に致しまして、更に高い精神的な境地へ導くということを狙いにしております。従って非常にレベルの高いものとして企画されております。

このセミナーは明日から3日ございますが、セミナーの講義もだいたい一流の先生方によるものでございまして、わずか60人ばかりのこの受講生のためにですね、はるばる一流の先生を呼ぶ、こういう意味ではですね大変豪華なプログラムだろうと私は思うんです。従って講義を消化する能力を考えまして、受講者の年齢を20歳以上、少なくても大学の教養課程を修了した年代、そういうかたちで20歳以上にしている訳でございます。

で一つお断りをしておきます。明日から講義がはじまりますが、この講義というのは話し手と聞き手の共同作業なのであります。従って講義の途中でこの部屋への出入りはいっさいないようにお願いしたいと思います。部屋の出入りによって講義の雰囲気を壊すということは皆さんに迷惑をかけることになります。それから第一に講師の先生に失礼であります。それから真面目にこの講義を聴いておる人たちに対しても失礼であります。私たちがお互いに信頼の世界に生きておるわけでございますからどうかみなさん方も自分の良心に従って自律、自らを起立して下さい。自らを立つのでなくて律するのです。皆さんの良心に従って自律をしていただきたいと思います。

このライラはですね皆さん方の自律ということを大前提です。従って何をするにも基本的には自由であります。ご飯を食べたくなければ食べなくても結構であります。基本的には自由でありますけれどみんなで何かをするときには必ず時間を守っていただきたい。例えば講義がはじまる時には必ず時間を励行してください。時間というのは万人の共有物なのであります。一人が時間に遅れますとみんなが迷惑を被ることになります。これを一つ心に留めておいていただきたいと思います。それからこのライラの非常に顕著な特徴を一つ申し上げておきます。これはカウンセラーシステム、カウンセラーをおいている。先ほどカウンセラーの方のご紹介がございましたね。なぜカウンセラーがあるのかということであります。カウンセラーというのはこのライラの三泊四日、皆さん方といっしょのキャビンに入って、寝食を共にしていただきます。そして皆さん方のなやみとか皆さん方のお話を聞いて、相談相手になっていただくわけでございます。そしてお互いに心を開いて、話し

合っていただきたいと思います。カウンセラーはこのライラがすんだ後もですね、同窓会その他で後々みなさん方のご面倒をみていただく、こういう人たちでございます。仲良くお付き合いをいただきたいと思います。

またもう一つライラには思索の時間があります。プログラムには書いてありますが、思索の時間というのがあります。一時間であります。私たちはライラのプログラムには通常班ごとにみんなが一緒に行動致します。ただみんなが一緒に行動する中で、この思索の時間だけはみなさん方がそれぞれ一人ぼっちになって自分自身を見つめ直す時間でございます。瞑想にふけるのも結構であります。ようするに何を考えたらわからないという人は、何を考えたらいいか考えて下さい。このように致しまして、一人ぼっちになって、思索にふける時間、この珠玉のような時間を大切にしていただきたいと思います。

それからライラの核にあるプログラムの一つにバズセッションとフォーラムというのがあります。バズセッションとはバズセッションという言葉を聞いたことありますか。バズセッションというのはここで、例えば60人か70人いるみんな全体でですね。ここでディスカッションをやりますとしゃべる人は一人いくらでもしゃべります。カラオケのマイクを持って離さない人と同じようにしゃべる人はいくらでもしゃべるのです。しゃべらない人は一言もしゃべらないで、全体でフォーラムしますとね、それじゃ困るので全ての人が何かの意見を出していただくためにこの全体の5、60人を4人か5人の小さなグループに分けます。そしてその中で話し合う、そうすると必ず何かの意見を出します。これをバズセッションといいます。小さなグループに分かれて、同じ部屋の中でみんながそれぞれ意見をディスカッションします。だから全体で聞いているとクマンバチがブンブンブンブンいっているように、これをバズと呼んでいます。そういう意味でバズセッション。これを4時間やります。

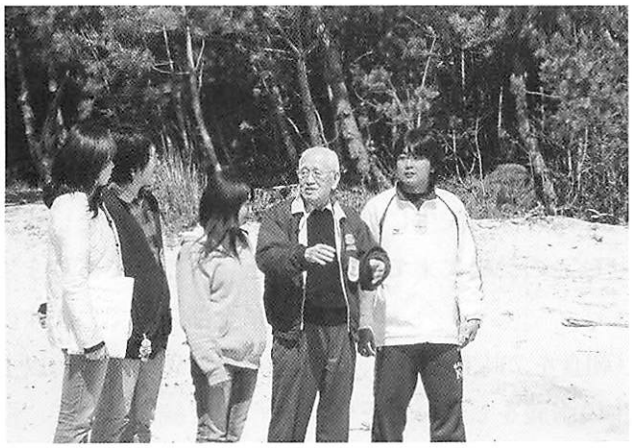
3日目の午後ですね。4時間あります。どんどんいろんな意見をだして、そしていろんな意見をみんながしゃべったその意見をバズセッションでしゃべったことを今度はよる7時から3時間フォーラムします。全体で集まりまして、どういう意見が出たかということをみんなここで発表していただいて、そしてお互いにああ、あんな意見もある。こういう意見もある。自分はこういうことは気が付かなかった。これは勉強するべき、学ぶ価値がある。これはもう自分とは関係ない。いろいろなことをフォーラムで皆さんの意見を聞いて、整理をしていただく。

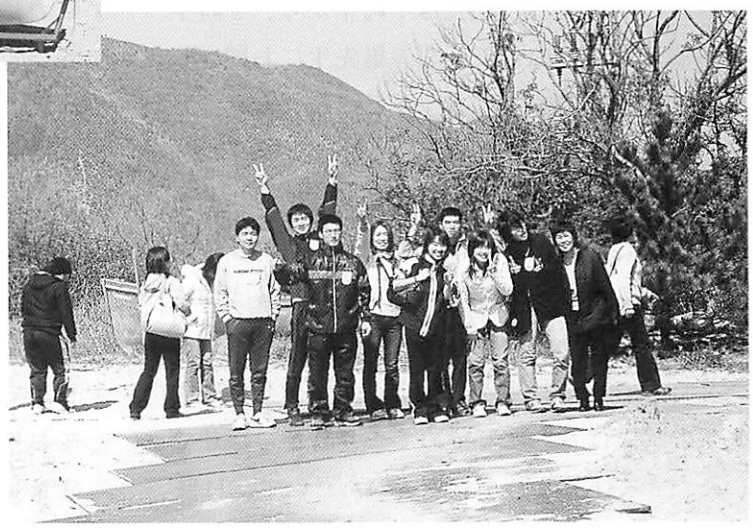
そしてその上でフォーラム全体で今度はディスカッションをする。こういうことになります。そのために最初に4時間のバズセッションを、そして続いて夕食が済んだ後、3時間のフォーラムとこういう形になっておりまして、だいたいこういうやり方、合計7時間ディスカッションをするというのはロータリーの中でもこんなこと絶対ありません。このライラだけであります。一つのテーマについてですね、7時間かけてみんなでディスカッションするプログラムというのはこのライラだけであります。ロータリーもいろいろなディスカッションをしますけれど、せいぜい長くて一時間半であります。そういうところでこのライラの核になるプログラムだとこのようにご理解いただきたいと思います。

最後にこの余島には素晴らしい自然環境がございます。これは今井先生がいまから60年ぐらい前にこの余島にこられて、まさに手作りで築き上げられた自然環境でございます。したがってみんなでこの自然環境を守っていただきたいと思います。またこの島には、部屋に鍵がありません。それは何を意味するかといいますと、これはみんなが絶対的な信頼の世界に生きているということであります。したがってこの島での生

活をみなさんで大事にしていただきたいと思います。

これからこのライラの３泊４日、一番大事なことは、みなさんがお互いに仲良くなって、心を開いて、話し合っていただく。充分に話し合っていただきたいと思います。そしてこの３日間みなさんの心の中に何か火が灯ることがあれば、こういうことを願いながら私の話を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。





スケジュールと注意事項の説明

ディーン　松崎　和博・副ディーン　秋山　紀史

(松崎ディーン)

どうもありがとうございました。

引き続きまして、4日間のプログラムのスケジュールを説明させていただきます。この開講式が終わりまして、6時からオープニングパーティを行います。会場はこの下の昼食を食べたところです。すぐ下の会場です。それでその後7時半からキャビンタイムということになっています。ロータリー関係の人はこの研修棟の方でロータリアンの夕べを7時半から深川先生にお願いしておりますので、ぜひこの会場に来ていただきたいと思います。

それから24日金曜日は、朝食を7時30分から、そして9時半から宝山先生の講義をしていただき、12時までします。12時から昼食、1時半から各班毎に分かれていただいて、リェクレーション、ヨット、テニス、ソフトボール、アーチェリー、陶芸等がありますので、好きなのをしていただきたいと思います。そしてまた6時から夕食、その後カウンシルファイヤーとか親睦とかキャビンタイム、ロータリアンの夕べと、させていただきます。

3月25日土曜日、朝食は7時半から、9時半から講義ということで、関義雄先生にお願いしています。12時までします。その後、食事をして1時から思索の時間で、1時間とっています。あとバズセッションして、6時から夕食、いま深川先生がいわれたようにフォーラムを約3時間とっています。だからだいたいこの25日は10時ぐらいに終わります。

3月26日は7時半から朝食をして、今井鎮雄先生の講義はちょっと早めて、9時からさせていただきます。9時からしていただいて、11時半に閉講式をさせていただきます。

閉講式が終わり次第、記念植樹、記念写真をしていただき、受講生のみなさんには、感想文を書いていただきます。その感想文を書いていただいて済んだ人からでないと食事は食べれません。その食事をすませてから解散ということになっています。またその感想文につきましては、こちらの方で全部まとめて、このセミナーの報告書ということでみなさんの方にお渡しします。

それがだいたい4日間のタイムスケジュールということであります。このワークブックの方に全部入っていますので、これを見ていただきたいと思います。以上です。

引き続きまして、注意事項の説明を秋山副ディーンの方よりお願い致します。

(秋山副ディーン)

こんにちは。

時間もだいぶ経ちましたので、お疲れじゃないかと思うんですけれど、注意事項をみなさんにということですが、みなさん方20歳以上の成人の方ですよね。だからあれもためこれもだめ、これはいいよというようなことあまりいいたくないのですから、そのへんははょりながら、注意事項の説明をさせていただこうと思います。

その前にまずみなさん方の胸につけていただいております名札ですが、名札の色でもってそれぞれ分けております。オレンジ色は受講生のみなさん、それからグリーンが受講生と一緒になって3泊4日間過ごしていただきますカウンセラーの方の名札にはバックがグリーンになっております。それから代表のロータリアンにつきましてはブルーのバックの中に名前が書いて

あります。それから私たちみなさん方のお世話をさせていただきますメンバーにつきましては、イエローの黄色、バックの所にそれぞれ名前を書いてあるのをつけております。4種類色分けをしております。それとともにこの名札ですけれど、誰が見てもわかる所につけていただきたいと思います。寒くなってジャンパーを着た場合、ボタンを止めてしまうと見えない場合はまた見える所につけるという気配りをお願いしたいと思います。こういうことでございます。

それと先ほど深川先生からお話がありましたけれど、講義の時間中は、私たちは聞く側にたちます。やはり相手のことをお互い思いやりながらの時間を過ごすのが、われわれの務めじゃないかと思いますので、その時間の間は、出入りはしないように。居眠りだけは自然現象かもしれないので、どうかと思いますけれど、そのへんもできれば頑張っていただければありがたいと思います。

それから先ほどの時間につきましては、みんなの共有物だというお話もありましたけれども、時間の厳守。これは何時から何をしますよという時間だけは、確実に守っていただくということですね。だから端的な例をあげますと朝、どうしても夜更かしをして眠たくて、どうもダメだと、いわれるときには食事は食べなくてすむ人だったら講義の時間の9時にはここへ出てくるけれども、食事はパスしたよ。ということはあってもいいのじゃないかと思います。だけどやっぱり三食食べないとダメな方の場合は、しっかりと時間と相談しながら、タイムスケジュールを作っていただいて、時間を守っていただければありがたかなあとこのように思います。それからキャビンでのというのか、班別に分けましたので、同じ所から3人4人とグループでこられてる方もたぶんいらっしゃると思うんです。そういう方々につきましては、班別している限りは、班と共に行動という形でキャビンタイムの時間帯におきましても他の部屋へ行ったりというような事だけは避けていただくと。やはりそのキャビンの中の班を大切にということだけは忘れないようにお願いしたいなあと。

それから私もたばこを吸いませんとちょっと厳しいなあと思うのですが、できればたばこだけはそれぞれ自覚において、吸わないで下さいとはいいませんけれど、吸う場所というのはそれぞれありますので、その辺を心得て、お願いしたいなあと。それと最初ここに入ったときにも話があったと思いますが、なにかのこういう講義の時間帯には、携帯電話をマナーモードか切ってしまうか。ということで後は、たえず何につけましても相手を思いやり、もし自分がそうだったらどうかなあという気持ちをありがたいなあとこのように思います。くどくどいうのもなんですけれど、みなさん方の自覚を心から期待しておりますのでよろしくお願い致します。ありがとうございます。

（ＹＭＣＡ余島研修所・原田スタッフ）

みなさんこんにちは。

私はここの余島センターで、プログラムを主に担当してますスタッフの原田といいます。よろしくお願いします。私もここに名札がついていますので、ぜひ名前を覚えていただけたらなあと思います。それから今日はちょっと急用で島を離れているのですけれど、ここのセンターの所長、山根というスタッフがいます。もう2、30分したら帰って来ると思うんですれけど、またこの後のパーティの時にでもご挨拶ができたらなあと考えております。よろしくお願いします。

それではですね、ここ余島の中のことを少し説明させていただきたいなあ思います。先ず一番最初に余島の中入ってこられてビックリしたと思うんですけれど、船をおりてすぐ、いきなり工事中でですね、いろんな機材が入っておりま

す。それからみなさんから左手ですね。土手に土嚢が積んであったりします。ここの余島の施設はですね、一番古い施設で約60年ぐらい昔から使っています。ここの余島のいいところ、売りにしているところは60年間、何一つ変わっていません。もちろん増えてきた施設はあるんですけども、60年間そのままを大事にしてきています。もちろんそのほかの自然ですね、自然はもっともっと大昔からずっとそのままで大事にしてきていますので、ところどころ建物でいえば、改修工事が必要になったりしてきます。ちょうど今この時期がですね、改修工事に入っている次期なんです。大変ご迷惑をおかけするかもしれないんですけれども、ちょっとね、危ないなあと思うところには、近づかないようにお願いします。

それでは島の中のことを説明したいんですが、あまり言い過ぎるとみなさんが探検する楽しみがなくなってしまいますので、自由なところだけちょっと説明しておきます。まずですね、外、屋外で使われるトイレですね、トイレの場所を説明しておきます。まず、余島へみなさんが入られまして、桟橋に着きましたね、そこで桟橋からてくてく歩いてきました、桟橋から歩いてすぐ、左手ですね、正面にはテニスコートがあったと思うんですが、ちょうどすぐ左手、左手にですね、先客待合所という緑色の屋根をしたちっちゃい小屋がありました。そこに屋外用のトイレが一つあります。そのまま道沿いをずっとてくてく歩いてこられたと思うんですが、途中左手にですね、余島邸と古い日本家屋があります。その余島邸という日本家屋の外側にですねトイレがあるんですが、ここは男性用女性用分かれておりますので、もし使われる場合はそちらの方を使って下さい。そのまま坂をちょっと急な坂なんですが、ぎゅっと登って来て、てっぺん、一番てっぺんにですね白い建物があるのですが、そこがインフォメーションセンター、おそらくみなさんが受付をされた場所ですね、そこがインフォメーションセンターになります。

そこのインフォメーションセンターには自動販売機があります。それから中に入って貰うとお菓子とか、カップラーメン、その他日用雑貨、簡単な日用雑貨がおいてますので、もし必要であればそのインフォメーションセンターを使うようにして下さい。そのインフォメーションセンターには、私たちスタッフ、私とか山根所長とかは、常にそのインフォメーションセンターにいます。開いている時間は朝の９時から夜の10時半までになってます。その間ですね、みなさんが自由に使っていただけたらなあと思うんですが、夜もし10時半以降、例えば部屋の中で何か大変なことが起きた。うわー歯が痛い、とかいろいろあると思うんですが、緊急な場合はインフォメーションセンターに来て貰ったら宿直のスタッフが常にいますので、受付の所まで来て貰ってでっかい声で、すんませんというて貰ったら宿直のスタッフが、バッと目覚めますので、来るようにして下さい。

そのインフォメーションセンターにもトイレがありますのでそちらも使って下さい。ちなみに自動販売機は24時間フル稼働しておりますので、特にお酒ですね、もあります。未成年の方いるかとどうかわかりませんが、自分達でよく考えてご利用して頂けたらなあと思います。

それからそのインフォメーションセンターの先に行きますと道が３ヶ所分かれます、３本に分かれます。その真ん中の道をずっとおりて来られた所が、今ここですね。大研修室、ちょうどさっきもいっておられたと思うのですが、そこに見えている大きな建物が、食堂、それから後大浴場ですね、大浴場がある施設になります。

そこの大浴場、お風呂なんですが、受講生の方々が泊まられる部屋にはお風呂はついていませんのでそこにあるお風呂を使って貰えたらなあと思います。そのお風呂の利用いただける時間が、夕方の４時から夜の12時までになっていま

す。例えば、朝一番で入りたいという方がいらっしゃるかもしれないんですが、朝は9時ぐらいからお風呂の掃除にはいりますので、朝6時から9時の間とかは、使えると思いますので、その間に入って貰うことも可能です。朝やからお湯が出ないということはないので、使って貰ったらなあと思います。

真ん中の道をずっとくだって貰ったらそういう形になってまして、今度右と左、ちょっとあがって貰って右と左に分かれている道があります。こっちから戻りますね。こちらから戻って右に曲がってもらうとちょうどみなさんのお部屋100番台から300番台400番台までお部屋があります。

左の方へ曲がって貰うとロータリアンの方々がご宿泊されるお部屋になってます。

大ざっぱに説明した余島の中はこんな感じなのですけれど、それ以外のようわからん道とか、これいけるんかなという道もありますので、ぜひこの3泊4日のうちに余島の中をぐるぐるぐるぐる歩き廻ってぜひ探検して欲しいなあと思います。もちろん景色のいい所たくさんあります。夜星がきれいな所もたくさんありますので、ぜひ余島のよさを味わって貰ったらと思っています。

それからですね、そのほかの補足なのですが、ここの余島は小豆島からの離島になります。小豆島も離島ですね。離島の離島、かなり離島なので火事が起こると消せません。消防車、入って来れませんので、たばこであったりとか、そのほか火の気のあるものであれば、とくに注意を払っていただきたいなあと思います。たばこなのですが、インフォメーションセンターの出たところに灰皿があります。それから食堂の入り口のところにも灰皿がありますので、そのどちらかで吸うようにしてほしいなあと思いますのでよろしくお願いします。

それからお部屋の電気、水、こちらも極力節約していただけたらなあと思います。とくに電気はですね、ちょっとご迷惑をかけるかもしれないんですけれども、例えば部屋でドライヤーを2個使うと、ブレーカーがとんでしまいますので、できたらドライヤーは部屋で一つをみんなで順番に使っていただけたらなあと思います。

ここからはちよっとロータリアンの方達にお願いがあるのですが、余島から出られる時にそれから入られるときにですね、渡船の方をご利用いただくと思うのです。もし渡船をご利用する方はインフォメーションセンターの受付の所に渡船の時刻表がありますので、その時刻にあわせてお名前を記入いただけたらその時刻に渡船が出るようになりますので、そちらの方にご記入いただけたらなあと思います。その時刻表なのですが、いまその体験教室の後ろにも貼っております。それからインフォメーションセンター、食堂にも貼ってありますので、そちらの方でご確認下さい。

それと後ロータリアンの方で、お部屋の入れ替えがあると思うのです。途中で帰られる方、または入ってこられる方、そのために、お部屋の掃除にリネンのスタッフが入ります。チェックアウトされる方は朝の10時ごろにはお部屋の荷物を出していただいてインフォメーションセンターでお預かりしますので、そちらまでお持ち下さい。その後リネンのスタッフが入るので、まだお部屋を使っていらっしゃる方がいると思うのですけれど、そのへんちょっとご了承いただけたらと思います。大ざっぱにですが、ざっと説明させていただきました。それでは3泊4日どうぞよろしくお願い致します。

新世代ライラについて

RYLA セミナー顧問
国際ロータリー第2680地区
パストガバナー　深　川　純　一
（伊丹RC）

2680地区の深川でございます。

このライラは、今から28年前に今井先生が始められたものでありまして、私は、それ以来、今井先生に導かれて参加させていただいております。

この28年間を通じて感じました大事なことは、このライラは、本来は受講生を教育するセミナーではありますが、実際はロータリアンを教育するセミナーでもあるということであります。

実は、２８年前の最初の第１回の今井先生の講義は、『社会の動きと青少年の実態』というテーマでした。その講義で今井先生がインダクティブ・エデュケーション Inductive Education 即ち、「人間とは何かという真実に招き入れる教育」についてお話をなさいました。

これはポール・ティーリッヒ Paul Tillich という神学者が、教育には３つの分野があると説いた学説を引用されての話でありました。即ち、

第一は、テクニカル・エデュケーション Technical Education 即ち技術教育。

第二は、ヒューマニスティック・エデュケーション Humanistic Education 即ち人間教育。第三が、インダクティブ・エデュケーション Inductive Education 即ち、人間とは一体何かという真実に招き入れる教育。

このような学説を今井先生が紹介されました。この話は非常に印象深く、今でも鮮明に覚えております。

その後、今井先生は、いつも講義をされるときに、色々な著書や学説を紹介して下さいました。

私は、それらの著書を紹介されるたびに買ってきて一生懸命に読みました。私は弁護士でありますが、それらの著書は弁護士の仕事とは全く関係のない著書でありました。しかし、それが私にとって大変勉強になったのであります。

実は、私の父も弁護士でありましが、父からは「弁護士というものは、法律の本だけを読んでいては駄目だ。色々な本を読み、様々な人に会い、沢山の経験を積んで、はじめて弁護士として大成するものだ」と聞いておりましたので、今井先生がいつもこのＲＹＬＡで色々な本を紹介して下さるのが大変有り難かったのであります。御陰様で随分勉強させていただきました。そして、ロータリーの話をするときにも、その知識を存分に活用させていただきました。したがって、このライラは、受講生を育てることが第一の眼目ではありますけれども、それだけではなく、実はロータリアン自身がお互いに自己研鑽をして、学び合って、育っていく場でもある、ということを痛感しているわけであります。

したがって、皆さん、今日の私の話などはどうでもよいのでありまして、明日からのセミナーの先生方の講義こそ大事であります。それを自己研鑽の糧にしていただきたいと思います。

先ほどオープニングセレモニーで、今井先生がご自分のお歳を数え年で87歳とおっしゃいました。私は今井先生よりちょうど10歳若い77歳

であります。今井先生は1980年、還暦の年にガバナーになられました。私は10年遅れて、1990年、やはり還暦の年にガバナーになりました。したがって、今井先生も私も、いずれも還暦の年にガバナーになったのでありますが、最近、私は体力的に限界が出て来たのか、200メートルも歩くと脹ら脛(フクラハギ)が痛みます。それに比べると今井先生は、私と一緒に歩いても私より早いのであります。まさに恐れ入るほかないのでありますが、どうか皆さん、健康には呉々も注意して今井先生のように何時までも元気であっていただきたいと思います。

さて、このＲＹＬＡは、今井先生が28年前に始められまして、まさかこんなに続くとは思いませんでした。今でも覚えていますが、私は、このＲＹＬＡの企画段階で今井先生に、「ロータリーは決議23－34号があって継続的なプログラムは原則として認めないことになっていますから、このＲＹＬＡも１年限りで止めましょう」と申し上げました。

ところが、第１回のＲＹＬＡが大成功。その結果、止めることができなくなって28年間続いてしまったというのが実態であります。これは、やはり今井先生のリーダーシップと先生の暖かみのある人格的な魅力で続いてきたのだろうと思います。このＲＹＬＡがこれほど永く続いたのは、本当に今井先生の魅力によるところが大きいと思います。このことも皆さんご理解いただいて、これからもＲＹＬＡは続けなければならないと思います。

日本は、後20年経ったら駄目になるかもしれません。それは何故か、と言いますと、人が育っていない。したがって、若者を育てなければなりません。やはり私達の後継者を育てるというのは、リーダーの役目であります。みなさん方は皆、地域社会のリーダーであります。したがって、後継者を育てなければなりません。

例えば、禅宗の世界では、老師が自分の後継者を育てるためには、殆ど一生をかけて、心血を注ぐと言います。何故かと言いますと、もし後継者を育てることが出来なければ、その法脈が滅びるからであります。法脈が滅びるということは、指導者として最大の恥なのであります。したがって、禅宗の御老師、即ち指導者は、自分の後継者を育てるために本当にその一生をかけて心血を注ぐのであります。

この意味では、このライラは、幸いなことに元祖今井先生以下ずっとライラの法脈というものが続いております。先程、篠原さんが、俺のところは危なかったのだけれどやっと続いたと言っておられましたが、四国も本当に篠原さんの御努力、そして三宅先生のお力添え、その他色々な人達の御努力のおかげで、白石さんとか松崎さんとか立派な後継者が育って来ました。おめでたいことだと心からお喜び申し上げたいと思います。

私達は、地域社会の指導者として、やはり後継者を育てるということを絶対に忘れてはならないと思います。それを忘れたら日本民族は滅びてしまいます。ということは、人を育てるということが如何に大事かということであります。このことは、一番最後に申し上げたいと思います。

実は、今日は、三木ガバナーノミニーの悪企みによりまして、とにかく何か喋れというので、何か喋ることになったのであります。したがって、「ロータリアンの夕べ」ということでございますけれども、テーマは別にありません。

そこで、今年度のＲＩのテーマ、“Service above self”について少し話しておきたいと思います。実は、先日、２月１日に日本のロータリークラブが最初に出来た地区であります東京の2580地区の地区大会にＲＩ会長代理として行って参りました。その時に、佐藤千寿パストガバナー始め色々な指導者とお目にかかりまして、その謦咳に接したのでありますが、その時に、私は会長代理でありますから、ＲＩ会長の心を地区

大会の皆さんにお伝えしなければなりません。そこで、今年度のＲＩのテーマの解説を致しましたので、今日は先ずその話をしようかと思います。そして最後に、人を育てるということが一体どういうことなのか、というお話をして終わりたいと思います。

先ず、イントロダクション的な話から入っていきたいと思いますが、最初に申し上げておきたいことは、ロータリーというものは一つの文化概念でありまして、数理の概念ではございません。あくまでも数理の概念ではなくて文化概念なのであります。ロータリーの世界というものは、やはり本質的に文化の世界でありまして、論理の世界ではございません。ロータリーは文化である、という文化論的な思考がないと、ロータリーを正しく身に付けることは出来なかろうと思うのであります。即ち、

論理一辺倒の考え方、即ち、１＋１＝２というこの自然科学的な論理一辺倒の考え方、合理主義的な考え方だけでは、ロータリーというものを本当に理解することはできなかろうと思うのであります。

例えば、サービスServiceという言葉があります。これは英語でありますが、その言葉自体が持っている歴史的な背景とか、思想的な背景を理解しなければ、サービスとはそもさん何ぞや、ということを正しく解釈することはできなかろうと思うのであります。

サービスという言葉、辞書を引けば、これは奉仕と訳されている。そういうふうに単に言葉を訳しただけでは、サービスという言葉を正しく理解することはできなかろうと思うのであります。

例えば、“Service,Not self”という言葉があります。この“Service,Not self”という言葉にしても、アメリカ人やイギリス人の歴史的、文化的な背景に基づく独自の思想・慣例というものがあるのであります。それが解らなければ、正しい解釈はできなかろうと思うのであります。

先ず、これだけの前置きを致しておきまして、この話に入っていきたいと思います。

今年度のステンハマーＲＩ会長の提唱するテーマは、“Service,Not self”ではなくて”Service above self”であります。これは、現在、日本語の訳では、「超我の奉仕」と訳されております。

しかし、この“Service above self”という標語が生まれ出る前に、1911年に実は“Service,Not self”という標語が生まれておりました。これはアメリカのミネアポリス・ロータリークラブの初代会長でありましたベンジャミン・フランクリン・コリンズBenjamin Franklin Collinsいう人が提唱した標語であります。

このような歴史的な因縁を考えますと、“Service above self”という標語は、『超我の奉仕』と訳すよりは、私は、日本ロータリーの創立者であります米山梅吉先生が訳されました『サービス第一、自己第二』という翻訳の方が、適切ではないかと思うのであります。何故かと申しますと、『超我の奉仕』という言葉は、むしろ“Service,Not self”に近いニュアンスを持っているからであります。

ところで、この“Service,Not self”という標語を提唱しましたベンジャミン・フランクリン・コリンズが、一体どのような心でこの言葉を使ったのかということにつきましては、これはもとよりベンジャミン・フランクリン・コリンズのみの知るところでありまして、我々が知るところでございません。

しかし、英米法学者の説くところによりますと、“Service,Not self”という言葉は、英語系国民の慣例に従って解釈を致しますと、”Not self”即ち、自己犠牲、セルフは自分、自己であります。それをNot、否定すること、即ち、自己犠牲、の奉仕の意味なのであります。“Service,Not self”これは“Service イコール Not self”、奉仕とは自

己犠牲である、と考えるのであります。

その根底に流れる、思想は何かと言いますと、“Service,Not self”とのいうのは、自己を主張するのではなく、自分を犠牲にして、神様の支配する宇宙の秩序体系のもとに帰依すること、それがサービスであるというのであります。

要するに、この“Service,Not self”という言葉の根底に流れる思想は、中世神学の思想以外の何者でもない優れて宗教的な思想なのであります。

しかし、その後、1920年頃、自分を犠牲にするという考え方は行き過ぎではないか、我々には厳然として自我、自己、セルフがあるではないか、それを否定するのはおかしいのではないか。ロータリーは宗教ではない。お寺ではないのだから、自己犠牲などと宗教的なことを言ってもらっては困る、という議論が出て来まして、その反省の中から誰言うとなく、自己＝セルフをnot＝否定する、セルフを犠牲にする自己犠牲でなくて、セルフのアバーブ above、上にサービスを考えよう、ということになって、“Service above self”の標語が提唱されるようになったという経緯があるのであります。

では、一体、このようなことを誰が提唱したのか。

一説によりますと、1908年にシカゴのロータリークラブに入会したアーサー・フレデリック・シェルドンが言ったのでないかという説もあるのであります。したがって、“Service above self”が提唱される以前の標語が“Service,Not self”自己犠牲の奉仕、ということであった、ということから言えば、“Service above self”の訳語は、やはり『超我の奉仕』と訳すよりは、米山先生の訳のように『サービス第一、自己第二』と訳した方がニュアンスとしては適切ではないかと思うのであります。これが実は文化概念としてのロータリーの解釈であると私は思っております。ロータリーは文化概念でありまして数理の概念ではありません。この辺のところの理解が出来ないとロータリーの理解がおかしくなっていくだろうと思うのであります。

しかし、“Service above self”が提唱される以前に“Service,Not self”があり、その後“Service above self”が提唱されたからといって“Service,Not self”の思想がロータリーの思想の世界から消えてしまったわけではありません。

ロータリーの思想の世界では、“Service,Not self”即ち、自己犠牲の奉仕の考え方と“Service above self”即ち、実業倫理的な思想とが共に排斥し合うことなく併存しているのであります。これが実はロータリーの思想の世界なのであります。

1959年から60年にかけて、国際ロータリーの会長をしました、ハロルド・トーマスという偉大な思想家が『ロータリー・モザイク』という本を書きました。

モザイクというのは、ガラスの破片であります。赤や黄や緑や青など色々な美しいガラスの破片が集まって美しいモザイク模様を作っているのと同じように、実はロータリーの思想の世界も、色々な思想がお互いに排斥することなく共存して、美しいモザイク模様のように思想の世界を形作っている、とハロルド・トーマスは見た訳であります。

これが実は、この本を『ロータリー・モザイク』と名づけた由来なんであります。したがって、ロータリーの歴史の流れというものをどの段階で切って見ても、その横断面には、様々な思想の混在が見られるのであります。これがロータリーの思想の世界の特色であります。恰も滔々と流れる大河の如く、様々な思想が共存しながら、滔々と流れて現在に至る思想の潮流を形作っているわけであります。

このように色々な思想が、お互いに排斥することなく共存している世界、これが実は、1910年にロータリーの創始者ポール・ハリスが『ロー

タリーは寛容の中に宿る』と大悟した境地と相通ずるものがあろうかと思うのであります。ロータリーは寛容の中に宿るのであり、自分の考え方を相手に押しつけてはならない、相手には相手の考え方がある、これがロータリーの世界だよ、とポール・ハリスは説いたのであります。これがポール・ハリスの『ロータリー寛容論』と呼ばれるものであります。

そこで、"Service above self"《サービス第一・自己第二》、これは自分のことはさておいて、まず第一に、世のため人のためのことを考えようというのであります。

したがって、この標語を生み出した直接の動機は、実は職業奉仕的な思考でありまして、職業奉仕的な考え方から"Service above self"という標語が出てきたのではありますが、しかし、この言葉の根底に流れる思想は何かと言いますと、実は、これは職業奉仕のみに止まらず、クラブ奉仕、社会奉仕、国際奉仕更には世界社会奉仕というロータリーの奉仕の全てを包摂する思想であると思うのであります。それなるが故に、この標語は、今年のＲＩのテーマになっているのであります。職業奉仕的な思想だけの問題であれば、ＲＩのテーマになることはないと思うのであります。このことを一つ御理解いただきたいと思うのであります。

したがって、『サービス第一、自己第二』、自分のことはさておいて、それよりもまず人様のことを考えよう、ということは、これを別の言い方をしますと『人の幸せを祈ろう』ということであります。ステンハマーRI会長は、国際協議会におきまして、今年度の方針として、皆さんご存知のように、識字率とか教育の問題、そして水の保全の問題をはじめ色々な提唱をしておられます。しかし、それを一言で集約すれば一体何かといいますと、ステンハマー会長の心は、世界中の全ての人たちが幸せになること、世界中の人たちの幸せを祈る心である、と言ってよろしいかと思います。

実は、インドのカルカッタ・ロータリークラブから出ました偉大な思想家、1962—63年度の国際ロータリーの会長ニティッシュ・ラハリーNitish Lahharyは、「世界中の何処かの片隅に、一人でも不幸な人がいる限り、我々ロータリアンは永久に幸せになることはできない。心の中に火を燃やそう。Kindle the spark within !」という有名なターゲットを打ち上げました。これは誠に東洋的な神秘なターゲットでありまして、すべての人の幸せを祈ることによって、この世の中を明るくしていこうということなのであります。

ところで、この"Service above self"という言葉は、既に1923年のセントルイスの国際大会におきまして決議された「決議23—34号」の第1項に規定されておりまして、これが更に1950年度のデトロイトの国際大会の決議によって、ロータリーの公式標語として採択されております。

要するに、"Service above self"と言う標語は、1923年の「決議23—34号」の第1項に規定され、そして1950年のデトロイトの国際大会によってロータリーの公式標語として採択されているわけであります。

そして、"Service above self"と切っても切れない関係にある言葉に『奉仕に徹する者に最大の利益あり』"He profits most who serves best"という言葉があります。

実は、これは"Service above self"という標語が生まれる10年前の1911年の全米ロータリークラブ連合会の大会におきまして、アーサー・フレデリック・シェルドンによって提唱された標語なのであります。したがって、説明の便宜上、まずこの言葉から話に入っていきたいと思います。

さて、ロータリアンは、全て職業人でありまして、資本主義経済社会に生きているのであります。したがって、資本主義経済社会ということになれば、職業人は皆、利益を追求しなければなり

ません。利益というのは、平たく言えば儲けのことであります。

しかし、その儲けとは、そもさん何ぞや、ということを考えてみますと、儲けというものは、一生懸命働いた結果の問題なのであります。したがって、その限りにおきましては、利益、いわゆる儲けのことを第一に考えてはならないわけであります。先ず、利己と利他との調和。利己というのは自分を利すること、利他というのは他人を利すること。即ち、利己と利他とを調和させることを第一に考えなければならないのであります。

具体的な例を出しましょう。例えば、或る物を仕入れて、これを百万円で売ったとします。現実に売れる売れないは別と致しまして、兎に角、売ったとします。そうするとそれを買取ったお客様は、騙されたわけでありますから、大変な損害を受けます。これは暴利であります。したがって、商人は物を売らなければなりません。しかし、適正な利潤であればよいのですが、今の例のような暴利となりますと、お客様が限りなく不幸になります。暴利によって百万円儲けたとしても、果たしてそれをロータリーで謂う儲けといえるのか、利益といえるのか、という問題があります。

今、話題になっているライブ・ドアの問題もあります、あの経営者には倫理がありません。金儲けしか考えていませんから、あのような結果になるのであります。

やはり、商人も物を売って幸せにならなければなりません。しかし、お客様もその商品を買取って幸せにならなければなりません。このように両者の調和点というものがどこかにある筈であります。商人もお客様もお互いに幸せになる調和点がある、それを追求するのが実はロータリーなのであります。

したがって、暴利を貪ることによってお客様を不幸にしてはならない、商人も物を売って幸せになる、と同時に、お客様もその物を買取って幸せになる、その調和点を求めなければならない、それがロータリーだ、という考え方であります。これが、利己、即ち自分を利することと、利他、即ち他人を利することとの調和を求めることであるという考え方になってくるわけであります。利己と利他との調和。これを第一に考えなければならないというのがロータリーの基本的な考え方であります。

これが“He profits most who serves best”「奉仕に徹する者に最大の利益あり」ということになってくるわけでありまして、要するに、奉仕第一の考え方で行動しなければならないということであります。利益とか儲けとかを第一に考えるべきではない、ということをロータリーは説くわけであります。

しかし、奉仕第一、利益のことを考えなくても結果的には、一番儲かることになるよ、ということをシェルドンは言っているのであります。

彼は、この考え方を“He profits most who serves best”「奉仕に徹する者に最大の利益あり」と表現したわけであります。実は、中国の古典の『易経』の中に「積善の家に余慶あり。積不善の家に余オウあり」という言葉がありますが、これはA．F．シェルドンの“He profits most who serves best”という言葉と相通ずるところがあると思います。即ち、「積善、即ち善いこと、をしている家には、子々孫々に至るまで慶びごとが絶えない。しかし、積善不善、即ち善くないことをしている家には、子々孫々に至るまで災いが絶えない」というのであります。

要するに、悪いことをしていると善いことはないよ、という教えであります。この考え方とこのシェルドンの“He profits most who serves best”「奉仕に徹する者に最大の利益あり」という言葉は相通じるところがあるのであります。

利己と利他との調和、即ち、職業の倫理をもって社会的な責任を遂行している職業人に損をし

た人はいないよ、とシェルドンは説くわけであります。

実は、この利己と利他と調和の図式を簡単に書こうとして出来上がったのが、A．F．シェルドンの“He profits most who serves best”という言葉でございました。

しかし、この言葉はいろいろな誤解を受けました。例えば、「奉仕に徹する者に最大の利益あり」それでは、これ奉仕を餌にして儲けを得るのか、という考え方もございます。非常に方便的な表現でございますから、これはロータリーの精神を示すものとして果たして如何なものかな、という議論があったわけであります。この議論は、かつてヨーロッパにもございましたし、日本のロータリアンの中にもこのような議論をする人がおられたのであります。奉仕を餌にして儲けを釣っているのではないか、という言い方をする人がいたわけであります。

しかし、アーサー・フレデリック・シェルドンがこの言葉を作ったときに、彼が本当にそのような方便的なことを考えていたのであれば、これは批判されてもよいと思います。しかし、彼は、その言葉を作ったときに、そのような方便的なことを考えていたのではないのであります。彼は、どのようなことを言ったのか、と言いますと、“He profits most who serves best” 利己と利他との調和とはいうけれども、実はそれが調和できるのは、神様の世界でありまして、人間の世界はどこまで行っても、利己と利他が調和できることはない、もし、それが調和できるとすれば、それは宗教の世界であり、聖者の世界である、このような言い方を彼はするわけであります。

ところが、先ほど言いましたように、ロータリーは宗教ではございません。お寺ではないのであります。したがって、聖者にはならなくても結構であります。

しかし、聖者になることを毎日念願しながら日常生活を営んで、自己研鑽の努力をすればよいわけでありまして、実は、利己と利他との調和というのは、実現の世界ではなくて、あくまでも念願の世界である、という言い方をA．F．シェルドンはするわけであります。

念願の世界であって実現される世界ではない、念願しながら日々自己研鑽に励む、自らの心を磨く、そういう世界だという言い方をA．F．シェルドンはするのであります。

したがって、利己と利他との調和を念願しながら、それを少しでも早く実現できるようにクラブ例会で自己研鑽に励む、自己改善をする、このような努力をして企業管理をしている人に損をした人はいないよ、必ず儲かるよ、という言い方をシェルドンはしているわけであります。つまり自由競争のさ中にあって、自由競争の圏外に立ち、そして企業を長期的にかつ安定的に繁栄に導くことができる、という言い方をシェルドンはしているわけであります。したがって、彼は利己と利他との調和ということを念願して企業経営をしている人に損をした人はないよ、という言い方をするわけであります。

要するに、“He profits most who serves best”という言葉は、利己と利他との調和で、即ち、奉仕の精神で企業経営をしている人に損をした人はいない、と訳しますと、シェルドンの考え方をうまく表現できると思うのであります。

しかし、これにつきましては、一つ反論が出て参ります。どういうことかと言いますと、翻訳としては、“He profits most who serves best”の中の“most”モーストという言葉の訳が抜けているのではないか、「最もよく」という言葉を、単に損をした人はいないよ、と訳したのでは、これは防御だけであって「最もよく」という言葉が出てこないではないか、という反論が出てくるとだろうと思うのであります。これはもっともな議論でありまして、そこで、これは一つの言葉だけでは表現できませんので、表現を補充しなけ

ればなりません。では、どのように補充すればよいか、と言いますと、「損をした人はいない」というところまではよいのであります。ここからが付け足しであります。即ち、「そればかりか、我利我欲で企業経営をする職業人よりは、はるかに多くの利益を得る結果になる」と、このように補充すれば、シェルドンの言葉をよく理解できるだろうと思うのであります。

具体的な実例を挙げておきます。「私は、自分の利益を考えないで、お客さんのことばかりを考えて働いていたところ、お客さんの数が三倍に増えた、ということは、それだけ儲かったということ、したがって、私は、"He profits most who serves best"という言葉を体験的に理解することができるようになりました」という人が小売業者の中からかなり出てきているのであります。

それからまた、歯医者さんからも事例が出ております、この歯医者の先生は、患者を診たときに、この人を治療すればいくらの金になるかということを必ず頭の何処かで考えたというのであります。ところが、ロータリーに入って奉仕哲学を勉強してからは、そのような考え方は消えてしまっていた。「どうすれば、患者の苦痛を和らげて、治療費を安くすることができるかを一所懸命に考えるようになった。すると、患者の数が増えて増えて困るようになった」という実例が九州から出ております。

したがって、「利己と利他との調和ということをもとにして職業を営んでいる人に損をした人はいない。更に、我利我欲で経営している人より遥かに多くの利益を得るだろう」この標語は、このような意味をもって使われたのではないかと私は思うのであります。

このように致しまして、"He profits most who serves best"の標語が提唱されるようになったのであります。

なお、このプロフィツ "profits" というのは、一体何を意味するのか、精神的なことを意味するのか、或いは物質的なことを意味するのか、という議論が日本にもアメリカにもありました。

しかし、シェルドンは、「これは儲かるという意味である。これは金額をもって示すことが出来るものである」ということを言いきっております。したがって、精神主義者の側からしますと、シェルドンは評判が悪いのであります。

しかし、シェルドンの心を誤解してはならないと思います。彼は、利己と利他との調和、企業管理者としての社会的責任の遂行、という原則を第一にしていくと、その限りにおいて、「儲け」などということは第二次、第三次のことではあるけれども、結果的には儲かってしまう、とシェルドンは言うのであります。

そこで、ロータリーの創始者ポール・ハリスはこの点につきまして、彼の著書『ロータリーの理想と友愛』"This Rotarian Age" という本の次の中で次のように述べています。

「最もよく奉仕する者は、最も多くの利益を生む、という標語は世俗的に過ぎるのではないか、という非難もある。また、シェルドンがこの思想の中に観念した報酬というものは物質的なものなのか、精神的なものなのか、と問う人がいる。著者（ポール・ハリス）の信ずるところによれば、シェルドンは彼自身に関する限り、いわゆる精神的報酬に主眼をおくものである」と。このあたりは、シェルドンの言い方と少し違うのであります。

しかし、ポール・ハリスは、これについて解説をしています。

「しかし、彼の目的は、最大多数の人々に最大限の幸福をもたらすことにあって、その最大多数の人々は、実は、物質的な利益に多くの関心を持つということをシェルドンはよく理解していたのである」「したがって、利益の生み方を正しいものにするように努力したいと考えたわけであって、火力が強ければ強いほど熱度は高い、それと同じように、サービスが大なれば大なるほ

ど利益は大きい」ということをシェルドンは主張したのである、とポール・ハリスは解説をしているのであります。

そこで、次に、1911年のアメリカ・オレゴン州ポートランドの第2回全米ロータリークラブ連合会の大会におきまして、"He profits most who serves best"という標語と時を同じくして、相次いで発表された標語に、"Service,Not self"というのがあります。

いずれも1911年にこの2つの標語が同時に発表されているわけであります。これはミネアポリス・ロータリークラブの初代会長ベンジャミン・フランクリン・コリンズBenjamin Franklin Collinsが提唱したものでありまして、ロータリーの奉仕というのは、"Service,Not self"。Selfは自分であります。それをnot、否定する。即ち、自己犠牲。自分を滅却して、自分を犠牲にして神様の司る宇宙の秩序体系のもとに帰依すること、それが奉仕"Service"である、という考え方であります。したがって、サービスというのは、イコールnot Self自己犠牲、という考え方であります。これは、中世キリスト教神学の思想以外の何ものでもない、優れて宗教的な思想なのであります。

これに対して、シェルドンは、ロータリーは宗教ではないと反論します。

シェルドンの"He profits most who serves best"というのは、あくまでも世俗的な実業倫理の概念であり、実業倫理の世界に棲む標語であります。一方、"Service,Not self"は宗教的な概念でありますから、この二つの標語は、棲んでいる世界が全く違うのであります。

ところが、この二つの標語が同時に発表された当時のロータリアン達は、その辺の原理的な分析が出来ていなかったのであります。そこで、時の全米ロータリークラブ連合会の大会の決議委員長でありましたジェームス・ピンカムが、この二つの標語は共に素晴らしい標語だというので、この二つの標語をロータリーの公式標語として採用しようと提案致しまして、この標語が二つともこの大会で議決されてしまったのであります。

ただ、当時の全米ロータリークラブ連合会の大会決議というのは、今日の国際ロータリーの大会決議と異なりまして、連合会自体が単なる連絡調整機関に過ぎなかったためにその大会決議というものは、全米のロータリークラブに対して、拘束力を持っていませんでした。したがって、改めて1950年、デトロイトの国際大会の決議を待って、そのときに"Service,Not self"という標語を"Service above self"に変えて、そして「奉仕に徹する者に最大の利益あり」"He profits most who serves best"という標語と共にこの二つがロータリーの公式の標語として採択されるに至ったわけであります。

では、何故、"Service,Not self"が"Service above self"になったのか。

1911年時点では、"Service,Not self"であった。これが1920年頃になると"Service above self"になった。何故か。

先ほど申し上げた"Service,Not self"は宗教の世界のある概念であります。ロータリアンは職業人として、厳然として自我を持っている。そうだとすると、このnot Self 即ち、自己否定、自己を犠牲にするのはおかしいのではないか、したがって、自己否定ではなくて、自己・自我の上に、即ち、"above self"という形でロータリーを考えるべきだという議論が出てきたわけであります。

そして1920年頃、実は正確な年月日は判らないのでありますが、誰言うとなくこの"Service above self"に変わっていったのであります。この経緯を少し詳しく説明しておきます。

当時、シカゴロータリークラブの中に"Service,Not self"の考え方を"Service above self"の方へ集約していこうという動きがありま

した。これは、シカゴロータリークラブの一部の会員とシェルドンとの間になされていたという記録があります。

それは1920年頃、シカゴのロータリアンが、"Service,Not self"「自己犠牲の奉仕」即ち、自分を犠牲にして宇宙を支配する神の秩序体系の中に帰依していくことがロータリーの奉仕である、という考え方を分析しておりまして、これは少しおかしいのではないか、と考えた訳であります。と言うのは、ロータリーというものは、一番最初に良質な職業人の自我・セルフ"self"があるではないか、ロータリー運動というものは、一業一会員制をもって選ばれた良質な職業人を運動の基本単位と考えているわけでありますから、そのロータリアンは既にセルフ・自我を持っているわけであります。したがって、"Not self"ではないわけであります。自己を滅却して、自分を犠牲にして、神の司る宇宙の秩序体系のもとに帰依しようなどということは到底出来ることではない。

もともと自我はあった。その自我を例会における自己研鑽を通じて、少しずつ少しずつ改善することが、やがて利己と利他を調和しせしめる、つまり神の秩序体系の中に自分を没入させることになるのでありますけれども、それはあくまでも聖者の世界の出来事でありまして、人間としては、これは死ぬまで不可能なことなのであります。したがって、この世にある限り、人間はあくまでも人間なのであります。人間は長所と短所を持ちながら絶えず自己改善をしていく、それがやがて奉仕の世界に入っていく。このような考え方からしますと"Service,Not self"「自己犠牲の奉仕」は妥当ではないのではないか。「自己犠牲の奉仕」"Service,Not self"では、奉仕・サービスというものは実現できないということになります。したがって、ロータリアンの自我というのは、常に良質な自我であります。その良質な自我を更に良質化していくために毎週一回の例会で自己研鑽に励む、という考え方をロータリーの思想の中核体に持っているとしますと、それはSelfをnot即ち、否定するのではなくて、Self・自己のabove・上に奉仕を考える、これが"Service above self"である、ということなのであります。

実は、このように言ったものの"Service above self"という言葉は、英語の慣用例にはありませんでした。今は使われておりますけれども、もともと英語の慣用例には"Service above self"という言葉はありませんでした。これは中世以来のマルチンルッターとかカルヴィンなど中世神学の考え方では、サービスという言葉は"Service,Not self"自己犠牲を意味したのであります。

即ち、人間というものは、自由意志を持ってはいても、神様の世界から見ると次元の低い世界にいるわけでありますから、自分というものを主張するのではなくて、自分を捨てて、ひたすら神様の秩序体系の中に没入していくことによって、自分の二度とない人生の価値を発見することができる、それ以外には自分の価値など発見できるものではない、これが実はヨーロッパ中世人の考え方であったのであります。この考え方が近世の社会に伝えられていますから、英米人がサービスといえば、これ即ち、"Not self"「自己犠牲」のことを意味したのであります。したがって、元来、英語には"Service above self"という用語例はなかったのであります。これが英米法学者の解説であります。

したがって、"Service above self"という言葉は実に奇妙な概念なのでありますから、この言葉がシカゴクラブで出てきた時に、シカゴのロータリアン達は爆笑したということが言われております。

「ロータリーというのは変だね。元来自分達はサービスというのは、"Service,Not self"自己犠牲だと思っていた。しかし、原理的に見てみる

と、これではロータリーの一義が立たないので、ロータリーの原理である自己改善というところから組み立てていくと“Service above self”ということになる。これはおかしいね。」というのが当時のシカゴのロータリアン達の考え方であります。

したがって、“Service above self”で成る程と納得することができるのは、実は英語が判っていない証拠であります。英語が判っている人は“Service above self”などという言葉は、おかしい言葉だと思うのであります。英語が判っている人にとっては、サービス“Service”と言えば、それは即ち、“Service,Not self”「自己犠牲」であったのであります。

実は、昔、神戸ロータリークラブの初代会長松方幸二郎さんは、イギリス育ちでありましたから英語が判っていた人でありました。当時、未だ日本にガバナー制度がなかった時に、スペシャル・コミッショナーという制度がありまして、その初代のスペシャル・コミッショナーの米山梅吉先生が神戸クラブを公式訪問された時に、松方幸二郎さんが米山先生に、「米山さん、私は日本人だから英語のことはよく判らない。殊に“Service above self”という言葉はよく判らない。あなたは日本の全クラブを統括するスペシャル・コミッショナーであり、しかも国際ロータリーを代表する人だから、一つこの言葉を納得のいくまで説明してもらいたい」と言ったのであります。

ところが、米山先生はどうしてもこれを原理的にうまく説明することができなかったというのであります。結局、米山先生は松方さんに、「貴方のいうことはよくわからない」と言われて、結局、もの別れになってしまったという記録が神戸ロータリークラブの歴史の中に残っているのであります。

神戸ロータリークラブの直木太一郎パストガバナーは、私の敬愛するパストガバナーでありますが、流石の直木さんもこの理由がよく判らなかったのであります。

そこで、中央大学の英米法の教授の小堀憲助先生に、「小堀先生、ここのところは一体どういうことなのでしょうか」と質問されたわけであります。

実は、小堀先生も最初はよく判らなかったそうであります。そこで、小堀先生は、これを研究課題として、長い間、頭の中で温めておられたのでありますが、結局、『ロータリー思想の理論構造』という本を書かれた時にこの疑問点が氷解したと言っておられました。

それは、どういうことかと言いますと、松方さんの考え方からしますと、サービスというのは即ち、“Not self”なのであります。“Service,Not self”「自己犠牲の奉仕」これで、すかっと判るのであります。これが英語系国民の慣習なのであります。理屈の問題でなくて慣習なのであります。“Service above self”などとセルフの上にサービスをのせる考え方は、英語を素直に理解できる人には判らないのであります。したがって、松方さんという人は、素直に英語が判る人、英語の大家であったということが言えるわけであります。

したがって、今、国際ロータリーの日本事務局が、“Service above self”を「超我の奉仕」と訳しているのは、実は正しい翻訳ではないと思うのであります。先程、この話の初めに私が申し上げたように、「超我の奉仕」という言葉は、“Service,Not self”の意味に近いだろうと思うのであります。したがって、先ほど申し上げましたように、米山さんは、“Service above self”という言葉を「超我の奉仕」とは訳さずに、「サービス第一・自己第二」と訳しておられますが、この方が私は適訳であろうと思うのであります。

要するに、“Service above self”というのは、自分を改善する世界をサービス・奉仕を志す世界だと心得るべし、ということであります。絶えず

世のため人のためのサービス・奉仕を志す心をもって、自己改善、自分の心を磨くということ、それは即ち、聖者の世界、即ち宗教の世界を至ることを意味しないのでありますが、日常の自分の心を磨き、行動を改善すれば、それが地域社会万般のことを潤す契機になることは間違いないわけであります。したがって、"Service above self"の世界を実業倫理の世界と呼ぶわけであります。したがって、"Service above self"のサービスというのは、自分を改善することであると理解すればよろしかろうと思うのであります。したがって"Service,Not self"自己犠牲の奉仕とは、概念の次元が全く異なるのであります。

以上を整理しますと、"Service,Not self"はロータリー＝宗教論であります。これに対して"Service above self"はロータリー＝実業倫理論であります。したがって、これは、"He profits most who serves best"と同じ世界にある言葉であると言えるのであります。これに対して、"Service,Not self"の世界は、宗教の世界であります。ロータリークラブは、世俗の団体でありまして、宗教的な団体ではありません。このような反省の中からポール・ハリスの意向を受けまして、"Service above self"という考え方が、ロータリーの主流になったと考えればよろしかろうと思うのであります。

したがって、"Service above self"は、原理的には明確ではありません。原理的な純粋度、原理的な明確さから言いますと、"Service,Not self"の考え方の方が圧倒的に優れております。日本のロータリアンの中で、この"Service,Not self"の考え方を採っておられたのが、実は米山梅吉先生でありました。したがって、米山先生のロータリーというのは非常に厳しいロータリーであったということが言われているわけであります。

では、何故、"Service,Not self"を"Service above self"に変えるのに10年もかかったのか。それは、ベンジャミン・フランクリン・コリンズBenjamin Franklin Collinsというロータリアンがあまりに偉大なロータリアンであったがために、これを変えることができなかったのであります。それからまた、ベンジャミン・フランクリン・コリンズが"Service,Not self"という標語を提唱した以降、ロータリーの代表的な指導者は、殆ど"Service,Not self"「自己犠牲の奉仕」の世界に生きた人が多かったということも一つの原因でありました。例えば、1912年の国際ロータリークラブ連合会の初代会長グレンC.ミードGlenn C.Meed、1913年の連合会の会長ラッセルF・グライナーRussel F.Greiner、1915年の連合会の会長ドクター・アレンD.アルバートDr.Allen Albert、これは内科のお医者さんであります。それから、私達になじみの深い1923年の国際ロータリーの会長ガイ・ガンディカーGuy Gundaker、これらの人達は全て、ロータリーの奉仕とは"Service,Not self"「自己犠牲の奉仕」であるという思想の世界に生きた人達なのであります。

要するに、"He profits most who serves best"と"Service above self"とは同じ世界に棲む概念でありますが、"Service,Not self"は、これらの言葉とは全く違う世界に棲む概念なのであります。

元来、"Service above self"と"He profits most who serves best"という二つの言葉は、同じ思想の世界に棲む概念として、1950年のデトロイトの国際大会において二つともロータリーの公式標語として採択されるに至ったのであり、そして、国際ロータリーの色々な文献その他において広く使用されてきたわけであります。

要するに、"Service above self"は、クラブの中の親睦の世界で自己研鑽に励み、自分を高めていく目標であります。そして、その職業実践面への投影が、実は、"He profits most who serves best"であると分析することができるわけであります。そして、この二つの標語は、シェルドン

が、同じ頭脳で考え出した標語であるということがいえるだろうと思うのであります。

以上を図解しますと、先ず、奉仕の実践をクラブの内と外に分けます。クラブの内においては、毎週の例会において自己研鑽に励みます。毎週毎週自己研鑽に励みながら、奉仕の心を学び、自らを高めていきます。その目標が“Service above self”であります。

そして、自らが高められていく心を或る段階を奉仕の実践面、即ちクラブの外へ投影した時の目標が“He profits most who serves best”になるという具合に理解すればよいと思うのであります。クラブの中で自己研鑽により自分の心を高めていく、その目標が“Service above self”であり、その高められた心をクラブの外へ、即ち、奉仕の実践面に投影していく時にその目標となるのが、“He profits most who serves best”である、と理解をすれば解り易いと思うのであります。

ところが、1972年の規定審議会におきまして、この2つのうち“Service above self”を第一順位のモットーにするという決議案が提案されたのであります。これが「72—76号」議案でありました。そこで、この提案に対して、大阪ロータリークラブの塚本義隆パストガバナーが代表議員として反対意見を述べられました。即ち、塚本さんは、先程紹介しました『易経』の「積善の家に余慶あり。責不善の家に余オウあり」という言葉を引用して、“Service above self”と“He profits most who serves best”の二つのモットーは、ポール・ハリスがその著書“This Rotarian Age”『ロータリーの理想と友愛』(米山梅吉訳)の中で高い評価をもって承認しておるものであるということ。これが第一点。それから、シカゴクラブのシェルドンが発案して以来、全く変わっていない。しかも、ロータリーの実践哲学として過去61年間の長きに亘って用いられてきたものであるから、これを廃止するなどということは、とんでもない話である、という反対意見を述べまして、圧倒的多数をもって、この提案は否決されました。

その結果、“He profits most who serves best”と”Service above self”の二つのモットーは、いずれも公式標語として残ることになったのであります。

ところが、1989年の規程審議委員会で、“Service above self”だけを第一の標語とする旨の決議案が採択されました。これが「89—145号」議案であります。

その結果どうなったのかと言いますと、“He profits most who serves best”「奉仕に徹する者に最大の利益あり」という標語の方は、次元が低いということになって、“Service above self”と区別されるようになったのであります。現に、2001年の手続要覧には、「決議23－34号」の冒頭第一項では”Service above self”だけが記載されていまして、従来記載されいた“He profits most who serves best”の文言は削除されています。

しかし、同じ思想の世界に棲む“Service above self”と“He profits most who serves best”を区別すること自体、原理的にはおかしいことだと思うのであります。

更に、2004年の規程審議会では、“He profits most who serves best”という標語を廃止する、という提案が15件も出て参りました。この提案も、原理的にはおかしいことなのでありまして、この標語を廃止するのであれば、“Service above self”も同じ世界に棲む標語である以上は廃止するべきではなかろうかと私は思うのであります。

要するに、“He profits most who serves best”という標語は、ロータリーの職業奉仕の根幹をなす概念でありまして、歴史上確立された概念であります。したがって、これを廃止したり、その表現を変えたりすることは、極力避けるべきだと私は思うのであります。

以上を要するに、アーサー・シェルドンの説く考え方が、ロータリーの本質論の立場から一つピックアップされまして、ロータリーのロータリーたる所以は一体何か、と言うと、それは職業社会に抜本的な功徳を与えることである、即ち、ロータリアンの自己研鑽のエネルギーが自分の企業を潤すということなのであります。

したがって、このことを1927年の国際ロータリーの理事会の「奉仕の四分類法」即ち、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕という実践類型に当てはめますと、「ロータリーのロータリーたる所以は、ロータリアンの自己研鑽をもってする職業奉仕の実践にあり」ということになるわけであります。

ここにロータリー正統派の理論が確立するに至ったわけでありまして、シェルドンとポール・ハリスがこの正統派理論を代表する信奉者だということが言えるわけであります。そして、その標榜するスローガンは何か、というと、それが“Service above self”であると思うのであります。

さて、国際ロータリーのテーマの解説はこれぐらいにしておきます。堅苦しい話をして申し訳ございませんでした。以上のように、国際ロータリーのテーマについても、また、ロータリーの思想についても色々な考え方があります。

ただ、私は、ロータリー運動というものを一言で集約すると一体何か、と言いますと、それは、「人を育てる」ことである、ということに尽きると思います。

そこで、「人を育てる」ということについては、もう少し突っ込んで考えてみたいと思います。「人を育てる」ということを考えた場合、近来、私達日本人は、経済的には大変豊かになりました。そのために、「人間として大切なもの」を失ってはいないだろうか。

また、そのために、「人を育てる」ことに失敗してはいないだろうか。とも思うのであります。「人を育てる」ということは大変難しいことであります。しかし、育てなければなりません。「人を育てる」といっても、皆さんご存知のように、それは簡単なことではございません。色々な知識を教えるだけでは人は育たないのであります。教育というのは、教え育てると書きます。したがって知識を教えるだけではなくて、「知恵」を育てなければなりません。「育てる」のであります。知識を「教える」だけではなくて、知恵を「育てる」のであります。これがまた大変難しいのであります。

仏の慈悲とか、愛というものをもとにした知識を「知恵」というのでありますが、禅宗では、「人を育てる」「後継者を育てる」ということは大変大事なことなのであります。禅宗では、歴代の老師が自分の後継者を育てるために殆ど一生涯をかけて心血を注ぎます。それは一体何故か、といいますと、後継者を育てられないと、その法脈が途絶えてしまうからであります。したがって、後継者を育てられなかったということは、指導者にとっては致命的なことでありまして、最大の恥なのであります。したがって、後継者を育てるために心血を注ぐのであります。私達がこのライラで若者達を育てようということの意味も、まさにその点にあるのであります。私達のロータリーの法脈が途絶えてしまってはならないから後継者を育てるわけであります。

参考までに一つの事例を出しておきます。臨済宗妙心寺派の御老師・森永宗興先生の話であります。この話は前にしたかもしれませんが、聴いた人は、あの話かと思って聞き流して下さい。

盛永宗興老師が、ある雑誌に載っていた俳優の森繁久弥さんの対談をお読みになりました。そこにはどういうことが書いてあったのかと言いますと、森繁久弥さんの友達で東京の或るロータリークラブの会長になられた人の物語なのであります。

その人は、ロータリークラブの会長になったというので、友達や知り合いの人を集めて、ロー

タリークラブの会長になったことの披露宴をされたのであります。関西ではクラブの会長になったことで披露宴などしませんが、東京ではそういうこともあるようであります。

会場はホテルでありますから、フランス料理、中国料理、西洋料理など色々な料理がありますが、この会長さんは、敢えて料理に「赤飯の握り飯」を添えたのであります。

そして、会長になった披露の挨拶で、何故自分が「赤飯の握り飯」を料理に添えて出したのか、という理由を話されました。

その人は、長野県の農家の長男として生まれた人でありまして、幼いときから両親の手伝いをして、朝は真っ暗なうちから畑へ出て働き、そして夜は、とっぷりと日が暮れてから帰ってくるという生活をしていたのであります。しかし、歳をとるにつれて、働いている田畑の広さが判って来て、これでは、いくら働いても一生涯水飲み百姓で暮らさなければならない、弟や妹を学校に行かせることもできない、ということが判りました。

そこで、これはどうしても都会に出て一旗揚げなければならないと思ったのであります。しかし、そのようなことを両親に相談しても、農家の長男というものは祖先から譲り受けた田畑を守っていかなければなりませんから許してくれる筈もありません。両親が悲しむだけだと思って言い出すこともできなかったのであります。

しかし、いくら考えても、このままでは駄目だというので、遂に彼は家出をすることを決心したのであります。そして或る晩、ひそかに下着などをまとめておきまして、翌朝、母親が起きる一時間前に起きて階段を降りていったのであります。そうすると、その日に限って、既に母親が台所で水仕事をしていたのであります。彼は、今更引き返すこともできないので、黙って母親の後ろを通ろうとしたのであります。

すると母親が振り向きもしないで、「赤飯を炊いておいたから食べて行きなさい」と言ったのであります。見ると、ちゃぶ台の上に赤飯がおいてありました。仕方なく彼がそこに座ると、母親が菜っ葉の味噌汁を添えてくれたのであります。彼は、赤飯を口に入れたのでありますが、涙の塊のようなものが込み上げて来て、どうしても赤飯が喉を通らない。それを見た母親が「起きたばかりで食べたくないのなら、お握りにしてあげるから持って行きなさい」と言ってくれたので、その握り飯を門口で受け取りまして、逃げるようにして真っ暗な道を駅へ急いだのであります。

そして、自分の家出を留めもせず、咎めもせず、怒りもせず、そして密かに赤飯を炊いて自分の家出を祝ってくれた母親が、今頃は台所の柱にすがって泣いているだろうという姿がまぶたに浮かんできて、彼は泣きながら真っ暗な道を駅へ急いだというのであります。

やがて、彼は、一生懸命に働いたお陰で、収入も増え、遊ぶ時間もできたのですが、母親の渡してくれた「赤飯の握り飯」が、恰もお守り札のように心の中に貼り付いて、どうしても横道に逸れることができなかったというのであります。

そして、真面目に働いたお陰で、名士の集まりといわれるロータリークラブに入れていただいて、今度はその会長にまで推されるようになった。これは偏に母親のお陰、「赤飯の握り飯」のお陰だと思うので、今日はどうしてもそのことを皆さんに聞いていただきたくて、この「赤飯の握り飯」を出したという話をされたのであります。

森繁久弥さんという人は、大変な感激家でありまして、その話をポロポロと涙をこぼしながら聞いたそうであります。森永宗興老師もこの記事を読んで涙がこぼれたと言っておられます。

ただ、老師は、「自分の流した涙は、母親の愛情が深いということに対してだけの涙ではない。この母親には、自分の息子が今何を考え、何時何

をするか、ということを的確に見通す知恵がある。その素晴らしい知恵の働き、その知恵の裏付けのある愛情が、見事に赤飯を炊いて送り出すという素晴らしい働きをした。このように感じて涙を流したのだ」と言われました。

この母親は、何故、子供の心が判ったのでしょうか。何故、その日に子供が家出をするということが判ったのでしょうか。何故、このような素晴らしい知恵を授かることができたのでしょうか。

老師は次のように解説しておられます。

昔の農家の母親が子供を育てるには、朝暗いうちから田畑に出て働かなければなりませんから、田畑に出るときには、赤ん坊に3回分4回分の「おむつ」を何重にも巻きつけて、藁で作った畚(フゴ)というものの中に赤ん坊を入れて、田畑に働きに行くのであります。子供のそばにべったりついているわけにいきません。しかし、赤ん坊と離れてゐればゐるほど乳房が張ってきます。乳房の痛みが心の痛みとなって、畚(フゴ)の中でおしっこだらけになって、お腹を空かして泣いている子供からは、一瞬たりと心は離れなかった筈であります。いつも子供とは心が繋がっている。そのような生き方の中から、この母親は、今日よく謂われる「親子の対話」などということは全くなしに、自分の産み育てた子供が、今何を考え、何時何をしようとしているのか、ということを的確に知って、そして子供が家出するその朝に赤飯を炊くという見事な働きをしたわけであります。

では、この母親に知識があったのか、というと、明治時代は、小学校は6年制ではなく4年制であります。したがって、学校の教育もこの母親は十分に受けておりません。

では、情報はどうか、というと、明治時代には農家にラジオなどありません。私の記憶でも、昭和の初期だったと思いますが、親父がラジオを買ってきたのを今でも覚えております。したがって、明治時代に農家にラジオがある筈は絶対にないのでありますす。

では、新聞はどうか、というと、新聞をとっている家庭ととっていない家庭がありました。仮に、農家で新聞をとっていたとしても、それを読むのは農家の主人でありまして、農家の女将さんが横座りになって新聞を読むなどという情景は絶対に見られなかったのであります。

このように、この母親は、今日の母親達と比べて、極めて情報にも乏しく、知識もなく、教育にも受けていなかったのであります。それにも拘わらず、自分の息子が今何を考え、何時何をするか、ということを的確に見抜いていたのであります。

これは、知識とか、教育の問題ではありません。私達が先祖代々授けられてきた先天的な知恵によるものなのであります。

今、若い母親達は、高等教育を受けています。短期大学や4年制の大学に行き、児童心理学、育児学、栄養学その他諸々の学問を学びます。そして、卒業してからもカルチャーセンター等で沢山の知識を身につけて、教育についてはいっぱしの理屈をこねる母親達が、果たして、自分の子供が今何を考え、何時何をしようといているのかということを本当に知っているでしょうか。これは、単に知識や教育の問題ではない、と老師は説かれるわけであります。

要するに、情報というものは、単なる知識とかデータの問題ではなくて、自分のぐるりを走り回ったり、泣いたり笑ったりしている子供の生(ナマ)の体験から発信してくる情報というものを適確に自分の心で受けとめなければ、子供を育てるために役立つ情報とはならないだろうと思うのであります。

最近、子供を育てることに関して、親子の対話がなければ子供が非行化すると言われていますが、それは、どこかの評論家が頭で考えたことではないかと思うのであります。

私の体験を申し上げますと、元来、男の子とい

うものは、父親とはあまり話をしません。私も親父とはあまり話をしていませんでした。したがって、父親との対話が殆どなかったというのが実状でございます。しかし、私は父を心から尊敬をしておりましたし、父も私を信頼してくれておりました。私は大学時代は徹底的に遊んで勉強は全くしませんでしたが、親父は一切文句を言いませんでした。卒業してから、司法試験を受けると言いますと、「それはよい、頑張れ」ただそれだけのことでありました。日常は、殆ど対話はなかったのでありますが、やはり父は私を信頼をしてくれていましたから、大きな目で見ていてくれたと思います。これは理屈の問題ではございません、また知識の問題でもございません。そして、親父と対話があったか、なかったか、という問題でもないと思うのであります。それはやはり、私が幼い頃から、父の生活態度、父の一挙手一投足から何かを教えられてきたからだろうと思うのであります。したがって、人を育てるということは、このような感化が重要であろうと思うのであります。

これに比べますと今の教育は、あまりに知識偏重になり過ぎていると思います。子供を塾に通わせるのも結構でありますが、知識ばかり詰め込んでも、その子供が本当に育つのかどうかということを考えなければならないだろうと思います。

私達は、近来、あまりに豊かになりました。欲しい物は何でも手に入ります。そして、あまりに便利になりました。そして、あまりに自由になりました。

実は、そのために人間の能力というものを衰えさせているのではないかと思うのであります。自由であることは結構であります。しかし、自由な生活ができるその反面において、人間の包容力というものを衰えさせる虞があります。そして、便利であることは誠に結構であります。しかし、それが一方では、人間の機能、心の働きとか体の働き、機能や体力を衰えさせることにもなるわけであります。それは、車にばかり乗っていると足が弱るのと同じことなので、これらの点も今一度、反省してみる必要があるかと思うのであります。

私達は、豊かに、便利に、そして自由になったがために、子供達に何らの感動も感化も与えられないかもしれません。先ほどの「赤飯の握り飯」を作った母親のような素晴らしい働きとか、素晴らしい感動など与えられないと思います。それはそれでよいと思うのでありますが、ただ、この母親のような生き方、育て方もあるということを私達はロータリアンとして心のどこかに留めておかなければならないと思うのであります。

この母親が育った明治時代というのは、人間の倫理、道徳というものが確立しておりました。しかし、昭和２０年の敗戦によりまして、我が国は軍国主義を排除して民主主義国家の道を歩んだわけでありますが、その際に、全ての古いものを捨ててしまったのであります。そのために軍国主義を捨てたのはよいのでありますが、軍国主義のみならず、人間の本来あるべき姿を育てる所謂倫理教育、道徳教育もまた捨ててしまったのであります。そのツケが今回ってきているわけであります。

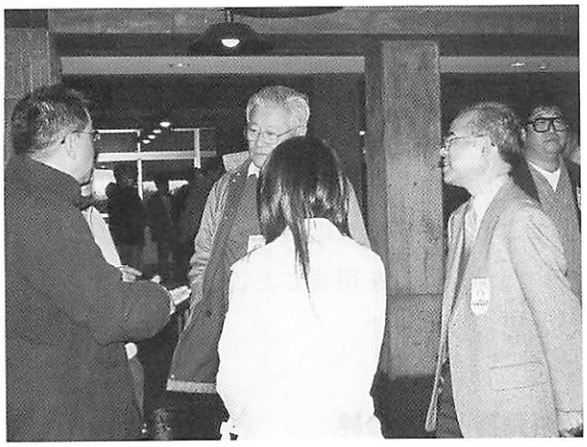
このことは、最近の少年事件の増加をみれば明らかであります。子供が親を殺し、親が子供を殺す。幼い子どもが連れ去られて殺される。一体人間の倫理はどうなっているのかということを疑わざるを得ない状況であります。

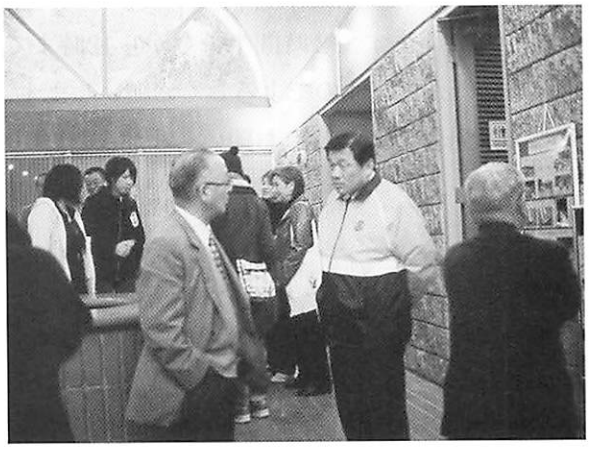
この原因は、結局、終戦直後、私達や先輩達が、倫理教育を怠ったそのツケがいま回って来ているわけであります。私達は、「子供を育てる」「人を育てる」ということについて、ロータリー運動は倫理運動でありますから倫理教育ということを忘れてはならないと思うのであります。実は、これは教育というものの中核にある考え

方であると思うのであります。

以上、ＲＩのテーマとそれに関連して「人を育てる」ということについて長々と喋りました。もう10時に近くなりました。大変遅くなり申し訳ございませんでした。酒を飲む時間が少なくなったことを心からお詫び致しまして、私の話を終わりたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。





自分の人生から感じたこと

穴吹学園理事
宝山（ほうざん）　秀逸（ひでいつ）先生

（司会）9時半から宝山秀逸先生の講義をいただきます。宝山秀逸先生のプロフィールはワークブックの方に出ておりますが、簡単に紹介させていただきますと、兵庫県のご出身でございまして、関西大学法学部を卒業後、香川県にあります百十四銀行の姫路支店に入行されまして、ニューヨークの駐在員事務所を開設をされた人で、後にニューヨーク支店長もされ、本店の方に戻られてからは人材開発室長などをされました。現在は学校法人穴吹学園の理事をされてます。まあ英語も堪能でありますし、またいろいろと教育関係の講演とか企業や役所の研修の講師などをされています。2時間半、今から12時まで講義をいただきますのでよろしくお願いします。それでは先生、よろしくお願いします。

宝山　秀逸先生

出身地　兵庫県
昭和39年3月　関西大学法学部卒業
昭和39年4月　百十四銀行姫路支店入行
昭和57年3月　ニューヨーク駐在員事務所長
平成元年10月　ニューヨーク支店長
平成10年3月　学校法人　穴吹学園理事
公的委嘱等　教員採用に関する実践研究推進会議委員
雇用・能力開発機構人材育成コンサルタント
高松国税局管内高松税務署国税モニター
高松商工会議所国際委員会委員
高松市倫理法人会副会長
高松市人材育成基本方針策定会議委員
香川県青年海外協力隊を育てる会運営委員他

はじめに

みなさん改めまして、おはようございます。ご紹介いただきました宝山です。私の名前を見てどう思われますか。厚かましい名前だと思いませんか。上は宝の山、下の秀逸(ひでいつ)は音読みをすると「しゅういつ」、辞書でひくとこれほど優れたものはない。大変秀でていると書いてあります。上は宝の山で下は秀逸、私、銀行に入った当時にね、銀行の同僚、先輩からお前の名前は厚かましい名前やな。上は宝の山で下が秀逸こんな厚かましい名前全国探してもないぞ。と言われたものです。昨日からみなさん方とご一緒させていただいておりますが、まず最初に、私はこのような歴史と伝統のあるライラセミナーに、それも初日の講師としてお呼びいただきましたことに対しまして、大変光栄に存じますとともに心より厚くお礼申し上げたいと思います。またここにお集まりの若い方々に、お話をさせていただく機会を得ましたことを大変大きな喜びと思っています。

海外勤務と家族の絆

私は今ご紹介がありましたように銀行員をやっておったんですがね、銀行の仕事というのは大体みなさんご承知のようにお客様からご預金をお預かりして、そして資金が必要な会社さんだとかいろいろなところへご融資をする。これが主たる銀行員の仕事ですが、実は私はほとん

どそんな仕事をしていないんですね。最初姫路支店に入りまして、約5年間預金や為替、出納など中の仕事、それに外回りも6、7ヶ月経験しまして、それで昭和44年2月に大阪へ転勤になりました。そこから外国為替、国際業務、平成5年の8月にニューヨークから帰って来るまで24年間、国際業務一筋、多分銀行員の中でもこういう経歴の人間はあまりいないと思うんです。

私は海外の勤務が2回ございまして、延べ8年2、3ヶ月になりますか。家族を連れてです。内示の段階で、駐在員の仕事は単身では無理、一人では仕事にならん。この話を聞いて家内は途方にくれましてね。私の家内は英語も出来ませんでしたし、車の運転も出来ませんでした。まあ高松が本店の地方銀行の百十四銀行の行員と結婚して、まさか自分がニューヨークへ行くなんて夢にも思っていなかったんですね。昔の東京銀行だとか三菱商事だとか三井物産の人と結婚したら、海外勤務があるかもわからないと覚悟していたでしょうが…。英語も出来ない、車も運転が出来ない、私みたいなのが大丈夫なのかしら、まして二人の子どもをつれて、主人は毎日仕事で忙しいだろうし、ちょっとしたノイローゼ状況になりまして、専門用語でいう自律神経失調症ですね。行きたくない、行きたくない、なんとか行かなくてすむ方法はないのだろうか。でも銀行の命令だしということで、私も一生懸命説得をしましてね、絶対おれが全部するから、買い物も何もかも通訳も全部やるから、とにかく一緒に行ってくれ、ということで昭和55年に行ったわけです。1980年です。それが最初でございました。そういうことで私はよくお話をするのですが、8年間の家族帯同のニューヨークの生活が、実は私たち家族の絆を物凄く強くしました。なぜかというとみんなそれぞれに大変な苦労があったからです。

ニューヨークという異国の地で肩を寄せ合って生きていくようなそんな体験が家族の大切さを教えてくれたのだと思います。子ども達を私、日本人学校に入れなかったのです。彼らの将来を考えてアメリカの小学校に入れたのです。特に、小学校の5年生だった娘はすべて英語の学校での授業は何もわからず大変な苦労だったと思います。家内は家内で、言葉はわかんない、テレビつけても全部英語でしょう。今日は天気はどうなるのかと思って天気予報を見ても、パートリィークラウディとかパートリィーサニーとかなんとかでてくる。何を言っているのかわからない。ですから寝るしかないんですよね。もうごろーっとして子どもが学校へいったら寝るしかないんですよね。

そうこうしているうちに、当時日本人の数は少なかったのですが、今度来た宝山さんの奥さんは車の運転が出来ないんだということがだんだんわかってきて、それじゃお買い物に誘ってあげようということで、声をかけていただくことが多くなり、家内としたら良かった。お願いします。といって乗せて行って貰いますよね。そうして欲しかったものを買い、ほっと一息していたら、翌日別の奥様からまた電話がかかってきて、奥様お買い物に行くんだけれどどう。ああこれ断ったら二度と声をかけていただけないかもしれない、昨日行ったところなのにと内心思いながらも、ああ、ありがとうございます。といってね。いくらあってもいい品物、腐らないものを買って、ありがとうございました。助かりました。と言って家まで送ってもらう。そんなことをしてるうちにですね、自分で運転免許を取ろうかな。もうこんなことで神経使うのもいやだし、子どもたちの送り迎えまで人様のお世話になっていたので、自分で免許を取ろうと思ったようです。もちろん筆記試験は英語ですよ。日本の本屋さんに虎の巻が売っているんですよ。英語の問題集の全部翻訳したのがね。私が一生懸命に横について、一緒に勉強してやりました。結局筆記試験、彼女は満点でした。私は90何点だった

のですが。でも運転免許は取ったものの運転は苦手、好きじゃない。私の駅への送り迎え、子どもの送り迎え、買い物、まさに一家のお屠い運転手みたいなことをやっていました。日本に帰ってきて免許証を切り替え手続きし、車もあるのに彼女は全然運転しないのです。日本は道が狭い、スーパーへ行っても駐車場が狭い、バックが苦手で私は出来ない、そんな状態でございますから、いまだに運転しておりません。そんな彼女を見て、子どもたちも、お母さんは運転は好きではなかったが僕たちのためにニューヨークでは随分がんばってくれたのだと今は心から感謝をしているようです。

それから昨日のオープニングパーティーでも少し話がありましたが、9．11テロの時つぶれました、ワールドトレードセンター北棟、最初飛行機がぶつかった、あそこの86階で4年4ヶ月仕事をしたのであります。あのビルは私にとっては本当に思い出深いビルでしたね、宝山君、君がニューヨークの事務所を作ってくれと、いうようなことでいろいろな方のお助けもいただきながら、物件探しに駆けずり回り、小さいながらも駐在員事務所を立ち上げました。40歳のころでしたね。もう俺がやらねば誰がやるんだ。というようなことで、アメリカ人を口説き一生懸命やって、ものの見事に開設予定日の3月23日には、きちっとした事務所をオープンできたわけですね。アメリカ人と日本人の工事期限に対する考え方の違い、なによりも私生活重視の考え方、組合とのトラブルなどいろいろ苦労しながらの体験もしまして、まあビルは今はないんですが、私にとっては一生忘れることが出来ないビルだったのです。

いずれにしても家族がそれぞれに苦労した4年4ヶ月でした。でもあの苦労のお陰で今の家族の強い絆があるのだと感謝の気持ちでいっぱいです。

昨年6ヶ月間で2度の一ヶ月入院

今日は「生きる」というテーマをいただいて、いろいろなお話をさせていただこうと思ってますが、「生きる」って凄いテーマですよね。物凄く範囲が広いですよね。

私たちは他人に対してもそうですが、自分自身が生きていることに対して、それは当たり前と考えてしまいがちです。でも去年の私のような経験をすると、生きているのが当たり前というようなことにはならないと思うんです。

実は私は昨年の3月から8月の6ヶ月間になんと2回も一ヶ月入院をしたんです。この経験はすごいですよ。やろうと思ってもなかなかできないことですよね。あなたね6ヶ月間で入院、それも長期の一ヶ月入院を2回しなさい。はい、やってみます。と言ったってなかなかできないですよね。盲腸になったって昔と違って一週間も入院させてくれないんじゃないですか。私はそれをね、去年体験しましてね。

一つは右眼の網膜剥離の手術でした。これは働き過ぎが原因だったと思うのですが、網膜剥離もかなり深刻な状態で失明寸前でした。眼科医院から紹介されて日赤の眼科へ行き診てもらったら、「これは大変だ」の一言。もう動いちゃだめ、絶対安静ということで、即入院。学校の机の上、まだ片付けていないし、明日の講演のレジュメも用意してちゃんとしているのに、学校へも戻れない。奥さんにすぐ電話して、入院出来るようにしてすぐ来て貰いなさいということでした。救急病棟に一泊して、それから眼科病棟に移って、4時間近い大手術を受けました。

3月25日に退院したんですが、いずれにしましてもね、その後の病気が、前立腺がん、それでまた一ヶ月入院しました。こういう経験をしてみますといろいろ考えますね、健康の有難みだとか、もっと言うとね、がんが転移していなかったことに対する感謝の気持ち。そして手術も大成功でした。主治医の先生も今までたくさん患

者さん手術しましたけれど、私にとっては最高の手術でしたと言ってくださいました。特に前立腺がんの場合は手術の後の尿もれだとか、いろいろあるんですが、もう何にもなくて手術された先生がびっくりなさるぐらい経過が良かったんです。で、いろいろなことを学びました。やはり患者と医師の信頼関係って大事だなあ。とか、たくさんの方にお見舞にきていただいて、やっぱり人の情け、こんなにみんな心配してくださっているんだとか、もっと言うと私の家内がですね、まだ3月寒い頃、それから7月8月の暑い頃、延べ2ヶ月毎日病院に来てくれました。とても心配をかけました。

私がその時に思ったのは、妻の存在、配偶者ですね、これはね、人生という戦場を共に闘ってきた戦友だなあと、そんな思いをしたんですね。一生懸命苦労をして、家庭を持って、何もないところからスタートして、子どもを産んで、そして二人の子どもを立派に育て上げて、そういうふうな38年の結婚生活ですが、去年ほど私は、妻の存在の有り難さ、これを考えたことはありませんでした。そんなことで生かされている命、転移もしてなくて、非常に順調にいったということは、お前にはまだやることがあるよ、いろいろな残された仕事があるよ、世のため人のため、まだやることがあるんだよ、こういうふうなことかなと思って、今もいろいろなところでの講演活動、若い人たち、または失業中の方々、いろいろな方々にお話をしております。

そういった病気や手術や入院の体験というのも「生きる」ということに密接に関係しているのだから、そんな内容でお話しようかとも思ったのですが、まあ若い人が多いから、あんまり関係ないなあということでこれはやめました。結局何を話しようかと思ったんですが、結論として、私が生きてきた６４年の人生を少しお話をすることによって若い方々に、ああそんなこともあったんだ。人生って平坦じゃないんだ。生きるということは大変なんだ。いつもいつもが順風満帆じゃないんだ。苦しいこともあるんだ。また、そんな時にどう対応するか、こういうことが大事なんだなあ。ということを少しでもお伝えできればと思い、私の64年の人生についてちょっとお話をさせていただきたいと思います。

運命論者の私

まずですね、この中で学生さん、ちょっと手を上げて下さい。はい、ありがとうございます。他の方は、働いてらっしゃるのですね。働いてない人、いらっしゃいますか。フリーター、ニートの人。いらっしゃらない、ありがとう。

生きているということについて、若い受講生の方、今までに考えたことありますか。生きているって、例えばですよ、「生きてて良かったなあ」、とか「ああ、やっぱり生きてて良かった。こんな瞬間を経験できて」あんまりみなさん、生きてて良かったと考えるようなことはないと思います若いうちは。逆にですね、「もうこんなんだったら死んだ方がましだわ」「お父さんお母さん、ぼくなんか産んでくれなかったら良かったのに」とか。「お母さん、私産んで欲しいと言わなかったのに」とかね。ひょっとしたら今までにそんなことで、お父さんお母さんに文句を言ったことがあるかもしれません。でも一般的には若いうちは、ほとんど生きていることの有り難さとか、生きているって素晴らしいことだなあ、ということをほとんどお考えにならないんですね。これはやはりだんだんだんだん年をとってきて、いろんな人生体験をして、喜びもあり苦しみもあり楽しみもあり悲しみもあり、いろんなことを体験していって、ああ生きているって素晴らしいなあと、生きてて良かったなあとか、こういうふうなことになるんじゃないかと思うんです。みなさん方の場合でも、今までにいくら人生経験が少ないといっても、絶望を感じたことがあるかわかんない。随分悩んだことがあるか

わからない。失恋してね、ものすごくショックを感じたことがあるかわからない。いろいろなことがあったかと思うんですが、それが人生なんですね。これからもいろいろなことが起こると思います。

ところで私自身は、運命論者なんです。すなわち人それぞれの運命というのはもう最初から決まっているんじゃないか。どんな人生をして、どういうふうな道を辿って、どんな死にざまをするのか。これはもう、人間は生まれた時から決まっているんじゃないかなあ。というのが私の理論、考え方だったんです。たとえばそれだったらね、悲しい運命の人ね、非常につらい運命の人は全然幸せになれないのか、こうなりますよね。そうじゃないんですよ。人生においてはいろいろな節目、ターニングポイントがあるんですよ。例えば、こういう人生を過ごしていて、ここで、ここでね、どうするか、こうして頑張ってみよう。そこで、変わる。こっちへ行って良かった。また、こう進んでいい道をたどる。。またここで、障害だとか苦難だとか困難が。その時にね、よっしゃーといってこっちへ行く、こうなる人とこことという時に頑張らない人。私はいろいろ人生の節目節目でね、その時にどう対応するか、どう考えるか。どう対処するかによって、道が変わって幸せな人生ができる。こういうふうな運命論者なんですね。

「稲盛和夫の哲学」から学んだこと

そういうふうに考えていたら何とね、京都セラミックという会社をお作りになった大変立派な経営者の稲盛和夫さんが、「稲盛和夫の哲学」という本をお書きになっているんですが、読んだ方はいらっしゃったら手を上げて。多分いらっしゃらないね。ぜひお読みいただきたいと思うんですね。

稲盛和夫さんは、私と同じような考え方なのですが、具体的にはこうおっしゃっています。われわれの人生を形成する要素として、2つのものがあると考えておられます。

まず第一に挙げられるのは、もって生まれた「運命」です。みんなそれぞれにもって生まれた運命がある、大金持ちの家に生まれる子どももいれば、貧しい家に生まれる子どももいる、早くてお母さんが亡くなるそういう子どももいる。これはもって生まれた運命なんですね。この「運命」とは別に、もう一つ、「因果応報の法則」これがあるとおっしゃっているんですね。

すなわち、良い原因には良い結果、善根は善果を産み、悪根は悪果を産む。良いことを思い、良いことをすれば、いいことが向いてくる。そういう「因果応報の法則」この二つがありますよと。これが複雑に絡まりあって私たちの人生を形成している。幸いなことにこの「因果応報の法則」の方が、もって生まれた運命よりもわずかに力が強いとおっしゃる。ということはいいことを思い、いいことをすれば、いいことが向いてくる。その「因果応報の法則」をうまく利用することによって、自分の運命を変えることができるという。私は全く同感なんです。それだったら救われますよね。悲しい星の元に生まれた人も、非常につらい人生を送らなければいけないような運命の人も、その「因果応報の法則」を使うことによって、楽しい素晴らしい人生に変えられるんだというこういう教えなのです。そりゃ全くその通りだと私は思います。

で、もう一つ「稲盛和夫の哲学」を読んでいて、はっと気が付いたことについてお話しましょう。私たちの人生に於いてはいろいろな試練がありますが、「人生の試練」についてという項目でこんなことが書いてあります。

実は私は、試練といったらね、困難だとか苦難だとか苦労だとかこういったものだと思っていたんですね。大変辛い目に会うとか、非常に悲しい目に会うとか、大変な困難に遭遇するとか、これが試練だと思っていたんです。しかし稲盛さ

んは、こう書いていらっしゃいます。そういう大変な災難に遭うとか失敗するとか苦労するとかだけじゃなくて、人生における試練は、大変な成功をすることも試練なのです。大変な幸運に恵まれることも、人の羨むような成功に恵まれることも等しく試練なんですと。

はっと気づかされましたね。私はこれを読んでいてそうなんだと。最近の例でいいますとね、ライブドアの堀江元社長さんなんかが、これにあたるんですね。大成功、大変な大金持ちになった。だけど今の彼を見ているとまさに急転直下、没落ですね。どういうことかと言うと大成功とか大変な幸運とかいった試練に会った時にどう対応するか、どう考えるかでその人の先行きが変わってしまう。

すなわち一生懸命やって、コツコツ努力をして、謙虚に人に感謝をして、そのお陰で成功があったのに、成功した途端に俺の力だ。俺がやったんだからこうなったんだ。そういうことで傲慢になって、金があれば何でも出来る。人の心も買える。こういうふうな傲慢さが出たときに結局、人に対する感謝の心も忘れ、成功に酔うと同時に謙虚さを忘れて、没落、衰退をしていくんですね。だから大成功、大変な幸運、これも試練なんですよと。ですから逆にですね大変な成功をしたり、幸運に恵まれたその時に、いやあ僕の力だけじゃないんだ。みなさんのお陰なんだと周囲の人たちに感謝をし、成功を得た後も謙虚な心と地味な努力を忘れず、さらに努力を続けていく人。成功という人生の試練にそのように対処していく人は、さらなる幸運と成功を手中に収め、それを長く保持できるはずだと書いてらっしゃるんです。

ですから生きて行く中で、いろいろなことをみなさん体験すると思うんですが、私が今いう人生における試練というのは、成功も幸運も試練なんだとこういうことで、どうぞ謙虚さを忘れずに努力を忘れずに一歩一歩、自分の人生を築き上げていくということをしていただきたいなあと思います。

「生きる」ことと感謝の心

それからもう一つ私が2、3年前に読んだ本ですが、こんな本があります。「朝（あした）には紅顔ありて」これは大谷光真さん、西本願寺第24代門主で住職ですね。りっぱなお坊さんですね、この方が書いてらっしゃる。「生きる」ということに関連して、一つこんな項目がございましたので紹介しておきましょう。

みなさん方の中にはほとんどいらっしらないと思いますが、生きていて、役に立たない人などいないのです、と書いてあるのですね。ちょっと読ませていただくと、『自分は何もしないまま人に迷惑ばかりかけて、何の役にもたたぬ人生を送ってきた。どうしようもない人間です』そんなことをおっしゃった方がいます。自分の人生を振り返って見つめるだけの余裕ができたとき、果たしてこれで良かったのかという後悔や反省の気持ちが沸き上がってきたのでしょう。私は、『反省が起こるということは素晴らしいことです』とお答えいたしました。

この方は、自分の生き方を省みるチャンスに遭遇したのです。変化の始まりに立っているのです。そう申し上げました。ところがその方は、浮かぬ顔でおっしゃったのです。『いいえ、自分にはどう変わったらいいのかということは、まるでわからないのです。わかるのは、ただ、どうしようもない役立たずだったということだけです』と続けられました。かりに、仕事もせず、親兄弟に迷惑をかけ続けてきた人であっても、だからといって自分は役に立たない人間であると卑下することはないのです。

その人は、ほかの誰であっても代わりは務まらない。この世で唯一の存在なのですから。と書いてあります。人は、身ひとつで生を受け、自分ひとりでは何をすることも出来ません。お乳を

与えて貰い、オムツを換えてもらい、何くれとなく世話をしてもらって育ちます。そして立って歩くことを学び、言葉を覚え、人の道として生きるすべを周囲の人々から教えられ、さまざまな願いをかけられて育ちます。こういうことなのですね。これを私たちはつい自分一人で、僕はここまで自分一人でやってきたんだ。とこういうふうにね、考えがちなんですね。そして親に対する感謝の気持ちすらなく、自分が全部やったんだ。誰にも世話になっていないと考えてしまいがちなんですね。

もうひとつこんなことを書いた人がいるので、これもちょっと披露しておきましょう。『私は今、家から離れ、自立し、家からは一円も貰っていない。私は一人で生きているんだ。誰の世話にもなっていない。ある青年が偉そうにそう言った。』これは私が所属している、倫理法人会のりっぱな先生が書いていらっしゃるんですが、そこでね、私はこう聞いてみたとこの先生がおっしゃっている。「あっそう、じゃあ君が着ている服は自分が作ったの？その靴や時計も自分で作ったのかい？おぎゃーと生まれたときから、一人でご飯を食べ、お風呂に入ったの？電気や水道も自分で作ったの？」その青年はうーんとね、言葉に詰まってしまったと書いてあるんですね。「君は誰の世話にもならず、一人で生きていると言ったが、そうじゃないよね。服だって靴だって時計や電気だって、お金を出せば買えるけど、いくらお金があっても作ってくれる人がいなかったら買えないよね。君は一人で生きているのではなくて、いろいろな人や物、電気や水や空気に生かされて生きているんじゃないの？」こういうふうなことをおっしゃっている。

私たちはなかなか、こういうことに気付かないんですね。自分一人で、私が俺が、こういうふうになりがちなんですが、どうぞその感謝の気持ち、私たちは水も空気も当たり前のように思っていますが、やっぱり当たり前じゃないんですね、いろんなことに感謝する気持ち、そういう気持ちが持てれば、いいんじゃないかなあとこういうふうに思います。

人生とは縁と出会いの連続

私はいま公私共に大変幸せなんです。僕ってこんなに幸せでいいんだろうか。確かに去年2回も1ヶ月入院をしましたけれど、その時に体験したこともいま大変な肥料になってますし、私は若い人たちに今日のようにいろいろなことを私の人生を振り返ってお話させてもらって、その子の人生が変わるというようなことが今までたくさんあるんですね。進路指導のお話だとか、まあいろんなことをさせてもらってます。本当に銀行時代も自分のやりたいことをやって、そして最後の4年間はこれがやりたかったんだと思えた人材育成、教育研修。人材開発室長として、2,600人の行員の全ての研修教育の元締めとしてやらせてもらって、そして穴吹学園さんに招かれて、毎日毎日本当に充実して、いい人生させて貰っているなあ、ありがたいなぁ、こういうことですね。

よく失業中の方々にお話をするのですが、みなさん方にも考えて欲しいのですがね、世の中が悪い、親が悪い、学校がどうだった。そんなこと言ったって何にも変わらないんですよ。自分が変わらなければ何も変わらないんですよ。いいですか、人を非難し、世の中を非難し、親に文句をいい、学校の先生を批判したって何にも変わらない。あなた方が変わらなきゃ何にも変わらないんですよ。そういうようなお話をよくさせていただきます。そういうことで私は自分の人生観の中で、一番大事にしているのは、やはり人との出会い、ご縁、これですね。われわれの人生とは、まさに縁と出会いの連続なんです。いろいろな人とのご縁をいただいて、いろいろな人との出会いがあって、それがずっと私たちの人生を作っているんです。ということはそのいた

だいた御縁だとか出会いを大切にすることによって私たちの人生に幅を作ってくれるんです。深みを作ってくれるんです。厚みを作ってくれるんです。みんな平等にいろいろな方との出会いのチャンスをいただきます。

でも皆さんその出会いを大事にしていますか、大切にしてますか、せっかく会ったのにせっかく知り合ったのに。私は今回のライラセミナーでみなさん方一緒になった仲間、どうぞこのセミナーが終わった後も人生のよき相談相手として、パートナーとしていつまでもね、ああこの人に会えてよかった。という人がもしいれば、ずっと生涯の友人として、お付き合いを続けていただければと思います。

百十四銀行との出会い

私がどうして、縁と出会いを大切にしているか。そしてこのような私の人生観はどこから来たか、まず、申し上げますと、百十四銀行との出会いです。私は昨日もはっと思ったことがいっぱいあったんですね。例えば前に出てきた人の住所は、神戸市灘区、あらっ僕の生まれたところですよ。どこかなぁと思って聞いていたら、ちょっと違っていました。私は戸籍謄本で見る限りでございますが、神戸市灘区千旦通２丁目で昭和16年10月16日に生まれているんですね。それでね、神戸の方がいらっしゃる、昨日見たら姫路、私、小学校３年生からは姫路育ちです。城北小学校、広嶺中学校を卒業しているんですが、姫路の方もたくさんいらっしゃるんですよ。それでまたすばらしい出会いをいただいておるんですが、この百十四銀行との出会い、昭和38年の８月にね、百十四が姫路支店をオープンしたのです。

私は38年の６月に姫路出身の人間を採用したいという銀行の方針もあって、入社試験を受けているんですね。このタイミングですよ。私の就職する時に、就職活動をしている時に姫路の50m通りにね、姫路支店が作られたんです。笑い話みたいですが、その時は「ひゃくじゅうし」と私、読めなかった、「ひゃくとし銀行かな」、いやぁ「ももとし」と読むんじゃないかな、ひょっとしたら「もそよ」かな、なんのことはない「ひゃくじゅうし」なんですね。素直に読んだらなんのことはないんです。38年の８月に姫路支店オープン、39年の４月に地元採用第一号で入行したんです。

このタイミングだけじゃなしにもうひとつ、39年の11月に百十四銀行は名古屋支店をオープンしているんです。名古屋と姫路、名古屋の方が大きいですよね、名古屋は100万都市、姫路は50万、当時の頭取がちょっと待てよ、重役会議でおいおい姫路は後にしようぜ、先に名古屋だと言って、決めてしまっていたら私はここにいないんですよ。わかりますか。39年の11月に姫路支店がオープンだったら私は39年４月にはどこか別の会社に入ってますよね。この時の頭取、重役会議の決断で姫路、名古屋を逆転していたら私は、みなさんとの出会いもないんです。人生ってそんなこといっぱいございますでしょう？

それからもう一つは、有難いことに百十四銀行はよその会社とちょっと違った採用方針を採っていたのです。すなわち、当時38年、39年ごろはとにかく採用する側、会社の方が強くて、あんな人だったらいらん、こんな人いらん、といって実はあのころは求人票に「胸部疾患者不可」、肺結核を患った人ね。麻雀しすぎて学生時代結核になったという人はもうダメ、いま元気になっていてもダメ、それからもうひとつは「色神異常者不可」というこんな言葉が記入されていたんですね。色覚が正常でない人ですね。具体的に言ったら赤緑色盲だとか赤緑色弱のことをいうんです。赤と緑の判別がしにくい、全然わからない。そのほかにどんな色も判別できない、すなわち、全部が灰色一色に見える全色盲というのがあります。そういう眼の色覚に異常のある人を

色神異常者というのです。

私の場合は一番程度の軽い赤緑色弱なんですが、色神異常者には変わりなかったのです。実際には程度が軽くて実務には影響がなくても、会社は胸部疾患者不可、色神異常者不可、と門戸を閉じていたんです。いくら優秀であっても、その条件だけであなたダメです。うちの入社試験受けられません。そんなひどい時代だったんです。

とくに色神異常者というのはどんなところがダメだったかといいますと、その筆頭は銀行でした。銀行がどうしてダメかといいますと現金が合う合わないだけじゃなくて、振替が合わなければ帰れないんです。すなわち、赤伝の入金伝票と青伝の出金伝票を起票して、例えば一万円ここから出して、一万円ここに入れるというときにはね、現金をいちいち動かさないんですね。一万円の出金伝票と一万円の入金伝票で処理してしまうのです。青伝と赤伝とでね。それをざっと１日終わったところで集計して、赤伝の合計いくら、すなわち振替の入金伝票合計いくら、青伝の合計いくら、すなわち振替の出金伝票合計いくらとそれぞれの合計数字がぴったり合わないと困るわけです。銀行は現金と振替２つが合わないと帰れないんです。現金だけじゃないんです。だから毎日振替伝票を集計する計算係の人がね、赤と緑が判別出来なかったら入金伝票と出金伝票がぐちゃぐちゃになってしまって、毎日合わない、毎日残業ということになってしまうんですね。だからダメなんです。

ほかに商社、ペイント会社、自動車会社、繊維会社など色に少しでも関係のある企業は全部ダメでした。その中で百十四だけが例外だったんですね。当時の頭取はね、「君、そうは言ったってね、現実に仕事に支障がないかもわからないのに、最初から門戸を閉ざすことはないよ、ひょっとしたらええのがおるかわからんぞ」と言って採用担当の人事部長に求人票から「胸部疾患者不可」と「色神異常者不可」の文言を削るよう指示されていたようです。百十四だけでした。そんな対応をしていた金融機関は。そんな銀行との出会い、これが私の運命だったのです。私としてはね、拾ってもらえた。銀行に拾ってもらえた。ありがたいことだ。よーし、この銀行のためにがんばるぞと思いました。

銀行を就職先に選んだのは、学生時代にね、私の友人が、お前は真面目で固いやつだから公務員か学校の先生か銀行員が向いていると言われたんですね。そうかいなと思って私は銀行を受けたんです。単純なもんです。それからもう一つはね、銀行の場合、３時に閉まるでしょう、シャッターが。あれに騙された。こんなに早く終わるんだったらええなぁと思いましたよ。これは受けないかん、実際銀行の中へ入ったらＢＧＭが流れててね、かわいい女の子が「いらっしゃいませ」と言ってくれましてね。これ、ええわぁと思いましたね。

もう一つ私は腕が細い、後ほどお話ししますが、身体的コンプレックスがありましてね、ガリガリだったのです。体重が大学卒業の時に45kg、もう夏は腹巻きしないとズボンがずり落ちる。そういうような状況でした、銀行はエアコンもきいているし、長袖でずっとおれるわ、単純なもんですよね。そういうことで銀行に入ったんです。この百十四銀行との出会い、これこそ私の人生に対する基本的な考え、「人生とは縁と出会いの連続」につながっているのです。

そして銀行に入ってから、今結婚している妻、私の家内との出会いもまた、おもしろいのですよ。みなさん方の中にもライラセミナーに参加したお陰で知り合えて、何年か先に結婚していらっしゃるカップルがあれば素晴らしいと思いますけどね。実は私の家内は百十四銀行の広島支店に勤務していたんですよ。そしてある時広島支店から姫路支店へ一人の男性が、まあＯさんとしましょうか。アルファベットのＯという頭文字ですね、転勤してきた。その人がね、私の

ことを非常に気に入ってくれましてね、私はお酒の付き合いもいいですしね、仕事もしますしね、お前ええ男やなぁ、気に入った。ところでお前そろそろ嫁とらないかんのとちがうか。そんな時代ですよ。24、25歳、そろそろ結婚を考えないかんのとちゃうか。はあ、そうですねとか言ってましたら、いやぁ広島支店にええ子がおるんじゃ。その後どんどん話が進みまして、結婚ということになったわけですが、もし、Oさんがあの時姫路支店に転勤してこなかったら私たちの結婚はなかったわけです。私たち夫婦は今もOさんに感謝しており、その後もずっとおつきあいが続いております。

結婚といえば、ある先生がこんな話をされておりましたので、ちょっとご披露しておきましょう。「お互いに相思相愛で、好きな人と結婚することは大事なことだ。しかし、もっと大事なことは結婚した人を好きになるということ」いい言葉ですね。好きになって結婚するのは大事だけれど、結婚した人を好きになることの方が、もっと大事だよ。これは仕事についても一緒なんです。みなさん方仕事を選り好みするのじゃなくて、何でもいいからとにかく仕事をする、ついた仕事、やってる仕事を好きになる。これが大事だということですね。そんなことで私は出会いに感謝し、その出会いを大切にするようにしています。

私の生い立ち

私の生い立ちと言えばちょっと申しましたけれど、私は神戸で生まれました。終戦直後のあの当時はね、若いあなた方はご存知ないけど、アメリカの兵隊さん、進駐軍がたくさんいましてね、実はジープでね、走っていてチョコレートやガムをまいてくれるんです。それをね、うわっと走って行って拾い廻っていた。

あのころから私は英語ができていたんです。「ハロー」「ハロー、ギブミーチョコレート」とか言ってね。4歳、5歳の時から英語やっていたお陰で、ニューヨークへ行けたんかなあと思うぐらいね、早くから英語と接触していたんですよ。そんなことを今思い起こします。そして小学校3年の時に姫路市内へ移ってそれからずっと昭和49年まで兵庫県内でおりました。昭和49年に芦屋の社宅を出て、東京の国際部の方へ転勤したんです。33年もの長い間お世話になった兵庫県はまさに私のふるさとなんです。

ところで、私の今の一番の楽しみは何だと思いますか。私の今の一番の楽しみは、昔の小学校、中学校、高校時代の同級生に会うこと。別に初恋の人に会おうとかそういう事じゃないですよ。昔の友だちに会ってビックリする顔を見るのが楽しみなんです。どういうことかといいますと実は私は、今も申し上げましたとおり、大変な劣等感を持っていました。色が黒くてガリガリでね、そりゃみなさん方は今は冷蔵庫を開けたら、牛乳でもジュースでもなんでもあるけれど、牛乳なんて私たち小さい頃はなかなか飲むことはなかったんです。バナナなんてめったに食べることはなかった。遠足にはゆで卵一個、それが楽しみだった。そういう状況で育ったわけです。やはり栄養は今ほど十分とはいえなかったと思います。

身体的なコンプレックスが内向的な性格にしたんでしょうか、とにかく内気で気が弱くてね、いじめにも遭い、学校から泣いて帰ることもしばしばでした。そんな子どもでしたから小学校時代、「宝山くん、おはよう！」と好きな女の子に声をかけられたらもう真っ赤になってうつむいとりました。今の私をご覧になったら考えられないですよね。私もそう思います。よくもまあ、こんなに厚かましく人前で、1時間、2時間話ができるようになったなぁーと思いますよ。

中学時代はバレーボールをやってましたけど、これもまたね、小さくてね、今の六人制じゃない、9人制の時ですから、強いサーブが来たら指

が小さいからバーンとボールがはじいてうまくレシーブできない。「馬鹿者！」とやられましてね、もう大変だったんです。

そのバレーボールのＯＢ会が２年前に姫路であったんですね。その時に久しぶりにバレーボール部の顧問だった先生ともお会いしたんです。久しぶりだからみんな自己紹介、私も堂々とやりましたね、自己紹介を。そしたらねその先生が、唖然とした感じではぁと口開けとんですね。それでねみんな紹介が終わってね、乾杯が終わったらね、一番に「おい宝山、ちょっとこっちへ来い」とおっしゃって、「お前いつからそんなに変わったんや」とびっくりされたんです。だっておるかおらんかの子だったんです。どこにおるやわからん、物も言えない、おとなしい、色が黒くて小そうてね。それがですよ、へーと思われたんですね、いつからこんなに変わったんや、いやぁー、最高は3,500人の前でもお話させて貰ったことありますと言ったもんだから、またまた先生がびっくりしちゃってね。

そんなことでね、私は今ね、昔の友人に会うのが大変な楽しみなんです。私の変わりようにみんながビックリするのが楽しみなんです。ですからみなさんこの中でね、内気な人、内向的、それから人づきあいが上手にできないとか悩みを持っていらっしゃる方いるかもわかりませんが、自分の性格ってのは変えようと思えば変えられますよ。間違いない。私が変えられたのですから。人前でものも言えなかった人間が、堂々と平気で喋れるようになったんですから。後で言いますが、これには一つ訳があるのです。

本当に高校時代は、レストランにも入れなかった。大勢の人がいるところが苦手だったんですね。母親が行こうと言っても、いやいやでしたよ。僕、行きたくないと言っていましたね。バスに乗っても真ん中によういかん、じっとこうしていた。考えられんでしょう。色が黒くて、ガリガリにやせていたというのが大変なコンプレックスだったんですね。

その当時私は、もうひとつ大きな悩みを抱えていたんです。それはとにかく数学が苦手で、いくら一生懸命にやっても、駄目だったんです。非常にまじめで、コツコツやっていくタイプでしたから、他の科目の成績はいつも上位にいたのですが、数学だけはコツコツ努力だけでは駄目なんですね。ヒラメキと言うか、なんと言うか、何か別のものがあるんですね。この中で数学が苦手で苦労した人がいたらわかると思うんだけど。

私はね、数学ができないためにね、どんなに悩んだか、ちょうど私の親父のＤＮＡをそのまま受け継いだんですね。親父はね、２分の１と２分の１足したら４分の２やないか。なんで１なんや。それをまぁー自慢そうに子どもたちに言ってたんです。わしゃ分数がわからんかったんやってね。これではあかんわと思いましたね。案の定、私も数学ダメ。そしたらね大学の進学先から何から全然違ってくるんですね。

数学が出来なかったというだけではなく、私にはもうひとつ先ほどもお話したように色神異常というハンディキャップがあったんです。数学が出来なかったから、理工系への進学については全然頭の中にはありませんでした。高校時代、英語の先生でしたが素晴らしい先生との出会いがあり、自分も先生になりたいと思い、教育学部の受験を考えたのですが、医歯薬理工系のみならず、教育学部への進学の道も閉ざされていたんです、当時は。

本当にね、ハンディキャップを背負って今までの人生をしてきたなぁという感じがするんですね。結局、小学校しかでていない親父と喧嘩しながらですね、まぁ第一志望ダメだったらしょうがない。関大へ行こうということになったんです。警察官だった親父は弁護士という職業にあこがれていたのか、私に弁護士になれと言ってきたんです。弁護士になれって簡単によう言

うわ、司法試験がどんなに難しいかも知らないのにと思ったんです。それで親父は弁護士になるんだったら関大の法科や。あの当時関西大学法学部卒業の弁護士さんが、大阪弁護士会の三分の二を占めていたっていうんです。今はずっとこうなっていますよね。そうことでよっしゃと思って、しょうがない。入試には数学もないしね、もうトップクラスで合格です。だいたい入試の結果発表、電報も頼まん、通って当たり前や思うてますから。で、翌日の神戸新聞見て、いやぁー合格しとるな。おれ、第一志望ダメだったらここに行かなしょうがないなぁというような感じでしたね。それで家が裕福でなかったお陰で、お陰じゃないけどね、その当時は、「くそっ」と思いましたけどね。

もちろん、通学できる範囲ということで受験したわけですから大阪吹田市の千里山まで、姫路の家から片道3時間、往復6時間、毎日通いました。それでほとんど毎日家庭教師のアルバイトをして、奨学金ももらいました。親父に出してもらったのは、4年間の授業料だけでした。授業料も今から考えたらあの頃は安うございましたね。年間の授業料が24,000円、私立大学では、関西で一番安かったんですがね。従って親から出してもらったのは96,000円だけです。後は全部自分でアルバイトと奨学金とでやりました。

そんなことで私が今考えてみるにですね、数学ができんで良かったと高校生にお話をするんです。

僕、数学が人並みにできて、または人並み以上にできていたら、第一志望の大学に入っていたら、きっとちゃらんぽらんな人生していたと思います。今の私はないです。「こんちくしょう」と思うことないのですから…。数学出来んでよかったんです。こんな素晴らしい人生を送っているんですからと言ってあげます、高校生にお話させてもらう時に、もう一つは、家が裕福でなくて良かったんや、貧しかって良かったんや。好きなところへ行かせてやるわ。東京の大学でもどこでも行け。なんぼでも授業料、下宿代出してやるわ、というような状況でなくて良かったんです。また、自分に身体的コンプレックスやハンディキャップがあって良かったんです。数学が出来なかったから、経済的に裕福でなかったから、身体的コンプレックスやハンディキャップがあったお陰で、こんちくしょう、負けてたまるかという気にさせてくれたんです。頑張れたんです。

人生これからの若い人たちにこんなお話をさせていただくのが私の役目かも知れないと考え、講演活動をするようになっていろいろ勉強しておりますと、松下幸之助さんが同じようなことを言ってらっしゃることがわかりました。

ある時テレビのインタビュー番組で司会の人から、松下さん、松下電器産業、松下グループを、こんな立派な会社に育て上げ、経営者として大変な成功を収められた秘訣はなんですかと聞かれた。松下幸之助さん曰く、私の家が貧しかったお陰です。小学校4年生で中退して、丁稚奉公で働いて、5銭のお給金をもらった時に、1ヶ月で5銭ももらえる。ありがたいことや。来月も一生懸命働こうと思われたそうです。裕福な家庭に育っていたら、なんや5銭しかもらえんのかとなってしまい、一生懸命働く気にもならなかったと思う。

二つ目は私に学歴がなかったお陰です。小学校4年で中退、中学校も高校も大学もでていない、だからみんな私の師匠、先生なんや。だから若い人の話も一生懸命聞く。最後まで相手の眼を見ながらじっくり話を聞く、部下は育ちますよね。こんなに僕の話をしっかり聞いてくれる上司のためならと、こうなる。最後に私の体が弱かったお陰です。肺が片方なくてね、無理ができない。だから、「すまんなぁ、君やってくれるか、すまんなぁ」と。自分が元気だったらやれることも部下にまかせる。だから部下が育ってくれた。

それで会社がどんどん大きくなり立派になったとこういうお話がございます。

まあ、私の場合はどちらかというとちょっと屈折思考の傾向がありまして、あの当時は。「なにくそっ。今に見ておれ」ということで、意固地になることが多かったんですが。たとえば学生時代に「おれは絶対にスキーはやらんぞ」と心に決めていたんです。大体大阪駅発５時15分の快速電車に乗っていたんですが、７時に姫路駅に着いたら家庭教師のアルバイト先のご飯が出るところだったらそのまま直行して、夕食の出ないところへ行く時は駅の地下にあった寿司屋へ行きましてね、あのころ一皿50円、５個入っていましたかね、急いでつまんでね、それからアルバイト先に行くんですよ。そんなことをやっておりました。

あの当時も、スキーをやる若い人がたくさんいまして、赤や青の派手なスキー着を着て夜行列車に乗るために待っているんです。北陸方面へスキーに行くんですね。金曜日の夕方などは大阪駅のコンコースはごった返していましたね。今から電車に乗って家庭教師のアルバイト先へ行き、家へ帰ったら10時過ぎ。なんとなく自分が惨めになって「くそっー、」と思ってね。おれは絶対スキーはやらんぞとなったんですね。いまだに一度もやってないんです。もっとも今やったら骨折してしまい、物笑いになるでしょうね。多分一生死ぬまでスキーはしないとこういうことになるでしょう。こういうふうにちょっと変に頑固なところがあるんです。これも親父のＤＮＡを受け継いでいると自分ながらにわかるんです。

まぁ、いま申し上げたように数学は出来なかった。親父のＤＮＡを受け継いだばっかりにと、親父を恨んだ。だけど今はね、親父に感謝してます。こうしてみなさん方の前でお話ができる、まさに親父のＤＮＡを受け継いでいるんです。私の親父は兵庫県龍野市が本籍地ですが、龍野の親戚の家へ法事だとかお祭りの時によく一緒に行ってたんですが、いつも私の親父が車座の中心で、一人でしゃべってましたね。「いやぁー秀雄さんの話はいつ聞いても面白い」とおばさん連中は一生懸命聞いていましたねー。

そんなＤＮＡも私は受け継いだんです。だから現在年間100回近い講演回数になっておりますが、是非今年もお願いしますといったリピーターの方々が多いのも、親父のおかげなんです。高校時代、数学が出来ないことで悩み親父を恨んでいた私が今は親父に感謝しております。感謝の気持ちを表す方法として私が今やっていることは、研修の講師をやっている写真が社内報に出たり、講演の記事や写真が新聞や雑誌に出たりしますといつも余分をいただいて、それを全部87歳で今まだ元気な母親、姫路に弟家族と一緒に住んでいるんですが、そこへ持って行ったり、送ったりしております。そして仏壇に供えてもらっております。

母親がいつも私にこう言います。「お父さんが元気やったらどんなにか喜んでくれるだろうになぁー」と。そんなことで親に対する感謝の気持ちを忘れずにやっている訳なんです。というのも母親は警察官の父の安い給料で私たち４人の子どもたちを育てるのに大変な苦労をしていたのを知っているからです。

幸い母親は娘時代、今の三ノ宮駅の近くだと思うのですが、加納町でドイツ刺繍の技術を身につけていたのです。そして夜一時二時まで一生懸命ミシンを踏んで内職をしていました。

私が姫路出身ということがわかり、今回ご参加のロータリアンの三木さんから、私は百十四銀行姫路支店のすぐ近くの中華料理店、「東来春」の横で歯医者をやっていますというお話をいただき大変なつかしく思いました。私も銀行時代はその店の中華そばをよく食べに行っておりました。実は私の母親は姫路のお金持ちの奥様が洋裁店で誂える洋服の袖口やら襟にカット

ワークをする、まさに下請けをやっていたんですが、「東来春」の経営者の奥様もそんなお客様のお一人だったようです。家族のために夜も寝ないで一生懸命働く母親を見ておりましたから、親孝行をしなければとはいつも思ってましたね。最初のニューヨーク赴任の時は、たまたま弟家族もニューヨークに駐在しておりましたので、一ヶ月半両親をニューヨークに呼び、3週間ずつ兄弟で面倒を見ました。父親が亡くなった後、母親をもう一度呼び寄せましたので、母親は合計二度、ニューヨークを経験しております。

プラス志向の大切さ

私たちは生きている間にいろいろなことを体験するわけです。楽しいことばかりじゃないです。苦しいことやつらいこと、悲しいこと、いやなことなどいろいろあります。考えようによれば生きるということは、大変なことかも知れません。でも喜びも沢山あります。

いずれにしても今までの私自身の人生を振り返ってみて、何が大事かといったら、やっぱりね、プラス志向だと思いますよ。例えばコップの中に水があって、よく話ありますよね、コップの水をこう見てですね、3分の1ぐらいあるとしますか、コレを見て、ああ、もう3分の1しかない、というマイナス志向よりも、ああ、まだ3分の1もあるわ、有難いなぁーというようなプラス志向が大事なんですね。家が裕福でなかっても、裕福でなくて良かったんだ。数学できなかっても、できなかって良かったんだ。というようにプラス志向で物事を考えられるようになるとどういう現象が起こるか。周りに集まってくる人が違ってくるんですよ。同じような考え方をする人が集まってくるんですよ。たとえば、「私って不幸な女よ、ついてないわ」などなんだかんだと言って、ぶつぶつぶつぶつ友達に不平不満や他人の悪口ばっかり言っている人の周りには、そんな人たちばかり集まってません？　顔を合わせたら不平不満、愚痴ばっかり言う人ばっかりが集まるんですね。

私は「僕ってなんて幸せなんだ、銀行でもこれほどやりたいことをやらせてもらい、上司にも恵まれた男はいないんじゃないか。入行同期82人の中では僕が一番の幸せ者や」と公言するんです。そうするとああ、あの人は幸せだ幸せだって言っているなー、あの人と一緒にいたら自分も幸せになれるかもしれないとか、僕は陰気で暗い人より明るくて元気な人が好きだといって幸せな人が周りに集まってくるんですよ。暗い顔をせずににこやかに元気にやっていたら、元気な人が集まってきますよ。だからまさに私たちの人生というのは、それぞれにもって生まれた運命はあるけれど、どう生きようか、生き様ですね。自分の人生どうしたいのかを真剣に考えることによっていい人生が出来ると思うんです。

残念ながら日本の教育現場では、あなたはどんな生き方をしたいんですか、どんな人生をしたいんですかというようなことについてみんなで真剣に討議するような場がないんですね。若い人たちに夢がない、何をやっていいのかわからない。いま非常に大きな問題を抱えておりますね。

私は先般も広島県の高等学校教育研究会の進路指導部会で講演をして欲しいと呼ばれたんです。やったぁーと思いましたよ。進路指導の先生方に対しては私は、どうしても言いたかったことがたくさんあったんですね。進路指導部会での講演、それもどちらかというと辛口の私が呼ばれたのには事情があったんです。私を呼んで下さった、その会の裏方になった方は、実は自動車メーカー、マツダのディラーの会社の社長をしておった方で、尾道商業高校の校長先生でした。事前に尾道商業高校を訪問させてもらい、いろいろお話をお伺いしましたが、同じ民間企業出身ということで、教育や人材育成の話では意

気投合しました。

赴任直後はギャップが大きく、抵抗する先生方も多かったようですが、十分話し合い、説得を続けていった結果、だんだん学校が変わり良くなって行ったんですね。もっと私はね、民間出身のああいう校長先生を増やしてね、日本の教育を変えて欲しいなぁと思うんだけれど、なかなかそうそうは、甘いもんじゃない。で、今年の3月で退任されるんですよ。今回ご参加のみなさん方優秀な方ばっかりだと思うんだけれどね、お勉強が出来る子が優秀、素晴らしい、テストの点数がよかったらお母さんもいい顔、先生も喜ぶ。今の日本の教育はこんな教育なんですね。

例えばいろいろな知識がたくさんあったって、知識を知恵に変えられなかったら何にも仕事してても役に立たないでしょう。それよりも大事なことは何ですか。学校じゃ勉強も大事、そりゃ漢字書けなきゃ、暗算も出来なきゃいけないよ、だけど大事なことはなんですか。

相手の立場になってものを考える。そういうことができる人間でないとダメだということ。昨日からお話ありましたよね、こんなこと言ったら気分悪くするだろうなとか、こんなことされたら私もいやだからあの人もいやだろうなあとか、そういうことが考えられる人でなきゃいけない。自分さえよければという自己中心はもうダメ、バランス感覚がないとダメ。今の企業はどんな人を求めているのか。やっぱりコミュニケーション能力です。みなさん方はかわいそうにね、コミュニケーション能力を育てる機会をどんどんどんどん削がれて、お勉強お勉強で、やってきている。

だからこのライラセミナーでしっかりね、ディスカッションしてね、そしていろいろ今日もお話ししてたらね、素晴らしい仕事をしている方がいらっしゃいますよ。そういう方々といろいろ意見交換してね、自分を磨いて高める一つの場にしていただいたらいいと思うんですね。勉強は一つの分野であるにもかかわらず、その勉強だけで人を判断してしまう今の教育、問題がありますねー。笑顔が大事ですよ、人を思いやる心も大事ですよ、やさしさも大事ですよ。いろいろ大事なことがたくさんあります。手先の器用な人はそれを生かしたらどうですか。絵が上手な人、いっぱいいろいろないい面を持っているのに全部殺されています。勉強だけで判断される。

私はアメリカ教育を体験して、たくさんのことを学びました。アメリカの教育全てがいいとは言いませんけどね、少なくとも日本の教育よりははるかにいい点が多いです。小学校6年間、テストをして順番つけてクラスで何番、学年で何番なんてそんなんありません。まさに昨日深川パストガバナーがおっしゃった倫理を重要視した教育なんです。人としてどうあるべきか、人間としてこんなことはやっちゃダメとかね、こういうことを徹底的に教え込みますね。

これが今はもう日本から欠落しているんです。金儲けで出来るんだったらええ、合理化になるんだったらええ、効率が上がったらいいんだ。それが耐震強度偽装事件もそうだし、東横インの問題もそうだし、なんでこんなことになったんです。人間としての基本教育がなされていないんですね。お勉強さえできたらええ、偏差値さえ高かったらええ、これを変えなきゃダメですよ。

私はそういった意味で、この間の進路指導の先生方にもね、こんなお話をさせていただいたんです。「あなた方のお仕事は生徒一人の人生をも左右するような、そんな大事な仕事なんだというようなことをお考えになったことがありますか」と。うちの高校から国公立へ何十人入れないかん。進学率を何%に上げないかん。君の偏差値やったら、大学行く気があるんやったら、何とか県立大学、なんとか市立大学、へんぴなところ、比較的容易に入れるところがあるんですよというような進路指導、国公立大学だからとい

って、そんなところへやっていいんですか。あたら若い青春時代を、ど田舎で、かなりの人が辞めて帰ってくるんですよ。その人達はその後どうなっているんですか。ニートになっちゃう人もいるんですよ。フリーター417万人、ニート80数万人、人口がどんどん減少し、これからたくさんの若い労働力が必要な時代なのに、まだまだそんな若者を作って行くんですか。私、怒ったんです。もっと真面目に進路指導はどうあるべきか考えて下さいよと。

三者面談から四者面談の進路指導へ

だから私が先生方に提案させていただいたのは、四者面談を取り入れた進路指導、だいたい今の三者面談いうたら、担任の先生と本人とお母さんで、お父さん出て来ないですよね。お母さんも専業主婦の方が多い。専業主婦のお母さん、世の中の動きわかっているんですか。

先生、失礼ですけれど先生は、先生としては立派でしょうが、今の世の中というのはどうなっているか、企業がどういう動きをしているか、企業経営者はどんな人材を求めているか、わかっていらっしゃいますか。わかっていない。なんにもわからんお母さんと先生と本人でどないしてええんかわからん、そんな3人が三者面談してなんで実のある進路指導が出来ましょうぞ。

そんな進路指導ちょっと変えないかんよと私思うんです。進路指導の面談の中にわかった人を入れるべきなんです。人生経験豊富なお父さんを入れたらいいんです。アメリカは私の体験では、高校二年生で進路についてのカウンセリングがありました。担任の先生が進路指導するんじゃないんです。むこうは専門のカウンセラーがいるんです。そして時間たっぷりかけてね。なんか聞いたら三者面談10分か15分ですってね。そんな一生を決めるような大事な進路指導の三者面談を10分か15分、とんでもない。お父さん入れて、四者面談にしませんか。アメリカは高校二年生で、本人とお父さんお母さんとカウンセラー四人で小一時間ですよ。

私はね、あの時に息子ってすごいなぁと私、見直したんですよ。英語で堂々とカウンセラーとやり取りしてました。私の意見も求められました。いろいろ話をして、だいたいアメリカの高校二年生ってのは、全部自分でね、その時点でね、僕はどういう仕事をしたい、どんな方面に進みたい、どんな仕事をしたい。ちゃんとした考えを持っているんですね。そこからじゃあ君、そんなにホテル関係に行きたいんだったら、コーネル大学のホテル学科は世界一だよ、全米一はもちろん世界一だよ、コーネル大学のホテル学科へ進みなさい。これが本当の進路指導ですよ。

偏差値だけ見てね、君の偏差値だったらここだったら通る、いゃあ私、弁護士になりたいんですけど。でもあそこの法学部は難しいから商学部だったら君は通ると思う。そんなら商学部へ行きます。そんな進路指導ありますかっていうんです。まあそんなことでいろいろ好きなことを言わせてもらっておるんですけれど、私の使命かなと。せっかくアメリカで小学校一年生から高校三年生まで、アメリカの教育の実態を保護者として体験したんですから。多分そんな人間はいないと思います。

だって中学、高校生を持ったニューヨーク支店長さん、ほとんど単身でした。信託銀行は6人だったかな。支店長さん全員単身でしたね。だから結局保護者としてね、アメリカの教育を体験できるということは、非常に難しいんです。私は二人子どもがいたということと途中5年間東京の国際部に帰ったために下の息子が幼稚園の時にアメリカへ行って、小学校1、2、3、4、5、5年間、東京に帰って、5、6、1、2、3、5年間日本、そしてニューヨーク支店長で再度行くときに、ちょうど中学3年卒業の前だったのです。

そういうことで高校1、2、3、それで娘がお

りましたから、娘が5年生6年生も体験して、中学3年生までいて日本に帰って来てますから、結局小学1年生から高校3年、12学年全てを期間が短い学年もありましたけれど、全てを保護者として体験できたんです。

というのは、日本のようにお父さんは仕事で忙しいから学校関係はお母さん任せという訳にはいかないんです。もちろん家内が英語が駄目だったのということもありますが、学校へ行くのも、先生と面談するのも夫婦揃ってが原則なんです。ＰＴＡの総会は夜8時からですよ、お父さんお母さんが一緒に行かなきゃいけないようなシステムなんですよ。

私は、よく中学校や高等学校のＰＴＡ総会などで講演をさせていただくんですが、平日の2時や3時からのＰＴＡの会合になんでお父さんが来れますか。来年からは是非土曜日か日曜日に開催するようにしてくださいとお願いしております。

それと私が提案させていただいている四者面談をやったら先生方も勉強になるんです。お父さんがどんな仕事をしてるとか、そういう話をすることによって、四者面談の場を通して日頃、家の中で親子の会話がなくて、うちのお父さんなんしょんかわからん、子どももお父さんの仕事やお父さんの大変さも知ることが出来るんです。あなた方はご存知かどうか知りませんけどね。お父さんの仕事は？、いや会社員です。どこの会社？　知りません。会社の名前を言えてもそこで何をやってるか知らない。会社の名前は知ってますけどという程度だった子どもが、ああ、お父さんってこんなすごい仕事をしているんだとかね。

学校の先生も勉強になる。お母さんも家に帰ってきたら、「飯、風呂、寝る」だけのお父さんだけど、やっぱり会社では苦労があるんだなぁーとかわかって、なんか見直されるとか。いろいろあるんです。だから四者面談して下さいよ。と提案したのですけどね、なかなか変わらないでしょうね。

日本の教育が変わらないのは皆さん何故だと思われますか。外圧がないからですよ。旧大蔵省や旧通産省はどんどんどんどんアメリカからの外圧で、規制緩和だ、談合だ、なんだかんだ変わってきましたね、これ外圧なかったら日本はここまで変わっていませんよ。日本はそういう国なんです。ところが教育には外圧がないんです。まあせいぜい教科書問題とかその程度でしょう。よそのことほっといてくれといえますからね、うちはうちのやり方で教育やるんだ。ということですからまあそういった意味でね、なかなか変わらないんです。でも変えられるところから変えていきませんか。

ロータリアンのみなさん方が、やっぱり将来の日本を考え、こういう素晴らしいイベントを主催していらっしゃる。私はもう感動しました。ライラセミナー、これをもう２８回もやっていらっしゃる。素晴らしいことです。そういった意味では、本当にロータリアンの皆さんに敬意を表します。休憩を入れた後は私が10年近くお勉強させていただいている倫理法人会のお話をさせていただこうと思いますが、昨日の深川パストガバナーからお話がありました倫理、ロータリーも倫理を大事にしているんですね。

私は昨日、はっと思ったのね。やっぱり一緒だと思ったのが、何かと申しましたら、パストガバナーが誰々がなんだかんだとここに並ばれた方々の名前を呼ばれたら、皆さん、「はいっ」、「はいっ」って聞いていて気持ち良かったですね。自分の名前を呼ばれてもこの頃ね、、「はい」という返事が出来る人が少ないんです。「はい」という返事ができないんですよ。

私はよく言うんです。「はい」という返事ができないということは、あなたが素直でないからや。素直な心があったら、自分の名前を呼ばれたらね、大きな声で「はい」と言えるんです。そう

いう意味で、昨日は、ああ、私が勉強している倫理と共通するところがあるなあ。やっぱりロータリーはすごいなあー。非常に感心させていただいたし、そういうロータリーのことをあまり知らなかった皆さん方も、昨日でだいぶんお勉強になったと思います。

ぜひ明日、明後日しっかりお勉強されて、友情の輪を深められて、自分の人生を振り返えるいい機会にしていただくと共に、ああライラセミナーの3泊4日、本当に良かったなあというような経験にしていただきたいと思います。

ちょっとここでトイレ休憩を15分入れまして、11時から始めますので休憩致します。

倫理法人会について

あと1時間の辛抱、がんばって聞いて下さい。後半はちょっと趣を変えまして、私が昨年会った、すさまじい生き様を実践されてきた人、大島修治さんのことについてお話をさせていただきます。

その前に私が所属している倫理法人会について少し説明させていただきます。母体の社団法人倫理研究所というのは、文部科学省の生涯学習政策局がバックアップしてくれており、昭和２０年の９月に設立されております。倫理法人会自体は昭和55年に初めて設立された会で、今、全国に40,000社余りの中小企業の社長さんが中心になって、活動しております。

全国各地にございまして、多分500ヵ所ぐらいになっているかと思うんですが、何をやっているかといいますと、倫理法人会の目的は、日本を良くしようということで、日本を良くするひとつの方法にまず手っ取り早く、中小企業の社長さん、個人経営の社長さんとか、もちろん弁護士の先生、お医者さんも公認会計士の方もいらっしゃいますが、そういう方々が、立派な人間になる、立派な社長さんになったら、その会社が立派になっていく。そして社員が立派になる。そうすれば日本がよくなる。こういう遠大な構想でございます。、

千葉県のある社長さんが、経営者が自らを高める、学ぶ会を作ろうということで最初の倫理法人会が千葉県でスタートしました。香川県は12年前に丸亀市に光建設という会社がございますが、そこの津島社長さんが、「これはいい」ということで、そして倫理運動を香川県で始められたのです。今、香川県は会員数は約800社を数えておりますが、愛媛県はすごいのですよ。1,500社ですよ。それでちょっとそんなことにからんで、話をしていきますが、それぞれの倫理法人会設立にあたっては最初はとりあえず50社の会員を必要とするんです。

百十四銀行へもお取引のある津島社長さんが、平成９年の３月、「百十四銀行さんも会員になって下さい」ということでお越しになりました。そして津島社長さんが、最初「万人幸福のしおり」と表紙に書いてあるんですが、こういう本を置いていかれました。これは何かオーム真理教か新興宗教みたいな感じだなーとみんな思ったんですが、あの立派な社長さんが薦められるんなら、そんな変なものじゃないだろうということになったんですね。

例えば「万人幸福のしおり」の17ヶ条にはね、「今日は最良の一日、今は無二の好機」「苦難は幸福の門」「運命は自らまねき、境遇は自ら造る」「人は鏡、万象はわが師」以下ずっとあるんです。「夫婦は一対の反射鏡」「子は親の心を実演する名優である」「肉体は精神の象徴、病気は生活の赤信号」「明朗は健康の父、愛和は幸福の母」「約束を違えれば、己の幸を捨て他人の福を奪う」「働きは最上の喜び」「物はこれを生かす人に集まる」「得るは捨つるにあり」「本を忘れず、末を乱さず」「希望は心の太陽である」「信ずれば成り、憂えれば崩れる」「己を尊び人に及ぼす」、というような項目が書いてあって、最後はね、「人生は神の演劇、その主役は己自身である」とある

んです。

どの項目も中身を読んでみたらいいこと書いてあるんですよね。なるほどなと思うようなことや当たり前のことなんだけど、なかなか実行できていないようなことが書いてあるんです。全国の倫理法人会各会場では毎週一回、朝6時からモーニングセミナーを開催しておりまして、高松市倫理法人会も毎週金曜日朝の6時スタート。会員になってもいいけど、毎週金曜日朝6時は大変やなー。とりあえず倫理やから、教育研修担当の宝山君、君の名前で登録手続きはしとくけど、君が毎週朝6時というのは気の毒なから、これは高松市内の支店長が交代で行くことにしよう。とりあえず君一回目行ってくれということになりました。

最初にね、大きな声で歌を歌うんです。ロータリーの会合と一緒ですね。そしてね、この本をね、みんなで大きな声で読むんです、そして一小節毎を輪読するんですね。会長挨拶があって、外からお呼びした講師の方のお話を聞く。中小企業の経営者が中心ですが、ここに来られた会員の方は、どんなお話でも勉強になる。ということで、毎週でもないですが、月に、2回か3回ぐらいは講師を呼んで来て、お話を聞くんですね。7時にぴしゃっと終わって、7時から朝食会、まあこんな会ですね、朝早く起きなければなりませんが仕事に支障ないんです。

そして私は、平成9年3月の設立第1回目のモーニングセミナーに行ったんですね。1回目行ってみたら、これは交代で行くようなそんな失礼なことは出来ないという雰囲気でしたので、それ以来ずっと今に続いておるんです。毎週、朝6時でしょう、5時に起きてね、あの当時は高松で車を持っていなかったので、タクシーで行ってましたんですが、いずれにしてもいつも木曜日になったら考えるんですね。ああ、明日は金曜日、朝5時起きかとね。どうしょうかなと。木曜の晩に遅くまでお酒を飲む機会があったりすると、睡眠不足で身体を壊してもいかんしなーなどとなんとかかんとか辞める口実を最初のうち考えていたんです。ところがそれを無理して行きますと朝食会に参加して帰ってくるときの気持ちがいつもさわやかなんですね。行って良かった、いいお話が聞けた、いい人との出会いがあった、良かった。この連続でしたね。

そのうちに私が顔が広いからということで、宝山さん、講師をしてくれる方を呼んできてくれませんかということになりました。当時、高松市倫理法人会のモーニングセミナーの参加者はですね、14、5人だったんです。それが私ずっとやっている間に最高は40人を超えるまでに参加者が増えたんですよ。朝のモーニングセミナーを何とか活性化したいという思いで頑張ったんです。何をやったかといったら、ああこの人の話だったら聞いてみたいなというような人を講師に呼んでくればいいと思いましてね。日銀の高松支店長さんや四国電力の元社長さんや、昔、若いころに松下幸之助さんの秘書をやっていらっしゃった方とか、とにかく面白いお話が聞けそうだと思われるような人に会ったり、知り合いから紹介されたら、講師としてお越しいただきたい旨、誠心誠意ぶち当たりお願いしました。

皆さん方ね、必死の思いで真心を込めてぶち当たれば、絶対に相手は分かってくれるんですよ。中途半端な気持ちでお願いするから引き受けてもらえないんですよ。これが私が得た教訓ですね。講師に来て下さる方にいろいろお話させていただいていますと、ああ、この方は脈がないなーとか、もう一押しでＯＫかなとか、大体わかるんですよね。それでね私の最後の殺し文句、朝早くて申し訳ないのですが、先約は入っていないでしょう。と言うのです。いやぁちょっと約束が入っておりましてね、その日朝6時から。そんなことはないでしょうと言ったら、わかった、君の言うとおりにするよ、わかった行くよということで、どんな話でもいいんだね、はい、な

んでも結構です。私お迎えにまいりましょうか。とかね、そんな苦労をしながら、やっているうちに皆さんが喜んでくださる、今日もいいお話が聞けた。宝山さんのおかげや。そうしたらどんどんどんどんモーニングセミナーに参加する会員が増えたんですね。

皆さんが喜んでくださるのが嬉しくて、もっと素晴らしい人をお呼びしようと思いましたねー。人に喜んで貰う喜び、実はこれが私たち人間にとっての大きな喜びだということに多くの人たちは気がついていないんです。宝くじに当たるのが、喜びかもわかんない。志望大学に入学するのが、喜びかもわかんないけどね、何物にも替えられない人間にとって一番大きな喜びは人に喜んで貰う喜びなんです。そんなことで私は、正確に数えていませんが、120人から130人くらいの方々をモーニングセミナーの講師としてお呼びしたことになっています。これが私の貴重な人脈になっているんです。まあそういう会で平成9年からですから、11、12、13、14、15、16、17、18年、9年目ですね、来年の3月で10年になるんですがね、私はぜひ10年は続けたいなぁーとこう思うんですね。何事もそうですが、みなさん方ね、若い人であろうと年をとっておろうと、大事なことは続けるということなんですね。

倫理法人会はロータリアンの方々も一緒ですが、立派な方々がたくさんいらっしゃるんです。本当にね。会員のお一人の、埼玉県三郷市倫理法人会の会長で三郷オフセット印刷の代表取締役吉岡貞義さんという方ががこんなことをおっしゃっています。昭和20年7月24日旧満州生まれで、物凄く苦労されてきた方ですが、この方がこういう言葉を言っておられます。

「一つのことを続けて10年経てば、一つの仕事が出来上がる。一度決心したことを10年続かないようでは何も出来ない。どんな荒れた土地だって、10年耕せば、稲も実れば麦も実る。1年2年で何が出来る、焦らず怠らず10年続けてみよ。きっとモノになる。モノになるかならぬかは続くか続かないかで決まる。」

こういうことをおっしゃっています。このライラセミナーもそうですね、28回、凄いです。ですから続けるということに意味があるんです。私たちの人生におけるいろいろなことにおいてもね。仕事もいっしょです。続けるということが大事なんです。いま転職がはやりですね。アメリカ型ですね。私は反対論者なんです。

農耕民族の日本人は終身雇用制にピッタリの民族なんです。日本の風土はまさに終身雇用制にピッタリなんです。それをね、アメリカ型の経営がどうだ、グローバルスタンダードがどうだとやってますけどね、今にほころびが出てきますよ。やっぱり年功序列もいいんです。それをうまく実力主義、能力主義とかみ合わせることが大事なんです。

ちょっと横道になりましたが、で、先月の2月24日の金曜日が、ちょうど500回目のモーニングセミナーだったんです。それで500回目の節目のモーニングセミナーだから、私は著名な人を呼んでね、たくさんの人を動員出来たらいいなと思っていたんですが、なんと、「宝山さん、あなたにお願いしたいんです」と去年の10月、会長から依頼されましてね、びっくりしまして、「えっ私がですか、私じゃいかんでしょう。もっと有名な人、立派な人を呼ぶべきでしょう」「いやぁーあなたは、1回目から参加していらっしゃるし、高松市倫理法人会に随分貢献していただいてますから、倫理の考え方なども入れながらお話をしていただきたい。是非お願いします」と言われましてね。

で、どんなお話をしようかと一番に考えました、立派な人がたくさん来られますでしょうし。今日もそうですが。どんなお話がいいかなと考えた結果、そうだ誰もなかなか出来ないようなことについてお話させてもらおう、すなわち、昨年、6ヶ月間で2回1ヶ月入院を経験した。これ

は誰もそう簡単に出来んでしょう。この話をしようと思って、テーマを「6ヶ月間で2度の1ヶ月入院を体験して」とし、その体験の中から得た教訓をお話させていただきました。朝の6時に、150名を超える方がお見えになったんですよ。うれしかったですね。役員の方々からも宝山さんにやってもらってよかった、大成功に終わることが出来たと大変喜んでいただきました。

大島修治さんとの出会い

長年倫理のお勉強をしてまいりましたが、この中で私は実は社団法人倫理研究所から法人レクチャラーという肩書きもいただいてるんです。レクチャーする人ですね、講義をする人、いろいろとこうやって全国各地の倫理法人会でお話をさせていただくんです。この間は岩国市の倫理法人会へ行ってお話をしました。夜6時半からとか7時から「経営者の集い」でお話をして、翌日は朝6時からモーニングセミナーでお話をする、それがセットなんです。その前は新居浜の別子倫理法人会へ行きました。この5月には兵庫県赤穂市準倫理法人会へ行くことになっています。

そういうことでいろんな所へ行くんですが、この法人レクチャラーばかりを集めて、法人レクチャラー会が年に一回東京で開催されるんです。そこでの出会いを今からお話しします。

凄い人に出会ったんです。4年前、私が法人レクチャラー会へ初めて行きました時に。パッと見たら顔や手がケロイド状なんですね。ああ、原爆かなぁ—、と一瞬思ったんですが、じゃないんですね、まだお若いんですね。この人どうなさったんだろう、この人が社長さんなんだろうかなどと思っていたんですね。で、全体会の後、小グループに分かれて研修会があったんですが、私のグループにその方がいらっしゃった。体験発表の模範演技を3人の人にやって貰いますと講師から指示があり、その人がお話をされたんですね。その話の内容に全員びっくりしてしまいました。

「実は私は平成8年7月23日に暴漢に襲われて、ガソリンをぶっかけられて火をつけられたんです。全身の65%が火傷でした」人間、身体の60%火傷になると死ぬんですね。65%だったらまず助からないんです。そんなお話を聞きましてね、うわっと思ったんですね。

そしてその方がですね、実は私はこういう生い立ちだったんです。ということから始まって、そして自分は生かされている命を感じております。集中治療室で4ヶ月半、皮膚の移植が15回、先生僕に何針縫ってくれたんですか。数千針、ここの脂肪を、あごの所にもってきたりとか、そういうのでもう体はパッチワーク状態ですと「人生逃げたらあかん」という著書の中でも書いてらっしゃいますがね。とにかくすさまじい人生をされていらっしゃる。私は「うわっ」と思ってね。実は話を聞いている人たちの半分以上の人が涙ぐんで、女性はぼろぼろ涙を出すような話だったんですね。わずか10分か15分ぐらいのお話でした。その人は大島修治さんという方で、福岡でキャセイ産業という会社を経営されているということもわかりました。

その次の年、大島さんの姿を目にし、ああ、今年も来ていらっしゃるなと見ておりましたら、「やあ！、お元気ですか。やあ！」と笑顔でたくさんの人と握手をされていました。で、握手している手を見たら、ぐちゃぐちゃなんです。火傷のためにもう全部固まっているんです。その手でですね、「やあ、お元気ですか！」と。私は感動しましたね。

そして実は昨年の10月15日、私、例年によって法人レクチャラー会へ行きました。休憩時間になって、何気なく後ろを見てみましたら、一列後ろに大島さんがいらっしゃるんです。彼は私のことはご存知ありませんので、私はもうね、ぱっと立っていって「私、香川県倫理法人会の宝山

です」と言ってね、ご挨拶させていただきました。

実はその３週間ほど前、ＮＨＫのラジオ深夜便でね、いろいろな方のお話されているのがＣＤで販売されているんです。この中に大島さんのお話「大やけどで学んだ人間学」というこのＣＤがあったんです。日経新聞に広告が出てましたので、私これを買ったんです。買って聞く間もなく、法人レクチャラー会に参加したんですが、まさかお会い出来るとも思っていなかったんです。私はね、「大島さん、ＣＤ買っているんですけど、まだ聞いてないんです。本もね、買わなきゃいかんと思っているんですけれど」。「人生逃げたらあかん」というこういう本を書いてらっしゃるんです。そしたらおもむろにかばんから出してこられてね、「これが現物ですが、この本がまさに私の原点です。今も読み返しているんです。これ差し上げます。」と言って倫理法人会ですから会員のことを倫友というんですが、倫友、宝山秀逸様、右手は殆ど書けない状態なんですが、「逃げたらあかん」とその場で書いて下さいましてね、これ差し上げます。といっていただいたんですね。

そしてＣＤも帰ってからすぐに聞きました。本をいただいたお礼に私は、私の本もお送りしますとお約束して帰ってきました。ということですぐに帰って私の「管理職のための人材“超”育成法」をお送りしたらお礼状がきました。冒頭に「宝山先生、お元気様です」と書いてあるんです。これね、お疲れ様ですという言葉はいやなんですと大島さんはおっしゃってます。よく会社でね、お疲れ様と挨拶してますよね。もう聞いただけで元気がなくなる、朝から、お疲れ様ですなどといったらどっと疲れが出てしまいますね。「ご苦労様」ですというとお互い苦労しているなあと苦しみや悲しみが生まれてしまいます。これでは元気の交換になりません。ですから私たちの会社では「皆さん、お元気様です」とこうやっているとおっしゃるんですね。ユニークですね。ハガキには、宝山先生、お元気様です。秋深まる今日この頃、お元気に御活躍のことと存じます。名著及び貴社資料を御送り下さりありがとうございます。一度御来福、福岡市倫理法人会でも講話いただきたく思っております。その節はよろしくお願い致します。というような内容でしてね、私はこのＣＤを何枚か買いまして、ちょっとこの人に聞いて貰いたいなあと思う人に差し上げているんですが、皆さん方興味のある方は聞いていただきたい。

なぜこの人について私はそういう思いを持ったかというと実はすごい苦労をしているんですね。お父さんお母さんが韓国から来られた、在日二世なんです。だから生まれた時からですね、貧しくて、お父さんは炭坑で働いてらっしゃった。そしてぼた山ってご存知ですか。石炭取り除いたかすを外に積み上げているその中にまだ石炭が残っているんですね。４歳の時から、ドンゴロスの袋を持ってね、ぼた山へ駆け登ってキラッと光るものを探すんですね。それが石炭なんですね。拾った石炭を売ってそのお金で自分の文房具を買ったり、おやつを買ったりしていた。

というそんな人なんですね。炭鉱が閉鎖されてからはお父さんお母さんはぼろクズを拾って生計を立てていた。いろいろ苦労されて今と違って昔ですから、随分いじめられたり、ぼろクズ拾いやということで、まあみんな遊んでいるのにどうして僕だけ古新聞、段ボールを整理せないかんのやと思った。そういう中で大島さんが、今も思い起こす情景が一つあるそうです。

お父さんお母さんのぼろクズを引くリヤカーを後ろから押してね、毎日手伝っていた。そしたらね、途中でね、パンと牛乳を買って貰える。これが楽しみでね、やーぁいぼろクズ拾いとかね、ボールをぶつけられたり、石ぶつけられたりしてね、くそっと思ってなんで僕がいじめられないかんのや、悪いこともしてないのにとそんな

ことを感じながら、その買って貰った牛乳とパンを食べながら赤い夕日を眺めていた。その情景が今も忘れられません。というようなお話をされています。

そして彼が昭和46年に若くして大島重機商会を設立したんですが、その後オイルショックの不況で潰れてしまったんですね。それからまた立ち直って昭和60年にキャセイ産業という会社を作りましてね、パチンコからカラオケ、それからもつ焼き、もつ鍋、焼肉屋などいろいろな商売をかたっぱしからやって、当時最盛期がですね、従業員230名、年商70億、そこまでやったんですね。まさに飛ぶ鳥を落とす勢いだったようです。

そんな折平成8年7月23日、「ちょっとクーラーの点検をさせて貰います」と言って一人の男が部屋へ入ってきて、やおら持ってきた缶からガソリンのようなものを、パァッと身体全体に投げかけられた。アッと思って逆方向出口から出、階段を降りて逃げた。そこに発煙筒をポンと投げられて、それで全身火だるま。それで65%の火傷を負ってですね、まさに生死の境をさまよったんですね。彼の本を読んでいてもCDを聞いておっても、それはそれは凄い闘病生活だったようです。

全身の60%をやけどするとほとんどの人は死んでしまうそうです。65%といったら生きておるのが不思議と言われたそうです。そしてね、感染症を防ぐための消毒が1日に1時間半、医者2名、看護師5名、総勢7人で治療が行われたそうです。イソジンという消毒薬を噴霧器で振りかけられるんです。その痛みが「もう殺してくれー」と大きな声で、病院中響きわたるような叫び声をあげてしまうような痛さだったそうです。「こんなんで生きている価値はないと」いうことで少しずつ良くなっていくとともにですね、もう死んだ方がましだと、こんなの生きてても仕様がないということで死ぬことばかり考えていたようです。どうしたら死ねるだろうか。ある時、治療の時に痛がるものだから、紐でね、両手足をベットに括りつけられた。ああこの紐があったら首つって死ねるわ。こう思って、そしてこの本の中にも書いてますが、看護師になんとかかんとか言ってその紐をはずしてもらって、よっしゃこれで死ねると思ったそうなんです。看護師がいなくなって、首つりをしようと思ったんですが、包帯ぐるぐる、右手親指も小指もない、もう塊です。

死ぬに死ねないんですね。本当に死にたい死にたいということで、もがき苦しんで首をくくろうにも紐も結べない。そうこうしてるうちに少しずつ元気になっていったら、そうだ紐でくくれなくても、歩けるようになったら電車に飛び込んだらいいんだとかいろいろ考えたそうです。

そしてある時こんなことがあったそうですね、救急で小さな子が運ばれてきました。ちょっと読んでみましょうか。小学生ぐらいの男の子が運ばれてきました。ご家族が大きな声で励ましておられました。その声で私は目覚め、また眠れなくなってしまいました。その子は6歳で運動会の最中に突然倒れたのだそうです。そうです6歳といえばその時の私の末の息子と同じ年齢です。毎日入れ替わり立ち替わり身内の方や学校の同級生がお見舞に来られ、励ましの声をかけていました。

しかし2週間もたった頃、その励ましの声がぷっつりと聞こえなくなったのです。睡眠薬や痛みのせいで私はうつろな状態でしたが、その子のことが気にかかり、妻に尋ねました。「あの子はどうなった？」そう聞かれた妻は気の毒そうに言いました。「昨日亡くなったそうよ」「そうか、亡くなったのか、かわいそうにな。まだこれからだというのに。おれ、代わってやりたかったな、本当に代わってやれればよかった。こんな身体で生きていてもしようがないしな…」私はつ

いそんなことを口にしました。それはその時の偽りのない気持ちだったと思います。

私の言葉を聞いて、妻は何も言わずに黙ってうつむいていました。いま振り返ってみますと、この時の私の言葉は、妻にとってどれほどひどい言い方だったろうかと思います。妻にしてみれば、少しでも私に元気になってもらいたいという一心で、家事や会社のことなどいろいろ心配事があるのに朝早くから夕方まで、私に付き添ってくれていたのです。そんな妻に向かって「自分の命はいらない。死んでもいい。ほかの人の命と代わってやりたい」と言ったのですから･･･。なんと愚かなことだったかと思います。

妻にはいろいろなことで迷惑ばかりかけてしまいました。家族とはいえ本当に申し訳ないことをしたと思い、また言葉で言い表せないほどの感謝をしています。こういうことを書いていらっしゃるんですね。そしてもう一つは両親に対してね、こういうことがあったそうです。なかなか見舞いに来てくれない両親に対して、年も年だから見舞いに来るのも大変なのかなと思っていたのだそうですが、実際は感染症の心配があったため奥さん以外面会謝絶だったのです。

85歳のお父さんは、ずっとＩＣＵの外にある待合室のソファで寝泊りしていたのだそうです。ちょっと読んでみます。入院後２ヶ月くらい経ってようやく顔を見ることができた両親に、私は「すまない、心配かけてごめんね」としか言えませんでした。私は20歳の頃から事業を手掛け、貧しかった両親の面倒を見てきました。自分では６人兄弟の中でも、一番親孝行者だとその時までは思っておりました。しかしそうではありませんでした。年老いた両親にこんなに心配をかけて、親より先に死んでしまおうと考える息子がどうして、親孝行のはずがあるでしょう。

母は私の包帯にくるまれた両手を握って言いました。「いいか、決して死にたいと思うなよ。お前がどんな身体になってもいい。火傷が治って、元気になったら母ちゃん、もう一人子どもを産んだと思うからな、がんばれよ。」その母の言葉を聞いて、ボロボロと涙がこぼれました。

ああ、俺はなんという親不孝者なんだ。自分が楽になるために、死ぬことばかり考えて、家族や両親の事など少しも考えなかった。なんと自分勝手だったことか。本当に心配をかけてすまなかった…。「わかった。母ちゃん、父ちゃん、ごめん。俺がんばるよ」私は涙を流しながらそう答えたのです。こんなこと書いてらっしゃるんですね。

握手の大切さ

大島さんは退院後いろいろな研修を受けたり、勉強をなさり、現在は福岡市倫理法人会の会長をされています。いろいろなお話を聞いた中で、彼にとって印象に残ったのが握手の大切さ。

人間の出会いというものは６秒で決まるというのです。アイコンタクト、眼と眼ね、アイコンタクト、それから笑顔、そして握手、ここまでわずか６秒、それで全てが決まる。こういう講演を聞かれたのです。そしてそこでね、笑顔でしっかり握手を交わすことによって、心まで伝わる。僕も手があるんだけど、右手で握手が出来るようになりたいなぁー、と思うようになったそうです。右手の親指がないことがなんとなく恥ずかしく、人に会ったときも大体手を後ろに回すか、ポケットの中に入れて、右手を隠すようにして挨拶をしていたので、消極的になり良い人間関係を築くこともむつかしかったと書いてらっしゃる。そこで、どういうことをしたか、右足の親指を切断して、右手に移植をしたんだそうです。これね、うまくいかず、二度三度と大変な手術だったようです。右手親指のほうはなんとかついたんですがね、右足親指がいろいろ化膿したりして、３回手術していらっしゃるんですね。

それで私、握手しました。ごつごつしたもう何とも言えないような感触でしたが、しっかりと

心を込めてやらせていただきました。握手はやっぱり心を込めてやらなきゃいかんですね。私はその瞬間ああっと感動すら覚えましたね。

その握手についてですね、もう一つこの本の中でですね、映画評論家の淀川長治さんのことが書かれているんですが、淀川さんがある時サイン会の後、会場を立ち去ろうとしたときに一人の少年が駆け寄ってきて、握手を求めてきたそうです。そして淀川さんが握手をしようと思ったんですが、その少年は左手を出したんですね。その時に淀川さんが、「坊やね、左手で握手をするということはスコットランドでは戦いのしるしなんだよ。そんな失礼なボクとはおじちゃんは握手しないよ」と言ってさっさと車に乗り込んじゃったんです。

そして淀川さんがちょっと気になってね、待てよと思ってね、車の窓から見るとその少年の右腕がなかった。あわてて降りていって、「坊やごめんね。おじちゃんが悪かった。左手でもいい。握手しよう！」と言って謝ったいうエピソードを聞いて、要は握手ができる体になりたい。心を伝える一つの手段の握手ができる手になりたい、ということで移植をされたわけです。

そんなお話を聞いてですね、私たちはちゃんとした体を持ってて、そういうハンディキャップのある人が、本当に心の底から握手をされる姿、私は感動を覚えましたね。ああっと思いました。まあ大島さんと今こうして、つながることができたのも倫理のおかげなんですね。

そして大島さんはね、なんで俺はこんな目に会わされたんだ。ガソリンぶっかけられて、火つけられて、あの犯人が憎い。俺をこんな目に遭わせた、こんな大やけどを負わせた犯人を見つけ出して、絶対に復讐してやる。とずっと思っていたそうです。このことは私が4年前に最初にお会いした時にもそのことをおっしゃってました。絶対に復讐してやる。こういう気持ちだったのが、ある講演会で、「致知」という月刊誌を出している致知出版社の藤尾秀明社長が「人生に於いてその人の性格はその性格にふさわしい事件をひき起こす」。いいですか、「人生に於いてその人の性格はその性格にふさわしい事件をひき起こす」と話されたんですね。この話を聞いて、「ああっ」と自分が気が付いたんだそうです。

俺がやっていたことはなんと傲慢だったことか、金が全てだった、人のことはどうでもいい、あそこに店を開いたらこれだけ儲かる、同業者は潰れたっていい、そんなことをやってたんだ。ということに気がついたんですよ。そしてその途端に犯人に対する憎しみの心は、すうっと消えましたとおっしゃってます。

今、大島さんがおっしゃるには、犯人に感謝している。私、大島修治は7月23日をもって生まれ変わったんだ。こんな人間にしてくれた犯人にありがたいと今は感謝すらしています。もしあの事件がなかったら、俺はどんな人間になっていただろう。自分勝手な人生を歩んじゃいかんよと気付かせてくれて、お前の生き方ちょっとおかしいよと注意をしてくれたのが犯人なんだ。ということで全身大やけどは、私の人生における最大の苦難であったけれど、しかしそれでも私はいま生きている。死ななかった、65%の大やけどで死ななかった。ここに大島さんは生かされている命、俺はまだやることがあるんだ。世のため人のためにもう一度生まれ変わった自分がやることがたくさんあるんだ。というふうなことを感じさせてもらっているとおっしゃってます。

いま彼が考えているのは、身体障害者だけがゆっくりと入れるような温泉設備を、全国の障害を持ったいろいろな方々のために本当にゆっくりと浸かれるようなそういう設備をつくろうということで、それを進めているとお聞きしています。ボウリングもして温泉が出てくるというのもわかったそうです。

世の中には本当にいろいろなすさまじい体験

をした方がいらっしゃる、凄い人がいらっしゃるということを私は倫理法人会の活動を通じて、知ることが出来ました。凄い経営者にたくさんお会い出来て、倫理に入っていて良かったなあとこういうふうに思うわけでございます。

「やりがい」とは

で、話はころりと変わって、そういうふうな大変な体験をした人のお話を聞いたり、本を読みますと我々は恵まれているなあとこういうことですね。当たり前に思っているんだけれど、感謝しなければいけない。こういうふうな気持ちを強くするわけです。

いま若い人たちが自分の好きな仕事がない。僕に合わない。私に向いてない。ね、こういうことで、好きな仕事がみつかるまで、フリーターしているんですという若者が増えていますね。夢を持つことは大事ですが、私には何か現実から逃げているような気がするんです。苦労とか困難から逃げているいるような気がするんです。

ＮＥＥＴ（ニート）ね、これよく説明するんですが、これはNot in EmploymentのＮとE, EducationのE, or TrainingのＴの略なんですね。日本語に直すと、働いている状況でなくて、学校へ行っている状況でもなく、職業訓練を受けている状況でもない人のことを指しているんですね。イギリス労働省の最初の文献では、Notの前にヤング・ピープルという言葉があるんです。働いていない、学校もいっていない、職業訓練を受けていない若い人のことをいうので、55歳の人はニートとは言わないんです。

このことに対して私はよく高校生にお話をするんです。何で働かねばいけないのか。私たちは生まれてきて、何をしなければいけないのか。こういうふうなことですね。生きているということは、誰かにお世話になっているということ。生きていくということは、それをお返ししていくということ。こういう事なんだと。

あなた方、甘ったれるなと言うんです、若い人たちに。自分の好きな仕事が見つからないとか、自分に向いていないとか、やりがいがないとか、世間を舐めるんじゃないよ。親に甘やかされ、先生に甘やかされ、勉強ができたらよい。いい子いい子できてよ。それで働く年齢になって働きたくない。就職したくない、楽したい。あなた方のお父さんお母さんはどんなに苦労をして、あなた方をここまで育ててくれたかということを考えたことあるの。お父さんだって会社で嫌なことがあって、「くそっ」と思うことだってあるんだよ。こんな会社もう辞めてやるわ。と思ってもまだ娘が高校へ行っている。いゃあ息子がまだ大学在学中、ああ我慢せないかん。どんなに無念な思いで、思いとどまって、お父さんがお仕事を続けられているか。そんなこと考えたことあるんですか。

このところ私は毎年穴吹学園の入学式でお話をさせてもらってます。徳島校、高松校、福山校でね、「穴吹学園から変わる君の人生」、「穴吹カレッジから変わる君の人生」というテーマでね、お話をしているんです。

誰のおかげで専門学校へ来れているんですか。１年間に200万円も300万円もいろいろ全部いれるとかかる、あなたが働いてくれたらお父さんお母さん楽できる。でも授業料を出すためにお母さんはパートに出たりしてる。それだけのお金があったらお父さんお母さん二人で世界一周旅行ができますよ。でもあなた方がかわいい、あなた方に頑張って欲しい、いい人生をして欲しい、だから勉強をして資格も取っていい会社に就職して欲しい。お父さん、お母さん頑張っていらっしゃるんですよ。

それを未成年でありながら、たばこを吸うなんてもってのほかじゃないですかというんです、私、法律を犯してまで、苦しいのを一生懸命稽古してたばこを吸う、女性のたばこを吸う人が増えた。何がかっこいいんですか。周りの人に肺が

んの危険分子ふりまくんですよ。たばこ吸わない他の人達にまで。まあ、たばこ吸う人は肩身がが狭いかわかんないけどごめんなさいよ。

それを若い人に言うのはね、世の中が変わりつつあるということを知って欲しいの。海外旅行へ行っても飛行機の中全部、禁煙ですよ。そんなに一生懸命稽古してよ、むせびながら稽古してね、お金払ろうてね、やめようと思った時にはもやめられん、そんな麻薬のようなものをなんで吸わないかんの、でしょう。

だからそういうふうなこと、まして親からまだ独立もしてないのにですよ、それを言いたいんです。まあそれは余談として、とにかく、生きていくということはある意味では大変なことなんですよ。今お話した大島さんのような目に遭わなくても、普通でも生きていくということはお金も稼がなきゃいけないし、いろんなこと嫌なこともあるんです。まあそういうふうなことを考えると私はニートだとか、フリーターの人たちに言うんです。

何をしていいか、どんな仕事をやっていいかわからないからといってじっとしていたって何も変わりませんよ。とにかく動いてみること、何かやってみることが大切ですよ。回転寿司屋がそうじゃないですか、外から見ていたって何もわからない、一回入って座ってみなさい。うわっ、こんなええネタ、こんなにおいしいのが150円で来たわ。とかね、要は座ってみることですよ。だからとりあえず会社へ就職してごらんと。働いてごらん。そしたら自分が何に興味があるのか、自分の得意なことは何なのかわかってくるんですよと。せっかく入社しても「やりがいがなかった」ということで数ヶ月でやめてしまう若い人がいますが、そんな人に私はこんなお話をするんです。

やりがいなんてね、あなたね、入って2ヶ月や3ヶ月の人にね、そう簡単に出てくるもんじゃないんですよ。やりがいとはどういうことか、どんな状況になった時に出てくるのかお話ししてあげるんですよ。

例えばジェット機のパイロットになりたいという念願がかなって、パイロットになった人がいるとしませんか。そのパイロットになった人はですね、離陸してですよ、操縦桿握って、計器にらんでこうやっている。ああ、操縦桿握って、この握り具合ええなあ、やりがいあるなあ、違うでしょう、やっぱり300人の乗客を無事にどこどこ空港まで届けるそれがやりがいなんですよ。乗客の安全を考えながら無事に届けることにやりがいを感じるのです。操縦桿握ったり、計器を見てるのがやりがいじゃないんです。乗客から目的地までの飛行の無事、スムーズな着陸を期待されている。だからやりがいを感じるんでしょう。

仕事だって入社して3ヶ月、6ヶ月で、なんでやりがいが出てくるんです。やりがいというのは、うわっ、先輩を飛び越えて、上司から僕にこんな難しい仕事与えてもらった。出来るだろうか思いながらね。、で、上司からも君なら出来るよと言われて、そこでやりがいが出てくるんですよ。ということは、一般的には入って6ヶ月や1年では無理やということです。それを入社して数ヶ月でやりがいがないから僕辞めます、僕に向いていないなんて。とんでもない。世の中舐めるんじゃないよって言うんですよね。昨日の話じゃないけど、給料払う相手の立場に立って考えたことあるのと言うんです。

15万円の給料をもらうとすればあなた方は15万円分は稼がないかんのですよ。雇う社長さんの身になって考えてごらんよ。ぷらぷらぷらぷらしてね、お客さんに迷惑かけてね、ミスばっかりして、それでやりがいがないなんて、向いてないなんて、とんでもない。その辺がわかっていないんです。これは今日お集まりのロータリアンや私を含めて大人の責任です。我々世代の責任です。厳しさを教えてないからなんです。生きて

いくということは大変なんだよ、世の中は厳しいんだよ、矛盾が多いんだよ、上司は無理を言うんだよ、社長は難しいこと言うんだよ。

そういうことを社会の窓口になるお父さんが、家庭で語っていないんですよ。そういう話をする機会、時間がないんですね、今は。お父さんは仕事が忙しい、子どもは塾優先、そして豊かになったためにみんな子どもは個室、それで親はね、特にお母さんはね、勉強部屋を作ったら勉強するやろ、整理整頓するやろ、みんなお父さんの部屋がないのに子どもの部屋だけはある。そして食事がすんだらすぐに自分の部屋へ。家族の中でもほとんどゆっくり話す機会がない。だからコミュニケーション能力がなかなか身につかないんですよ。

陽のあたる役割と陽のあたらない役割

私たちは今申し上げたように本当にどんな仕事でも一生懸命、誠心誠意やる、特にお客さんに喜んで貰う、そこでやっぱり働く喜びって出てくるんです。じゃあお客さんがどういうふうにしたら喜んでくれるんだろう。それを考える子は成長しますよ。商品の知識をしっかり頭に入れないかんなとか、お客さんとこういう応対をしたら喜んで下さるなあとか、どんな仕事でも努力が必要なんですよ。

皆さん方働いていらっしゃる方が大半なのですが、働いていたらね、いろいろと悩みもあろうと思いますが、私は一番に申し上げたいのは、この世の中にはやっぱりいろいろな役割があるということです。私たちの社会は、陽の当たる役割もあれば、陽の当たらない役割もあるんです。だけど世のお母さん方は、自分の子どもはこうさせたい。こんな道に進ませたい。例えば家でいったら、自分の子どもは床の間にしたいと思うんですね。でも家は床の間だけでできていないんですよ。トイレもいるし、台所も寝室も客間もいるでしょ、押し入れもいるでしょ、床の間だけじゃ家はできませんよね。やっぱりいろいろな機能が備わって家ができている。それをお母さん方、どうしても自分の子は床の間にしたいんですといって早くから塾に通わせて、人間として何が大事か、世の中で役に立つ人間になるようになどといったようなことも教えず、とにかく勉強、勉強。もう勉強さえしておったらええと、それが今のような日本になってしまった。

陽の当たる役割と陽の当たらない役割、ある講演で聴いたんですが、例えば顔、顔はまさに私たちの身体の中ではまさに陽の当たる役割ですわ。会社でいったら社長さんですよ。足の裏、陽の当たらない役割ですね、重たい60kgの体重を支えてね、いつも重たいな重たいな思っていますね。会社の中で言ったら新入社員さんみたいなものです。下には誰もいないんです。

私たちは陽の当たる役割がいつもいい目ばかりしていて、陽のあたらない役割がいつも損な役回りだと考えてしまいがちですが、そうでもないんです。足の裏は陽の当たらない役割だけどね、考えてみたら皆さんお風呂に入るときにどこから入りますか、顔から入りますか、私、社長ですから顔から入ります、てなことにはならないでしょう。やっぱり足から入りますでしょう。陽の当たらない役割の足が一番に入るんですよ。わしゃ社長やから顔から入りますいう人おらんでしょう。

逆にね、風呂から出るとき、一番最後までお湯の中におれるのは、足の裏ですよ。顔はずっと出てますよ。温かいお湯の中には長いこと入っておれませんよね。こんなお話をされたりしてますけれど、私たちの社会というのは、それぞれの役割をみんなが分担して成り立っているんです。

これは日本の社会のいけないところなんですが、こういう職業だから立派、こんな会社に勤めているから立派、業種だとか仕事の種類で判断するようなことはやめるべきでしょう。アメリカの社会では郵便配達の人だって俺はニューヨ

ークで一番の郵便配達人なんだというような誇りを持って仕事をしてますよ。ゴミの収集に来るおじさんだって、新聞配達の人だってみんな、誇りを持っている。そういう社会に早く日本がなればいいなあと思うんですが、なかなか難しいですね。

夢を持つことの大切さ

最後にもう時間がありませんが、私はみなさん方にですね、これから生きていくうえにおいて大事なこと、若いみなさん方に是非考えて欲しいことは、夢を持つこと。夢をもって欲しいんです。今からでも。もちろん小さな頃持っていた夢に邁進する人がおれば尚結構。

私は学校の先生になることが夢だった。身体的ハンディキャップのために教育学部へは進めませんでしたけど、実現出来たんですよ、ほぼ。銀行時代の最後の4年間、人材開発室長、まさに学校で言う校長先生ですね。2,600人の行員の教育、研修の総元締めをやらせてもらえた。そして新入行員研修から支店長研修、いろいろやらせてもらい、教える喜び、人を育てる楽しさ、そういうことを体験できて、それから次に穴吹学園、まさに学生と接して、そしてその子の進路指導、就職の面倒をみてきました。希望通りの会社に就職出来た学生から先生のおかげです、そういう言葉を聞いて、ああ良かったと思うことも度々でしたね。

そして期間は短かったのですが、私は高松高等学院の学院長も兼務させてもらうことが出来ました。これで本当に自分の夢が完全に実現出来たと思いましたね。高松高等学院というのは、中学校、高校時代にいじめに遭ったりして登校拒否になって、卒業できない、そんな生徒たちに高等学校の資格を取らせる学校なんです。高等学校の資格がないことには次のステップに進めないということでそういうサポートをする学校なんです。北海道のクラーク記念国際高等学校の通信課程を修了することによって、クラーク高校の卒業証書をもらって、そして次のステップへ進む。それをサポートする学校を穴吹が経営しているんですね。現在130人から140人の生徒さんが学んでいます。

私は高等学院の学院長を仰せつかった時にこれが本当の教育だと思いましたね。受験校の英語の教師や数学の教師なんてこんなん誰でもできる。もう先生からも見放され、親も途方にくれている、本人もどうしていいかわからん、そういう子どもたちを立ち直らせ、そして次のステップに進ませてやる。こんな素晴らしい仕事はないですよ。それをしばらくの間やらせてもらって、私は自分の夢はほぼ実現出来たと思いました。

今いろいろな所でお話をさせてもらいながら、私、振り返ってみて、人生においてやっぱり大事なことは夢を持つこと、そしてその夢をいつまでも持ち続けること。それに努力をしていくということだと断言できるようになりました。

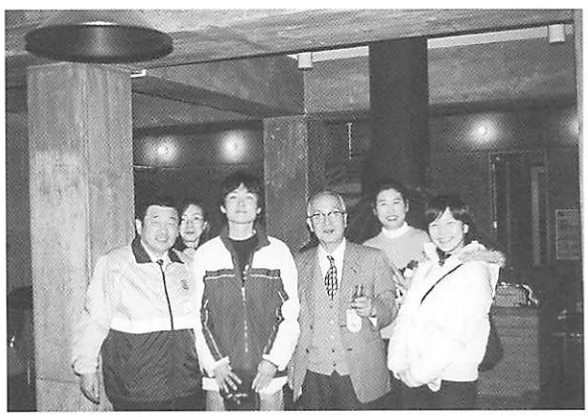
私のプロフィールの中に英検一級の資格というのが書いてあるでしょう。35歳ですよ、取ったのは。33歳、34歳、35歳、3年かかりました。働きながらですから、毎週日曜日図書館へ行きました。家内の協力もあって、35歳でやっと。でも取って良かった。荷物にならない。苦労はしたけれどそれが自分の自信にもつながった。そしてニューヨークという一流の場所で、8年間を一流の人たちと付き合うことが出来た。このことは何物にも代え難い、体験であり資産でございます。

その体験を伝えることが私の使命だと思っています。日本の教育これでいいのであろうか。こんな若者がこんな生き方をしてていいのであろうか。アメリカじゃこうなんだよ、日本はどう変わるべきかなど、こういうようなことを伝えていくのが、私の使命だと思ってます。そういうことから言いますと今回は本当にいい機会を与え

ていただけたと喜んでいます。また若いみなさん方が私の話を熱心に聞いていただきました。これからのバズセッションの中で皆さん方がそれぞれいろいろなお話をし合って、実りある研修にしていただきたいと思うわけです。

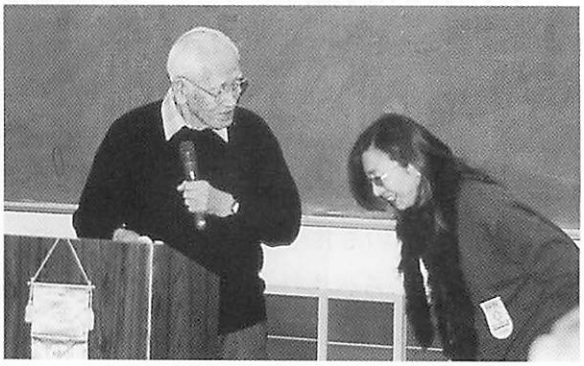
要は最後、人間死ぬときが一番大事、現役の時に肩書きがどうのこうのといってもね、死ぬ時に、臨終の時に、ああ私の人生いい人生だったなあ、おいしいものも食べて、いい音楽を聴いて、素晴らしいところへも行って、海外旅行もしたし、いい伴侶に恵まれて、いい家族も持てた。私の人生良かったなあ。私の人生ありがとうと言って死ねるかどうかなんです。

そういう悔いの無いいい人生をしたいなあと若い皆さんが今から思うことが大事なんです。これからの自分の人生どうしたいんですか。どんな人生しようと思っているんですか。アメリカやヨーロッパの教育現場ではね、あなたは何になりたいんですか。どんな仕事に就きたいんですか。どんな人生したいんですか。だったら今あなたは何をしなくちゃいけないんですか。というようなことをいつも問われるから彼らはしっかりしてくるんです。日本の中学校や高校の教育現場ではそんなこと一つも問われない。偏差値さえ上げたらええ。そういうことがニート、フリーターをどんどん作る原因にもなっているんじゃないかと私は思っております。どうぞ皆さん、生きるということは大変なことでもあり、素晴らしいことでもあるんです。いい人生を歩まれんことを心よりお祈りいたしまして、私のお話を終わらせていただきます。長時間にわたり、ご熱心にお聞き下さいまして、本当にありがとうございました。



ロータリーについて

元国際ロータリー理事
神戸 YMCA 顧問
パストガバナー　今　井　鎮　雄
（神戸西 RC）



２日目のロータリアンの夕べをさせていただきます。今日はロータリーについてということで語っていただきます。今井元ＲＩ理事です。よろしくお願い致します。

今井でございます、どうぞ宜しくお願いします。

ロータリーって大変なところですね、何にも頼まれていないのにいきなり今晩話やと…。これ何分？、５分？。10時までですから…その間、私が何かしゃべるのでしょう？。ロータリーについて。

いやいやあの人１時間ぐらいで、私30分？それじゃあですね、私の方から、ロータリーって頼まれたら何でもせないかんのですけれど。私の方からお願いがあります。皆さんがロータリーについてこんなことをちょっと聞いてみたいと言うことがあったら、それをおっしゃって下さい。それについて、話を始めたいと思いますが、但しわからんことはわかんとここではですね、歴史については深川パストガバナーがいますし、規則については安平パストガバナーがいますから、私はなにも話する必要がないだろうと思いますけれど、ごく一般にこんなことが疑問なんだけれどどうなんだということがあったら言って下さい。

あなたはこれから勉強をするんですよね、はいどうぞなんでしょう。

（会場からの質問？）

雑談でいいんですよね。

12月の始めにちょっとＲＩの方からお前こいと言うんです、なんでかと言ったら、パストガバナーの皆さん方はご存知だと思うのですけれど、来年の会長さんのことについて、なかなか決まりませんでしてね、そして２度目ぼうとう？或いは選考をしなければいけないので、ちょっとこいとそのことについてやはりよくわかっている方が良いだろうというので、向こうからご指名でちょっと来いということがございました。

12月の一番最初の月曜日だったと思います。私関空から出て、日曜日の夜に入りました。次の日の朝９時からということになってまして、日曜日の夜に入ればいいと思いましたら、ホテルに入ったのが９時半頃でした。そしたらスリップが入っておりましてね、もしも６時半までについた委員の人がいたら、６時半からこういうミーティングをするとプレミーティングをしたいとそれに一緒にご飯を食べるから、６時半にこのフロントに集まってくれということでありました。あわてて自分の荷物を置いて、急いで下に降りていきました。

ちょうどみんなに久しぶりの、古い連中ですから、みんなだいたい知っている連中ですから、あんたもあんたもかといって集まりました。食

事に行こうといって食事に行くし、帰ってきたら11時でありました。6時頃から11時頃まで、それは一体今度の会は何だと、どうするんだろうと言って、みんなの話がそこから始まっていました。11時頃に帰って、着いたばかりでしたからお風呂に入って。

その11時までの話の中で、明日9時からだけども、その前7時半からの朝ご飯を一緒に食べようと言うことで今度は朝ご飯を食べながら、9時半まで、我々委員だけで集まりました。

これ顔を洗うの？　よろしかったらだって…こういうの冷や汗と言うんですよね。

それで7時半に始まりまして、そもそもなんとかと言って、内容はちょっとあんまり言えないのでありますが。そんなような話をしてようやく9時になりましたら、かたちの上で事務総長が出てきて、ご苦労さんです、遠くからご苦労さんですと、今日のプログラムはこういうことでございます、こういうプロセスでやって欲しいと思いますと言って、チェアマンだけ決めて下さいということでした。

まああらかじめ、決まっていたんだと思いますけれど、前のというかだいぶ前の副会長だった方が、チェアマンをするとなって、それじゃあチェアマンお願いしますと言ったら、総主事と言いますか、事務総長もそれから事務の人たちも誰もいなくなってしまうのです。あなた方だけでと言うのです。そしたらその15人の中でチェアマンが先ほどのアナウンスがあったようにもう一度、新しい会長を決めなければならないので、あなた方にお願いします。あらかじめ配りますから、その中からまず、6人の人を選んで下さい。伏せてあるこういうものをひっくり返しましたら、10何人の方々のお名前が書いてあります。だいたい私たちは古い人たちは、この人はどこの人だなという見当はつくんですけれど、その中から6人選んで下さいなので6人に印をポンポンとつけまして、はいどうぞとして、これを委員の中の一人が集めて、6人決まりました。

6人決まりましたからその中から4人を選んで下さい。6人の中から4人だけ選んで下さいと言って、また4人にピョンピョンとつけますと集めてきて、はい次ぎ、4人の中から2人選んで下さい。また4人の中から2人、この人とこの人とつけてまた、ポンポンとつけて、なんか単純な、次から次へとやった結果、ただその中で一番最初に、そこまで出てきたときにどうでしょうか特に皆さんご意見ございませんかというようなことで、みんなの一般論みたいな意見をいう訳なんですね。

私は、これからは若い人がいいと思いますとか、ある人は今大変なのはＲＩするものの実は経済的、財政的な基盤がいま弱くなっているので、そういうことに詳しい人がいいとか。あるいは国際的な問題に理解がある人がいいとか、どれもみんないいのですけれど、ありがとうございます。そういうことを頭においてもう一度、今度は2人選んで下さい。2人選びます、そこからが大変でした。

2人のうちから1人選んで下さい、ただし今度は15人ですけれども、10人票が入ったときに達成、それ以外はそれより少なければもう一度やり直します。そしたら8対7、もう一度やり直します、またやったらまた8対7、もう一度繰ります、9対6、もう一度繰り返します、8対7、もう一度繰ります、7対8なんと4時半まで同じことを繰り返すのです。

どうしてかと言いますとある種の確信犯がいるんですね、自分たちはこの人を推薦したいと、どんなことがあってもこの人と頑張る、片一方もある種の確信犯がいるから、10対5という差にならない。どうしても、とうとうしまいにチェアマンが、これは明日までかかるかも知れないな。そしたらチェアマンがもう一度ちょっと言います。これをひとつもう一度考えてくれと。私たちはＲＩの会長として、最もふさわしい人と

言って選んできて、最後の人が残って、その中から10票入ったら、その方が当選ということになりますけれど、その時には10対５で当選ですとは言いません。よろしい全員賛成。全会一致でこの人にという形に致します。私たちが今直面している問題は、こここういうな問題ですと。

さきに上がってきたような問題をあげて、ですからみんなもう一度よく考えてやって下さい。よく考えて、それから３回ぐらいまたしましたよ。もうこれはこのまま明日に持ち越さんとしようがないなといって、最後にようやく10対５になりました。そして10対５になったら、この人ということに決めますと、みんながその場でその人に電話をかけます。

だからおそらく15人の人は待機していたんだと思います。だけど当選した人へその場でチェアマンが電話をかけて、あなたが次の会長に選ばれましたと。私たちの希望や夢がこういうことになりますということを言ってですね、そしておめでとうと。次ぎに投票した人みんなに投票した全員が賛成したとなっていますから、はい順番に言って下さい。秋山さん、大森さんとこのように日野さんとみんなコングラチュエーションとか言って電話をかけて、終わるんですね。

で決まったと、今度はそれがリコメンデーションということでもう一度理事会の方へ持っていきます。理事会の方へ持っていきますと、推薦委員会ではこういう推薦を受けました。

この推薦に対して、理事の方々は、この方をアクセプトしますかと。理事の人はお任せしたんだから、アクセプトしますという手続きがすんで決まります。理事会がこの方に決定しましたというかたちになるんです。

私はその次の日の飛行機でまた14時間かかって帰って来たんですからね、まあーロータリーってところはね、えらいんですよ、そしてね、挙げ句の果てにお前が日曜に入って、月曜日だと、で火曜日に私は実はポリオプラスのことでロータリーの事務局と少し話をしたいと。実はポリオプラスのいま委員長補佐をしているもんですから、この前から度々お願いをしたようにＤＤＦを使って残こりがあったら、それをポリオにまわしてくれないかということでみんなにお願いをしてくれと言うことがありましてね。

そういうことを帰ってから皆さんに手紙を出したら、皆の中にはＤＤＦというのは２年前に決まっておるんだからそんなこと今頃言っても困ると怒られたりね。いろいろしましたけれどもその打合せがありまして、担当の職員の人と話をしましたから、実は火曜日に帰れませんでした。水曜日に帰った。

なんとロータリーはこの日とこの日はお前はいいんだから、宿泊費はロータリーで払います。だけど次の日泊まったのは、お前が勝手に泊まったんだから、ホテル代は自分で払えと。はい。払いましたけれど、ロータリーは経済的にも大変厳しくて、委員の人たちもそういう意味では、大変です。飛行機代とか計算のできるものは払ってくれたのですが、委員会ですから、だけども途中の電車賃やバス賃は払ってくれませんからね。そういうふうに大変厳しく、ロータリーのＲＩというところは、やっているということをつくづく思う。

終わりましたときに事務総長が来て、皆さんのご協力で、良い結果が出たそうで、ありがとうございました。これで解散しますと、言うことだけに出てきました。それがこの前の、中身については公にしてはいけないことになっておりますので、あまり公に致しませんけれど、そういうプロセス大変厳しいですね。チェックでそうは書いてあるけれどこうしようやというのが、ダメなんですね。

ついでですから申し上げますけれど、ＲＩの方でいろんな質問状がきますよね、返事をしてくれと言うことで返事をしますよね。そしたら何日までに送ってくれというのがきますよね。

私たちは次の日の午後からそれの審査会みたいなのがあったときにね、この手紙は今朝着いたと。昨日までにという手紙で出したのに1日遅れてたからこの手紙はいま4通きているけれど、これはボツにします。規定の日にちまでに届いたものだけで、どうぞ皆さんご審議下さい。そんなものついているならやったら一緒に見てやったらええやないかと僕らは思うのですけれどね。そういうこと、せんね。弁護士さんそれが正しいのですかね、厳しいね。それで弁護士は非常だなと時々思うこともあります。でもそういうふうなある意味では大変厳しいところもあります。ちょっと後日談言っていいですか？

それで終わりまして、理事会にまいりました。理事会はＯＫでもって全国に全世界にアナウンスしましたね。ところがこれは現役のガバナーのところにいまきていないと思いますけれど、ある…名前これは言っても良いんじゃないかなぁ…アメリカの女性のパストガバナーが、クレームをつけよったんです。そのいまの会長の推薦のときにね。あの人よりこの人が良いと言うんです。あの人よりこの人が良いということについてそれをパストガバナーの人たちに手紙で通知がいきました。届きましたか？

いろんな怪文章が届いたというかたちで、ＲＩからもいきさつの説明がありまして、その手紙をいただいたので、それに対する反論というかたちで、怪文章に相当するものということで無視をしました。あえて返事をする必要はない。

それで結構なんですけれどね、その後またもめてね。前の何代目かの副会長をされていた、私もよく知っている人からまたそれに対して、こういう手続きでこうした以上、それをいまひっくり返すのはおかしいと。もうプライベートレターみたいな、あなたの言っていることは間違いだし、悪戯にこういうことを繰り返したら、いろんなかたちでルーモア？だけが飛んで、ちゃんとしたことにならないし、信用にも関わるからもういい加減にやめろと言うような手紙をその人宛に出たのを私のところにこんな手紙を出したといってきてましたから、たぶんあれでおしまいになるんだろうと思います。

いずれにしろ、人事のことについては、事務は大変なことが度々ありますね、皆さんのご存知のパストガバナー、パスト、プレジレントで、サブーさんと言う方がおられました。サブーさんは会長に当選してから、会長になる前に自分の生まれた、インドからクレームが出ました。そしてこれはいろんなかたちでクレームが出たものですから、弁護士さんたちが何人か集まってそのことについて調査をし、いろんなことを致しました。

そして大会のときにでした。これはね、あれは何年かね…、ポートランドオレゴン、あんたが行っていたときや。名前を忘れたけどね。それで結局大会のときに弁護士さんたちからのデスジョンのメーキングのプロセスやなんかが発表されて、これで間違いないでないかと、大会のときに決議をもういっぺん仕直したようなことがあります。

日本だけじゃないですか、ガバナーに当たって、嫌そうな顔をするのは。他の人はね、もういろんなところに手を回して、そういうことをするということがあって、これは大変でしたけども、なるべく公平であるということのためには。ただ国の事情が違うもんですから、この前のようにインドのときには、調べたらそんなものの存在していないロータリークラブの名前で、投票が行っているんですよ。でね、吉田ロータリークラブってとかいってね、どこにあるんやといったら、どっかにある。そんな手紙がね、そしてこれはその人賛成、この人賛成。その人賛成ところに何票かそういうのがあったとかね・

そういうのを弁護士さんが調べて、後でこう

なってますから、これは無効ですとかなんとか言って、サブーさんは予定通り、当選したという事件がありました。こんなことあるもんですから、なかなか厳しくやっていると思うんです。全体的にはそういうプロセスだけでやっている。そんなことでいいんでしょうか。

他に何か、飯さん、難しい話だめですよ。あなた勉強して帰ってきたところですから。国際協議会から帰ってきたところで、どうも合う前は少しダッチロールをしているんじゃなかろうかという気がしまして、かたや原点に帰れとおっしゃる。なかなか我々として次年度の運営が、目前に迫っているのに、ある意味で怖いという気がしました。その辺のところを元理事というお立場でどういうふうに考えておられるのか。

一つは理事会というのは、アズリミテーションの中心になりますね、ポリシー、来年度のポリシーっていうのは、会長を中心として考えて、会長のメッセージが一番中心になると思います。ただ、ダッチロールというよりもいまの状況が大変社会それ自身の状況が大変なので、この前のときも私はそれを感じました。

今度会長を選ぶときにね。アドミシュミレーションの考えから会長を選ぶことが大事なのか、例えば財団の問題だとか、財政の問題とかいろんなことを考えて、アドミシュミレーションについてよいリーダーシップを発揮してくれるのがいいのか、あるいは財政をちゃんと立て直すことの為のね、方策をいろいろ考えてもらうということがいいのか、あるいは世界がこんなかたちになっているときにどういうかたちで世界大のロータリーとしての運動方針を決めていく方がいいのか。というようなことになりますと、世界大のポリシーとして運動の方針を決めていくといえば、若い時代の中で若いリーダーシップっていうんが必要じゃないかということにパストをおこうというかたちになりますし、アドミシュレーションのことについてとなるならばそのようなかっこうで考える。あるいは財団の問題について、どういうものがいま世界のためにはロータリーが力を入れなければならないか。いろんなポイントがある、違ってくると思いますね。だいたい大きな流れについては、そんなに急激に変化はありませんけども。少し長く考えるとやっぱりそのことについて苦労しながら、やっているんだろうと思います。

それはあのー、ターゲット、モットーを見てもですね。少しずつ連関性を少しずつ保ちながら、またその解釈をするときに少しずつ前のところを関係しながら、作っていって、そういう意味では緩やかにカーブを曲がっていこうという感じはしているんだろうと思います。それは一人一つ一つのロータリー、一つの地域地域の中のロータリーってことを考えますとだいぶずれがあるということは否めないんじゃないか。ダッチロールというよりも、そういうことにロータリー自身の運動が直面している苦しみなんだろうとそれを飯さんが担って、来年はやっていただくと、大変ですけれど、ご苦労さんです。

正直な話、いろんなことでじくじたる思いがある。実はいま40年目になるんですが、深川先生や今井先生の話を聞きますとよくわかる。その中でいま新しくボランティア化しようとしたり、著しく改善をしようとしたり、ターゲットというかロータリアンが意義を持って目標を立て

られないのにただ励もうというようなことを突然打ち出してくる。ロータリ以外の人の反感みたいなものを、反発をどう抑えるのか。

われわれはロータリアンであるという胸を張れるような何かを目標みたいなものを作っていただけたらありがたいなあという気が非常に強くいたしまして、たぶん理事会でも審議して頂けたんだろうと思うのですが、残念ながらそういう方向には至らなかった。私としては非常にくどくどと言い訳めいたお話を聞かされたという気がします。

最後の最後に来まして、今日の情勢を見るに危機感を覚えずざるを得ない、スピーチ、同時通訳も通訳も入れておりませんでしたので、ひょっとして聞き間違いじゃないかと思っているのですが、四大奉仕を基に奉仕活動をしなければならないとおっしゃった。黒人も白人も一斉に立って、スタンディングオペレーションで拍手を繰り返して、カーテンコールですよ、拍手が鳴りやまない。ロータリーは変わらないと思って帰ってきました。

ビチャーイル・アンタックルはあんたの時の会長ですね。久しぶりでアジアから出た。残念ながら日本からは会長になる人がなかなか出ないんですね。例えば会員の人で、会長をしたことのある人だけが、ガバナーになれるんですね。選ばれて。だからガバナーというのは会長経験者に決まっている訳です。

ところがガバナーをした人の中からＲＩ理事は選ぶことができる。ＲＩ理事というのはパストガバナーに決まっているんです。会長はＲＩ理事をしたことのある人以外にはならないから、会長は元ＲＩ理事であることは決まっていると。そんなふうな段階がある訳でしょう。そういうようなことで、日本とかアジアとかいうところからこの辺のロータリアンを封印しておりますから、気持ちと南米のロータリアンの気持ちとはやっぱりいろいろ違ってくる。

そういうことをどのようにまとめるかということについては、自分のところからいい人をだそうということであって、また私たちはビチャーイル・アンタックルがでたことについては、みんなが大いに感激もしたし、これから東洋的な知恵が必要だななんて言い方まで、あるところではみんなが話し合ったというように非常に優れた会長さんでしたね。会長さんの中には優れてない人もいないとは言いきれません。

それもある誤解があります。というのは一番最後になったときに、あの人の会長としてのプライベテスセンス？というのが非常に大きかったということがあって、いろいろもめました。あの人も弁護士ですし、やっぱりこれは許されるだろうと思ったものが、そういうアローアンス？が、それは慣習的に許されていないということがいろいろあったと思います。

それで、最後は、彼がまたその通りに守って処置をされたものですから、法的な問題その他は一切なかったのですが、そういうことで印象がいくらか、みんなと違っていたような印象を受けた。さっきの話に戻りますが、ビチャーイルさんたちは、感覚的にアジアの感覚ですよ。ですから私たちが聞いても、なるほどとそのことが大事だなあと。深川さんが職業奉仕ってこといっているのと一緒でありまして、なるほどとみんながね、このことは大事と言いますけれど。よその国の中では、そういうことも大事だけれども、表現としては他のものにおいて喋っている人たちがいますね、

殊にいま一番問題になっているのは、ポリオじゃないかと思いますね。ポリオについてはもっと早く結末がつく筈だった。そしてその段階でみんなが、うまくいくよとなっていたのに拘わらず、いろんな問題が起こってきて、まだいまだに解決していない。いろんな問題が起こって

きたときに、これも安平パストガバナーが前に怒っていたけれど、ナイジェリアから…マレーシア、そうそう　へんな祈祷師がおって、ポリオの注射なんてしたら、なんとかになるぞ、ってなこと言ったもんですから、ポリオの注射を受けないようなグループがあちこちにできて、それが飛び火したんですよね。飛び火したそんなことがあって、予期しないそういうものが発生したりなんかして、うまく計画通りにいかない。おそらく計画通りにいく。私たちがインドへ行ってもね、これで全部か、一人一人道の中にはってね、子どもを連れた人たちが通るたびに捕まえるのです。お前注射したか、ワクチン投与したかと聞いて、投与した人には、マジックインクでここに、ちょこっと黒をつけて帰すんですよ。次の子どもが来たときに見たら、ついていたら、ああいいよと。ついてない人は、あんた飲ませてないなといって一つ飲ませておくと。そんなね、うちだったらもう誰のところには何歳の子どもがおるの解ってますから、それでやればいいのに、それができないようなことで、まあ、難民が異動してくるのを捕まえながら、やっているんですから、そんなにうまくいくかなあと思うことがたくさんありますね。

計算の仕方はどうなっているのか知りませんが、そういうことのずれなんてことが、最後の方になると一番大きなものになって、パキスタンであるとか、あるいは紛争地帯のインドの上であるとか、あるいはナイジェリア今のような問題があるとかですね、それに飛び火していくつかのところにあるとか、いうことです。それは先生に聞いたら、何%か以下になったらあまり広がらないんだってね。だから全総員、一人もいなくなるのじゃなくて、何%以下になったらもうあんまり伝染してもしれている。ってなことで、やっていこうと、お医者さんとしてはそうなんだ。お医者さん、おられる、そうですか、全然0%にはなかなかならんと。しかし何%、ほんの僅かにまで追いつめれば何とかひとりでに撲滅するだろう。そういうような違いなんかもいろいろあって、財団が一番お金の使い方が難しくなっていますね。それがいろんなことに影響してると思います。これがまた今は財団の委員長とそれから会長との間が、先輩後輩になっちゃうもんですから、そういう点で、財団がだんだんだんだん今は、理事会と同じぐらいに財団委員会が、たびたび行われるようなかっこになって、そこでポリシーを決めて出すから、ロータリーの理事会と財団の委員会のディスジョンこれが少しずれているところが、今のような誤解を受ける問題になるかも知れません。

前は、もうご存知のようにあそこに行かれたら解るように、ロータリー・ファンデーション・オブザ・ロータリーインターナショナルと書いてありますよね。オブザのところがひっくり返ったりしますよね。そういうのがお感じになったのかも知れませんね。

実はですね、先ほどのダッチロールに似たようなことなのですが、ロータリー、我々が始め習ったのは、継続性の禁止、できるだけ毎年新しいことを行う。それから、他の団体との協力をできるだけ避けて、独自にしなさいというような教育を受けていた。だけど去年の国際協議会、いまのステンハマーさん、ハッキリ一番最初の国際協議会で、継続性をもたしなさい。他の団体と協力しなさい。とハッキリ言ったんです。継続性を持たないように。我々が始めに習ったのは、目標です。他の団体と合同でやるより、独自にやりなさい。クラブの方でロータリアンで。それがいまはですね、反対に協力しなさい。効果が大きくなる。というような表現になってきている。去年の2月の国際協議会では、そういうふうにハッキリ、今でも文章で残しております。

その通りだと思いますね。それからね、いまの

継続性の問題やなんか。これもいろいろあると思いますね、どうしてもおわらん。例えば、このポリオプラスの仕事というのは、これは、あれの時やね、メキシコのカンセコ、でしょ、カール・カンセコから始まった。こんなに長くかかるとは思わなかったですよね。それが継続性ということになってしまった。また継続性があったから、これだけの大きな仕事ができたということにもなるかもしれません。

私たちは継続性を避けるということ、現実問題としてそのプロジェクトの大きさによって、ちょっと継続をしなければならないような、実態があったと思います。これが混乱をした一つの問題じゃないかと思いますけれども、私は80年の時のガバナー、80年の時のガバナーはもう少し、シンプルに会長のポリシーが、順番に伝わっていましたけどね。最近いろんなところにまわってまいりますとね、中には突拍子もないことで、こんなことを今年はやるのか、てなことを会長が言ったことなんかあります。

私は95年の理事になったときに、一番大きな問題は、どうも理事会よりも事務局の方が強いと、なにも事務局が決めて、理事会が決めると言うことをあんまり通じない。それはどうしたら良いかと言ったら、事務局長を首にしたらいいんだ。ということで、前のジェフは任期途中で、辞めたでしょ。ビルハントリーさんが連れてきた、イギリスの方、ジェフリーは任期途中で、名前を言ったらおかしいですけれど、アルゼンチンのＧＩに首になりました。

その時にも大変大きな問題が、その時のポリシーが、そういうようなことで変わってきた。理事会もその時の会長さんが、よしやるぞっなんて、変なところで頑張られると、いま見たいに変なことになるということもあり得るんじゃないかと思います。それから事務局もアメリカの会長さんが出たときには、わりとおとなしいけれど、他の国の会長さんが出たときには、どうせ1年しかおらんやないかと、あとはインフレンシャルな働きはできない。アメリカだったらアメリカの中におるから、そんなことをちょっとね、雰囲気として私ら感じたり、よくしてますから、いまおっしゃることはいろんなところで、あるんだろうと思うのです。それをどういう具合に解釈をしながら、それぞれのガバナーがおやりになるか。言うことだろうと思いますね。

日本は大変忠実ですから、全部やらなければならんと言ったら、ああ言ったと言ったら、こっち向く、こう言ったと言ったら、こっち向くといったところがあって、混乱を起こすかもしれませんけれど。全体の流れを考えれば、一つの方向をまたガバナーが、お考えになるということも大事だと思います。そのへんについて、意見が新しい人いませんか。何か特に。あなたの時にはポリシーどうでした？むしろラタクルさんがおったんで、かえってよかったですか？それ見せたってダメだ。その袋にみんな入っていたというんじゃ。深川さんは、誰のときでした？

ポール・ゴスト

どうでした？

よかったんですけれども、時々変なことを……環境問題でしたね。

まあ、全般に無難な感じでした。
まあ、いまみたいに環境の問題を取り上げたのは、おもしろいですね。環境問題を取り上げる。今度みたいにロータリーの精神みたいなことを取り上げるとかね。

だからガバナーが、今の全体の中からこういう道がロータリーの道だっていうことをリードしなさい。率先してやるかどうかは別として、そういうような気持ちの方が強いのじゃないですか。

後ろに何でもつけられる。ある意味では、何でもつけられるので、地区の特別な目標は立てないでくれ、釘をさされましたが、いくらでもリーズナウェイに後ろに目標が作れるというふうに考えています。

私の時はね、えらい細かかったです。ビルザ・フゥチャー・ウィズ・アクションアンドビジョンというやつでしてね、こういうのは、わりと簡単ですよね。やろうかと言えば、どっちの方向に行くかは、ガバナーが考えてくださって。それから今みたいにかってに目標をつけないでくれ。おそらくそれは会長ではなくて、事務局がある方向を考えながら、一つ一つが別なものを出さないようにしてくれと言うようなことだろうと大変ＲＩの本部というよりも、事務局の方が強くなるとそういうことになってきますね。これは事務局やっぱり強いです。強いですからよっぽどＲＩの理事会が首切るぐらいの覚悟をしないとなかなかうまくいかないということがあると思います。

それは早い話が、日本区大会の時にどれだけもめたか。ＲＩの事務局、やっぱり強引ですよね。そういうことがありますから、なんかＲＩが一本でもってさっと行くと言うことはなかなかいかんかもしれませんけれど、ガバナーの皆さんのご判断を中で聞きながら、全体の雰囲気はこういう方向だなってことで、お選びいただかなきゃしょうがないかもしれませんね。
掛水さんも２回目だから、雰囲気がちがうでしょう。前と。

私ね、1980年に出てね、82年83年に出て、95年96年に出て、いまだにこんなことをしているんだから大変ですよね。

尊敬します。

ありがとうございます。何か他に・・・・えらいパストガバナーばっかりが、ご質問ですけれど。パストガバナー並びにガバナーノミニーばかりのご質問ですけれど。

平野・・あっ、すみません。あなたガバナー補佐でしたよね。そこのガバナー補佐何か特にご気づきになったことがありますか。

去年１年から随分ロータリーの基本路線みたいなものが変わって、会員にしても同業の
一業種一会員制も潰れてしまったし、出席の問題もクラブで認めれば、ああいいよみたいなものがだんだんだんだん会員も、まあ世代的にも減ってきているんかもわからんけれど、どうでもいいよと思われる。

私もう10年も前にＲＩ辞めましたからね、ところが今の問題はおそらくこの後、安平さんがいろいろ引き受けてくれるだろうと思いますけれどね。規定審議会の中で、この問題が決まるんですね、私、規定審議会の委員をした、あれは２年、２ヶ年に限るのですよね。前は２期に限るというようなことを言われておりました。そのときに感じたのですけれど、豊岡のロータリークラブが、65%でいいとか、出席率がとかいろんなことを言い出したでしょう。おかしいじゃないか、そんなこと今あるやつをできるだけ守というのはいいけれど、何ももっとハードルを下げるというのは、ロータリアンとして、おかしいじゃないかということで、言っていました。

私ちょうどその時代議員だったものですから、これは皆さん聞いて下さい。日本でもっともロータリーを忠実に守ろうという、日本のロータリアンが熱心な意見として出しますけれどいかがでしょう。と言ったら、一番ロータリーのことについて忠実に守っているという方のご提案ですから、どうぞ真剣に討議して下さい。といって、かけたけれど、とたんにノーですわ。要するに規定審議会で、なるべくややこしいことは減らしていこう、ややこしいことは減らしていこ

うという考え方が強いですよね。一般の人たちは、だからあそこで簡単に決まっちゃう。ことにだんだんだんだん終わりに近づいた、題は簡単に。あんたいっぺんいった？　初めの方は非常に熱心にやるんです。だから順番がたくさん出てくるでしょう。あとのほうになると帰る時間とくっついちゃう訳なんですよ。ああ、ＯＫ、ＯＫてなことでね。ノーノーとかいってね、どんどこどんどこ進んでいってしまう。初めの時間が三倍かけた、あとの時間はほんの僅かということですからね、あれ出すんだったら、通そうと思ったら後の方に議題をあげて貰う方が、一番通りやすいということですよね。確かに時間的に大変なことですけれど。そういうような中で、雰囲気としてはやっぱりみんなもっとイージーに自分達が、ロータリーライフを楽しむために、クラブの規則とかややこしいことは止めようとか、会員増強をせいというのだったら、こんなもの外せとか、いろんなことがたくさんあるってことが、これは規定審議会の傾向としてなかにそういうことがあります。そうかと思うと女性を止めろと女性を入れるべきでないと。
ちょっと伺います。皆さんの中で女性を会員にしておられるクラブいくつありますか？

認めておられる。あんたえらい元気よく、はい、されたけれどどんな具合ですか？女性がこられるのは？

別にいいんじゃないですか。

歓迎をする。それでいまみたいにクレームがついたとき、やっぱり女性か？なんて、女性はジェラシーか゜強いなんてみんなが言っておりましたけどね。あの時も随分長い間、ノーでした。

私が出て80何年か、82年かな、その時に反対、反対の意見でなんやと聞いたら、何と言ったかといったら、フランスのやつ、同じ女性と一週間に一度、昼飯を食っていたら、家でなんと言われるかわからんから、女性を入れるの反対だとかね、そんなんか、笑い話ですよ。みんなが笑いながら、手を叩いたりして、そういうこと。

それで次の人はなんといったかといったら、女性を入れるのだったら、男性によって組織されているという私たちの規則、定款を全部、いっぺんロータリー解散して、男女平等の会だといって、もう一度やり直したらいいけれど、このままで女性を入れることはいかんとかね。まあそういうふうないろんな意見が出て、聞いててアホらしくなるような、ディスカッションが続いたことがありました。

その結果の気持ちとしては、なんやと、ロータリーももう少し、ただ多数決で決めていくというのは間違いなんじゃないかなぁともっと真剣な問題を定義してなるほど、これが一番大事なことだからってことにならないといかんのじゃないかということを感じたり致しました。だから結論的には、そういうかたちで、さっきのあれでも人数を、何回やっても同じようなことをやってくるということは、形式的には民主主義ですけれど、それで公正ですけれど、実体的にどこかしっかりしなければならない。どこかしっかりするというのは、一人一人のロータリアンの問題で、一人一人のクラブの問題で、一人一人の地区の問題ですから、そのことさえハッキリしておけば、多少のブレぐらいは、あんまり一つ一つに気にかけていたら、これからのロータリーはちゃんとしたものにならないのじゃないかと心配しています。

他にございませんか。こうやってごまかしているんだけど。

他に何か。それじゃあ、日本のロータリーでいま一番弱いところってなんでしょう。日本のロータリーでいま一番弱いところってなんでしょう。

地域格差が……。

深川先生、あちこち回っているのでなにか。日本のロータリーで弱いところってなんですか。職業奉仕に理解が行き渡っていない？そういわれると、みんなああそうですか。といわんと仕方がない。私もう一つはね、職業が昔だったら、小さな町に、メガネ屋さんと煙突掃除屋さんとね、靴屋さんとそういう形で町が成り立っていましたよね、ところが今は会社組織ですから、なんとか部長、かんとか部長みたいな、形で職業を奉仕のカテゴリーに入ってきますから、昔の職業奉仕の概念と今の職業奉仕の概念とが、やっぱり実態としてずれてきているんではないだろうか。っていうことを時々感じるんです。

それどうでしょう？専門ですから。

そこが私は、ひとつはっきりしないのが、ひとつの問題だろうと思う。例えば堀江さんが、あれだけライブドアーグループの中で、あれだけ傘下に治めていた。何で出てくるかということは、全然わかりませんよね。

例えばですね。だから職業奉仕の時のそのへんをどう考えるか。例えばあなたみたいに弁護士の専門職の場合は、はっきりしていいですよ。日野さんみたいにお医者さんならどう考えても新聞配達はできそうもないですから、やっぱり職業奉仕はお医者さんでいかんと、外科ってなことで、やらないといかんでしょう。大森さんが、今更どこいったって魚屋にはなれそうもないですよね。

そういうふうなハッキリしている専門職の人は、わりとハッキリしていると思う。ところが一般の方々の中では、昨日までセールスやっていて、今日からは他へいって、工場で働くという人はたくさんいるわけでしょう。職業奉仕の職業の概念をどう規定して、どう位置づけて、その役割をある人に貸し付けるのか。このへんが非常に難しくなっているんじやぁないか。だから職業奉仕の概念が、ハッキリしていないということは、社会の動きの中で、ハッキリしてないということと一緒なんです。

もっとも飯さんのように、本当は学校の先生やりたかった。青少年のために指導したかった。幸か不幸か家業を継いだなんて人の職業奉仕は家業の方でやっておられるですね。とにかく職業そのものの選び方っていうなことが、全く違ったものになってくるようなことが、しかもロータリアンはそのまま席をおいておるということですから。はっきりやめて今度はこの職業で入ります。みんなが承認して入るのなら、またいいですけれど、同じ人が変わってくるってことだってありますでしょう。どうしますの。

安平さん、ご意見はございませんか。いまのじゃなくて職業奉仕がいま混乱しているだろうというような。

もう一つは外国といいますか、一般には西洋社会、コミニュティという概念があって、ひとつの地域の中に集まったときに、この地域で何が必要かときにね、例えば学校が必要だと言って、学校をつくる。片方では、消防署が必要だといって、消防署をつくる。こういうぐあいにして、実は魚屋さんが必要だといって、魚屋さんができる、必要なものがコミュニティの中に必要なもの、はじめは医者が必要だといって、つくりますよね、こういうかたちでもってコミュニティができてきた。エリアと考えるのか、あるいは一つ一つの心がつながっているというだけでコミュニティをつくるのか。

日本のコミュニティの作り方というのは、非常に他所ともちょっと違ってきた。僕は、あの、あそこに行ったときに、皆さんもこれは行かれた方がおられると思いますが、ブラッセルね。ブラッセルに行ったときに小高い丘のところにスタッフ柱が立っているんですよ、塔がね。塔のと

ころにみんなね、銅像が積んでいるんですよ、その銅像をみたら、クラーク、弁護士さんやなんか、ロイヤー、とか煙突掃除屋さんとか仕立て屋さんとか、荒物屋さんとかの格好をした人形がずっとついて、これが一番最初に、このブラッセルを創ったときにこの町に必要な職業であって、その職業の代表者がＣＴカウンセルをつくった。言い換えればロータリーと同じような計画の物ができてきた。いうのでスタッフ柱が立っている。コミュニティというのがそういうものならハッキリします。

事務をとるような人がいて、それでもって一つのコミュニティができて、これが最初のＣＴカウンセラーのメンバーというのは名前じゃなくて、そういうことで小高い丘のところにに立ってましたね。そしたら職業奉仕という概念もわりとハッキリするけども、いまの日本の分類ではない。

この前も田中さんが、問題になっている横須賀ですか、中学校の先生が、ロータリアンになったと。一先生なんてロータリアンに入れるべきでないとかなんとかが、いろいろ問題になったということですけれど、裁量権の問題ね。なんかそういうような問題になったということがちょっと問題になってましたね。

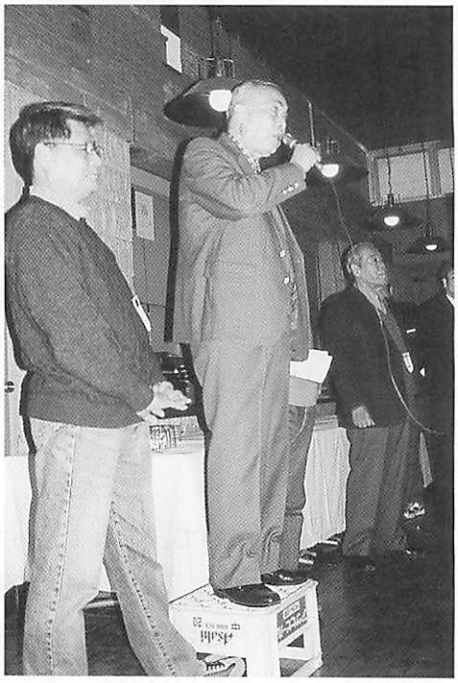
さっきの掛水さんのお話のように、その人が、何百ドル？納められない人は入れるべきじゃない、という発言と同じように。やっぱりどういう形で職業分類に従って集めるかいうことが、非常に概念として曖昧になってきているのではないかと感じますけどね。これはどういうふうにしたらいいんですかね。コミニュティの問題として考えたときにどういう分類の仕方をすればいいのかってことを私たちはもう一度考えてみる必要があるかもしれない。行政は違った分類をしますよ。自治会長だとかね、民生委員さんとか、そういう代表でもってコミュニティの代表としてつくってる。職業の代表をした人たちを集めた、自治体はあまりないだろうと思います。これは結論として、あなたが質問ですけれど、これからどうしたらいいですか。

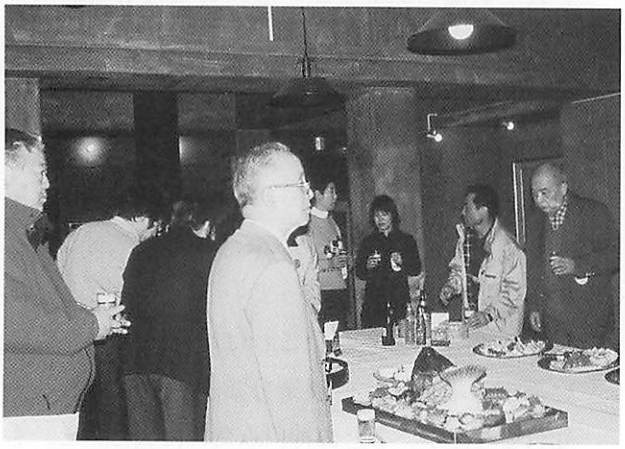
職業分類表を整理して、やっぱり職業というのは結局、自分の職種を一番忠実に地域社会に奉仕の心を適用できるか？問題は残ります。やっぱり社会が変貌して複雑になった以上ですね、しょうがないと思われるだけど、あくまでも正確な職業分類表というのを作っておかないかんのです。それをどう適用するかは、ここのロータリークラブの問題であろうと私は思います。

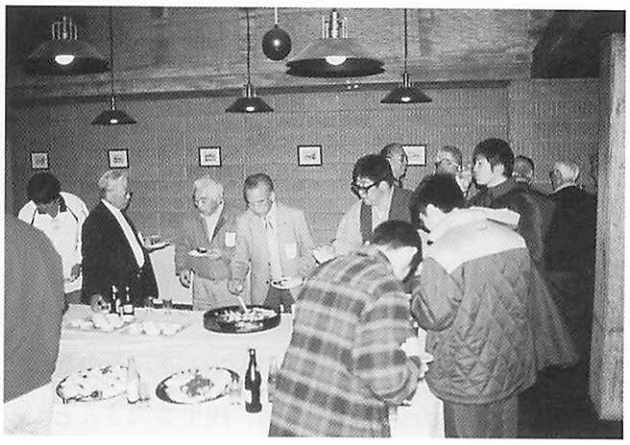
僕はそのここのロータリークラブが、自分の地域社会の職業、どんな職業が代表的な職業があるか、この地域社会にどれだけインフレンスを持った職業があるか、という選び方を形の上ではしながら、もうそこは全部抜けているんですよ。充足していないんですよ。そしてあいつが来たぞといって、人間を集めて、これどこに入れようか、言ってね、なかったら、新しい職業分類だと言って、書いてやってて、あの職業分類表というのは有名無実になっている。というところがあると思いますね。これはかえって大きくない都市の場合には、職業分類表と合ってるかも知れませんが、ことに神戸みたいに大きいと、もう何がなんだかわからなくて、職業分類表を出すんですよ、ガバナーが公式訪問、カルテゴリやうちの職業分類はこうなっております。と未充填、未充填、未充填、充填、新しく来た人は、新しくまた職業分類、勝手に増えて、それを削らないものだからどんどこどんどこ職業分類表が多くなって、未充填の部分が物凄く多くなってくる。あれではいかんから、職業奉仕分類表から考え直さないといけないのかもしらんと思います。

未充填があってはいけないことはない。

だから最初に作ったときは、そこのコミュニティがどういう職業によって、一つのコミュニティとして成立しているかということを基準にして、その代表者の方々を集めましょうということになってて、それに貸し付けていく。それが壊れちゃって、人間に、異動も激しいし、いろんなことで、人間についているから、新しく加わった人の職業分類表をくっつけていくから、こんな人たった一人しかいなくて、その人が代わったら、もういないという職業分類まで、未充填と書いてあるから、あいている、みんな未充填の人が多くなってくるということだと思います。だから職業奉仕とともに、職業分類も考えてもらわないとあかんということですね。おかげさまで予定の時間がきました。おわります。







規定審議会の状況について

RYLA顧問
パストガバナー 安 平 和 彦
(姫路RC)

すみません、お疲れのことだと思いますけれども、今の職業分類、話が逆転してしまっているので、本来職業分類表をいかに作るかと。それはその例えば、姫路だったら姫路における姫路クラブとしてはどういう職業から代表者に来て欲しいかという、それを各クラブが職業分類表というのを作っていく。会長が8月末までに作らなければならない。それは自分のクラブとしてどういう職業から会員になってもらうのが望ましいかという発想で作ってもらう。そういう望ましい人がいなければ、その職業分類はもうペケにしてしまったらいいんです。未充填でおいておくというのはおかしいわけで。しかし新しい職業が出てくるわけですから、そういう職業からも来てもらうのが望ましい。

とするのならそういう職業分類も新しくやって、毎年毎年職業分類表というのを見直して、そして望ましい会員に来てもらうように努力するのが発想なので、やっぱり人が先に見つかってから、どれかくっつけるというのは本来は、話が逆だろうというふうに思っていますけど。

まあ、規定審議の話をせないかんのですが、ポリオはですね、昨年、随分増えまして、1917人かなんかになったと思います。一時500人以下になったんですけれども、さっき話があったように2003年、4年にナイジェリアからマジャルエ？会長が出られて、カノ州、カノック？さんから出たのですけれどもそのお膝元のカノ州で、いま今井先生がおっしゃられたようなことで、約1年近くワクチンの投与がされなかったと、いうことで爆発的に発生しまして、ナイジェリアから輸出されて、そして隣へ行って、またこう行って、挙げ句の果てにインドネシアに昨年、飛び火しまして、インドネシアで何百人も出ました。それがまた今度、ネパールにも行きまして、ネパールで何人か去年発生しました。ただその後、ナイジェリアでもどんどんどんどんワクチンの投与をやっているようでありまして、だいぶん効果が出てきたかなぁというふうに思っていますけれど、今年もすでに何百人か発生しておりますから、まだまだちょっと先行きしんどいなあと思っておりますけれど、朗報はミジェールとエジプトは野生のウィルスは去年一年間、発見されなかったというふうなことで、これまで6ヵ国野生のウィルスがまだ残っているというふうに言われてましたけれど、そのうち2ヵ国は撲滅されたのかなぁと、後4ヵ国とこういうふうなことのようであります。

ポリオも型が2つほどあって、最近ワクチンも少し、また改良されたワクチンが出てるようですので、それをいまどんどんどんどんやっていますので、まあ、ここまで来た以上やり遂げなしようがないと思います。手を抜いたらまた、いまみたいなことで、元のもくあみになったら困りますので、ロータリーもえらいもんに取り組んだと思いますけれども、これはもうやり遂げなしょうがないと私は個人的には思っております。

規定審議の話でありますけれど、来年の4月の22日から4月の28日まで、シカゴのマリオッ

トダウンタウンホテルというところで、規定審議会があります。一週間、私は2680地区の代表として、代表議員として、出席をせないかんというふうなことでありますので、前後あわせると９日か10日ぐらいいかないかんと、英語もできへんのにどうしょうと思っとるんですが、まあそんなことになっています。

まず規定審議会とは何やと規定審議会の流れはどうなっているのかということと、それから参考に2680地区がこないだの地区大会で、立法案を可決して、提案するということになってますので、そのことも参考にお知らせしようかなぁというふうに思っています。

規定審議会の歴史については、これはもう深川先生の全く受け売りでございますが、一応皆さんご存知のことと思いますが、それを復習という意味でお聞きいただきたいと思います。

まずその何で規定審議会というふうなものができたのか、いま規定審議会というのはＲＩの唯一の立法機関ということになっているわけですけれども、なんでその規定審議会がもともとできたんだということにつきましては、そのまあロータリーが、創設されて、発展していく中で、そういう組織原理の形成という面から考えて、振り返ってみないといけないだろうというふうに思います。

ご承知のように1905年にロータリーが、最初のロータリークラブが出来たわけですけれども、一番最初の原則はご承知のように一業種一会員制と例会出席の強制というこの２つの原則が、根本原則としてつくられて、そして出発したというふうなことでありますけれども、その後ロータリーは例の親睦派とか、奉仕派とか、それから個人奉仕家、団体奉仕家とか、まあいろんな対立がありながらもそれを克服して、発展をしてまいりまして、まあ外形的な話ですけれども、シカゴクラブの創立から３年後の1908年に、サンフランシスコに全米第二のロータリークラブが出来ました。

翌1909年には、オークランド、ロサンゼルス、シアトル、ニューヨークシティ、ボストン、ミネアポリス、それから1910年には、また８つのクラブが出来まして、1910年の８月に今のＲＩの走りとなる全米ロータリークラブ連合会、ナショナル・アソシエンション・オブ・ロータリークラブが組織されたわけであります。

その年の10月に始めて外国のクラブとして、カナダのウイニペグロータリークラブが出来まして、そして1911年、翌年ですけれどもイギリスのダブリン、グラスゴア、エジンバラ、ロンドン等にロータリークラブが創設されました。そして1912年に全米ロータリークラブ連合会を国際ロータリークラブ連合会にインターナショナル・アソシェーション・オブ・ロータリークラブというふうに改称したわけですが、この時に全世界のクラブ数が全部で50でした。その後1915年に、これはいわゆるロータリー創立10年後でありますけれども、サンフランシスコで国際大会が開かれたときには、186のクラブ、そしてこの時に全世界のクラブを19の地区、デストリックト？ですね、に分割して、それぞれに地区ガバナー制をガバナーを置くことになりました。

だから今の地区ガバナー制というのは、1915年に既にしかれたというわけであります。その後1917年には、全世界で300のクラブ、21年には1,000、そして22年のロサンゼルスの国際大会において、いわゆる国際ロータリー連合会を国際ロータリーＲＩ、ロータリーインターナショナルと名称変更して、国際ロータリーの定款、細則を採択するとともに標準ロータリークラブ定款を採択した。とこういう流れであります。このロサンゼルスの国際大会で、全世界の全てのロータリークラブ、それ以前に作られたクラブは、特権保有クラブということで縛られないわけですけれど、それ以降に作られる全てのロータリークラブは、全て標準ロータリークラブの定款

の採用、それから毎週1回の例会、が義務づけられている。

そしてこの時にメイクアップの規定というのも新設されました。そんな流れの中で、一番最初、シカゴクラブでは、守るべき規則というのは、一業一会員制と例会出席強制というまあ2つの原則であったわけですけれども、全世界にたくさんのクラブが出来てくる中で、そのたくさん出来たクラブを管理し、連絡調整をはかるためにはＲＩという、そういう連絡調整機関の設置とそしてその組織規定が必要になってきた。それから会員の守べき基準としての標準ロータリークラブの定款、いうふうなものが必要になってきた。いうわけであります。

そして1925年、ロータリーの創立20周年で、全世界のクラブ数が2,000を超えました。その後、第二次大戦の時には若干減りましたけれど、その後ご承知の通り数だけ、ロータリークラブの数だけとしたらちょっと語弊があるかもわかりませんけれども、数と会員数は全世界で120万人、クラブ数は3万をはるかに超えるという、巨大な組織になっていったというわけであります。こういうふうにロータリーというのは一つの組織でありますし、運動体でありまして、その創立以来、その組織とか、それから実践のあり方については、幾多の先人達が議論をしてきたわけですけれども、そういう発展の流れ中で、どういうふうに規則を制定し、改案するのかということにつきましては、最初は毎年の国際大会で、やってきたわけであります。

その後、今度は2年に1回、偶数年に開かれる国際大会で、審議するようになった。ところがその国際大会に提案される案件が、どんどん増えてくるものですから、またクラブ数やロータリアン数の増加によって、国際大会でいろいろ議論しようと思ったって、ゆっくりと議論が出来なくなってきたということがありまして、1970年のアトランタの大会で、それまでは規定審議会というものはあったんですが、それは国際大会で審議検討する案件を事前に整理し、予備診査をするだけであったんですけれども、その規定審議会を今後は、国際ロータリーの立法機関としようというふうな決議をしました。

そしてその2年後の1972年のヒューストンの国際大会で、国際大会の一部として、始めて立法機関としての規定審議会が開催されたということになっています。その後1974年のミネアポリスセントポールの国際大会においては、それまで2年毎の開催であったのを3年毎に開催しようというふうになりまして、そして最終的には1977年のサンフランシスコの国際大会で、規定審議会を国際大会の一部としてではなく、独立の立法機関としようということを決議致しました。

そういうことで規定審議会というのは、いわゆる独立の立法機関として、まあロータリーの議会ということで国際大会とは別個に3年毎に開かれるようになりました。ただその当時は、規定審議会で採択した案件に対して、各クラブからの反対投票が10%超えた場合には、国際大会で最終決定をするということになってましたので、その限度では、国際大会がまた立法機関たる性格を失ってはいませんでした。

ところが1998年のインドのデリーで開催された規定審議会で、それまでは国際大会が細則に従って、立法案を審議決定する場合を除き、規定審議会がＲＩの立法機関をなすものとする、というふうに規定されていたものを今度はたんに規定審議会がＲＩの立法機関をなすものとするというふうに決議されまして、結局この1998年の規定審議会以降は規定審議会が唯一の立法機関いうことになりまして、現在に至っているというのが規定審議会の歴史であります。従いましてＲＩで、ロータリーのいろんな組織原則については、規定審議会が唯一の立法機関として、3年に1回開かれて、決議をされていくという

ことになっております。

それじゃあ規定審議会とはどんな流れでやっているのというのが、一枚物の表があると思いますけれど、それをちょっと見ていただきたいと思います。規定審議会に提案するのは、一番上にあります、クラブでも提案できますし、地区大会でもできますし、それからこの世界大会、それから規定審議会そのもの、それから理事会、これらがいずれも提案することができます。で規定審議会に提案される提案のことを立法案といいます。立法案は2つありまして、制定案、いわゆる組織規定ですね、ＲＩ定款、ＲＩ細則、標準ロータリークラブ定款の改正を目的とするのは、制定案といいます。それからそれ以外の決議、それ以外のものを改正するようなことを組織規定以外のいろんな、まあたばこは吸わないようにしようとか、なんとかかんとかいうようなものについては、それを決議案といいます。でクラブが提案する場合には、どういう流れになるかというのが一番左にありますけれども、各クラブが理事会でその立法案を決議し、そして例会において、会員の承認を得て、そしてそれをガバナーの方に提出をします。ガバナーはクラブから出てきた提案を地区大会にかけます。

以前はクラブが提案した立法案につきましては、地区大会で賛成されようとも、否決されようとも別にそれはかまわなくて、否決されても規定審議会に提出されたのですけれど、前回の規定審議会で、クラブ提出の案件については、地区大会で、賛成評決を得なければならない、こういうふうになりました。従いまして地区大会で、賛成評決を得て、賛成されたものだけが、ガバナーの証明書を持って、事務総長に提出をするということになっています。で事務総長に提出するのは、規定審議会が開催されるロータリー年度の前年度6月30日、つまり来年度7月からの2006年度の来年の4月に規定審議会が開かれますので、その前年というのは2005年度ですけれども2005年度の6月30日ということは、今年の6月の30日までに事務総長までに提出されないといけません。

そういうふうに提出された案件が規定審議会に、まあいったん提出されても、これおかしいとかいろいろ修正の要求なんかもあるわけですけれども、一応適用な立法案だということになれば、規定審議会で評決にされるわけです。規定審議会で投票権を有するのは、原則としては、原則というか、各地区一名の代表議員であります。

全世界に529の地区がありますので、全世界の529の地区から各1名の代表議員が出てくるわけであります。この代表議員というのは、規定審議会が開かれる2年前のロータリー年度の地区大会で、選挙されるということになっておりまして、まあ私代表議員になっておりますけれど、これは昨年度2004年度の地区大会で、選出されたということになっております。四国も決まっておられると思います。

そういう全世界から出てこられた代表議員が、審議するわけですけれど、その代表議員は、各地区から提案された議案を代表議員として、提案するという仕事もあります。ようするに地区の代理人みたいな形で、提案するのだと思いますけど、そういう地区からのやつを自らの代表議員が、提案するということがあります。

それから全世界から出てきた案件について、いわゆる投票券を有する議員として、自由に投票すると、審議するという立場があります。そういうことでやっていくわけですけれども、あとまあ、投票券を有しない議員として、いろんな人がおりますが、このへんのところは一応のかしまして、規定審議会は定足数2分の1でありまして、代理は認められません。投票権は一票ずつです。その結果としては採択、修正、採択、否決、取り下げ、みなし取り下げ、理事会、保留とこういうふうなことであります。

2001年度の時は700件ぐらい出てます。2004

年が500何十件でした。ものすごく数が出まして、従いましてＲＩは、かないませんので、今度の規定審議会から各地区の提案件数を５件以内におさえてくれというような、これはまだ決定ではなく自己免除ですけれどそういう要請をしてきています。それにも負けずうちの地区は５件出すといっぱいいっぱい出すということになりました。

一応そんなことで、規定審議会で採決がされまして、その結果は議長が事務総長に10日以内に結果を報告しまして、事務総長がそれを全世界のクラブに結果を送ります。その送られた結果に対して、各クラブからの反対投票が、10%を超しましたら、いったんその採択案件は、効力を一時停止しまして、全クラブの郵便投票にします。そして反対が過半数なら、その採択された案件は無効になりますし、半分以下ならば効力を復活して規定審議会の採決通りとなります。10%未満ならば、規定審議会で決議されたすぐその後の７月１日から効力が発生するというふうになっています。10%越したことはこれまで、過去に１回もないというふうなことでありますので、規定審議会で決まれば、それが最終の結果だろうというふうなことになると思います。

四国の方では、特に規定審議会への案件は、提出にはなってないんですかね。地区大会で。2680の方ではですね、前回が３件ほど、その前が５件ですか。今回５件ほど出しているわけで、ＲＩから嫌がられるだろうと思うのですが、参考にどんな案件を出しているかということなんですが、嫌がることばっかり出していますが、今井先生いらっしゃいますが、今井先生はパストですからね。

一つは理事会決定の公表という理事会の決定事項を速やかにロータリーワールドもしくはザ・ロータリアン紙、及びロータリーの地域雑誌を含むロータリーワールドマガジンプレス又はロータリーワールドワイドウエーブを通じて公表しなければならないとこれはですね、理事会の決定というのは、定時又は臨時の国際大会にクラブが、提訴する以外にひっくり返すことができません。理事会の決定というものは非常に重いものです。

しかし、提訴以外にひっくり返えされないのに拘わらず、理事会の決定がきちっと発表されていない。というのがありまして、まあそれなりに公表はされているんですけれど、きちっと公表されていない。しかもＲＩ細則に公表規定がないという、従いましてＲＩ細則の中に公表せなあかんよという規定を設けようというこれは制定案です。これは形の上では、神戸西クラブ、今井先生のホームクラブが提案をされています。ちなみの当地区でも各クラブに年度始めに規定審議会の説明会をやりまして、どうぞ各クラブからいい提案を出して下さいというふうにお願いをしましたが、出てまいりません。それからもう一回またどうぞ出して下さいというふうに勧誘をしたのですが、また出てまいりませんので、そういう中で常設の委員会として、規定審議委員会というものを地区では置いておりまして、規定審議しよう委員会ですけれど、そこでどういう案件がいいかということを独自に検討致しまして、そしてその中でこういう案件を出したらいいんじゃないかということを規定審議しよう委員会に出てきてる委員さんにお願いして、あなたのクラブでこういうのを出してくれませんかとお願いをしました。

各クラブできちっとそれは理事会、例会を通じて出ているわけですけれど、各クラブから自主的に出てきたのというんじゃなしに地区の小委員会が、勧誘をして出ていったということであります。各クラブでもっと自主的に出て行ったらいいんですが、そういうことにはなっておりません。

それからもう一つ、例のウェブサイトを通じてですね、メイクアップが出来るというのがあ

りますね。これは前回の規定審議会で、採用になったというか、クラブのウェブサイトを通じて、平均30分の３回が義務づけられた、総合参加型の活動に参加すること。とこれがメイクアップになるという話でありますけれども、これを抹消しようという制定案を出しております。

趣旨としては、本来各クラブというのは、所属クラブの例会の60％以上に出席すべきものである。ところが標準ロータリークラブ定款はやむ得ない場合の欠席に限って、メイクアップという方法での出席補填を認めている。ところがクラブのウェブサイトを通じてのメイクアップというのは、他のメイクアップの方法に比較して、単に机上のパソコンだけ、パソコンを通じて極簡単で短時間でやりとりだけで、メイクアップが可能にならしめる。

田中パストガバナーの経験によれば、５分か10分以内で、パソコンデートでやりとりすれば、メイクアップが出来てしまうという。いうふうなことでありますので、これは本来のメイクアップ制度にふさわしくないのではないかというふうなことで、これの削除をもとめた制定案を出しております。これは伊丹クラブ、深川先生のホームクラブであります。

ということでこれは他の日本の他の地区からも同じ趣旨で、出そうなことを聞いております。後３つ決議案を出しております。

一つはＲＩ理事会が、規定審議会において採択された、制定案を忠実にＲＩ定款、ＲＩ細則、標準ロータリークラブの定款の改正に反映させ、手続き要覧に掲載することを求める件。非常に新しい決議案です。これはですね、姫路クラブが出しています。こんなことあってはならないと思うのですが、ＲＩ細則の改正のための制定案が、可決されたとで、何条と何条の改正ですよというふうに採択されて、報告書に記載されているのに後で手続き要覧の細則のところを見ると巧妙に外して、別のところに改正されたような記載になっているとこんなことは許されるわけないと思うんですが、そんなことが実はございまして、これも内容まで話をするとちょっと長くなるので、勝割りしますけど、そんなことがありますので、規定審議会とはいま申しましたようにＲＩの唯一の立法機関、ものすごく権威のあるものですから、そこが決議をした制定案が、かってに事務局だろうと思うのですが、かってにかえられてしまうと、おかしいじゃないかということで、ちゃんとせいよというのがこの決議案です。これも随分嫌がれるだろうと思うのですが、これも出しました。

それからもう一つは、これは尼崎西クラブ、うちのガバナーが出てるクラブでありますけれど、そこの提案で、国際ロータリーＲＩ理事会が手続き要覧に掲載された社会奉仕に関する1923の声明の本文１にロータリーの第二標語であるゼイプロフィット・モスト・フーズ・サーブベストを掲載することを求める件。これはご承知のように2001年の段階で、ヒープロフェスというのが性差別、に関係するというふうなことで、例の削り23の34の本文中でヒープロフェスト・モースト・フーズサーブズベストというそこのところが、使用停止というふうにカットされたわけですけれど、2004年の規定審議会でこのヒーをゼイにかえて、ゼイプロフェスト・モースト・フーズサーブベストというのをロータリーの第二標語とするというふうに決議をされました。ところがそういうふうに、ゼイプロフェスト・モースト・フーズサーブベストがロータリーの第二標語とするように決議したというこれが04271という決議なのですが、それにも拘わらず今の手続き要覧の決議23の34のところにはそれが、ゼイプロフェストが掲載されていない、戻っていないということですので、それをちゃんと戻せよという決議案でございます。

最後の決議案は、これは今井先生にまた、いわれるかもわかりませんが、ＲＩ理事会が国際ロ

ータリー定款第５条第２節Ａに定められた資格条件を強調することを認められた件。ちょっとなんのことかわかりませんが、趣旨を読みますと国際ロータリー定款第５条第２節Ａは、クラブは善良な成人であって、職業上良い施主を受けている正会員によって、構成されるものとされ、その正会員は一、一般に認められた有益な事業または専門職務の持ち主、共同経営者(パートナー)、法人役員又は支配人であるか、または二、一般に認められた有益な事業または専門職務あるいは、その地方代理店または支店において宰領の権限ある管理職の重要な地位にあること。またはこの三のＡの一、または二にあげた如何なる地位からも退職せず、昔そういう人やったんやということですね。しかるに禁じ、これらの用件が軽視され、これらの用件を具備せず、裁量権のないものを会員として入会さしている例が見受けられる。従って国際ロータリー理事会は、全世界のロータリークラブに対して、国際ロータリー定款第５条第２節Ａに定められた資格要件を強調することを求めるという。これは淡路三原ロータリークラブというところの提案ということになります。

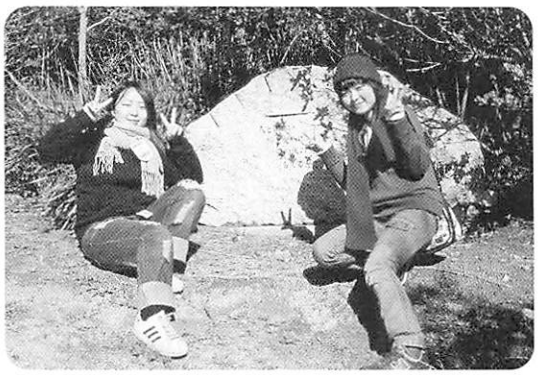
先ほども今井先生がおっしゃいました。茅ヶ崎湘南クラブというのが作られまして、それがその財団奨学生のＯＢといいますか、そういう方とかＧＳＥの方とか、そういうその方を中心に、若い方ばかりで新しいクラブを作った。その学校の先生、いわゆる平野先生みたいな方も入れて、というかその方が中心になってクラブを作った。地元の現役のガバナーはこの今のＲＩ定款がありますので、まさかＲＩが認めへんやろ思とったら、すんなりとＲＩはクラブの結成を認めてしまったということがあります。考え方がいろいろあって、何もこれからのロータリーは、そんなセクト主義みたいな話、若い人たちも一緒にやったらええじゃないかと、それいうような方向ももちろんあろうし、世界のロータリーのムーブメントというか生き方として、そういうのがこれからの生き方だという考え方もあるでしょうし、だけどやっぱりロータリーというのは、あらゆる職業の横断面からその代表的な方による裁量権あるその代表的な方に来ていただいて、そしてロータリーで切磋琢磨して、そして自らの職業分野にかえって、その職業分野の職業倫理を向上させていくんだという。まあそういう理念的な部分からいうとやっぱり裁量権のあるメンバーで構成されないとやっぱりおかしいのではないんかなあというふうな原理的な考え方もあるでしょうし、まあ難しいところだと思うのですが、いずれにしてもその茅ヶ崎湘南クラブの結成については、このＲＩ定款そのものに全く反していると、いうふうに言わざるを得ない。

そして規定審議会のＲＩ定款の改正は、全代表議員の３分の２以上でないと改正できないということになってまして、厳然と規定は生きているわけでありますので、その規定をかえたらいいじゃないかという生き方と、やっぱりこれが大切やからこれを守れという生き方と両方あるんだろうと思いますけれども、やはり規定がきっちりある限りは、それを守べきではないかと、私は原理的にそっちの方がえんちゃうかというように思いますけれどそうなんですけれどもそういうふうな案件でありまして、この５つの案件はいずれも先般の２６８０地区の地区大会で、いずれも圧倒的賛成を、賛成の人といって、「はい」とガバナーが自ら手を挙げたら、みんな「はい」といってつられて、手を挙げてしまって、圧倒的多数で可決されましたといわはって、全部通りました。通った以上は、私が来年審議会に行ってこれを説明せないかんというかなわん立場になったんですけども、やはり規定審議会でいろいろ審議をしてもらうに充分価値のあるそれぞれの案件だと思いますので、どういうことになるか、楽しみにしております。そんな

ことでございまして、最後に私の時には2002年ー3年のビチャール・ラタックルの時でした。ラタックルは非常に素晴らしい方ですよね。私の年度の国際協議会でもこのテーマを発表されたときには、みんなスタンディングオベーションでやりましたけれど、その後毎年の国際協議会でもその話をされたら、みんなもう、スタンディングオベーションで感激して、大拍手しているということでございまして、本当に素晴らしい会長のもとで、ガバナーをさせていただいたなぁと喜んでいます。前年は、キングさんという、前にあげられて歌をうたわせられなくてよかったなあと大変そういう意味でも喜んでおります。やっぱりその年度の同期のガバナー、ＲＩの会長の時のガバナーいうのは、これずっとつきまとうわけですから、大変有り難かったなあというふうに思っております。そんなことで10時をちょっと過ぎましたが、一応話を終えたいと思いますが、何かご質問あるでしょうか。今井先生がなんかいいたそうにしていますが。

あのー、私がアドバイザーというか、それをやっておりますけれども、後は委員長の委員も普通の一般のメンバーで、たまたま三木ノミニーが、その総委員長でございますけれど、あの当地区、2680地区が田中パストガバナーが大変熱心でございまして、2001年と2004年の２回お出になりまして、特に2004年は、代表議員の世話役なんかをやられまして、そんなことでもっと言えば、深川先生の時から小委員会を作っておりまして、小委員会で一生懸命、案件を検討して、特に深川先生の時でしたか、カラカスかあの頃からの案件を全部、もう一回掘り起こして、否決されたものについてもう一回見直すべきではないかという、ずっと過去の例もやってですね、地区からこういう提案を出したらどうだというような検討をその小委員会で、やっておりまして、それを今もずっと常任委員会として、おいております。それじゃあ、ありがとうございました。

レクレーション



環境を通じて、ボランティア活動の実践

香川大学院地域マネジメント研究科教授
関（せき）　義雄（よしお）先生

関　義雄先生

兵庫県出身
1978年　大阪大学院工学研究科・博士課程終了（工学博士）
1992年　香川大学大学教授
2004年　香川大学院地域マネジメント研究科教授・
　　商品システムマネジメント
《主要社会貢献》
ネットワーク・グリーンコンシュマー香川・会長
香川県環境審議会会員
《ロータリークラブ》
高松西クラブ・本年度幹事
四国千種会会員

（司会）プロフィルを簡単に説明させていただきます。

詳しくはワークブックに入っています。出身は兵庫県で、大阪大学大学院工学研究科を出られた工学博士で、香川大学へ講師として入られ、現在、香川大学大学院地域マネジメント研究科の教授として活躍されています。また、高松西クラブの幹事もされています。そして、県環境審議会委員ということで、環境についての講演、さまざまな活動もされていますので、そういう中から「生きる」というテーマでお話していただけると思います。ご静聴のほどよろしくお願いします。

香川大学の関と申します。よろしくお願いします。

今日の「生きる」というテーマのライラセミナーの講師ということで、最初「エッ、専門が違う」という感じでしたが、よく考えてみると私たちのこの地球、環境というのは私たちの生きる器のようなものなので、そこが今どうなっているのか、どう考えたらいいのかということを知ってもらうのもこの「生きる」というテーマにちょうど合うかなと思って講師を引き受けたわけです。たぶん皆さん、環境問題に対して誤解されている面もありますので、その辺もふまえて三部構成で考えています。その代わり、その間に質問なり休憩も入れますので、2時間半ちょっと長丁場ですが、聞いてください。

この中で、ロハスということを知っている人は手を上げてみてください。Lifestyle of health & sustainability という今はやりのライフスタイルなのですが、いわゆる健康と地球環境を考えるというライフスタイルが今、アメリカでかなり盛んになってきています。20世紀はたぶん自分の健康を考えるという health だけだった。21世紀にはそこに sustainability いわゆる持続可能な地球環境を考えないと、私たちの地球はもたないかもしれないという時代になりつつある。そういう意味で新しいライフスタイルが出てきていますので、その辺も考えて今回のテーマにぴったりだと思っています。

小豆島土庄町の向かいに豊島という島があります。そこで20年ほど前から主に自動車のシュ

レッダーダストですが、50万トンという大変な量の産業廃棄物が不法投棄されてきました。やっと5年前に解決して、対岸の直島の三菱マテリアルへ廃棄物を持って行き、そこで溶融して金属を抽出してあとレンガにして再利用しようということが、解決方法として進んでいます。

10年後には完全に無くなって、更地になる状況です。このスライドは、5年前の風景です。日本では毎年500万台が廃車になっています。車の重量を1台につき1トンと考えるとシュレッダーダストはその10%ぐらい出てきますので、500万台だと50万トン相当になり、実は毎年、豊島に捨てられた量の廃棄物が国内にどんどん出てきています。そういう意味で第二、第三、第四の豊島が出てきても不思議ではないということです。

日本は今、そういう状況になっています。そういう意味で、廃棄物を処理するだけでは実は私たちの生活はなりたたないというか、捨てないでいいような社会にしなければ廃棄物問題は解決しないということです。そのあたりの考え方をお話しますのでよく聞いてください。

その前に「生きる」というテーマと環境問題がどのように関係しているかということですが、これはかなり以前アメリカの化学会社の連合体が出したレポートの内容の一部ですが、アメリカの農民一人が生産できる食料が当時76人分、現在106人分といわれています。当然食料は余ります。その余った食料を実は日本が大量に買っている。一方、それで自動車を輸出して、自動車とアメリカの食料をバーターして私たちは豊かな食生活を享受しているわけです。もしアメリカの農民が人力と畜力だけで6人分しか生産できないと、家族を養って税金を払うと何もない、いわゆる開発途上国の農業社会ですね。7、8割が農民であとが支配階級というパターンになってしまう。今、そういうパターンになっていないのはアメリカの農民がものすごい生産力を持っているからです。

そこでアメリカの農民はなぜそんなに生産できるのかというと、コンバインを使い、飛行機で農薬を撒く、化学肥料を大量に使うなどしているからです。しかし、それらの機械は石油がないと動かない。肥料、農薬は化学製品、実はアメリカの農民が大量生産できるベースになっているのは石油なのです。石油があるからこそできていることであって、逆に言うと私たちは石油を食べていると考えていいのです。アメリカから大量の食料を輸入しているのだけれど、そのベースは石油を大量に投入することによって高い生産性が発揮できているわけです。

もっと分かりやすいのは、世界の化学繊維は現在1,800万トンが生産されていますがその半分の900万トンを天然繊維で代替したらどのくらいの面積が必要かというと、羊毛で約400万平方キロ、ヨーロッパ大陸ぐらいで、ヨーロッパ全体を羊の養牧場にしないと私たちの着ている服が維持できないということです。綿花にすると16万平方キロ、日本のほぼ半分を綿花畑にしないと今の衣生活を維持できないのです。サッカー場ぐらいの敷地にある工場からものすごく高い生産性をもって化学繊維がつくられている。その物質的豊かさが私たちの豊かな生活を支えているわけです。

それらは何で動いているのかといえば実は石油であり、今の私たちの物質的な豊かさを支えているのは石油なのです。その石油を消費したらCO_2、二酸化炭素にかわります。その二酸化炭素は結果的に地球温暖化に影響してくる。ということは、物質的豊かさと石油のエネルギー問題と地球環境問題はまさにリンクしているということです。トライアングルになっているわけです。物質的豊かさを追求すればするほどCO_2はいっぱい出るし、エネルギー問題と関係してくるのです。アメリカは、クリントン大統領の時に締結した京都議定書からブッシュ大統領の時

に離脱しました。というのは、今の物質的豊かさを維持したい、石油をどんどん使いたい、そうすると議定書にしばられるとそういうことができなくなるからアメリカは離脱したわけです。そういう意味で物質的豊かさと環境問題はリンクしているのです。地球環境問題を考えるということは、実は今の豊かさを考えなければならないということです。そこを皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

どうして石油がベースになるか分かりやすくいうと、今ガソリン100ℓがあり、1ℓ当り10km走るとすると1.000km走ることが出来ます。高松から足摺岬往復するぐらいです。車でドライブしたとすると、それでどのくらいのものがとれるかというと、全部orでなくて&です。

ワイシャツ21着、家庭用のゴミ容器6個、セーター21着、ナイロンの婦人下着が200枚、尿素肥料が50袋できてくる。ということは、私たちがガソリン100ℓでこれだけのものを消費しているわけです。車に乗るということがいかに環境を破壊しているかということも分かってくるわけです。現在の車社会が環境問題にすごい負荷を与えてしまったということになります。

先ほど食料の問題が出ましたが、これも古いデータですが、1992年からほとんど変わっていません。今の日本の食料自給率は何%だと思いますか。カロリーベースで60%あると思う人手を上げてください。いない。そしたら50%、40%……、カロリーベースでいうと40%ちょっとですね。飼料穀物になると28%で、それだけ日本の食料は海外に依存しているわけです。実は1960年のデータを見ると、1,140万ヘクタールから得られる食料で私たち日本人は生きていた。そのうち国内の面積が810万ヘクタール、ということは70%以上80%近く自給率があったわけです。

ところが今1,700万ヘクタールから得られる食料で私たちは生活していますが、そのうち国内は520万ヘクタール。いかに海外の食料に依存しているかがこれで分かると思います。だから私たちが今豊かな生活をしていて、ほとんど食べ物に困らないが、実はそれを支えているのはアメリカの農業、それを支えているのは石油、それは実はエネルギー問題とものすごくリンクしているという話です。

それでは本題に入ります。これは26年間の株と賃金、物価の推移を表しています。黄色い部分がいわゆるバブル経済の時代です。バブルが崩壊して15年経ちますから、若い皆さんは知らないですよね。バブルの時代は日本全体が浮かれていた時代です。日経の平均株価が1970年を100とすれば、1,500、15倍まで上がったのです。だから株を持っていたら絶対儲かっていたという時代です。資産効果が出て、日本でシーマ現象という有名な話があった。トヨタの高級車のクラウンが月間販売台数でカローラを追い抜いたという伝説的な時代です。一方が400万円ぐらいの車で、一方が100万円ぐらい。400万円の車のほうが100万円の車の販売台数を追い抜いたというぐらい、日本全体がものすごく浮かれていた時代です。

それが1991年にバブルが崩壊して、その後はほとんど泣かず飛ばずで、だらだらと下がっていって、最近やっとここ2年ほどぽっと上がっていったという状況です。だからバブルの頂点と比べたらまだまだ下のほうです。これは何が言いたいかというと、それでもバブルが崩壊してからでも物価が311、3倍です。それに対して赤い△ですけど、賃金は817倍です。ということはこの26年間で私たち日本人の生活は、物価が3倍で、賃金は8倍、2.5倍ぐらい豊かになったわけです。ということはどういうことを表わしているかというと、たとえばクラウンという車があったとしたら、今400万円します。

当時の人にとってのクラウンというのは2.5倍の1,000万円、私たちが今1,000万円の車というと高級外車で、当時の人はそれぐらいのイメー

ジをクラウンに対して持っていたわけです。ところが今クラウンでもローンを組めば買えます。そういう意味で2.5倍豊かになったということが実は私たちの消費を大きく変えてきたのです。大きく変えていくことによって、環境問題とどういう関係があるのか、ということなのです。

これから順に3つのキーワードをあげていきます。このスライドはどういうことを表わしているかというと、耐久消費財の普及率です。1960年、電気洗濯機、冷蔵庫、ここにありませんけど白黒テレビ、この3つを三種の神器と言っていました。今のロータリアンの方たちはまさにその渦中にいた人たちで、僕も子供のころです。冬に冷蔵庫が来て氷を作って寒いのに氷を入れて飲んでいました。それぐらい新しいものが来た喜び、消費の喜びですね。これがあった時代、1960年から1970年までぐらいです。洗濯機が来て脱水機で遊んだ子供のころのことを覚えています。

ところが、普及率は100%が限界です。あと、1台、2台、3台と増えるぐらいですが、洗濯機、冷蔵庫が2台、3台とは要りませんので、普及率100%となると、売れないのです。あと買い替え需要、壊れたら仕方がないと買い換えるわけです。そうすると、消費の喜びというのはほとんどありません。成長期の洗濯機が売れると企業が儲かる、テレビ、掃除機それぞれも成長期に急激に売れ、企業は儲かります。しかし普及率が100%になると儲からない。売れない。そうすると企業はどういう戦略を取るでしょうか。企業が売り上げを伸ばす方法は2つあります。1つは成長商品を持つこと。台数が2倍、4倍、10倍になれば当然売り上げが伸びていく。成長商品が無くなれば次の企業の戦略は何かというと、今まで10万円で売っていたテレビを20万円、あるいは50万円で売る、そうすると売り上げはどんどん伸びていく。ただ同じテレビを価格だけ上げていっても売れない。どうするかというと、機能アップ、たとえば14インチのテレビを19インチ、29インチ、あるいは液晶テレビ、ハイビジョン、プラズマ、そういう形で値段を上げて企業は儲けているわけです。

ところが、たとえば、私たちは今まで19インチのテレビを見ていた。まだまだ見られるのだが企業が新しい製品をどんどん出してくるし、しかも液晶テレビはきれいだし、プラズマ、ハイビジョンも、きれいだな、ほしいなと買い換えます。そうすると、19インチのテレビはまだまだ見られるけれど、どんどん新しいのが出てくるから、そちらのほうを買ってしまう。そうするとまだ使えるテレビがゴミとして捨てられるわけです。企業の戦略でどんどん新しい製品を出すことによって、まだまだ使える家電製品がゴミとなってどんどん出てくるのです。最近ゴミが増えてきている一つの要因としてこれがある。まだまだ使えるのだけれど、新しい製品がどんどん出ることによってゴミになっていく。そういうことが実際に起こっています。まだまだ使えるのにゴミになっちゃった、これが一つのキーワードです。

二つ目。このスライドは大型スーパーの総販売額と飲食料品の販売額の推移を表わしています。販売額は2000年前後に頭打ちになってきます。これはスーパーの売り上げの前年比がずっとマイナスで続いているからで、スーパーという業態はほぼ限界に来ています。なぜ頭打ちになっているかというと、一つはユニクロのような専門店が台頭して来てスーパーの売り上げを食っていっているということですが、ただ飲食料品の販売は右肩上がりでどんどん伸びていっています。本来、スーパーは食品スーパーに特化すればまだまだ戦える業態になっています。それではスーパーのビジネスモデルはどのようなものか。ここで当ててみましょうか。(参加者に質問を投げかける)

スーパーでどんな買い方をしていますか。まず

店へ入ったらカゴを持って必要なものをカゴにぽんぽん入れて、レジで並んで支払いを済ます。だから、いわゆるスーパーはワンストップ商店、一箇所で食料全部まかなえるということが一つ。

それからレジで一括精算。だから店員がいないのです。自分で必要な商品をカゴに入れて運んで最後にレジへ行く。それによって大量仕入れ、大量販売、いわゆる薄利多売ができる。利益は薄いけれど、量で稼ぐビジネスモデルなのです。

そういうときのポイントは何かというと、いわゆるレジで一括精算ですから店員がいない。店員がいないと私たちがどういうようにして商品を選ぶのかというと、ぱっと見ておいしそうな包装を選んでカゴに入れたりします。スーパーのビジネスモデルの大きなポイントは、包装が物を言わない有能なセールスマンになっているということで、包装の良し悪しで売り上げが決まってくるということになってきたのです。ということで企業は包装、パッケージにものすごい力を入れるようになり、できるだけ売れそうなデザインを考えるわけです。

ところが包装材料というのは、家に持って帰って箱を開けるとすぐゴミ箱行きです。スーパーが出現する前は市場というのがあって、そこに八百屋、肉屋、乾物屋さんなどと業態が別れていて、肉屋さんに行って「この肉100グラムください」と言ったら竹の皮に入れてくれました。それでいくらと金を渡して家に持って帰って、その竹の皮は風呂の焚き口に入れて燃やせば何も残らなかった。鰹節も新聞紙に包んでくれて持って帰って風呂で焚けば何も無い。だからスーパーが出る前は、家庭で処理できるゴミだけしか出てこなかった。スーパーが出て包装に力を入れだし、しかも包装にプラスチックが入ってくるようになると家では処理できないゴミがどんどん増えてきた。

今、家庭から出るゴミの容積の60%は包装用のゴミです。これは家では処理できない。それが二つ目のキーワードです。結局、家庭では処理できないゴミがいっぱい出てきた。それは何かというと、スーパーマーケット、私たちのライフスタイルがアメリカ型の使い捨て社会に変わっていったということで、それでもって包装用のゴミがどんどん増えて結果的に家で処理できないので、市のゴミに出すことになり、どんどんゴミが出来てきたということです。

最後の三つ目。ワンウェイとリターナブルと書いています。まず下のリターナブルからお話しますと、今も少しありますけど、瓶ビールがそうですね。ビンビールは私たちが店で買って空になったものを店に持っていくとお金が返ってきます。そのビンを工場に持っていって洗浄されて新しいビールが入れられ、お店へ、そして消費者へとグルグル回りゴミが出てこない。

リターナブルなわけですね。昔は基本的に牛乳ビンもそうだし、いろんなものがそうだったわけです。ところがワンウェイに変わってきた。なぜかというと、リターナブルの場合、たとえば新しい飲料を開発し、製品化して売ろうとしたときに、ビンを大量に購入して洗浄するシステムがいる。また、店との交渉でリターナブルのシステムがいる。そういう意味で初期投資がものすごくかかるわけです。それでもし売れなかったらリスクでしょう。よっぽど売れるという自信がないと新規参入が起こらない。だからリターナブルの時代というのは新しい企業はなかなか参入してこなかった。

その典型的な例がカルピスです。カルピスという会社は乳酸菌飲料で有名ですが、当時ものすごい優良企業だった。内部留保もすごくて絶対つぶれないという超優良企業だった。ところが昭和50年代傾いてきて倒産寸前の状態に陥った。なぜかというと、時代がリターナブルからワンウェイに変わったことです。ワンウェイは何かというと配送システムにありますように、人

がいっぱいいそうなところに自動販売機を設置して車の配送システムを作って商品を置く、そして後は知らないよ、で自治体がゴミとして処理してくれるので、企業としてはものすごくリスクが低いわけです。もし売れなかったら自販機を別のところへ持っていってまた配送すればいい。返ってこないワンウェイですから、そういう意味で新規参入のハードルがものすごく低くなって、自販機を見ると、昔に比べ多くの企業が参入してきているのが分かります。

ということは、リターナブルのときはリユースでどんどん回っていたのに、ワンウェイになることによって使い捨ての缶飲料、あるいはペットボトルがどんどん出て結果的にゴミが急激に増えたわけです。だから三つ目は、時代がリターナブルからワンウェイに変わって使い捨て社会になってしまったということです。それは私たちが選択したのです。

ただここで気をつけてほしいのは、それじゃぁこれを元の時代に戻したらいいじゃないかという単純な発想はできないということです。今からスーパーをやめて昔の市場に戻すというのは絶対無理です。ワンウェイからリターナブルにというのも大変な労力が要ります。もう元には戻らないということを前提にして、どういう形が私たちの廃棄物を減らせる方策なのかが、今日の最初のメインテーマになっています。

結局、私たちは動脈産業をどんどん太くしてしまったわけです。モノを大量に作り、大量に消費して、大量に廃棄しています。この廃棄をもう一回資源に戻すような静脈産業を軽視して、これが先ほどの豊島の不法投棄につながっているわけです。ここをちゃんとしなければいけないということが、当然日本のこれからの大きな課題になってきます。それじゃあ、どうすればいいのというテーマになります。そのときのヒントがこのスライドです。日本のゴミの廃棄量というのは、右肩上がりで来たようなイメージですが、実は1973年から85年の間、ほとんど増えてないのです。ここにヒントがあります。なぜかというと、第一次石油危機が1973年です。第二次石油危機は1979年、何が起こったかというと、石油の値段がどんどん上がっていきました。1バーレル3ドルから12ドル、12ドルから34ドルと、上がっていったのです。上がることによって実はゴミというのは増えなかった。ところが1986年に石油の値段が逆に大暴落します。34ドルから10ドルぐらいに下がると、ゴミが一気に増えた。しかし、今、石油が高騰してもゴミは減らない。これは私たちのリサイクルシステムを完全に壊してしまったからです。ということは何かというと、ゴミの量と石油の値段は何かリンクしているなということです。これさえ分かればだいたいゴミの問題のプロフェッショナルになれますので、今日、これだけは覚えて帰ってください。

たとえば道に冷蔵庫が捨てられているとする、皆さん無視していきます。なぜ無視していくのか。あれは鉄の塊ですから、資源として有用ですのでもったいないことです。このスライドは実際に行ったデータを示しています。ある人が冷蔵庫を金鎚やバールなどの工具で分解した。冷蔵庫というものは鉄が73%で、あと銅があり、アルミがあり、プラスチックがある。こういう構成になっている。これをそれぞれ部材に分けていき、鉄をその市場で売ったら1,268円儲かり、プラスチック106円、アルミ530円、銅が786円、トータルで2,890円儲かった。冷蔵庫を拾ってきて2,890円儲かるなら皆さんアルバイトでやる……とは限らないですよね。なぜかというと、大人が8時間かかったわけです。8時間トンカチトンカチやってやっと2,890円儲かったということは、時給にならすと360円くらい。今の日本で時給360円のアルバイトの広告を出してもだれも寄ってこない。ということは道端の捨てられた冷蔵庫をだれも見向きもしないわけです。そこ

で冷蔵庫が捨てられて、だれかが拾ってなくなるにはどうすればいいのか。

方法は二つあります。一つは2,890円だから問題なので、もしこれが12,000円で売れたらどうでしょうか。8時間で12,000円儲かるとすれば時給1,500円。これ今の日本で十分ペイしますよね。逆に冷蔵庫を捨てる人がいなくなるでしょう。先ほどの石油の値段が上がることでゴミの量が減るというのはこれなんです。結局回収することによってメリットが出てくる。高く売れる。そうすると回収システムがぐるぐる回ってゴミがどんどん減ったのです。そうすると、資源価格が上がればゴミが減るというのはそのパターンですけど、そのとき冷蔵庫の値段も上がりますから、買い替えがそんなにできなくなり大事に使う。そうするとゴミもそんなに出ない社会になる。本当は環境を考えたときには資源価格はどんどん上がったらいいんです。しかし、逆に経済は回っていかないというか、不景気にならざるを得ない。経済はどんどん回っていく、しかも環境にいい、これはどうしたらいいのか。どこにポイントがあるのか。

2,890円の冷蔵庫は同じ、それで冷蔵庫が消えてなくなるにはどうしたらいいですか。8時間が2時間だったらどうでしょうか。時給でいえば1,500円ていどで、今の日本で十分ペイします。これは何かというと、8時間で分解できる冷蔵庫を作っているから回っていかないのであって、2時間で分解できる冷蔵庫をもし企業が作ったら何もしなくてもグルグル、リサイクルが回っていくのです。ゴミが捨てられている、環境のために何とかしなければならないと皆さん一生懸命拾ってきれいにする、何かいいことをしているような気がする。しかし、実は全然いいことはしていないのです。本当はそこが問題ではなくて、2時間で分解できる冷蔵庫を作りなさいという運動をすれば別に皆で一生懸命ゴミ掃除をしなくてもいい社会になっていきます。今ゴミ問題を考えていますけど、一つは資源価格が上がっていけば自然とリサイクルが回っていきます。石油価格がどんどん上がっていて皆さん心配していますけど環境にとってはものすごくいいのです。あとで話しますが、これから当然起こりうる現象なので決して値段が上がるのは悪くはない。それをどう吸収するかが問題で、もう一つは製品を作るところから考えないと環境問題は解決しないということです。決してゴミ拾いをしたからといって環境にいいことをしたわけではなくて、システムを考えなければならないということです。

実際に皆さん、それらを理解できたかどうか質問をします。家電リサイクル法というのがあります。日本で家電製品を勝手に捨ててはいけないことになっています。小売店に持っていくことになっています。そこで、Aというテレビは40,000円、Bというテレビは35,000円、性能的にはまったく一緒。どちらを買いますか。当然35,000円のテレビを買いますよね。ところが家電リサイクル法になると、捨てるときに小売店に持って行きます。そうするとAというテレビは簡単に分解できリサイクルしやすいので3,000円でいいです。Bというテレビは分解するのに大変な労力がかかるので10,000円くださいといわれる状況になるとすればどうですか。安いテレビ買ったのに、ということになります。

今のシステムは廃棄するときに持っていって廃棄費用を払わなければならない、ということは、不法投棄が増えるという問題はありますけど、基本的に欠陥なのです。なぜかというと、企業はできるだけ売れるテレビを作ろうとするので、リサイクルは考えないわけです。当然売れるテレビはリサイクルしにくいテレビになってくるわけですから、企業は2時間で分解できる冷蔵庫を作ろうという考えはしない。もしそのときにリサイクル費用を最初に入れてしまう、買うときにAテレビは43,000円、Bテレビは45,000

円だったら、皆さんAテレビを買いますよね。

これは何を意味しているかというと、家電リサイクル法の最大の欠陥は、あとでリサイクル料金を払うシステムが企業の2時間で分解できるテレビ、冷蔵庫を作るincentiveを生み出さないということにあります。だから私たちの社会のシステムを考えるときに、商品の価格にリサイクル費用を入れてしまうと、企業は必死に2時間で分解できる冷蔵庫を作ろうとするわけです。それが結果的に道路に冷蔵庫がなくなる最大のポイントとなります。

自動車リサイクル法では新車を買うとき、あるいは車検に出すときに払うことになりますが、あれが正解です。そうすると10年後とか車が廃車になったらトヨタ、あるいは日産とか各メーカーに車が戻ってきます。そのときに分解に8時間かかるようでは元がとれないので、企業は必死にリサイクルしやすい自動車を作ろうとするわけです。それが結果的にリサイクル社会に変わっていくことになるのです。

もう一つ、ペットボトルのリサイクルシステムなのですが、今、容器包装リサイクル法という法律があります。これは何かというと、私たちはペットボトルを分別排出しなさい、と法律に明記されています。だから勝手にぽんぽん捨てないで、ちゃんとゴミステーションに持って行きなさいというのが私たちの責務になっています。それを自治体は収集、圧縮してコンパクトにして再生処理工場に持って行きなさい、これが自治体の責務になっています。再生処理工場はそれをちゃんとリサイクルして再商品化しなさいというのが、容器包装リサイクル法です。何となくこれでうまくいきそうな気がしますでしょう。しかし、実に欠陥法となっています。どこに欠陥があるのか。今、容器包装リサイクル法の改定を議論しています。このシステムの一番お金がかかるところはどこかというと、分別収集なんです。自治体のところです。一説によると、このシステムの25円が分別収集の市町村の負担で2円が企業の負担と言われています。ということは、このシステムは税金で回っているということです。

税金で回っているということは一般廃棄物と一緒なんです。だから決してリサイクルシステムでも何でもない。いわゆる普通の生ゴミと同じように税金でぐるぐる回しているだけです。それではダメだということで、今、議論して市町村の部分を事業者に回そうということになり、市町村にいくらぐらいかかっているかを今回見直そうとしたら、市町村はデータを出さなかった。なぜ出さなかったかというと、あまりにもこが大きくて、税金の無駄使いだということをマスコミから叩かれることをいやがって出さなかったのだろうというのが朝日新聞の記事に出ていました。正解かも知れませんね。結局、システムが走ってここで働いている人が結構います。分別収集の市の職員とか、あるいは清掃関係で、この人たちが職を失うおそろしさということで一旦これが走り出すとなかなか戻らない。結果的にこれがどういうことになったかというと、ビックリなんですけど、1996年、未回収137,800トンと書いていますが、これは何かといいますと、ペットボトルの生産量が当時142,000トンです。回収量が4,200トンで、回収率は2.9%、あきらかに低い。これを何とか上げようということで、容器包装リサイクル法ができたわけです。できて、税金でグルグル回していったんだけれど、2002年、どういう結果になったかというと、生産量が実に410,000トンを越えたわけです。一方、回収量は必死で回収システムを作って188,000トンまで上がってきて、回収率も45.6%まできたわけです。工場もどんどん作って、ものすごい努力ですね。ところがよくみると、未回収が225,000トン、96年に未回収が137,000トン、容器包装リサイクル法を作ってこれでリサイクル、再生処理ができると思ったら未回収が

225,000トンと増えてしまった。どうしてなのか。実はここにポイントがあるのですが、ペットボトルは以前、1リットル以上のものしか作らないように業界で自己規制をしていた。ところが容器包装リサイクル法でリサイクルシステムができたから、自由に作ってくださいとなったら500cc、あるいは250,300ccの小さなペットボトルが、今、私たちの周りにどんどん出てきた。水筒代わりにもなるし、あれほど便利なものはないですね。どんどん使うので413,000トンまできてしまった。それに回収システムが追いつかないから、結果的に法律を作ることによって廃棄物がどんどん増えてしまったというわけです。

これが3部構成の1部の最終スライドです。外部不経済の内部化、これは専門用語になっていますけど、結局これまでの商品はどういうことかというと、赤丸が価格です。それで黄色が維持コストで、グリーンが社会コストになっています。実は、商品というのは社会コストまで含めた全体がコストなんです。ところが私たちは真ん中の赤の、価格で商品を選択しているわけです。グリーンのところは税金とかわれわれのボランティアで処理しているのです。

だから先ほど言ったように、私たちが道路とかあるいは谷間に捨てられた冷蔵庫を拾ってきて皆で処理して何かいいことしたなと思うのは、実は大きな間違いなんです。悪いことではないが、あれで満足してはいけない。グリーンのところをボランティアなり税金でやる限りは、決してリサイクル社会にならない。リサイクル社会にするためには、社会コストまで全部入れたものを価格にすればいいのです。だから当然価格は上がります。赤丸は大きくなりますが、社会コストと維持コストを含めた全体が小さくなれば、本当の意味のリサイクル社会なわけです。だから、自治体が主催する清掃活動に皆が参加して、きれいになってこれで環境にいいことしたというのは、このシステムを邪魔しているんです。自治体はどう思うかというと、これできれいになった、このままいったらいいじゃないかと思うわけ。また次の年になるとゴミがいっぱい捨てられてまた皆に動員かけてきれいにする、これでいいかというふうになる。そうではないのです。いわゆる社会コストを含めた全体を価格にするようなシステムに変えていく運動を私たちがすることが本来の意味の環境問題の解決になってくるという、かなり逆説的な話になります。決して清掃活動が悪いわけではないですから、どんどんやっていいのですが、それで終わって環境問題がこれで解決と思うと大きな間違いで、私たちの運動というのはこういう形で、回っていくようなシステムを作ることによりゴミが自然に減っていくことです。

一番誤解されている部分ですけど、本当のリサイクルはどのようなものなのかということですが、飛騨高山の20kmほど西にオークビレッジというしっかりした家具を作っている工房があります。そこの稲本正さんというリーダーが行なった講演がなかなかおもしろいので紹介しますと、樹齢100年のナラの木があり、それを切って家具を作る。それを自分の代だけでなく、子供の代、孫の代まで使う。100年たつと家具もぼろぼろになり維持でなくなる。そうなってマキとして暖炉などで燃やされる。樹齢100年のナラの木を切ったときにナラの木の種を植える。100年間家具を使うと100年後、種は樹齢100年のナラの木に成長しているわけです。それをまた切ってちゃんとした家具を作って100年間使う。そうすると一切CO_2は増えない。本当のリサイクルはそういう自然界のリサイクルです。あとで詳しく出てきますが、私たちは自然環境から資源を取り出してそれで生活して、それでもう一回自然環境に返していく。そうすると自然環境が再び資源に戻してくれる。それをまた私たちが使うというように自然サイクルを入れたような循環、これが本当の意味でのリサイクルなんで

す。決してゴミも出ないしCO_2も増えない。それでは今実際私たちが行っているリサイクルは何なのか。ペットボトルリサイクル、家電リサイクルは何なのというと、人工のリサイクルと書いていますけど、鉄なりアルミなり、石油製品からいろんな製品を作って人間社会で使っているわけ。それをもったいないとグルグル回しているのだけれどそこから大きな汚染が出てくる。それはどういうことかというと、廃品回収で新聞紙を持っていったらトイレットペーパーをくれる。新聞紙がある日突然トイレットペーパーに変わるのではなくて、新聞紙がどうなるかというと、川之江、伊予三島の製紙会社に持っていかれて、そこで強いアルカリで溶かされて、繊維をばらばらにして高熱でもう一回繊維を作り直してトイレットペーパーにします。ということは何かというと間に近代工業が入ってくるわけです。だから、原材料を技術でもって製品を作る、製品を作ってある程度使ったら廃棄物になる。それをもう一回リサイクルしてグルグル回すのが今のリサイクル社会なんです。これは何もしないで回るのではなくて、そこに大量の化石エネルギー、石油なり、石炭なりいろんなものを使っているわけです。当然、石油という燃料を使えばそこからCO_2が出てくる。これが地球温暖化につながっているわけです。

ということは何かというと、リサイクルを一回回すと石油が消費されてCO_2が出てきます。逆にいえば、リサイクルはどんどん回せば回すほどCO_2がいっぱい出てきます。それが今のリサイクル社会なのです。本当は、リサイクル社会は決して私たちの地球を救わない。リサイクルしなくていいような社会をつくるというのが、本当の意味でのリサイクル社会なんです。それはどんな社会なのといえば、先ほど言ったように、自然環境から樹齢100年のムクの木を切ってきてそれで家具を作り、100年大事に使う。これはついこの間、戦前の私たち日本がやっていたことです。親の代、おじいさんの代、使っていたいろんな家具がそれぞれの家に残されていてそれを大事に使っていたわけです。今どうかというと、皆骨董に流れています。皆さんこれから家庭を築きあげるときに、安物を買わないで、大事に使うのだったら少々高くても良い物を買ってそれを大事に一生使う。そのためにはシンプルな家具になるんですけど、そういうものを大事に使うことが実は本当の意味でのリサイクル社会であるということです。

そういう意味でリサイクルすればするほどエネルギーが使われます。そういうことで第二部はエネルギー問題に入っていきます。これも私たちが「生きる」ということを考えるときの地球環境問題の一つの大きなポイントになります。最初に言いましたように、結局物質的豊かさを支えているのは石油、石油を燃やせばCO_2に、いわゆる環境問題、今の物質的豊かさと環境問題とがリンクしているところに、今の環境問題を解決する大変な難しさがあるのです。地球環境問題を考えると結局、豊かさを制御する、いわゆる生き方を制限しないと今のままの行き方ではどんどん地球が破壊されますよということです。このスライドは現在の地中海周辺の風景と書いていますけど、「地球大紀行」というNHKの番組のものです。ほとんど木がないですよね。だけど人間が入る前はどんな風景だったのかというと、ナラの原生林が生い繁っていた大森林地帯だったということです。地中海沿岸部は人間が入る前は大森林地帯だったのですが、そこに人間が入って木を切って開墾して畑を耕し、羊、豚、鶏などを放し飼いし、そこでどんどん食料を生産すると、そこから表土が流されていって最後にはこういう木も何も育たない風景になっていった。文明はそこでおしまいになっていく。だから昔の地中海文明は、ローマ文明、ギリシア文明など多くの文明が滅んでいったわけです。それはなぜかというと、グリーンで書いている食

物の生産性に依存するシステムだったからで、そこのベースが崩れると、そこの都市国家はどんどんつぶれて消えていったわけです。しかし、今の私たち日本は消えていない。豊かな生活を50年、60年と続けていて、これからも続けられるのは何かというと、先ほど言ったように石油、石炭といった化石エネルギーを大量に使うことによって成り立っているからです。ただこの石油石炭は当然環境問題にリンクしていますから、これを解決する次のクエスチョンを考えないと、21世紀、まさに私たちが生きているこの器自体が崩壊しかねないという状況に今来ているという話です。

それでは第2部、聞いてください。現在、燃料別の世界のエネルギー事情はこういう感じになっています。世界では石油がだいたい40%から39%、日本では47%が石油です。あと石炭、天然ガスがこういう形になっています。これを見たら分かりますように、CO_2を出さないといわれているエネルギーはわずか13%です。ここで原油価格の推移と書いていますけど、かつて第一次石油危機、第二次石油危機というのがあり石油価格が高騰しましたが、それから以後第三次石油危機というのは聞いたことがありません。今、1バーレル60ドルから70ドルの間をいったりきたりしています。すごいですよね。第二次オイルショックと言っていたときには、34ドルです。ところが今60ドルを越えていて第三次オイルショックと言っていいほどすごい状況ですが、私たちはのほほんとしている。それでは、これから石油価格はどうなるのかという話から入っていきたいと思います。

ちょっと環境問題からずれますが、先ほど言ったように石油と環境問題はリンクしていますので、石油の将来を読み解こうと思います。オイルサイクルというのが、第一次オイルショックから第二次オイルショックの間で出てきた新しい考え方、概念です。まずどこからスタートしてもいいんですが、石油需給が逼迫してくる、逼迫というのは需要と供給の幅がどんどんなくなってタイトになってくるということです。生産量と消費量が一緒になれば、当然何かの問題があると供給が不足します。需給ギャップが起こります。それで石油の値段がどーんと上がります。第一次オイルショックの場合は、エジプト、いわゆるアラブがイスラエルに攻め込んで戦争が始まった第四次中東戦争がきっかけで、アラブ諸国が石油戦略を発動します。それはイスラエル寄りの国には石油を輸出しない、それから中立の国は毎月25%減らしますよという戦略だった。日本は中立国とみなされて、毎月25%減らしますよというもので、日本はビックリしました。日本は高度成長で浮かれている時代に石油がなくなるわけですから、まさにパニック状態になってトイレットペーパーがスーパーから消えてなくなったという、今の若い人には全然理解できないですけど大変な状況になりました。

これまで国内で回っていたお金が石油産出国に行ってしまい、消費国は石油デフレ、国内にお金がなくなってしまいます。それで不況になります。不況になるとどういうことが起こるかというと、とりあえず石油の値段が高いから無駄遣いをしない。無駄なドライブをしなくなります。それからできるだけ石油を使わないほうが儲かりますので、省石油がどんどん進んで石油の需要が減ってくる、そうすると供給のほうが多くなり、石油の値段を上げられない状況になり、石油の値段が停滞して景気が再び上昇に転じます。上昇すると石油の消費量が増えて、需給がタイトになり、再び何かのきっかけ、第二次オイルショックのときにはイランで革命が起こって600万バーレル相当の石油が市場から消えてしまった。それで第二次オイルショックが起こって34ドルまで上がったわけです。これをオイルサイクルと呼んでいます。どうして第三次オイルショックが出なかったのか。あるいはオイ

ルサイクルというものはもう無くなったのか。これがこれからの石油の値段を考える大きなポイントになります。それじゃどういうことが起こったのかというと、対世界シェアと原油生産量と書いています。これを見たら分かりますように、第一次石油危機と書いていますけど、1973年、OPEC(石油輸出国機構)のシェアが55%ぐらい、60%近くありました。世界の原油生産量がだいたい3,100万バーレルぐらいでした。ところが第二次オイルショック以後、石油を使わない、景気が悪い、それで石油の消費量がどんどん減ってきます。生産量が減るのは当然なんだけど、世界シェアは変わらないのが普通です。それがどんどん世界シェアも減ってくるのはなぜかというと、非OPECという、イギリスとかメキシコ、ロシアなどの国がどんどん生産し出してOPECのシェアをどんどん食ってしまったからで、最悪1985年に1,600万バーレルの生産量と半減してしまった。OPECは石油を売って成り立っている国ですから、売れないと国の経済が持たないということで、1985年に限界になり、そこでどういう戦略を取ったかというと、OPECは価格維持からシェア奪回へと大転換をします。そうすると、石油がジャブジャブにあふれているところに供給をやるということですから、先ほど言った大暴落が1986年に起こったわけです。そういう意味で石油というのは通常の商品と一緒なんです。だから需要と供給で値段が決まってくる。

それがそのとき初めて分かって、OPECは石油価格の維持はしない、市場に任せますということをここで行なったわけです。それじゃどうしてそういうことが起こりえたのかというと、これは大変重要な点ですけど、第一次オイルショックと第二次オイルショックの決定的な違いは何かというと、石炭、天然ガス、LNGというのは液化天然ガスという意味、原子力の割合がものすごく高かったということです。3,000万キロリットル相当の代替エネルギー寄与率になっています。これはどういうことかというと、たとえば、伊方に原子力発電所を作ったとすると、石油の値段が下がったら原子力発電をやめて石油、火力にしようとはならないのです。いったん作ったらあとは何で決まるかというと、その維持コストと石油の値段との関係で決まってきますから、石炭、天然ガス、原子力を使い出すと、これは無くならない。ということは半永久的にこの部分の石油の消費量は減ってくるわけです。ということで石油の消費量が減ることで需給ギャップ、供給過剰が起こって、1986年以降ほとんど石油の値段は最近まで変わらなかった。それはなぜかというと、私たちが一生懸命努力して原子力なり天然ガスなり石炭の代替エネルギーを導入した努力の結果です。

石油の価格は誰が決めているのかというと、国際石油資本、いわゆるメジャーが1973年まで決めていたのが、1973年から1986年まではOPECが価格を決めていた。ところが先ほど言ったように、OPECが価格を決めるのをやめてシェア奪回宣言をしてからは、原油先物市場、ニューヨークのWTIが世界の石油の指標になったというわけです。市場で決まるということは、供給と需要で決まってきますよということを頭の隅のほうに入れておいてください。だから今、石油の値段はだれが決めているのかというと、市場です。

それでは現在の原油の状況はどうなのかというと、1991年と現在の確認埋蔵量が1兆バーレルと、そんなに変わりません。今でもロシアとか世界中でどんどん発見されていっています。累積も7,000億バーレルを超えていて、だいたい未発見が4,000億バーレルを切ってきている。これがどんどん発見されることによって、石油があと何年もつかという話です。世界のいろんなシンクタンクがさまざまな予測をして総平均を出したのが2.1兆バーレルという究極埋蔵量です。

これも仮定ですけど、2.1兆バーレルが黒い線の総面積と考えてください。1984年をスタートとして、2.1兆バーレルになるように線を引いたらどうなるのか。ケース1は今の石油の消費量を増やさない、それでいくとだいたい2045年まではそのままいくけど、そこからは石油は減りますよ、もし1%だったら2025年、2%だったら2010年をピークにして減りますよということです。びっくりしますね。2010年ならあと4年、2025年なら、皆さんが社会でバリバリと活躍しているころです。そういうときにピークになりますよということです。これはあくまでシミュレーションで、このままになるわけではないのですが、今のままでいったらこうなりますよという結果です。だから1%増えていくと2025年にピークがきて、そこから減るような量しかありませんよというのがこれなんです。確認埋蔵量は中東が圧倒的に多いことも頭に入れておいてください。

将来世界的に中東依存度がどんどん上がってくるのは間違いないですけど、今、台風の目は中国です。このスライドでは中国のGDPおよびエネルギーの需要の推移とエネルギー構成をしめしていますけど、中国は今、石炭を65%使っています。ここが今どんどん減って石油に変わってきています。GDP、いわゆる経済成長も年率9%とか8%とかすごい成長を続けています。そのうち日本を間違いなく越えるでしょう。その中国のエネルギーは石炭66%、石油23%となっています。中国が皆、車にどんどん乗るようになり、発電を石炭から石油に変えたらどうなるのか、という心配の一つがこれです。ブルーが生産量で赤が消費量です。1993年までは中国は石油の輸出国だった。日本に輸出していたわけです。ところがそれを境に輸入国に転じて、生産量はほとんど横ばいですが、輸入量はどんどん拡大しています。かなりすごい右肩上がりです。現在、輸入依存度39%です。当然日本は99.9%、ほぼ100%が輸入です。中国の輸入依存度が上がっていく最大の理由は自動車です。僕は今まで中国へ5回行きましたが、最初に行ったのが15年ほど前です。北京空港に夜降り立って市内に行くときに、薄暗い夜道にほとんど車が走っていなくて、マイクロバスで行った記憶があります。高速道路もありません。それが3年前、5回目に行ったときの北京は、空港に降り立ったら高速道路ができていて車があふれかえっていました。15年前は自転車の洪水の中を縫うように行っていたのが、今や車の洪水の中をバンバン走っているという状況です。あれらの車はガソリン、軽油で動いています。そういう意味でこれから車社会になればなるほど石油の消費量は増え、中国は石油の輸入大国になります。そのポイントは自動車の生産台数です。乗用車が上がってきています。日本でいえば昭和48年ぐらいのいわゆるマイカー元年、中国も今、マイカー元年に来ています。これから一般市民が車を持つような時代に変わりつつあります。それではどういうことになるかというと、これは単なるシミュレーションですが、もしこのまま行ったらという前提です。日本の乗用車の普及率が50%になるのに25年かかった。つまり、マイカー元年5%から10%ぐらいから50%の人が車を持つまでに25年かかったわけです。中国の過去10年間の乗用車の伸び率は11.3%です。これを前提にして中国の乗用車の普及率50%までどのくらいかかるかというと、20年ぐらいです。中国の自動車の普及率が50%になったらという仮定の話だが、中国の2020年のガソリンの消費量は現在の8.5倍になります。これは原油換算にしますと、世界の生産量の実に3分の1です。今、日本は世界の石油の8%を消費しています。

最近原油の値段が急激に上がってきたのは、いわゆるBRICsという、ブラジル、インド、中国、ロシアという国々が著しい経済成長を遂げていて、車社会にどんどん変わり、その石油消費

量が増えたからです。オイルサイクルが再び巡ってきたわけです。オイルサイクルは第二次オイルショックでぽしゃってしまった気がしたけど、それは単に私たちが一生懸命、省エネルギー、代替エネルギーを導入して石油の消費量を減らしてきたからで、供給量は変わらないので、供給過剰がずっと続いてきたから石油の値段は上がらなかったんです。

ところが今、需要が急激に上がってきてタイトな状態になってきた。そこで市場で決まりますから何かの原因、たとえばハリケーンカトリーヌがテキサスを襲い、精油所が破壊された、それだけで原油が73ドルまでドーンと上がるわけです。そういう意味でこれからの原油価格というのはかなり乱高下してきます。何かあるとドーンと上がる、逆に石油の値段が下がるのはどういうことで下がるのかというと、中国が大混乱に陥って経済がストップすると、当然石油の値段はドーンと下がります。ただそうなると当然日本でも大変なパニックになります。そういう意味でこれから石油は上がりこそすれ下がらないと考えたほうが正しいかなと思います。何か大変な革命とかそういうものがあれば別ですけど、今のままで経済が続く限り、石油の値段は基本的には上がっていく。それは何かというと、ここにあるように、中国の人たちがこれから車にどんどん乗り出すということで、これから石油の争奪戦が始まってくると考えたほうがいい。

それじゃ、それを受けて私たちはどうしたらいいのか。これは日本の戦後の経済成長の推移を表しています。1973年までほとんど日本も今の中国と同じように10%成長していた。このときに大量のエネルギーを消費しています。エネルギー多消費型の経済成長です。いわゆる鉄鋼、石油化学です。それが第一次オイルショック以後安定成長に入り、バブル以降低成長、いわゆる失われた10年、ほとんど0成長のデフレにあえいで、やっとここ2年ほどで明るさが見えてきたという状況です。この経済成長を支えるのには当然エネルギーがいる。そのエネルギーは何でまかなってきたかというと1973年までは石油、とくに中東の安価な石油が私たちの豊かさを支えてきた。ところがオイルショックで石油に頼っているわけにはいかないということで、天然ガス、原子力などを導入してなんとかつじつまあわせをしてきたわけですが、なかなか日本の原油の輸入の中東依存度は減らない。原油価格の崩落以降再び大きく増えて今90%まで来ています。先ほど言いましたように今原油のあるところというと中東しかないんです。エネルギーを石油に頼る限り、中東依存は中国だけでなくどの国も一緒です。ホルムズ海峡を通るタンカーで日本の経済は支えられているわけです。もし、あそこでドンパチあると間違いなく私たちの経済は完全に崩壊します。だから、イラクがクウェートを侵攻したときに、アメリカはいち早く多国籍軍で行きましたよね。あれはサウジアラビアが戦場になると完全に世界経済が崩壊するからです。

そういう意味で私たちは中東の石油に完全に依存している今の豊かさを理解する必要があります。アメリカの農産物と中東の原油が今の私たちの豊かさの源泉になっています。どちらも崩壊しやすいものです。そういう状況の中で、なかなかおもしろいデータなんですが、バブルのときに私たちはどういう行動をとったのかということですが、バブルのときに車が売れに売れた。そのときに普通車、いわゆる2,000cc以上の車が一気に増えた。また、奥さんが買い物の足代わりに使う軽自動車も一気に売れた。しかし、バブル崩壊以後、小型車がドーンと減ってきます。実は燃費を考えたら最悪のパターンです。燃費の悪い3ナンバーが増えて燃費のいい小型車がドーンと減ってきた。これは日本でも石油の消費量が増えてきたということの表れなわけです。だから、日本は京都議定書をクリアしなければ

ならないのだが、日本は1990年レベルでマイナス6%にすると言っているのだが、1990年から現在までプラス9%ぐらいまで来ているわけです。

それはなぜかというと、皆どんどん燃費の悪い車を乗り出したからです。逆に言えば京都議定書をクリアするのは簡単なんです。要するに車をやめたらいいんです。だから各家庭に2台あった車を1台にする。燃費のいい車にする。そうするだけで一気に昔に戻っていくのですが、それはもうちょっと無理なので、一つの解決策はこれです。ハイブリッド車の経済性と書いていますけど、プリウスとカローラを比べてみます。燃費は、カタログから見て倍違うとして、プリウスは1リットル当たり20km、カローラ1リットル当たり10km。ガソリン代1リットル100円としたときに、10年で120,000km走るとして金利年3%としたときの、車両価格がプリウスは約200万円ちょっと、カローラはだいたい150万円ちょっと、50万円くらいの差がある。その50万円は10年間使った燃料費で逆転してくるわけです。最初値段が安いカローラを買ってもトータル、ライフサイクルアセスメントを考えるとプリウスのほうが結果的にお得ですよ、燃費のいい車を長く使えば実はお得なんですよ、しかもガソリンの消費が半分ですむ。そういう意味で地球環境にいいし、トヨタも儲かるし、私たちも満足する。燃費のいい車に変えていくことを考えていかないと、今の車中心の生活を変えるわけにいかない。その中で環境と折り合いをつけようと思うと、燃費のいい車を私たちが積極的に使うという形にしていかないとだめなんです。

もう一つ、電気の問題です。電気はなかなか理解が難しくて説明も難しい。こういう予測が立てられています。電力消費は右肩上がりですが、とくに民生用比率がどんどん上がってきています。それは何かというと、これからどんどん高齢化していくと火を使うというのがなかなか危険なので年寄り世帯にもオール電化がどんどん入ってきます。そうすると電気の消費量がどんどん増え、民生用の比率もこれから増えてきます。そのような中でどのように考えたらいいのかという問題です。

その前に少し話がそれますが、このスライドは国が考える日本の長期エネルギー需給見通しです。石油は中東依存度が90%ぐらいなので、これ以上増やすわけにはいかない。これから減らしたいということで、石油は使えない。石炭はCO_2がいっぱい出てきますのでこれも使えない。本当は増やしたいのだが使えない。天然ガスも増やしたいのだが、これは供給がうまくいかないというか、すぐには手当てできない。ガスですからパイプを引くか液化天然ガスにするか、ものすごい投資がいりますのですぐには間に合わない。ということで石油はだめ、石炭はだめ、天然ガスだめということになると、最終的には原子力しか残らない。それで今国は原子力をだいたい倍くらいにしようという目標を立てていますけど、ただでさえ原発の新規立地は進んでいない。その中で原子力に依存することもできない。そうすると何に頼ったらいいのかということになりますが、日本のエネルギー問題は完全に八方ふさがりになっています。

その中で唯一私たちができるのが、ここにある新エネルギーの導入になります。新エネルギーというのは太陽光発電、風力発電、ごみ発電等で、私たちが関係するのは太陽光発電になります。国は2010年までに11倍、482万キロワット、原発相当で5基分になりますが、それを目標にしています。ただ、まだこの10分の1の45万キロしか普及していません。あと5年くらいでここを一気に伸ばしていかないとならないのですが、そうすると太陽光の投資効果、実は僕は3年前から職業柄実験もかねて我が家に導入しました。屋根に太陽光3キロワットのパネルをつけて当時300万円ほどしたんですが、国の補助が100万円あり、200万円を清水の舞台から飛び降りたつ

もりで投資しました。

結果どうなっているかというと、四国電力から買う電気代と同じ電気代で四国電力に売っています。今、キロワットアワー25円で買っていますから25円で売れます。もし修理費がかかったとしても200万円回収するのに30年、1キロワットアワー35円にすると、20年ちょっと切ってきます。200万円を投資して30年で回収というのは、ちょっとしんどいかなという気がします。だからお金を考える人はばかばかしくてだれもやらないと思いますが、皆さんのように環境を考える、これからの地球を考える生き方を考える場合は、もし余裕があればやられたらいい。なぜかというと、環境にいいですね。CO_2を出さない。それから投資するのも日本の産業に投資するようなものですから、日本の太陽光発電の産業、シャープなり京セラなり、サンヨー電機なりが経済的にうるおってくるし、日本の産業の競争力がついてきます。元は取れないけど、環境にいいからといつも勧めています。なぜこれを勧めているかというと、実は今、四国電力からリターンは年間95,000円返ってきています。ということは200万円投資して95,000円ということは、利子にすると年利4.5%です。今、年利4.5%という預金はないです。銀行に200万円預けているより屋根に預金していると考えたら一石三鳥かな、ということです。今、3キロワットの太陽電池パネルが200万円から170万円まで下がってきています。もしこれが100万円になったらたぶん皆さんやるでしょう。10年ちょっとで投資が戻って、あとは何十年もリターンがあればこれほどいい投資対象はないでしょう。ただこのときにリスクはあります。1つ目は四国電力が25円で買ってくれるという前提で話していますので、四国電力が買えませんと言ったら、その時点で自分で消費するしかないということです。2つ目は南海沖地震がこれから想定されています。グラグラと来て家がつぶれてしまうとパーになる。そういう意味で投資ですからリスクはありますけど、それよりも環境にいいということで皆さんも余力があればぜひやってくださいと勧めています。

また、本筋に返りますが、それじゃどうしたらいいのか、一つの解決というか方向として、このスライドは日本のエネルギーの流れを表わしています。ポイントは下に書いているロスが現在29%あります。1次エネルギー(石油なり石炭等)を投入して、その71%しか使っていないということです。29%は地球を暖めるために無駄に捨てているんです。どうしてそういうことが起こるのかというと、実は私たちのエネルギー供給システムに問題があるわけです。今私たちが使っている電気、どこでつくっているかというと、伊方原発が半分。あとは橘湾の阿南石炭火力発電所とかで、でかいタービンを回して発電していますが、あのエネルギー効率は最大で36%なんです。36%しか電気に変えられない。あとの64%は地球を暖めているわけです。36%が電気になって送電線を伝って各家庭に来るまでにロスがあり、最終的には32%しかエネルギーを使っていないことになるんです。これをどうしたらいいのかといえば、ロスの64%の熱を使えばいいわけです。使うためには伊方原発のそばに家を建てなければならない。発電所を家のそばに持っていかなくてはならないんですね。そうすると発電効率は若干落ちますけど熱が51%、給湯なり暖房に使えますのでトータルのエネルギー効率は75%に上がってきます。そうすると、エネルギーロスが減り、ものすごく有効に使えます。

そうするとどういうことが起こるかというと、ブルーのところが燃料電池ですが、今、企業が一生懸命開発していて、新日本石油が市販品を出しました。たぶんこれから5年、10年して、皆さんが家庭を持って家を建てようかなというときに劇的に変わっていると思います。家庭用の燃料電池がどんどん普及してくる。燃料電池は

エネルギー源を気にしません。石油でもいいし、天然ガスだってかまわない。水素が出てくればそれでいいので、エネルギー産業のボーダーレス化が起こってきます。今は石油が家庭の暖房から産業用、地域冷暖房までカバーしています。

一方、都市ガスと電気はほぼ全領域をカバーしています。そこで、燃料電池が導入されれば石油も自分で電気を起こしますからほぼ冷房から全部できますよね。そうすると、石油とか電力の垣根がどんどんなくなってきて、いわゆる大競争時代に入ってくる。だから大阪ガスとか東京ガスは発電もやりますと会社の定款を変えてしまった。すると今度はそれに対抗して東京電力、関西電力はガスもやりますと定款を変えてしまって、これからものすごいバトルが始まる。これに石油産業が入ってきます。石油産業もガソリン売っているだけでは儲からないので、そこで家庭用のエネルギーを全部燃料電池でまかなっていけるようにしようとしているのが、新日本石油の戦略です。そうすると、各家庭で電気も熱も自分の家で供給するようになると大変大きな変化になります。それは何かというと、先ほど言ったように、伊方原発がいらないということです。各家庭で自分の横に発電所を設けてそこから出る熱も全部使う。これは地震にも強い。地震があってインフラがやられても電気と熱は自分で供給しますのでほとんど気にならない。あとは水だけです。ということで今、エネルギー産業のボーダーレス化が起こってきて、大競争時代に入っています。それで残念なのが、電気代が下がってきていて、太陽光発電の投資効率が若干伸びてしまったという悩ましい状況になっています。ということで第2部エネルギー問題、これから石油の値段は下がらない、それを前提に私たちは考えていきましょうということです。

今回のテーマ“生きる”ということと、環境問題のリンクについて、最後まとめてディスカッションの時間をとりたいと思います。第1、2部でお話したように、結局私たちは後追いなんですよね。問題になってからそれをどうするかといういわゆる対症療法でずっときたけど環境問題はそれでは解決しないんで、出口論、ゴミが出たら何とかしようというのではなくて、ゴミが出ないような社会をつくりましょう、それが入口論です。

それを考えるにはどうしたらいいのというと、私たちが環境にやさしい行動をしないと解決しない。私たちの行動にかかっているということで、私は今、ネットワーク・グリーンコンシュマーかがわの会長をしていまして、環境にやさしい買物行動、ライフスタイルを普及させていこうというのが、大きな目的になっています。ただここで気をつけなくてはならないのは、最初に言ったように、それは補助であって本来は法律によって規制するのが王道なんです。だから、この商品は買うときにリサイクル費用を上乗せしなさいという法律をつくれば、冷蔵庫なりテレビの不法投棄はなくなる。企業も一生懸命リサイクルしやすい商品を開発する。ところが、それをすると値段が上がってしまう。35,000円のテレビが45,000円になって消費が減ってしまうという産業界からのクレームがあってなかなかそこから突破できない。そこで、セカンドベストとして私たち消費者の環境意識を高めていってグリーンコンシューマーを増やしていこう、それが次の第3話のテーマになっています。これまで消費者問題というのは、いろんな問題があったときに消費者が企業を訴えるという、生産者と消費者が対立関係にありましたが、環境に関しては対立していたのでは解決しない。みんな一緒に協力してやらないと回っていかない。それは何かというと生産者や流通業者には環境にやさしい、負荷の少ない製品を開発してそれを売ってもらわないと私たちは選択できない。私たちはそれを優先的に選択することによって環境の負荷が少ない社会にしていこう、それをバ

ックアップするのが自治体であるということでグリーンコンシュマーかがわというのは消費者と生産者と流通業者、自治体の大きなネットワークになっています。これは新しいタイプの消費者運動になっていいます。

グリーンコンシュマーって何なの？　これはたぶん皆さん初めて聞くと思うんですけど、このスライドはグリーンコンシュマー10原則を示しています。1989年、イギリスで緑の買い物ガイドという本が出版されたことが契機となってイギリスで運動が始まり、それが一気に世界にひろがったんです。それはゴミの問題だけでなく、必要なものを必要な量だけ、使い捨てでなく長く使えるもの、包装がないものを優先しましょう。そのほかに地球環境に関しては、トータルで資源とエネルギー消費の少ないものにしましょう。あるいは化学物質による影響の少ないもの、いわゆる本物を使いましょう。自然と生物の多様性を損なわない、これはなかなか難しい。少し寄り道になりますけど、皆さん、植物性の洗剤が環境にいいと思っていますよね。確かににいいんです。琵琶湖汚染のときにも石鹸運動をやりましたが、植物油というとヤシ油です。ヤシ油は日本でとれなくて、熱帯地方でとれるものです。売れますからインドネシアとかマレーシアは熱帯雨林を伐採してそこにヤシの木を植えてプランテーションをやっているわけです。ということは日本の環境はきれいになるけど、熱帯雨林が破壊されてトータルでみた場合、本当に環境にいいのかという問題が起こってくるんです。だからそういう意味で環境問題というのは実に複雑で、局所的に見ているかぎりはダメで、トータルでみていかないといけない。廃棄された天ぷら油とかからつくられているのは問題ないんですが、ヤシ油からつくっているのは本当にいいのかという問題。これが自然と生物の多様性を損なわない、全体で考えましょうということです。社会システムとしては近くで生産、製造されたものを使いましょう。いわゆる地産地消ですよね。それから作る人に公平な分配。これは南北問題に関係があります。それからリサイクルされたもの、システムがあるもの、一番下がまったく新しいポイントですけど、環境問題に熱心なメーカーや店を私たちがどんどん盛り上げていきましょうというのが、この運動です。今までは企業対消費者という対立関係だったんですけど、そうじゃなくて私たちが企業を応援しましょうというのがグリーンコンシュマーの大きな違いです。

それはどういうことかと言うと、環境への負荷の少ない製品サービスを優先的に購入しましょう。そうすると負荷の少ない製品を作っている企業が儲かります。儲かるとその企業は成長していきますので社会がどんどん変わりますよ、ということになる。これは先ほど言ったような、外部不経済の内部化ということです。分かりやすくいうと、となりに化学工場が２つできた。両方ともくさい臭いを出すのでＡ工場に文句を言いにいった。Ａ工場の社長は人のいいロータリアンで、そんなに迷惑なら臭いを消す装置をつけましょうということで数億円の装置をつけた。Ｂ工場の会社は経済合理性で生きている会社でそんなの法律にないから知らないよと言った。同じ製品を同じ店で売っているとすると、当然環境処理装置をつけたＡ工場の製品は、Ｂ工場のものより値段が高くなる。みんなは値段の安いＢ工場の商品を買う。Ｂ工場はどんどん儲かり、Ａ工場は儲からないでつぶれる。これを外部不経済というわけ。それを私たちの力でＡ工場の商品を買えば、Ｂ工場はこんなに売れないのならちゃんとした処理装置をつけないといかんなということになり、みんながハッピーになっていく。しかし、これはなかなか難しい。値段が安いのと高いのがあって、環境にいいけど値段が高い。それを私たちが選択するかどうか、私たちがグリーンコンシュマーになるというのはそ

ういう意味なんです。本来ならそうじゃなくて、くさい臭いを出す企業は操業停止という法律をつくれば解決するわけですが、なかなか難しいのでグリーンコンシュマー運動でとりあえず当面しのぎましょうということで、本来はグリーンコンシュマー運動というのはいらないんです。なぜかというと、一番値段の安い商品を買えば結果的に環境に一番よかったという社会をつくれば、あえてグリーンコンシュマー運動なんかなくてもみんな経済合理性で動けば環境に負荷が少ないということになるんですけど、それはなかなか難しい問題になっています。

実際に私たち買い物袋持参運動をやりました。買い物袋をみんなに無料で配ってそれをグリーンコンシュマー運動の起爆剤にしようということで、モニターさんにいろいろアンケートを取ったりしてやりました。レジ袋減らそうキャンペーンです。これがなかなか広がらなくて本当に大変なんです。最初スタートしたときは、持参率、買い物袋を持っている人が3％ぐらいです。100人いたら3人しかいなかった。それで去年調査したら5.9%で、6％ぐらいまでに上がってきました。私たちの運動がちょっとずつ上がっているんですけど、ここを何とか増やしたいなということで、エコちゃんカードというのを作りました。買い物袋を持ってきたらハンコ1個押しますよ、それで抽選会を開いて当たった人には当時は、自転車を差し上げたりしています。これ32,000枚回収して1つのカードに20個分押していますので、レジ袋は640,000枚減ったということになります。それを原油換算しますと、ドラム缶32本分。これを大きいとみるか小さいとみるかは難しいけれど日本の全体からみるとほとんど無視できるものですが、こういう運動をすることによってドラム缶32本分を燃やさなくてすんだということはある意味一つの成果かなと思うわけです。

その中でいろいろ調査して今日のここのテーマ“生きる”と環境問題がつながってくるんですけど、買い物袋持参体験アンケートを年代別にみるとほとんどが女性です。30から34歳までが一番多くて、それぞれがどういう意識を持っているかということなんですけど、あなたは環境にやさしい買い物行動をしていますか？　という質問を11項目しました。そうすると、していると答える項目としていないという項目は、こういう結果になります。上を見ると、詰め替え商品を選ぶ、消費電力が少ない商品、過剰包装を断る、これらはほとんどの人が行動しているんですね。なぜかというと、すぐメリットが分かるんです。詰め替えだったらゴミが確実に減る。消費電力が少なかったら電気代が儲かります。過剰包装を断るのも当然ゴミが減ります。メリットが目に見える行動は皆やっているんです。ところが下のブルーのところ、ペットボトルを買わない、今やこれを買わないというのはかなりよいしょがいります。自分の水筒をもって毎日出かけるわけですから。それから、価格が高くても環境にやさしい、これも値段が高いからなかなか難しい。生鮮品はトレーを使わない、これもくさい臭いがついたりして難しいですね。こういうかなりよいしょがいる、負荷がかかるような行動はしていないんです。だから目に見える、利益がすぐ分かるような行動は皆やっているんですけど、目に見えない、負荷がかかるような行動は皆やっていない。そこでもう一つの横軸の質問があります。あなたはゴミの収集法についてどちらが適当だと思いますか？という質問を入れています。一つは現在の姿、税金を使って市町村が収集、二つ目は、リサイクル費用を商品の価格に上乗せする。それで利用者が収集する。これは日本ができなくてドイツがやっている形です。これが第1部にあった外部不経済の内部化です。最初にリサイクル費用を入れてしまえということで、当然値段が高くなります。しかし、意外なことに44.7％が賛成なんです。これはかなり大

きな驚きでした。それでは赤い税金派と商品価格上乗せ派で、どういう意識の違いがあるか。これを比べたのがこのグラフになります。なかなか面白いですけど、下にいくほどスターが多いですね。シングルスターというのは5％の危険率で有意差がある。5％というのは100回くじをやって5回はずれになる可能性がありますよということで、ダブルスターというのは100回やって1回ははずれる可能性があるかもしれないが99％は当たり。だから下にいくほど差が大きいということです。下にいくほど白丸の人がしているんです。これは何かというと、価格に上乗せしなさいと考えている人ほど実はよいしょがいる買い物行動をしているということです。これは結局将来を考えている人。環境問題は何かというと将来の世代の負担を考えるかどうかなんです。だから私たちが今やることによって今私たちが儲かるか儲からないかというと、皆当然儲からないことはやりませんよね。ところが環境問題というのはCO_2を出せば将来の世代に負荷がかかってくる。いろんな問題が出てくるが私たちには関係ない。そういうような問題を考えるときに、将来の世代のために行動するかどうかが環境意識に大きな変化、違いがあるということです。だから環境問題でいろんな行動をやっている人は自分の利益だけでなく、将来の子孫のことを考えて今の豊かさをちょっとセーブしましょうというライフスタイルを持つ人が環境にやさしい買い物行動をしています。これが今日の“生きる”というテーマにつながってくる。だから“生きる”というのは今私たちの問題だけではなくて遠い将来の子孫、子や孫たちの負担を考えて今をある程度セーブしていくライフスタイルをやらないと地球は持たないですよということです。

最終的にこれからの社会を考えるときに、今までは私たちは世界第二の経済大国で、フローの社会で生きてきた。大量に生産しそれを大量に消費することによって何か豊かな社会になったような気分になってきました。確かに多くの人が車に乗り、ものが溢れて電気製品もいっぱいある。これフローの社会です。当然大量生産すれば大量廃棄になります。これが生産中心の視点なんですけど、これからはそれではダメですよというのが今日のテーマです。そこに入っているのがグリーンコンシューマ運動で、これからは実は日本を豊かなストック社会に持っていかないといけない。これはどういうことかというと、自動車を売る時、リサイクル費用を上乗せしてくるとどういうことが起こるかというと、私たちはトヨタから車を買って10年乗り、ぽしゃったらディーラーにタダで引き取ってもらいます。ということは私たちはその車を所有しているのではなくて、その利便性に対してお金を払っているわけです。家電、テレビも全部そうです。それはまさにリース、レンタルとまったく一緒です。トヨタからリース代を払って車を乗り回して、ぽしゃったら車を返しますということです。そういう社会になるわけで、これがいわゆる生活大国、製造業がサービス業に変わるような社会が、本当のこれからの日本が目指すべき社会なわけです。そうすると企業はものをつくって売って儲けるんじゃなくて、私たちに利便を、いわゆるリースとかレンタルでもってサービスでいただくという社会に実は変わっていく。そういうように変わってくるとリサイクル、いわゆる環境に負荷の少ない社会になってくる。これがいわゆる生活大国なんです。経済規模、GDPが大きい小さいの問題で豊かな社会かどうかの発想ではなくて、環境への負荷の少ない指標が豊かな社会かどうかを決めてくるのではないかということです。

もっと大きな視点で見ると、私たちが生きているベースになるのは何なんだろうと考えたときに、S＝6000分のQと書いていますが、Sというのはエントロピーという、皆さんも全然気

にしなくていいです。僕が大学に行ってエントロピーを習って最初に頭がこんがらがってどうしよう分からなかった概念なんで、短時間で理解するのはなかなか難しい。太陽の表面温度は6,000度になっています。白く輝いています。それの光が植物にボーンと当たります。植物はそれで炭酸ガスと水で光合成をやり、炭水化物を作っています。それを動物が食べて地球の中でぐるぐる回って微生物で分解されてぐるぐる周り、最終的に地球の表面温度は300度K。それで宇宙へ熱を逃がしているわけです。ということは何かというと、この白丸と赤丸、丸の大きさは一緒なんです。エネルギーというのは増えもしない、減りもしないというのが熱力学の第一法則ですけど、これがたとえば向こうが大きかったら地球はどんどん熱くなっていきます。こっちが大きかったら地球はどんどん冷めていきます。実は太陽からくるエネルギー量と地球から宇宙へ逃げるエネルギー量は同じです。何が違うのかというと、6000分のQは300分のQより小さいですよね。だからエントロピーの小さな光が植物に当たってぐるぐる回ってエントロピーの大きな光、エネルギーが宇宙に出ている。この差額が実は私たちの豊かさ、生命を支えているわけです。ということは逆に言えば、私たちは太陽からくる6000分のQしか使えない。それじゃ石油、石炭は何なのというと、過去の太陽エネルギーの缶詰です。だから太陽の炭素循環と書いていますけど、地球ができたときは、CO2ばかりで、酸素がなかったんです。それで植物が太陽エネルギーと炭酸ガスと水で酸素を放り出して炭水化物を作ったわけです。これが動物、植物になり、地中に埋もれて生態系の外に出て、酸素が残ったわけです。今、私たちのやっていることは、化石エネルギーと称してそれを酸素と結合させてエネルギーを取っているわけです。ということは昔の太陽エネルギーの缶詰が実は化石エネルギーで、それを燃やすことによって太陽のエネルギーを取り出しているわけです。ところが化石エネルギーがあと何年もつかという問題がありますけど、化石エネルギーを全部燃やすと酸素が全部なくなるということです。ということは原始大気に戻る。炭酸ガスの昔の世界に戻るということで、石油、石炭、天然ガスは化石エネルギーですけどあと何年もつというのはほとんど意味がないんです。全部燃やしたらそれこそ酸素がなくなり原始大気に戻るわけですから、そういう意味で私たちは化石エネルギーを使うライフスタイルは本来ならsustainableじゃないんです。どっかでハードランディングがあるわけ。私たちができるのはやはり太陽エネルギーに頼るような社会を作っていかないといけない。それがポイントになるわけで、そのへんを鋭く突いたのが『成長の限界』という、1970年ぐらいに有名なローマクラブというところから出た報告書なんですが、3つの前提条件があった。1つは物理科学的、あるいは経済社会的に大きな変化がない。今のままで成長しますよということ。2つ目は人口と食料は幾何級数的に増えますよということ。幾何級数というのは複利計算です。だから雪だるま式に増えていきます。それでデータは1900年から1970年のものを使いますよということで、MITの大型コンピュータで計算した結果がこのスライドです。それは当時、日本では高度経済成長期でしたから、ものすごいショックを与えました。

経済はまだまだ成長すると思っていたのが、こういうようになります。それはなぜかというと、資源というのは急速に減っていきますよ、それとともに汚染がどんどん増えて結果的に人口が21世紀半ばには逆に減ってきますよ。それはなぜかというと人間が住めない地球になりますよというのが、1971年か72年のその予測なんです。これはかなりショッキングで、これは大変だということになったんですけど、1973年に第一次オイルショックが起き、第二次オイルショッ

クが起き、資源価格がドーンと上がって皆一生懸命省エネルギーをやりだして、経済社会的に変化がないという前提条件が崩れたから結果的に皆忘れてしまったんですけど、先ほど言ったようにまた、中国とかBRICsとかがどんどん成長して再び資源の消費量が増えていますので今地球環境問題に大きな負荷がかかっています。だから化石エネルギーに依存するような今のシステムを続けているかぎり、そのうち人間の住めない地球になりますよ、私たちの命を支えているこの器自体が危ういですよというかなりショッキングな報告書なんです。

最後になりますが、私たちができることをやりましょうというか、結局自分たちでやらないといけないことです。私たちが生活上何が必要かというと、エネルギーと水と食料ですよね。これ3つは自分たちでまかなうシステムを作らないと、それを中東とかアメリカに依存するかぎりは砂上の楼閣というか、いつくずれるかも知れない。そういう意味で、自分で使うエネルギーぐらいは自分で作りましょう。最低、太陽電池ぐらいは自分の家でつけましょうということです。燃料電池と書いていますけど、太陽エネルギーは昼しか発電しないので夜涼しくなれば燃料電池があれば電気と熱の両方使えますので熱効率が上がります。それから雨水を貯めて自分のところで使うシステムを考えましょう。出てくるゴミはちゃんと分別してそれぞれ資源としてリサイクルしましょう。そういうような将来のエコライフが私たちができるものかな、それがこの地球という命を支えている器をsustainable将来的なものにしていく私たちの行動かなということで、最後、命と環境のしめくくりにしたいと思います。

あと10分ぐらい質問タイムを取りたいと思います。

永田と申します。ソーラーシステムの話なんですけども、そのシステム本体はずいぶん大きなものだと思うんです。一体何でできているのかよくわからないですけど、ガラスとかプラスチック製品とか金属片もついているし、きっと薬品なんかも入っているだろうと思うんです。それがどんどん普及して耐用年数が切れたとき、また大きなゴミとなってこれまたゴミ処理というかリサイクルを考えなければならないんじゃないかなと思うんですけど、その辺はどうなんでしょうか。

(関)おっしゃる通りで、メーカー側の話ですと、あれはアルミサッシと同じ構造なんです。いわゆる強化ガラスで膜で、枠がアルミニウムです。アルミサッシが20年、30年で使えなくなるかというと、50年、100年は充分にもつと言います。ただ半導体ですから、太陽の効率は悪くなります。そこはゴミで捨てるんじゃなくて、メーカーがちゃんとリサイクルする。そういう意味で本来なら先ほど言ったようにレンタルが一番いいんです。メーカーがレンタルしてもし発電効力がなくなればメーカーに返す。メーカーは自分で作っていますから、当然ものが分かっていますので、それをもう一回溶融するなり、半導体の原料に戻してというシステムをたぶんこれから作っていく運動が出てくると思うんです。そういう大きなシェアになってくると。まだスタート段階でそこまで行っていないということです。

(永田)たとえば金銭面でいった場合、10年とか20年とかかかりましたですよね。そうすると今度はエネルギー面でいった場合、リサイクルするとして作るエネルギーとかそういうことで考えて、そのできるエネルギーに対してそれほどメリットがあるのかどうか、その辺が疑問だなと思うんです。

(関)10年ちょっと前は7年くらいかかると言われていましたが、どんどん規模が大きくなっ

て、規模の経済で今は1年切っていると思います。だから1年分は作ったエネルギーでちゃらになるんですけど、それ以後は完全にプラスになるという状況ですので、どんどん広げていってください。

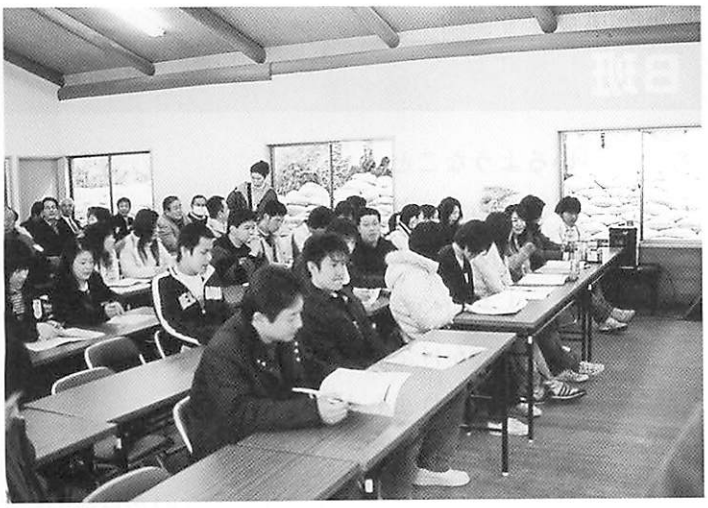
板倉由佳といいます。先生、ありがとうございました。レジ袋の話はすごく身近だったんですけど、うちの家族はレジ袋なんてと、自分の問題と考えていないところがあります。身近に迫っていないというか、自分さえよかったらいいっていう感じで、子どもや孫ぐらいまではみんな目が届くと思うんですけど、地球が破滅するとかになると身近な問題として考えられていないと思うんです。自分たちで地球を大事にしていかないとあかんなと思ったし、なくなったものを人間の力で復活させることもできないから本当に考えていかなければだめだなと思いました。それで太陽光発電の話もあったんですけど、自分の家だけでやろうとすると投資にお金がかかるし、地域でお金を出しあってその家につけて、その家で売ったお金をみんなで分けあうとか、レジ袋にしても皆いらないものがたくさん家にあると思うんです。それを店に持っていって、忘れた人はそれを使う。何を入れたか分からないので気持ち悪いかしも知れないですけど、一体感持ってみんながやることができたら、もうちょっと良くなるのかなと思いました。

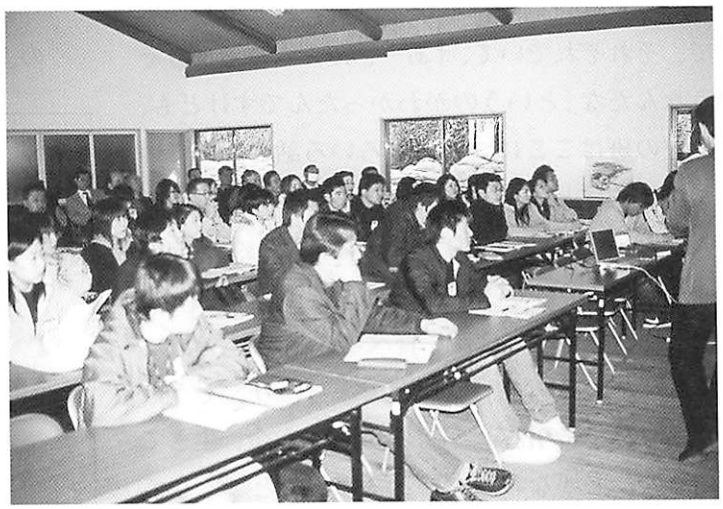
(関)ありがとうございます。なかなかいいアイデアです。太陽光自家発電のほうはすでにやられています。グループ組んで、1人で200万円は大変ですけど、10人いれば20万円でいいから投資して年利4.5%のリターンがありますので、それでやっているところが結構あります。レジ袋に関してはかなり楽観的なんです。何かというと閾値といって、ある点を超えると一気にドーッと落ちるという峠みたいなものです。たとえば今6%だから皆持っていかないんだけど、これが20%、30%になって10人に3人が持ちだすと、自分も持たないかんのかな、ちょっとうしろめたいなと思いだすと、一気にドーッと増えるんです。ですからそこまで持っていければ僕は一気に増えると思います。実際に杉並区が30%超えないとレジ袋税をやるぞといったら、30%超えたんです。僕はお母さんの判断というのは普通の人の判断で、それを環境のためにやらないかんと思うことになると、他人に強制するというエコファッショになり、それはまずいんです。社会のシステムとして考えていく必要があります。お母さんの判断は別に構わないんで、お母さんが3人、4人と持ちだすと、私も持たないかんなという気になるんじゃないかなと思います。

遠藤といいます。先生の話を聞いていて一番思ったところなんですけど、たとえばグリーンコンシューマの運動とか、トヨタの車という問題にしてもどちらかというと日本の中の話という気がします。実際これから環境問題で一番のキーポイントになってくるのは中国とかインドの台頭ということだと思ったんですけど、そういうものに対して日本は指導的な立場を取っていくべきだと思うんですが、そういう面で具体的な策が行われていることがあるのでしょうか。

(関)ニュースなんかを見るかぎりでは、日本の古い環境設備を中国に持っていくという話はどんどん進んでいるんですけど、僕は中国とインドに対して環境をやれやれと言うのはちょっとまずいというか、それじゃ日本が40年前どうだったのかというと、ほとんど垂れ流しで川はどぶ川で臭い。たまらないのでみんなでどうにかせないかんということで、昭和40年代、環境元年で環境基本法ができてやったわけ。だから中国も今は経済の豊かさを追求していますけど、地元に住んでいる人は大変な状況なんだからそのうち環境問題を何とかしろというのは中から

出てきます。だから、日本が環境問題をどんどん言うよりも、当然中国の中で出てきますので、あまり日本が中国に環境どうのこうのと言わないほうが僕はいいと思います。それは時間が解決するという考えです。僕は子どもの頃、尼崎に住んでいまして、黒い煙がもうもうと出ていて窓を閉めなければ洗濯物がすぐ真っ黒になるという時代でした。それがこういうのではいかんということで公害基本法ができたわけで、日本が言わなくても、間違いなく中国もすぐできますよ。逆に日本がやれやれと言うと、向こうは反発しますから。そこは僕は心配していないんです。





フォーラム

あなたは、生きるために何が大切だと思いますか

フォーラムリーダー　深　川　純　一
サブリーダー　　安　平　和　彦

(深川)

皆さん、こんばんは。今からフォーラムを始めます。テーマは既にお伝えしています。それから、発表の仕方は先ほど申し上げた通りであります。発表の順番が決まったそうですので、まず、順番に発表していただきます。

これはディスカッションの場でありますから事務的に仕事を進めたいと思います。パフォーマンスはしないでください。それでは先ず、B班から発表していただきたいと思います。よろしくお願いします。

バズセッション報告　　B班

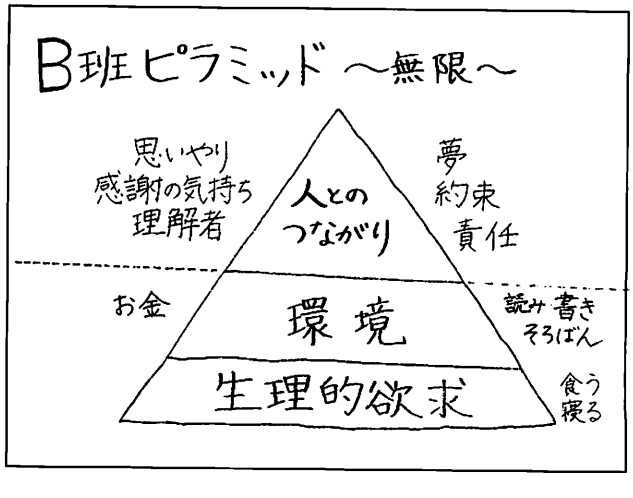
(B班・奥田直) B班の発表をいたします。よろしくお願いします。

僕らは2つのグループにわかれて考えたのですけれども、その結果このような三角形の形になりました。

この三角形っていうのがどういうふうになっているのかというのをおおざっぱに説明しますと、まず、やっぱり人として最もかなえたい部分、最も大切な部分というのは、人とのつながり、じゃないのかなというのが、それぞれの班で、それぞれでいて、「あ～、みんなやっぱりそうなんだな」というのがわかったんですけども、一方の班はここについていろいろ話し合っていたんですけども、もう一方の班についてはこの人とのつながりが成り立つためには、生理的の欲求、なにかっていうと実際、本当に人間としての大切な部分、ごはんを食べることであったり、眠たくて寝るっていうことであったり、そういう生理的欲求の部分、そして環境、お金、生きていくのに必要なお金を持っていること。そして読み書きそろばんを習っていてそれがわかっているようなこと。

この2つの部分がしっかりとできあがっていてはじめて、人とのつながり、という部分が求め、人とのつながりっていう夢の部分大切な部分を追っかけていけるのじゃないかなというふうな話に至りました。

そして、それぞれの班で、じゃあ人とのつながりっていうのが、どういうことなのか具体的に、どういうふうなところで人とのつながりが感じられるのか、ということをそれぞれの班からこのような意見がでました。それが、思いやりであ



るとか感謝の気持ちっていうこととか、理解者、でこちら側については夢、約束、責任っていうこの6つのことがでてきまして、それぞれについてひとつひとつ少し具体的な話をまじえながら説明していきたいと思います。

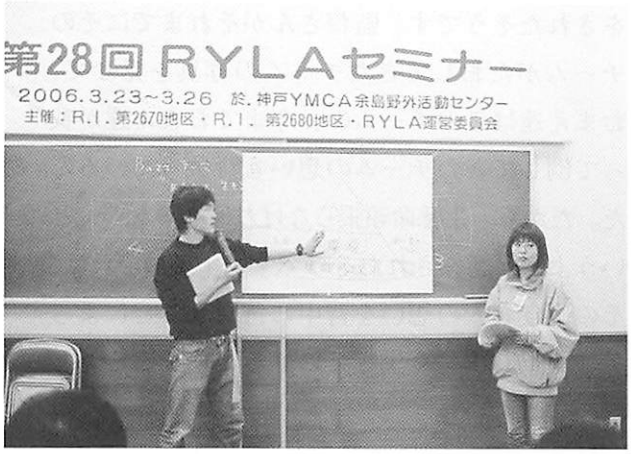
まず、私達は、こちらの思いやりと感謝の気持ち、理解者、理解者って言うのは自分の事を理解してくれるよき理解者を得るということについて話し合っていたんですけれども、この思いやりというのは笑顔であったり、明るさであったり、ユーモアであったり、人の心を明るくするようなそういう気持ちのことであって、あと挨拶、おはようございますなどの簡単な挨拶なども思いやりにはいります。

あと感謝の気持ちに関しては有り難うとか、ごめんなさいとか心をこめて言えるそういう気持ちと、あとお世話になった方や、今の自分が生きているのは、いろんな人の支えがあっているのだというそういう感謝の気持ちなどです。

で、次の理解者というのは思いやりと感謝の気持ちがあって相手とつながれるというか、思いやりと感謝の気持ちがあって得られるよき理解者。例えば、家族、家族はもとからつながっていますけど、友達とか、その出会った人の中で、思いやりと感謝の気持ちでつながれた人達のことです。

その良き理解者を得ると自分の存在を認めてもらい、その存在を認めてくれる人がいることで、自分が生きていることを認識でき、あと生き甲斐や夢をもっていたり、そういうこともありますので、思いやりと感謝の気持ちをもって人と接することはすごく大切だなと言うことを話し合いました。

(遠藤洋平) 今はこちら側の班で話し合った事を奥田さんに説明してもらったんですけど、僕らのグループでは、このような夢とか約束、責任っていうことがでてきまして、夢っていうのはまず、夢をもつことも人とのつながりの中から生



まれる、そしてその夢をかなえることも人とのつながりの中でかなえることができるというふうな意見がでて、「みんなそうだろう」というふうになったんですけれども、例えば、これは僕の話になるのですが、僕は建築を学んでいます。

建築でどのような夢を持っているかといいますと、やっぱり美しいすばらしい建築をつくりたいというふうに考えているのですけれども、そういう夢をもったこともやはり、たとえばですね、広島にあります厳島神社のようなものすごく自然と一体化した素晴らしい神社、ああいうのがある、それをみてああいうのを造ってみたいという想いをもったこと、そして、今度実際自分がそういうのを造ろうとおもって造る時にも、僕一人では何もできない。いろんな人の協力があっていろんな人で一つの物を造ろうよっていう想いがあってそういうのができるじゃないかというような話がいえると思います。

それで、2つめの約束っていうことに関してですけれども、これはですね、人と約束をする中で、人の思いっていうのが自分の中にはいってきて人の気持ちを背負うことでよりたくましく生きていけるということなんです。

これはあるラグビー部の話がでてきまして、あるラグビー部の監督さんが、すごいそのラグビー部はあまり強くなかったんですけども、すごく頑張って勝っていった。そして、ある大会の決勝戦までいった時に監督さんがこのような話

をされたそうです。監督さんがそれまでにそのチームがたおしてきたチームの写真を見せて、おまえ達はこのチームの、今までおまえ達が戦って倒してきたチームの想いも背負っているんだ。だから一生懸命頑張らなければならない、というような話をされたそうです。まさにこれは、そのような人の想いを背中に背負うことによって強くたくましく生きていけるということだと思いました。

最後、責任という部分なんですけれども、責任というのはですね、責任を果たすことで相手の信頼を勝ち取ることができるそれによって人とのつながりを感じて自分の居場所をもてるということなんですけども、なぜこんな話がでてきたかといいますと、社会人と学生の違いはなんだろうね、みたいな話になりまして、やはり社会人と学生の一番の大きな違いはお金を貰っていること、お金をもらっているということは責任を果たしていること、という話になりまして、その中から責任を果たすっていうことはとても大事な事であり社会での居場所を勝ち取ることにもなるというふうな事から、この責任という言葉がでてきました。

以上のような形でこの三角形が成り立っていて、これはB班ピラミッドと僕らは命名したわけですけれども、この後には無限と続いておりますが、どういう意味かといいますとB班ピラミッド無限というのは、あくまでもこれは三角形の形をしておりますが、ここの部分に関しては人とのつながりとありますが、あくまでもこの1，2，3、4，5，6、6つに限るわけではなくて、ここからそれぞれの人によっても違うでしょうし、それぞれの人によって同じ部分もあると思います。それぞれの人のとらえ方があると思うしそれぞれの国によってもちがうと思います。そういう想いをこめてあくまでも三角形の形、下の2つがしっかりあることで上がある。でもその上っていうのは無限の形があるっていう想いをこめてB班ピラミッド無限と名付けました。これが、B班が話し合って出た意見です有り難うございました。

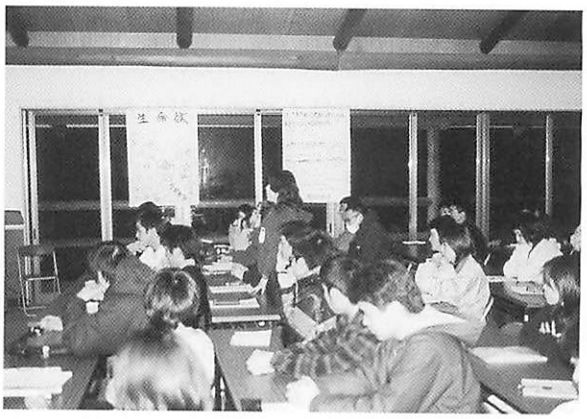
B班の遠藤洋平です。有り難うございました。

B班、奥田直です。有り難うございました。

(深川)有り難うございました。今、B班から意見を発表していただきました。この発表された意見の中で皆さん方の中で、この点はもうちょっと説明していただかないとよく判らないという点とか、或いは、これはどういう意味かという疑問点があれば先ずにおっしゃって下さい。これはディスカッションではありません。今、発表されたB班の意見を正しく皆さん方が理解するために判らないところを質問してください。議論は後でしますから。

特になければこれで終わります。有り難うございました。

それでは次はC班です。

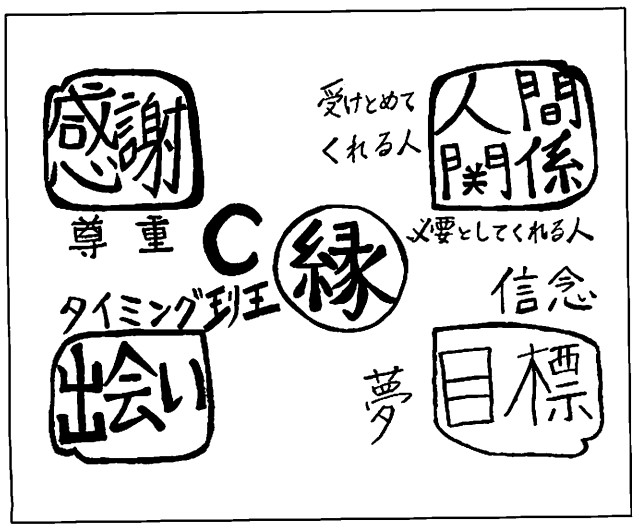


バズセッション報告　C班

（C班・板倉由香） C班の発表をさせていただきます。B班さんは生きるために必要な生理的欲求の部分についてお話されたのですが、C班では一応、必要なものがひととおりお金とかそろった上でそこから人間らしく生きていくために何が大切かという視点でみんなで考えました。

この真ん中にまるで書いたのですが、結論としては、まず、人との縁を大切にしていくことが一番大事でないかという結論に至りました。そして、その周りに四つ葉のクローバーの形で書いてみたのですが、これは感謝、人間関係、目標、出会い、とあってこれがすべて結局は全部つながってひとつのクローバーを形成するという、ひとつ全部つながっているという意味で一つの物にしてみました。そして、ひとつずつ説明させて頂きます。

まず、はじめに、人間関係というのは自分を必要としてくれる人がまず、大事だと思います。たとえば自分が今日生きていたということで誰かが喜んでくれたということがもしあればそれはすごく自分の今日一日を生きてよかったなあということにもなると思うし、すごくどうしよう自分なんかこんな世界に生まれていらんかったんと違うやろかと思った時に、やっぱり今日あなたに会えてよかったといってくれる人がいてくれたらその一日は自分で満足できるだろうし、今日生きていてよかったと思えるんじゃないかなと考えました。

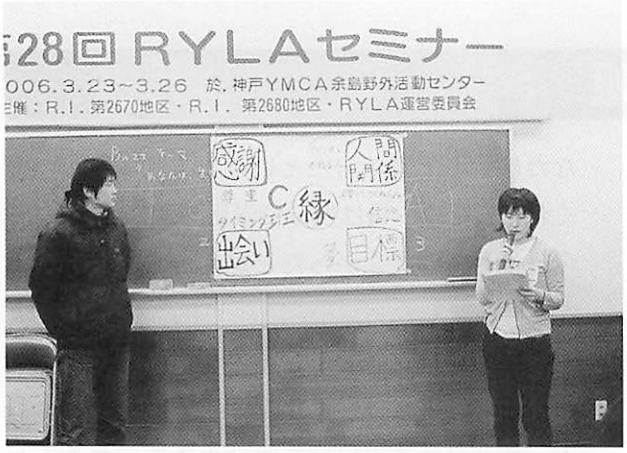


それから、次に受け止めてくれる人と書いたのですが、これは逆に今度は自分が必要とする人、ありのままの自分を受け止めてくれる人という意味で受け止めてくれる人と書きました。

この話は一人の女の子がストーカーに襲われた話をしてくれたんですけど、その時に、自分にはやっぱり家族がいるということをすごく実感したということで、そのとき、もしひとりだったらやっぱり怖くて外にもいけなかったと思うし、その時、自分が安心して生きるためには、やっぱり自分を受け止めて、自分が必要とする人、相談になんでものってくれる人が必要なんだなという話になりました。と言うことで、人間関係は、自分が必要とする人と、自分を必要とする人、この相互関係でお互いもちつもたれつでなりたっているんじゃないかという結論でやっぱり、人間関係は大事だということになりました。

私の好きな話があってマザーテレサの言葉があるのですが、この世界にはすごくたくさんの病気があって、痛い病気とかもあるし、苦しい病気ももちろんあるし、いろんな病気があるんですけど、マザーテレサがこの世で一番ひどい病気が何かっていうので、自分が誰からも必要とされてないと感じることが一番のひどい病気だと言う言葉をマザーテレサがいったのですが、そのことが私は心に残っているのですが、やっぱり、自分を誰もいてもいなくても同じと思ってしまったら、生きる気力もなくなるだろうし、今日生きていて自分は何の意味があるのだろうかと思うとだめなんじゃないかなと思いました。

次に斜め下の出会いというところを説明しま



す。その上にタイミングって書いてあるのですが、例えば今回この与島でライラをして、もし、自分だけが昨年にきていたら、今日一緒に発表した班の仲間とは出会えなかったねという話が出ました。その時本当にそうだなと思って、もし昨年きていたら、昨年は昨年でたくさんいい人が集まって関係はできただろうけど、今日のこの出会いは一回しかなかった。それで、この出会いの中でどんな人でも何か学ぶべきところがあるんですね。自分には。自分よりたとえその人が若い人であっても。自分よりあまり考えてないのではと思うようなところがあっても、やっぱり、よくよく話をしてみると、何か学ぶべきところがあるし、自分をどんな人でも成長させてくれる相手なんだなあということで、その一つ一つの出会いを一期一会というのですが、やはり大切にしていかないとだめだなあということで、それも縁につながるなということで一つ出会いを書きました。

次に感謝というので、大きく書いたのですが、感謝もすごく大事だと思いました。みんなも本当に感謝する気持ちは大事だといって、2つの班にわかれてこの両方の班が「感謝することだね」っていうふうにいったんですけど。感謝の横に尊重と書きました。これは自分が今ある状況に感謝することで相手を尊重する気持ちを持つことができるという意味でかきました。自分がどんな状況にあって、やっぱりそれぞれにつらいこともあるだろし、そんなこと何もかかえて無い人はどこにもいないと思います。どんな状況に自分がつらいつらいと思っていても、やっぱりだけど自分にはこれがあるというふうに、どんな状況になっても感謝することはできると思います。

自分が今ある状況に感謝することで、自分より下の人を探してあの人よりまし、とする必要はなくなると思います。自分が今これで充分満たされている、自分は今日これでよかったと思えたら、人と比べて「あの人、私よりできてないわ」、とそんなことで満足を得る必要はなくなると思います。ということで自分がいまある状況に感謝することから、相手を尊重することができる、お互いに尊重しあうことにつながる、ひとりひとりが人間の尊厳をもって尊重しあって生きることにつながるということで、ひとつ感謝を書きました。

そして最後に、目標と書いたのですが、ここまでは理想的な話をしてきたのですが、やはり日々生きるためにいろんなことがあって感謝もあるのですが、明日何をしようか、明日どんなことがあるだろうか、そういうことを目標として夢をもって今日一日生きて、この一週間を生きて、この1ヶ月を生きて、何を成そうという目標をもって生きることが大事なのではないかと思いました。

それで、その目標というのも縁につながるのですが、それは人との出会いから生まれてくる目標だったり、人間関係から生まれてくる目標だったり、あの人みたいになりたいとか、こういうことに感謝できるようになりたいとか、たくさん目標が生まれてくると思うんですね。それは他の人がいなかったら、目標も比べる対象がないわけですから、生まれないと思うんですけど。信念とか夢をもって明日何をしようとか、そんなことを具体的に夢をもって、生きることが大事なんじゃないかということで、4つ今まで

説明したのですが、これが全て縁につながるんじゃないかなということで、C班の意見でした。板倉由香でした。有り難うございました。

（深川）有り難うございました。

何かご質問とか、わかりにくいところとか、もう少し説明してほしいところがあったら、おっしゃって下さい。

ほかに何かありますか。特になければこれで終わります。有り難うございました。それでは次はA班です。

バズセッション報告　A班

（A班・松本光代他1名） A班の発表をさせていただきます。松本光代と申します。？？？？といいます。お願いします。

1時間の思索の時間が終わってみんなで集まった時に、1番初めにあなたは生きるために何が大切だと思いますかという問いに、単純に順番にみんなが答えたことを発表していきたいと思います。

生きようとすること。命がないと生きることがスタートできないので、命があることがすべての始まりだ。みんなで共存、共演の社会を造りたい。楽しみながら生きたい。人との生活を送るために、相手の立場で物事を考える心になりたい。周りの人を無条件に幸せにできる笑顔。楽しいや悲しいを感じることで生きている実感がわく。

目標をもって前向きに頑張っていきたい。お金は生活をするために必要だから。時間は充実した時間を送りたい。信頼、支えは、信頼できる家族や友人と支えあいたい。夢中は何かに夢中になることで、それまでの苦難を据えることも大切。選択が心に重荷にならない選択がしたい、というのが、みんなの意見です。みんなの生きるためには何が必要かという意見を聞いた時に、すべての意見に欲望というか欲求というか、欲という共通点が感じられました。命は生をうけて命が存在して、命があることによって、こういう考えとか、欲というものを含んだたくさんの大切なものが生まれるとおもって、文字を並べた時に、生命欲という言葉が生まれました。

単純に並べて、命、生まれる命、欲って書いたのですが、それを、並べて読んだ時、生命欲という熟語みたいに読めて、その発見が私達には感動で、それを中心に考えてみたのですが、その生命欲というのから、人々はみんな欲求の箱というのをひとりずつもっているのではないかと思って、書いてあるのが欲求の箱なのですけれども、例えば、愛する、愛する、愛したい、愛されたい、相手を大切にしたい、大切にされたい、そういう感情の欲求、あとは、このカバンが欲しいとか、服が欲しいとか、そういう物質的な欲求もあって、あとは希望だとか夢中になるものが欲しいとか、対象物やら目標のある欲求というも

のがみんなにあるのだなということがわかりました。愛するとか愛されたいとか、この欲求の箱の中で、私達が考えたのは、この中にある愛だとか思いやりだとかそういうものは、満たされたら紫になるのですが、自分が愛されている、愛しているということが感じられたら、紫になるのですが、次の瞬間にこれは白になります。それは永遠にずっとこれを繰り返すわけで、満たされ続けることもなくて、その瞬間思ってもやはりもう一度確認したいこともあるから、ずっとこの箱の中に、そういう一応ピンク色でやっているのが、感情なのですが、そういうものはずっとこの箱の中にはいっていて、夢中になるとか目標があるというのは、物質的な物もちょっとは含んでいるのではないかということで、両方の色で囲んでいて、あとお金だとか、あと服とか、住むところとか時間もちょっと微妙なところなんですが、そういうものは、はいってきた時に、満たされてお金が、例えば、千円欲しい、千円手にはいりました、っていったら、もうここで紫になった時点でこの箱からでていくんじゃないかと考えました。ここには、今書いてあるのですが、次、何もなくなってしまうのですね。そしたら、次の欲求がまたはいってきて、ここに存在して、白色のままでいる、これがまた次は例えば、違う欲求だったら、紫にしたい、紫にしたいというふうに思い続けて、人間としての欲がありつづけるのではないかと考えました。夢やら目標の例なのですが、例えば、野球少年が試合に勝ちたいから、そのために努力して、練習する。で、試合に臨んで試合に勝てました。そしたら、とりあえずの目標は達成できたので、ここからでていきます。でも、次に、勝てて喜びをしったら、その大会で優勝したいという次の目標ができて、また、努力をします。そこで優勝しました。また、ここからでていきます。するともっと大きい大会、全国大会で優勝したいという目標がはいってきて、優勝できました。でていきます。ついにはプロ野球選手になりたいとか、大リーガーになりたいとかそういう夢がどんどん膨らんでいって、このように欲が満たされると、次のさらにステップアップした欲が人にはわいてきて、また、それをかなえたいっていうふうな繰り返し、この繰り返しをずっとこの中で命を中心に、かなえたい、かなえたい、って思っていること、それが、人々が生きていることではないかなという結論に達しました。以上です。有り難うございました。

(深川) 今、説明していただきましたが、何がご質問、ご意見等ございましたら、おっしゃって下さい。

(発表者) 命というのはこの中にいれてあるのですが、これがないと何もできないので、みんなと違って、四角く中心にあるものとして、書きました。

(質問) 共存、共栄の意味は？どういう意味ですか？

(中村) A班の中村です。共存共栄は、共存共栄をみんなでめざしていこうよ、という心持ちのものなので、気持ちということで一応、赤で囲んでいます。共存共栄自体も？？？？？？？？

強い者も弱い者も共に存在しあって栄えましょうというふうな意味合いです。目指す気持ちです。

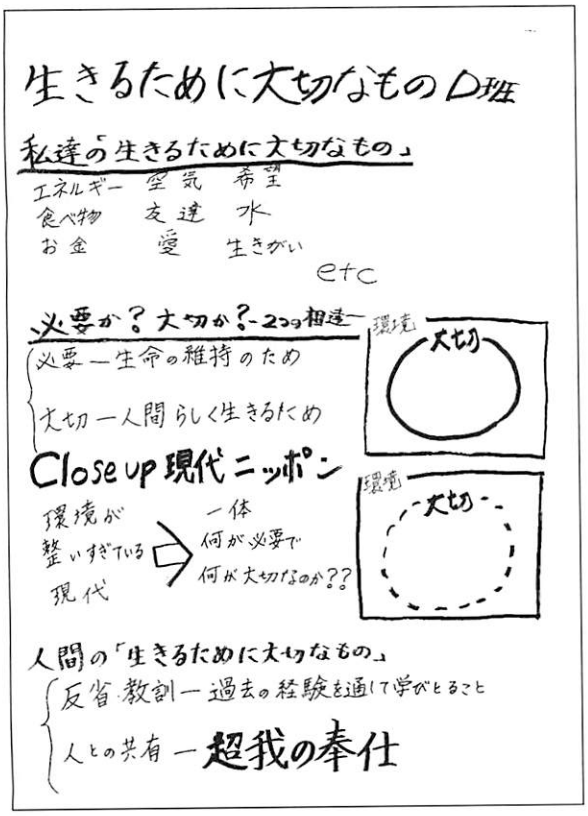
（深川）よろしいですか。他に何かありますか。とくに無ければこれで終わります。有り難うございました。

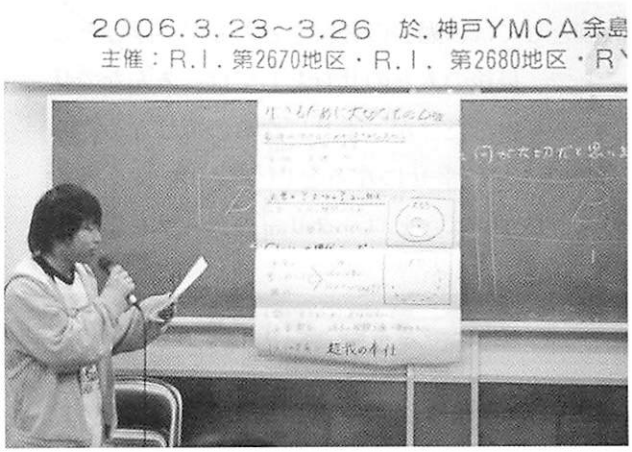
次はD班お願いします。

バズセッション報告　D班

（D班・松田伸吾・広瀬まき）それではいまからD班の発表をさせていただきたいと思います。松田伸吾です。広瀬まきです。よろしくお願いします。

まず、私たちD班が考えたこと、生きるために大切なものをテーマにしまして、まず、私たちが思いつく生きるために大切なものをひとつひとつあげてみました。ひとつはエネルギー、空気、希望、食べ物、友達、水、」お金、愛、生き甲斐、など他、いろいろでました。次にそのいろいろとあげたこれらのものを話し合ううちに、その生命の維持のために動物も同じように必要なものと、人間が人間らしく生きるために大切なものにそれらが分かれることにきづきました。まず、この図をご覧下さい。たとえば、エネルギーは、生命の維持に必要なものです。空気や水や食べ物もその生きるために人も動物も同じように必要なものです。一方で、希望、友達、愛、お金、生き甲斐は、その人がよりよく生きるために大切なものになってきます。





このように一般的な考え方をお話しましたが、現代は少しこれとは違っていると私たちは思い、次にこういうのをつくりました。現代は、食べ物やあらゆる物が人々の周りにあまりにもたくさん十分すぎるほどにあります。こんなにも恵まれた環境の中にあっては現代の人々は、一体何が大切で、何が必要なのかわからなくなってしまっています。私達はここに現代という時代の秘める問題点があるのではないかと考えました。

図の説明をします。今必要なものがこのどこにはいるのかわからないので、大切もてんてんで囲って、環境というのは生まれた環境とか、この現代では、食べ物があふれている環境とか、そう子どもだったら、おもちゃがいっぱい、服がいっぱい、そういう環境、の意味をあらわしていま

す。自然の環境という意味では無いです。今は、環境が整いすぎているから、何が必要で何が大切かが、あやふやになってわからないということです。

このように問題点を考えてきましたが、この中にあって変わらず、重要なことがあります。最後、人間生きるため大切なものを考えたら、反省教訓としては、過去の経験をとおして、学びとることで、最後の人との共有としては、みんなで話し合って自分だけが、幸せになるのではなく、みんなで、共に幸せになるということを長く書くのも、私が、ぱっとロータリーのテーマを思い出して、超我の奉仕やといって、それにしようよって、書いたわけで、そのロータリークラブ創立の最初は、ひとつの職業の人しかロータリークラブにははいれなかった。ひとりだけがロータリークラブにはいれてたのが、それを今では同じ職業の人でもたくさん入れるようになった経緯に、このひとつの職業だけで栄えて、そんな自分らだけではなくて、みんなでということが話を聞いてあったので、そこから、ロータリークラブはみんなで共に栄えようというのを話聞いたので、超我の奉仕、思い浮かびました。以上です。

フォーラムディスカッション

(深川) 有り難うございました。今のご意見に、何かご質問、ご意見がございましたらおっしゃって下さい。もし、なければこれで終わります。有り難うございました。

今、各班から意見を発表して頂きました。皆さん、この意見を聞いて、なるほどと思われた人もあるでしょうし、自分は違う意見をもっているという考え方の人もあろうかと思います。そのことはそれで結構でありまして、昨日も申し上げましたように、この場は、皆さん方の意見を多数決で決議をする場ではございません。皆さん方が色々な意見を出して、お互いにその意見に学び合う場であります。これをフォーラムと言います。

そこで、これから、個別的な問題を私の方から提起しますから、それについて皆さん方の意見を伺いたいと思います。そこで、最初に、発言のマナーというか、発言のルールというものを最初に申し上げておきたいと思います。

ロータリーは、国際会議などで決議をするためにこのようなディスカッションをいたします。大体、500人以上の人が一堂に会して、一つの問題提起に対して、それぞれ自分の意見を順番に発表していくわけです。その時に、一人の人が長々と喋りますと、公平な議論が出来ません。そこで、ロータリーの会議にはタイムキーパーというのがおりまして、発言者が、まず最初に「私は日本語で喋ります。I' ll speaking in Japanease.」と言いますと、皆が通訳を聞くためにヘッドフォンをつけます。この発言者が喋りだした途端に、会議場の正面にある青いランプが点きます。そして、発言者が喋り始めるのでありますが、2分30秒経ちますと、その青いランプが黄色に変わります。その後は30秒しか発言の時間はないのです。したがって、30秒経って、3分経過しますと、赤いランプが点いて、そこで発言は止めなければなりません。発言の途中であっても止めなければなりません。このような形で発表していきます。

そして、例えば、一つの案件について、発言者が20人、30人とマイクロフォンの前に並んで順番に発言していくわけです。意見の発表が済むと、最後に採決しますが、ここはフォーラムであって決議をするところではないので採決はいたしません。しかし、このような発言の順序を決めておかないと、例えば、カラオケでマイクをもっ

た人がいつまででも歌っているのと同じように、一人の発言者がいつまでも喋ると困ります。そこで、時間制限のルールを決めているのであります。

今、ロータリーの国際会議での発言時間は3分と言いましたが、皆さんは未だ慣れておられないので、3分を目途にして、5分位になっても結構ですから、あまり長々と喋らないで、3分なり5分以内で自分の意見をまとめるという躾をもっていただきたいと思います。

そのためには一体どのようにすればよいか、と言いますと、先ず最初に結論を言ってください。自分はこの問題についてはこのように思います、と結論を出してください。例えば、あなたは生きるために何が大切だと思いますか、という問題提起に対して、「私はこれが大切だと思います」と先ず最初に結論を出してください。

そして、次に、何故そのような結論になったかという理由を重要なものから順番に1，2，3，4と発言します。このような方法を採れば、最初に結論が出ていますから、時間関係で理由を全部発言できなくても、この人は何を言いたいのか、ということが最初の結論と1，2，の理由だけでも判るわけです。

ところが、一般に日本人の会議では、最初に結論を言わないで、色々な事情から喋り出します。そうすると聞いている聴衆は、最初に結論が出ていませんから、この人は提起された問題に賛成なのか、反対なのか判らない。

賛成かなとおもって聞いていると、反対のようでもあり、反対かなと思っていると、賛成のようでもある。そして、結局、最後に結論を出すのであります。

このような方法をとりますと、外国の国際会議では、最初に結論が出ていませんから、聴衆は発言者の意見などはロクに聞かずに、もう次の案件に関心が移っています。したがって、皆さん、会議やフォーラムで発言するときは、先ず、一番最初に結論を言う、という躾けをもって下さい。

このことは、裁判所の判決文を見るとよく判ります。先ず、最初に判決主文(結論の部分)が出てきます。「被告人を懲役何年に処す」という主文(結論)が出てきます。これが問題提起に対する結論です。そして、その次に、判決理由として、主文（結論）に至った理由を、1，2，3，4…と順序立てて述べています。

このように、会議やフォーラムで発言するときは、先ず、結論を出しておけば、時間がなくて理由が例え1，2，しか喋ることが出来なくても、兎に角、結論と重要な理由だけは発言していますから、発言者の意図は聴衆に通じるのであります。このようにして議論を進めるのが能率的であろうと思いますし、聴いている人にもアピールしやすいだろうと思います。このことを一つ心に留めておいていただきたいと思います。

ロータリーでは、会議での発言の方法についてロバート式議事規則“Robert’s rule of order”というものがありまして、このルール（議事規則）に従ってディスカッションをしているのであります。

このＲＹＬＡには、そのような議事規則はありませんが、フォーラムをするときの一つのマナーとして、問いかけられた問題に対して、先ず、結論を言って、それから、その結論に至った理由を、重要な理由から順次1，2，3…と順番に述べるということを心がけていただければと思います。

では、どこからいきますか。先ず、「あなたは生きるために何が大切だと思いますか」というテーマについて、この中で、皆さんは一番大切なものは何だと思いますか。この問題から入りたいと思います。

今、皆さんから沢山の意見が出てきました。感謝とか人間関係とか、大切なものについて色々な意見が出ましたが、この中で、自分として一番

大切なものは何と思いますか。いかがですか。なんでも意見をだしてください。

板倉さんいかがですか。

(板倉) 板倉由香です。私は、私個人が発表決める時に、一番はじめに言ったことは愛情が大事なんじゃないかなといいました。その理由は、愛情というのは何に対してもそうなんですけど、自己愛も大事ですし、他人を愛する事ももちろん大事だと思うんですけど、私自身が他人を愛そうとした時に、愛には限界があると思います。どんなに家族であっても友達であって、すごく大事な人であっても、自分をまず大事にしなければ相手に施すこともできないし、自分のその限界があるというのをわきまえた上でするのでなければ、相手にとって重荷になる。例えば、障害者の方にして自分がこれだけのことをしてあげてるのに、と思っても、その方にとっては迷惑である。自分が障害を持っている方を完全にわかることはできない、完全に愛することはできない、ということをわきまえた上で愛さないとだめだということを思います。ということで自己愛が大事だと思います。自分の事をまず大事にして、自分はここまでが限界なんだけれども、その自分を受け入れて愛するということからすべてはじまるのではないかと思います。それが他人を愛することの基本になると思います。愛がなければ、この世を愛することができなくなければ、厭世観ということになるとおもうのですけど、毎日生きていくことも、何に対しても愛情を持つことができなくなければ、つらいと思うし、それでなくて、もし、人の間で愛情を感じることができなくても、花をみて美しいなあと思ったり、空を愛することができたり、そんなことがあれば人間関係がつらかったとしても、その時、耐えられるだろうなあということで、私は愛情をもつことが大事なんじゃないかなと思います。

(深川) 有り難うございました。素晴らしい意見だと思います。ほかに皆さん何かございますか。今、愛情というものが自分が生きていくために一番大事だというのが板倉さんの意見だったのですが、他に意見があったら、おっしゃってください。はい、どうぞ

(遠藤) 遠藤洋平です。僕はちょっと似てるかなあと思うんですが、最も大切なことは隣の人、隣人を愛することだと言う風に僕は考えています。というのも人を愛する事も大事なこととおもうんですけれども、やはり、すべての人を愛するというのはすごく難しいことだと思うのです。実際そういうことができるのかなあと考えた時、難しいと思って、まずは自分のそばにいる人、隣にいる人を愛すること、それが実際にできてはじめて、さらに、その周りにいる人、もっと多くの人を愛することができるようになると考えています。たとえば、山を登るときなど、頂点を意識して登るのですが、頂点ばっかりみて山を登っていたら、ころげてしまうと思うのです。やはり、足もとをしっかり、石が落ちていないか、ここには切り株があるのではとかを考えながら、それでも、いつかは、頂点めざして頑張ろう、自分の周りすべてにいる人を愛そうと思いながらも、それをするためには、自分の隣にいる人、あいつなんかイヤな奴なんやけどどうなんかなあと思うけど、そういう人も必ず自分と同じ所があるだろうし、その人も、自分を愛してくれた方が、絶対に毎日が楽しいと思うのです。そういうことができるようにならないと、さらにまわりにいる人、世界中の人を愛するようになるにはとても無理だと考えているので、まずは、足もとを固めるという意味もこめまして、僕は隣人を愛することというのが、生きるために大切なことだと考えています。

(深川) 有り難うございました。ほかに何かございますか。自分はちょっとちがうけれども、このように考える、という意見も結構です。いろんな意見を出してもらったほうが、聞いている方も、

ああ、あのような考え方もあるのかと思って勉強になります。何でも遠慮なさらずにおっしゃって下さい。はい、どうぞ。

(川西)川西です。今、遠藤君が言ってくれた、他人を愛すということですけど、私も大事な物は他人の存在かなと思います。他人の存在。他人がいないと、自分が認識できないことがあると思います。例えば、地球上に自分一人しかいなくなってしまった場合、どうやって生きていけばよいか、いなくなった理由がわかれば、他の人は戻ってくるということがわかるならば、その人達のためになんとか助ける方法をみつけるというふうに考えることができると思うのですが、ひとりで、そういう方法もなく、自分一人で、生きていく、ということになると、これは生きていく意味というのが見つからなくなるように思います。他人というのは愛せれば一番良いのですが、愛すことができない、やはり人間ですから、気に入らない、合わないという人もいると思うのですね。ただ、そういう人達がいることによって、あいつは、こういう意見をいったけど、俺は違うな、違うなという自分の意見が認識できる。他人の意見によって自分の意見が差別化できると、それによって、自分がきづくこと、自分の考えはこうだったんだ、自分はこういうスタイルなのかということを気づかせてくれる、他山の石という言葉がありますが、まさにそのとおりで、他人の意見によって、自分の考えが、きわだつ、浮き彫りになる、のではないかと思うのです。他人の存在というのがあって、自分があるのではないかと、私は思います。以上です。

(深川)有り難うございました。ほかにご意見ございますか。はい、どうぞ。

(中瀬)中瀬弘子です。私は生きるために何が大切かというと、死をみつめることだと思います。生きていると実感が今、もてないのですが、何か実感するときがあるかというと、死と直面したときだと思うので、やはり死をみつめなおすことが生きていることの大切さがわかると思います。

(深川)有り難うございました。ほかに何かございますか。今、皆さんの意見を聞いてみますと、愛情についての板倉さんの意見からはじまりまして、似たような話だとは思いますが、結局は自分を愛することが先ず出発点だということであろうと思います。

これは、昔、インドの王様が、自分の最愛の奥様に対して、「自分はよく考えてみると、あなたよりも自分自身が一番可愛いような気がする」と言いました。すると、それを聞いた奥様も、「私もよく考えてみると、あなたよりも、私自身が一番愛しいように思う」と言いました。すると、王様が、「皆が、自分が一番可愛いと思っていたら、この世の中はうまくいかないだろう」と思って、お釈迦様に相談しました。そうすると、お釈迦様は、「それでいいのです。人間は皆、自分が一番可愛いのです。ただ、一番大事なことは、自分が一番可愛いのと同じように、相手も自分が一番可愛いと思っている、そのことを心に留めておきなさい」という話をされたそうであります。

そこから相手に対する思いやりの気持とか、他人を労る気持が出てくるわけであります。したがって、板倉さんがおっしゃったように、自己愛、自分を愛することが一番大事であり、それが無いと、やはりうまくいかないのではないかと思います。

それから、このごろ少年犯罪が激増しておりますが、結局人間というものは、人から愛されない人は、人を愛することもできない、したがって、犯罪を犯すことになる。したがって、やはり人を愛するということは、大事なことだろうと思います。この問題については、この程度で終わっておきますが、ほかに何かご意見がありますか。

人を愛するとか、自分を愛するとか、それが一番大事だということについて、自分はもう少し

違うという意見があれば、おっしゃってください。何かありますか。

特になければ、今、自分の死と直面することが大切だとおっしゃいました。これは難しい問題であります。そこでひとつ問題を出します。この問題は、去年のライラでも問いかけたかもしれませんが、おもしろい問題ですので、皆さん考えてみて下さい。

昔、ギリシャにカルネアデスという哲学者がいました。彼は一つの問題を出しました。大海原で舟が難破しました。そこで、一枚の板切れと、二人の人間が海に放りだされました。その板切れは二人が掴まると沈みます。

ところが、一人だけであればその板切れは浮くことができます。その時に、相手を救うために自分の命を犠牲にして、その板切れを相手に与えるのが正しいのか、或いは、自分の命を守るために相手を突き放して、自分が助かることが正しいのか、という問題を出しました。

これについては、色々な意見がございまして、例えば、欠陥自動車を全て回収・修理してお客様のところへ戻すというアフターサービスを実行すると会社が倒産することが計算上明らかになったときにも、アフターサービスを実行するべきなのか、それとも、倒産してしまったら、社員も家族も路頭に迷うことになるからアフターサービスは実行するべきではないと考えるのか、このような議論と結びつくわけです。

したがって、今、おっしゃった死と直面したその時に、自分を守ることが大事だとおっしゃるのですか？その時はまだわからない？どうするかは。しかし、死と直面することが大切だということをおっしゃいましたね、今。だから、その時に、皆さん、カルネアデスはそのような問題にたいしては、確かに自分の命を犠牲にして相手を救う、相手に対する愛ですね。それは大変立派なことだと思うけれども、しかし、それは愚かなことだと言っているのです。そこまでする必要はないだろう、というのがカルネアデスの意見です。

しかし、いや、そうではない。やはり自分の命を犠牲にしてまでも他人を救うべきだという考え方もあります。皆さん方は、どちらの意見をとられますか。どちらでもいいのです。賛成が正しいとか、反対が正しいとかの問題ではないのです。両方の考え方が成り立ちます。ただ、自分としてはこう考える、ということをおっしゃっていただければ結構です。ご自分の意見を。まず結論、そしてその理由は何かということだけおっしゃってください。

(板倉) 私の場合は、もし自分がそうなったら、といわれても、その時になってみなければわからないと思うのですが、自分だったら、もう一人の人を助けて、自分は死ぬほうを選びたいと思います。理由は、その時になってみないとわからないですけど、もし、自分が友達を蹴落として助かったとしても、たぶん、自分はそのことを一生ひきずって生きていかなければならないと思うし、かといってそれを逆に考えるとその人に自分を殺したとずっと考えさせて生きさせていくのもどうかなと考えだすととまらないのです。私はよく聖書を読むのですが、聖書には友のために命をすてること、これ以上に大きな愛はないとあるのですが、ほんとにそれはそうなのだなと思います。それで、やはり、私は人間として生まれた以上は、愛をもった存在として生きていきたいなと思うし、それが、さっきは無理だといったんですが、究極的には無理なのですが、それを目指して生きていきたいなと思って、そんなふうに考えて思っています。

(深川) 有り難うございました。他にございますか。どうぞ。おもったことをおっしゃって下さい。みんなの勉強になるのですから。

(川西) たびたび申し訳ございません。川西でございます。板倉さんが今言われたことと一緒で、私も、他人を助けたほうがいいのじゃないかと

思うのですね。ただそれは隣人愛とか他の人が大事だからというのではなく、僕は自分の為に、そうするとは思いませんけど、そういう風に考えます。考えるだけです。私の愛読書に司馬遼太郎さんの「燃えよ剣」という作品があります。その中で一番私の好きな長いフレーズを、土方歳三が、沖田総司の前にいって、自分の生き方について語るわけです。沖田総司が病気で死ぬという間際の時に、彼は男の一生とはと、いうのです。美しさというのは、人によっていろいろあると思うのですが、後悔をしない、私は男ですから、男ならば、やはり格好つけですから、格好つけて死にたいと思うから、別に他人がどうあれ、生きて欲しいというよりは、自分としてその行為は格好よくないだろうから、助けた方がいいのじゃないかと、助ければ自分としては自己満足ですね。格好いいと思うからそうすると、いうことですね。私の場合はちょっと違いますけど、助ける方をとりたいと思いました。有り難うございました

(深川) 有り難うございました。結論としては助けるということですね。理由としては違いますが。

(大谷) D組の大谷です。僕はみなさんと違って、2人とも助かるか2人とも死ぬかの道を選びます。あわよくば助かりたいです。それが、残り一人どっちかが助かるという状況に追い込まれた時に、自分が見捨てることもできないし、見捨てられることも許したくないのです。だから、あわよくば、助かりたい。あわよくば、2人で一緒に助かりたくて。

(深川) 緒に死んでしまうのではない。その板切れは2人つかまると沈んでしまうから、どちらが生きるかの問題なのです。

(大谷) その時には僕が板を持って相手を手に持って、僕が泳ぎます。(場内爆笑) あと、まだあるのですけど、これは相手が誰かにもよると思うのです。

(深川) いい質問です。それを言ってください。

(大谷) 正直な話をすれば、赤の他人であれば、僕は助けません。ただ、家族であったり、弟であったり、まだ結婚はしてないけど奥さんであったり、子どもであったりしたら、僕はそっちを助けると思います。以上です。有り難うございました。

(深川) 今のは、よい発言です。実は、ロータリークラブで、これと同じテーマを出したのです。そうすると、或るお坊さんは、「わしはやっぱり命が惜しいから、板きれを自分でつかむよ」と言い、或る人は、「相手によるよ。俺の家内ならどうかするか判らない」と言いました。それから、自分の子どもだったら、長生きするから板きれを渡すかもしれない。そういう話もありました。他に何かあれば、おっしゃってください。

(中瀬) B班の中瀬です。私は、悪いですけど、みなさんと違って、自分を助けると思います。それは、女性だからです。私は女性なので子どもも産める体なので、子どもを産んで子孫繁栄をしたいので、悪いですけど、相手が女性同士なら考えますけど、男の方だったり、お年寄りの方だったら、悪いですけど、私は自分を助けます。

(深川) 有り難うございました。他に何かありますか？これは、結論はどちらでもいいのですよ。両方の考え方ありますから。中瀬さんは、私は女だから、赤ちゃんを産むことができるからとおっしゃったのですが、それは確かにそうですが、逆に、男の人も赤ちゃんを作るのにはかかせない存在だと思うのですが、それはどうお考えでしょうか？

(中瀬) そうですけど、まだ、種はいっぱいあると思います。

(深川) 有り難うございました。他に何かありますか。どうぞ。

(神田) C組の神田ユキノリと申します。よろしくお願いします。さっき、2人の熱いバトルをみまして、僕なら、助かりたいです。人を思いやる

というのは、まず、自分の欲求が満たされないと、人には優しくはなれないと思うので、そういう死の直面だったら、まだ若ければ助かりたいです。

(深川) 素直な気持ちですね。有り難うございました。他に何かありますか。

(山根) B班の山根です。僕は、今の現状で考えたら死にたくないです。僕は、死ぬ時は何かを絶対残して死にたいと思います。今、自分の現状で何か残っているのもがあるんだったら、別に死んでもいいと思うけど、今は全然残って無くて、今から作っていく、残す物を作っていきたいから、今は死ねないと思う。だから、こんな究極な選択だから状況にもよるのですが、今は死にたくないです。

(深川) 有り難うございました。他に何かありますか？　これは、実はどちらの考え方もございます。ロータリアンの中にもどちらの考え方もあるのです。板倉さんは、先程、自分を犠牲にする、そして、バイブルを読んでいるとおっしゃっていました。洗礼を受けられたのですか。そうですか。クリスチャンの方は当然そういう選択になると思います。

実は、昔、昭和29年でしたか、洞爺丸という連絡船が函館の沖で沈没しました。その時に、これは今井先生にお話を聞いたのですが、学生ＹＭＣＡの総主事だったディーン・リーパーという人が、船が沈むとき、新婚の若者に自分のライフジャケットを与えて、自分は船と共に沈んだという話がありまして、私は昔、函館の地区大会に行く時に、今井先生から、そのディーン・リーパーの碑があるから是非見て来い、と言われたので、行って見てきました。

ところが、当初いくら探してもわからなくて、地元のロータリアンに聞くと、それはストーン神父のことだろうと言うのです。そこで判ったのが、ディーン・リーパーという人の他に、ストーン神父もやはり、自分のライフジャケットを他人に渡して船と共に沈んだということでした。どちらもクリスチャンです。だから、クリスチャンの方はね、当然その道を選んだのかなと私は思います。私などはまだ、信仰をもっていない生臭い人間でありますから、自分が助かればいいだろうと思います。その場合になってみなければ、実際はわかりませんが…。

今井先生は、昔、第１回のライラが終わった時に、受講生達が先生のところへ、このシャツに何か書いてほしい、と言ってもってきました。その時に、先生、何を書かかれるのかな、と思って見ていますと、「身を捧げよ」と書かれた。やっぱり、クリスチャンの先生は違うなと思ったのであります。

私はその時、今井先生の隣にいましたが、やはり何か書けといわれまして、私は、「身を捧げよ」とはとても書けませんので、戦争中に、学徒出陣で特攻隊で命を捨てていった戦没学生の言葉に、「人の為には涙を流し、己のためには汗を流す」という言葉があったので、それを書きました。

しかし、よく考えてください。己の為には汗を流す、というのは、己･自分というものは厳然として生きております。今井先生の場合は、身を捧げよ、自分を犠牲にしてしまいます。これは、実は、ロータリーの話で先ほど、「超我の奉仕」というのがでてまいりました。「超我の奉仕」というのは、英語では、“Service above self”というのです。selfというのは自分です。自分のabove、上にservice,　世の為、人の為の奉仕を考えようという考え方。ところが、これは1920年ぐらいの標語なんです。これより10年前、1911年に、“Service,Not self”　という標語があったのです。not selfというのは、selfというのは自分です。その自分をnot,否定する。したがって、serviceというのは、自分を犠牲にして、否定して、この神様の支配する宇宙の秩序体系の中に帰依すること、即ち、自分を捨てて、神様のために仕えなさい。それが、serviceだ、という考え方。これは、

中世キリスト教神学の思想以外の何ものでもない、非常に宗教的な言葉なのであります。

これに対して、約10年後に発表された“Service above self”。これが現在、「超我の奉仕」と訳されて、国際ロータリーのテーマになっておりますが、これは、“Service,Not self”のself即ち自分というものをnot否定する、即ち、自分を犠牲にするというのは、行き過ぎではないか、ロータリーはお寺ではないよ、宗教ではないのだから、Self・自分というものを温存して、selfのabove上に奉仕、世の為人の為のことを考えようというのであります。これは宗教的な概念ではなくて実業倫理の概念であります。このように思想的には区別することができます。

先程の話に戻ります。今井先生の「身を捧げよ」というのは、宗教的な標語である“Service,Not self”、即ち、自分を犠牲にして世のため人のために奉仕しなさいというのであります。これに対して、私の「人のためには涙を流し、己の為には汗を流す」は、あくまでもselfというものを温存しています。自分というのを否定していません。したがって、これは宗教的なものではなく、実業倫理的なものであります。私は、第1回のライラでこの今井先生の言葉を聞いて、私と今井先生とは、思想的に棲んでいる世界が違うなと思ったわけであります。

実は、ロータリーの世界にはこの二つの考え方が厳然としてあります。例えば、北陸のロータリアンでドーナツを作る機械を造っておられる人がいました。或る時、造った機械に欠陥が出てきました。その欠点を修繕するために、全部の機械を引き上げて修繕して、完全な機械にしてお客様のところへ戻すという作業をすると、計算上、会社が倒産することが判りました。その時にどうするかという問題であります。

倒産してしまったら奉仕も何もできないのだから、自分の会社を守るためには、アフターサービスなどしないでもよいではないか、という考え方もあります。しかし、そのロータリアンは、“Service,Not self”の世界に生きた人であったので、銀行から融資を受けながら、四苦八苦して結局アフターサービスを実行したのです。その後に何が待っていたか、と言いますと、絶大なる信用をもって報いられて、結局その会社は世界的な企業にのし上がって行ったのであります。したがって、ロータリーの中には、アフターサービスを実行したら倒産することが計算上明らかになっても、敢えてそれを実行しなさいという考え方があります。これが1911年の標語“Service,Not self”の考え方であります。この考え方の人は、アフターサービスを実行したら会社が計算上倒産するなどというのを机上の空論というのだ、と言います。ロータリーというのは行動哲学だから、先ず、実行してみよ、その後に何が待っているか。日本の諺にもあります。「振り下ろす太刀の下こそ地獄なれ。身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」と。これは、今井先生の「身を捧げよ」の考え方と同じであります。このような考え方も大事にしなければなりません。

しかし、一方、もしアフターサービスを実行したために、会社が計算通りに倒産してしまったらどうするのか、
妻子も社員も路頭に迷う、奉仕も何も出来ないではないか。それから、そうなれば、会社に損害を与えたということで、背任罪に問われる虞もある。したがって、そのようなことは駄目だという考え方も厳然としてあります。
この考え方、即ち、実業倫理的な“Service above self”の考え方の中に、ロータリーの創始者ポール・ハリスもいるわけであります。

このような二つの考え方が、ロータリーの中にも、実業界の中にもあります。そして、自分を犠牲にしてでもアフターサービスを実行しなさい、とういう意見も実業家の中にはかなり多いのです。実業家、即ち、会社を経営している人には、自分を犠牲にしてでもアフターサービスを

実行しなければ、結局その会社を生き延びさせることはできないだろうという考え方が強いのです。そのことだけ紹介しておきます。
今の話で疑問とかご質問とかあったら、おっしゃってください。ありませんか。

それでは次に、人間関係の問題です。これは色々意見がありました。板倉さんが発表した人間関係というのがありますね。これは、どういう問いかけをしましょうか。人間関係で大事なことは、結局、皆が、幸せになることなのです。皆さん方は、幸せということについて考えたことがありますか。何をもって幸せというのか。お金が沢山あることが幸せだと思う人もあるだろうし、いや、そうではないだろうと思う人もある。この人間関係が温かくなることが幸せだという考え方の人もあるだろうし、人間の幸せというのは一体どういうことか。その点について、もし、ご意見があったら、おっしゃってください。どうぞ。

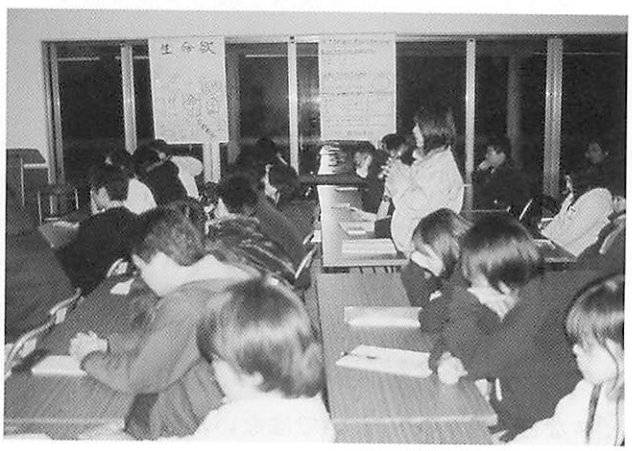
(遠藤) 遠藤洋平です。人間関係において最も大切だと僕が思うことは、やはり、自分がまず、幸せであること、その先に相手の幸せがあることだと思います。というのも、相手のことを考えてなんだかんだしても、もしかして相手が自分の思うようにならなかったら、すごくはらただしく思うと思います。それは、やはりあくまでも、自分が、相手の人が笑顔になって、自分も嬉しい、ということが根本にないと、それは違うのではないかと僕は思っていまして、doing for と being with という言葉を僕はいつも考えているのですが、何か人の為に行う時は、誰かの為にするんだというのではなくて、あなたと僕が幸せになりたい、共にいきたい、というふうに考えて、行動することが大切だと僕は考えています。そういうことも考えまして、自分が幸せになること、誰かの為に生きるのではなく、自分も幸せになりたい、というのが人間関係において大切だと僕は考えています。

(深川) 有り難うございました。素晴らしいご意見だと思います。他に何かご意見ございますか。どうぞ。

(板倉) 私は、感謝して生きることが幸せだと思います。私の友達で最近、印象に残った言葉を言った子がいるのですが、その子も、「私は今クリスチャンになったばっかりです」といったのですが、教会にきていて、まだその子は洗礼を受けてないのですが、とても家族の問題ですごく悩んでいて、どうしようもなく、話を聞いてもどうしようもない状況で、すごく大変だと思うのですが、その子は、だけど、私は今は、すごく大変だった時期をとりあえず過ぎて落ち着いたから言えるのかもしれないけど、私はこんな家族でもいて、やっぱりよかったなと思っている、というふうにその子は言ったのです。

家族がなくて、生まれたばかりで、親を亡くした子もいるし、戦争とか、何か大変なことが世界で起こっているのですが、そんな子のことを考えたら、やはり、私は家族がいたためにつらい思いもしたけれど、だけど、やっぱり何か家族がいたから、喜べた一瞬も人生にあったし、家族がいなかったら、一緒にできなかったこともたくさんあったし、そんなことを考えたら私はこれでやっぱり幸せだったなあと思うって、いうのです。

それで、私自身も家族の問題で悩んで教会に行くようになったのですが、やはり、今、教会に



行って幸せを知る、ここで宗教の話をするつもりはないのですが、私はその喜びがあったのは、自分の家族がそんな状態だったから、大変な思いをしたから、その幸せを知れたと思うし、今は、やはり、大変だったし、他の友達を見たらうらやましかったけれども、やはり、自分にはこの家族でよかったと思うし、自分がそのことを経験したためにこれから先の人生で、同じような思いをしている人がいたら、親身になって相談してあげることもできるのではないかと思うし、そんなふうに役立てていくことは、やはり満たされた家庭で育った人にとったら、私にしかできないことだと思うのです。私のもって生まれた贈り物だと思っているし、そう思います。

だから、どんなつらい状況があっても、その時は本当にすごく大変なのですが、いくらか経ったあとからでも感謝に思うことができれば、それは、すごく幸せなのではないかなと思います。

それは、やはり満たされているなあと思えることが、他の人から見たら、あの人かわいそうって思うような状況であっても、いつも感謝して生きられることが、大事なのではないかと思っています。

(深川) 有り難うございました。いいご意見だとございます。他に何かありますか。どうぞ

(福谷) C班の福谷洋介です。大切なのは、仲間の存在だと僕は思っています。こんなことやりたいなあと思っても、自分のできないことがあったとしてもそれを補ってくれるのは仲間であったり、自分が落ち込んだときに、一緒に考えてくれる人がいたり、それによって、自分はひとりじゃないんだなあと思えるから、仲間だと思います。

(深川) 有り難うございました。他に何かありますか。色々な人が発言してください。発言者が大体決まってきたような感じがしますので。他にありますか。

(川本) B班の川本です。自分の幸せはご飯を食べることです。今日もおかわり、昨日もおかわり、何杯もします。

(深川) 有り難うございました。他に何かありますか。

(神田) C班の神田敬仁です。何が幸せかは、やっぱり、この日本という恵まれた、世界的にも恵まれた国で生まれ育ったことが、幸せなのではないかと僕は思います。よく親父が言うのですが、他のブラジルとか発展途上国の人のことを考えると、日本で生まれたことがすごくラッキー、これ以上ない幸せ、国の情勢のことはおいといて、生きる上では幸せだと思っております。以上です。

(深川) 有り難うございました。皆さん、ご存じだと思いますが、私達がこのようなことをしている今この瞬間にでも、1時間に1,500人ぐらいの子供ども達が、食べるものが無くて飢えて死んでいます。そして、1年間に地球上で8,000万人の人が食べるものがなくて飢え死にしている。今、私達は豊かすぎて、このようなことは意識にないかも知れませんが、これは厳然たる事実なのです。

今の発言者のように、今、日本の国に生まれたことはやはり幸せだろうと思います。しかし、これは物質的に恵まれた意味で幸せなのです。しかし、どんなに物質的に恵まれても、不幸だと感じる人があるだろうと思うし、そういう意味で人間の本当の幸せは何かというについて、もし、ご意見があったら、おっしゃってください。あなたどうですか。

(広瀬) D班の広瀬麻季です。ほんとうの幸せは、自分が幸せだなあて感じたら、幸せだと、漠然とあるのですが、神戸の震災に遭った時は、今まで水道があって、ガスもあって、お風呂も毎日はいれたのが、できなくなったときに、普通の当たり前のことが、当たり前でなくなった時に、今まで幸せだったなと感じたり、先日、タイにいってきまして、村にホームステイしたときには、瓶に水

がはってあって、それは桶で作って水浴びで、シャワーとかお風呂とかなくて、衛生はちょっと厳しいなあと感じて、やはり、私は日本人なのだと思って、そこで暮らす人にはそれが当たり前で、それが日常だから何も感じないのだと思うけど、私は、もう毎日お風呂にもはいれるし、食べるものにもこまらない生活をしているから、うまく言えないけど、幸せだなと感じます。

(深川) 有り難うございました。他にありますか。

(松田) D班の松田です。さきほど、幸せは質だとおっしゃったのですが、僕は量だと思います。やはりひとつでもたくさんの幸せをもらったほうが、僕は良いと思うし、その幸せの量というのは、その地球に今、生きているひとりひとり、平等じゃないと思います。それというのは、今、飢餓で苦しんでいる子ども達は、食べ物をもらって、お腹が満たされて、幸せだというのであれば、僕は、毎日感じることであると思うし、生まれてきた環境によって、幸せの質、量とか、たぶん量、幸せに感じる量が多ければ多いほど、自分が死ぬ時に幸せだったと感じるのだと、僕は思います。

(深川) 有り難うございました。他に何かありますか。どうぞ。

(川西) 川西でございます。たびたび失礼いたします。いろいろあるのですが、本当の幸せというのは、基本的に物質が満たされた上で、私個人が考えるならば、人と気持ちが通じ合えたというか、人と思いが共有できた時に、いいのかなと、非常に幸せだと感じるかなと思います。

黒板を使わせていただくと、私、もと教員をやっておりましたので、黒板、好きなんです。単純にいいますと、こういうベクトルがあったら、一つのベクトルがあったら、そこに目標があったら、そこに向かう矢印があったとしたら、この矢印、こういうふうについてくるのですが、私の恩師があこがれ曲線というふうに名付けたもので、人というのは何か目標を共有できるというのは非常に喜びだといいましたが、あこがれにあこがれるものだというふうにいうのですね。ある人が、強烈なあこがれをもっていたとしたならば、そのあこがれに寄り添うことによってひとつの形ができあがるといいますか、それが教育の基本だというふうにおっしゃったのです。

ここも集団と言ったら、なんでもそうだと思うのですが、ひとり、言い出しっぺの人がおられたとしたらそれに賛同する方々、一緒に目的を共有しようという方々がいらっしゃることによって成り立っていると思うのですが、この、矢印になれることも当然幸せですが、人をひっぱれるという意味で、こういうふうに賛同できた場合、どちらにもなれることが非常に幸せだと思うのです。私自身もいろいろあるのですが、これを感じたのは、私が顧問をやったサッカー部が、部活ができたばかりで、非常にサッカー部が弱いという状況だったのですが、その連中が1年間練習して、2年ぐらい1勝もできなかった。

2年後ぐらいにようやく1勝できたという機会がありまして、私も、何もやらない奴だったのですが、前から、お前ら気持ちで負けるな、技術的なことは何もわからないので、何も教えなかったのですが、お前ら気持ちで勝ちたい気持ち、あるのだろう、俺は勝ちたいぞ、お前らこいよ、もっと気合いいれろよ、といつも気持ちだけ引っ張っていたわけです。

それで、キャプテンが、俺、やるぞ、今度は勝ちたい、練習やると、メニューもっと組み立ててくれ、こんな練習ではいかんだろうと、よっしゃ、じゃ俺が鍛えてやると、朝練もはじめて、練習の量だけを非常にあげたわけです。それまで、まったく守備ができない人間だったのですが、体力がついて守れるようになって、ようやく1勝ができたという思いがありまして、その時は、私も男泣きしまして、みんなで抱き合ったという思いがありますけれど、そういうふうにして、人と思いが共有できると、ひとつのことに向か

ってみんなで一緒に何かをやりとげることは非常に幸せなのではないかと思うわけです。有り難うございます。

(深川)有り難うございました。今のご意見に何かございますか。

(遠藤)遠藤洋平です。僕はまだまだ、学生のベイビーなので、黒板など使えないので、マイクだけでよろしくお願いします。

僕が本当の幸せというものを考えるのは、逆に何かたりない、少しの不幸というものを考えます。誤解をうけるかもしれませんが、さっきのD班の発表でみたのと同じように、すべてが、あまりにも揃いすぎている今の日本の状態では、みんな、何が本当に欲しいのか、何が幸せなのかわからないような状況になっていると思うのです。特に僕も、そんな、本当に飢餓で苦しんでいる国とか、そういうこともあるのですが、日本というこのような今の状況で考えるのならば、この逆に整いすぎている状況というのが、幸せがわからなくなっている状況ではないのかな、何かが足りない、もう少し足りないような状態、ちょっと小さな不幸というのが、それが求めるきっかけになって、本当の幸せをあらめて僕らに感じさせるきっかけになるのではないのかな、というふうに考えました。

(深川)有り難うございました。あまりに豊かになりすぎていると、何が幸せかわからない、というご意見なのですが、何かこの点についてもご意見がありましたらおっしゃってください。

先程、遠藤さんから、自分が幸せであることが大事だというご意見がでていました。したがって、あなたと僕との幸せ、というように、それから、板倉さんの感謝して生きること、家族が幸せであることが条件にとおっしゃっていましたが、要するに、この辺から考えると、幸せというのは、自分ひとりでは得られないものだと思います。独りぼっちの世界には、幸せはないだろうと思います。

したがって、例えば、私と私の友人との関係を考えてみましても、もし友人が倒産しますと、私の心は暗くなって幸せではなくなります。それと同じように、私が倒産しますと、友人の心は暗くなって、友人は幸せにはなれません。このような意味で、幸せというものは自分一人で得られるものではなく、相手が幸せであるからこそ自分も幸せ、という幸せの条件関係があると思うのです。

その関係を私と友人との関係だけではなく、私と私の家族との関係、それから、もっと広く、私と社会の人達との関係、地域社会の人達が幸せであって私の幸せがある、このような幸せの条件関係をさらに国際社会の人達との関係、世界社会の人達との関係で幸せを考える。世界中の人達が幸せであって自分の幸せがある、という考え方。この考え方をロータリーのターゲットとして提唱したのが、1962年、インドのカルカッタロータリークラブから出た元国際ロータリーの会長Nitish C.Laharryニティッシュ・ラハリーであります。彼は、「世界中のどこかの片隅に、ひとりでも不幸な人がいる限り、我々ロータリアンは永久に幸せになることはできない。心の中に火を燃やそう！" Kindle the spark within !"」というターゲットを打ち上げました。

これは結局、自分の幸せというものを世界中の人達との間の条件関係でとらえまして、世界中にひとりでも不幸の人がいると、私達は幸せになれない、という提唱なのです。これは非常に東洋的な発想であり、有名なターッゲトでありますが、このような考え方もあるということをひとつ紹介しておきます。福田さんがおっしゃった仲間が存在するということも同じような類型に属する考え方かと思います。

先程、すべてが豊かになったこの日本で、何が幸せであるかということが判らなくなってきているというご意見がございました。これについて、みなさんがた、何かご意見ございますか。あ

まりに豊かになって、自由になって、便利になって、自動車もある、食べるものも沢山ある、何でもある、本当の幸せって一体何だろう、という疑問なのだと思うのですが、先ほどの発言は。これについて、皆さん方、全てが満たされている中で、本当の幸せというのは一体何か、ということを考えてみてください。どうぞ。

(永谷) C班の永谷と申します。私は、豊かな国、豊かでない国、世界にさまざまな国があると思うのですが、幸せというもので私が思うのは、自分自身を誰かが必要としてくれる、そういったことが、どのような国、どのような状況であっても、とても幸せなものではないかと思います。例えば、どれだけ豊かなこの日本でも、誰もが自分を必要としてくれなければ、それはとても幸せとは思えないと思います。また、逆に非常に貧しい国、発展途上国でも、例えば、家族でもいいですし、恋人でもいいですし、誰かが、自分を必要だといってくれれば、とても幸せなことではないかと考えます。以上です。

(深川) 有り難うございました。誰かが自分を必要としてくれる、そういうものが無ければ幸せではないと、先程、どなたかがおっしゃっていました。マザーテレサの言葉を引用しておっしゃっていたと思うのですが、自分が必要とされていない、と思う時が、一番不幸だというのはマザーテレサの言葉だったと思います。無関心というのが一番いけないのだという言葉があったと思うのですが、この点についてみなさん、何かありますか。どうぞ

(発言) 無関心というのは本当にそうなのですね。私が、たとえば、誰かにすごく嫌われていたとしても、それは、私は、関心がもたれていない、全くもたれてないということではなく、すごく幸せなことだと私も感じるのです。それは、関心をもたれないことよりは、嫌われてでも、その人に何か影響を与えることができているというわけだし、嫌われているということは、気にかかっているということですから、だから、大好きに変わる可能性もあると思うし、全然知らない人だったら、無関心だし、そのことはすごく悲しいことだと思うのです。

(深川) 有り難うございました。他に何かございますか。私もマザーテレサの言葉を忘れてしまったのですが、無関心が一番恐ろしいというようなことを言ったと思います。今井先生、違いましたか？マザーテレサの言葉。

(今井先生) 愛の反対は……無関心こそが一番恐ろしいことである。

(深川) 判りました。有り難うございました。愛の反対は、憎しみではなくて無関心でした。これがマザーテレサの言葉であります。紙がまわってまいりました。「トイレ休憩をどうしましょうか」と書いてありますが、みなさん、少し休みましょうか。今井先生お願いします。

(今井先生) マザーテレサの話がでましたので、お話しましょう。マザーテレサがしていることに、「死を待つ人々の家」というのがあります。この「死を待つ人々の家」というのは、インドでもって、みんな、顧みられないで、捨てられて、ホームレスになった人達が沢山いて、その中には、道路の真ん中で命を失うような状況の人達がたくさんいます。

実は、マザー・テレサは、その人達をお弟子さんと一緒に探して、そのような人達を連れて帰って、ご自分のところで色々と介護して、元気になる人もいますし、亡くなる人もいます。

或る日のこと、一人のお婆さんが、インドのカルカッタの街の中で、既に、半死半生になって、片一方の足は溝の中につっこんで、その溝の中につっこんだ足をネズミが囓っている状況でした。街の人達は忙しくて、そのお婆さんについてほとんど無関心でした。それをマザーテレサが連れて帰って、もう意識はないのですが、お弟子さんとお婆さんの体を洗いました。そして、静かに寝間着を着せて、ベッドに入れて、皆でそれを

見ていました。一所懸命に介護して、何とか生き返ってくれないかなと思って。

ところが、そのお婆さんが、ふと気が付いて目を覚ました。あたりを見ましたら、自分が生まれてから今まで一度も着たことのないきれいな寝間着を着せられて、ベッドに寝ている。そして、あたりを見廻すと、心配そうな顔をして、マザーテレサやそのお弟子さんが覗き込んでいた。それを見た時に、そのお婆さんは、誰かが自分に関心をもち、誰かが自分を愛して、それに接してくれたことに気が付きました。そして、にっこり笑って「有り難う」と言って亡くなったそうです。したがって、助けることはできなかった。

しかし、マザーテレサは何と言ったか。私は、あの人が最期に自分が誰かに愛されていることを感じて、そして、「有り難う」と言ってくれたあの笑顔に私は支えられている。あの笑顔を見るために、私はこの仕事をしているのだ、ということを言ったそうです。マザーテレサが、大変世界の人達に尊敬されている一つの理由は、そのような形の行為があったということについて、今も大勢の人が言っているそうです。そして、その「死を待つ人々の家」に行って、マザーテレサに会ったりしていました。

このマザーテレサが、日本に来たとき何と言ったか。「日本は貧しい」と言ったのです。私達、日本は豊かだと思っているけれど、実は、日本は貧しい。何故だろうか。自分達が他の人達と共に分かち合う、ということが出来ない、或いは、そのようなことついて、必要を感じない、そこが貧しい、といった言葉は、大変私達にとって大事な反省の材料になると思います。

(深川)

有り難うございました。10分間休憩します。9時から再開します。

フォーラム後半

(深川)それでは、時間がまいりましたので、話に戻りたいと思います。今、幸せの問題について色々とご意見を伺いました。幸せというのは、言い方を換えますと、感謝の気持ちをもつこととか、これは、B班から出ていましたが、思いやりとか、感謝の気持をもって人と接するということが大事だというご意見が出ていました。

それから、C班は、感謝することで相手を尊重する、というご意見も出ていました。幸せということについて、色々なご意見を伺ったわけですが、一つの物語を紹介しておきます。

今日が3月25日ですから、zちょうど今から1ヶ月前が、二二六事件の起こった日であります。二二六事件をご存じの方おられますか。これは、昭和11年の2月26日に起こった事件なので二二六事件というのです。

昔、日本の陸軍の青年将校達が、血気にはやって反乱を起こしました。そして、その当時の政府の要人達を殺したのであります。その殺された人の中に、時の教育総監・渡辺錠太郎大将がいました。この渡辺大将に一人のお嬢さんがおられました。当時、小学校6年生位だったと思いますが、そのお嬢さんを渡辺和子さんといいます。今、日本カソリック学校協会の会長をなさっていると思います。かつて今から10年ぐらい前は、岡山のノートルダム清心女子大学の学長をしておられました。

実は、渡辺和子先生は、このＲＹＬＡに2回ほど講演に来て下さいましたが、この物語はその時に伺った話なのであります。

反乱軍が渡辺錠太郎大将の屋敷に侵入してきた時、渡辺大将は、お嬢さんの和子先生、当時、一緒にその部屋におられたのですが、反乱軍が侵入してきた時、渡辺大将は、咄嗟にお嬢さんを自分の机の下に隠しました。そこへ、反乱軍が入

って来て、渡辺大将に対して４３発の軽機関銃を撃ち込み、剣銃で滅多突きにして惨殺してしまったのであります。渡辺和子先生は、１メートルと離れていない目の前でお父さんを殺されてしまいました。そのことが実は、カソリックの信仰をもたれる動機なのかと思っておりましたら、そうではないと、おっしゃっていました。

実は、３０歳になると、もう修道女にはなれないそうであります。渡辺和子先生は、29歳までこの娑婆にいて外資系の会社に勤められ、部下も10人ほどもった大変エリートな地位におられたのでありますが、感ずるところがあって、29歳にしてカソリックの信仰の道に入られたのです。

そして、アメリカに渡って、アメリカのボストンで、修行に励んでおられたときの話なのですが、夏の暑い或る日、130人ぐらい入る食堂で夕食の準備のために、お皿とナイフとフォークを並べてセットする仕事をしておられました。大変暑い日であり、しかも、閉鎖的な修道女の服を着ておられましたから、つらい作業だったのですが、その時に、アメリカ人の先輩のシスターが渡辺和子先生に、「シスター、あなた今何を考えていますか」とお尋ねになりました。渡辺和子先生は、面倒くさいと思われたのでしょうか、「何も考えていません」とお答えになりました。そうすると、その先輩のシスターは、大変厳しい顔になって、「あなたは時間を無駄にしています」と言いました。渡辺和子先生は自分の耳を疑ったそうであります。「何故？」そうするとその先輩のシスターは、「同じお皿とナイフとフォークを並べるのであれば、やがて、その席にお座りになる人のために、何故、心の中でお幸せにと祈りながら並べないのですか。何も考えないで、ただ漫然とお皿とナイフとフォークを並べるということは、時間を無駄にしています」と諭されたそうであります。

渡辺和子先生は、「自分は今まで、いかに効率的に仕事をすることを教えられてきました。しかし、時間に愛をこめる、仕事に愛を込めるということは、初めて教わりました。お皿は同じ姿で同じ早さで並びます。しかし、その並べる行為に、心の中で幸せを祈る、という目に見えないものが籠められるか籠められないかによって、この世の中は大きく変わる。お皿を並べる、というつまらない単純な行為、雑用と思われる行為、それが、そうではない。雑用ということは、私が、仕事を雑にしたときに雑用になるのだということを教えられました。つまらないと思ってお皿を置く。お幸せにと祈りながらお皿を置く。そとから見た限りでは何の変わりもありません。しかし、その中に目に見えない大切なものが籠められるか籠められないかによって、この世の中は大きく変わります」と述懐されていました。

皆さん方も色々な仕事をなさいます。その時、いつも心の中でお幸せにと祈りながら仕事をする。要するに、感謝の気持ちをもって、相手に対してそのような祈りをこめる。仕事の中にそのような祈りが籠められることによって、その人は必ず幸せになるという信仰、それが大切だというお話をなさいました。そのような心をもって仕事をすることによって、その人自身も大きくなっていくだろうし、その人自身も結局は幸せになっていくだろう、ということを説かれたのであります。この目に見えない、大切ものが籠められるか、籠められないかによって、世の中が大きく変わる、ということについて、一つの例を出しておきます。

去年、一昨年は、沢山の台風が来ました。あの台風の渦巻きは皆さんご存じのように、左回りであります。何故左回りになるかといいますと、台風が赤道直下で発生して、北へ上って行く時に、地球が東から西へ自転してますから、その自転によって台風の渦が左回りになっていくのであります。したがって、南半球では、右回りになります。この現象は、地球上の全ての現象に現れ

ております。例えば、風呂の栓を抜きます。水がだんだん減っていきます。そして最後に水が流れ去っていくとき、水は必ず左回りに渦をまいて流れ去ります。この現象を発見した人はフランス人でコリオリという人でしたので、この現象を「コリオリの力」というのです。

台風も赤道直下で発生した時は単なる上昇気流にすぎません。しかし、それがだんだん北へ上るにしたがって、勢力を増し、コリオリの力によって渦を巻いていって、結局、巨大な自然現象になって、自然を破壊していく。コリオリの力というものは本来、弱い弱い力なのです。台風も最初は単なる上昇気流にすぎません。それがやがて、大きな力になっていく。このような現象は、実は、地球上の人間社会でもおこっております。

例えば、1989年、あの巨大なソビエト連邦が崩壊しました。あの原因は何か、といいますと、ソビエト国民の一人ひとりの心の中にあった、小さな小さな不満でありました。その不満が積もり積もって、結局、モスクワの暴動の際に、一気に爆発して、ソビエト連邦という巨大な主権国家を崩壊させてしまったのであります。だから、ソビエト国民の一人ひとりの心の中にあった小さな不満が世の中を変える、それと同じように、人間一人ひとりの心の中にあるものが大事だということを渡辺和子先生の話は物語っていると思います。目に見えない大切なものを心の中に籠める、このことが大事だということを心に留めておいていただきたいと思います。これは、私達自身が幸せになるために、そして、全ての人達が幸せになるために必要なことだろうと思います。

先程のニティッシュ・ラハリーの言葉、「世界中のどこかの片隅に一人でも不幸の人がいる限り、われわれ、ロータリアンは永久に幸せになることができない」というその心も全く同じ気持だろうと私は思うのであります。

さて、以上で、幸せの問題については、一応、集約したことにしておきます。そこで、その次は、A班から出ております共存共栄の問題であります。共存共栄というのは、皆が共に栄えていくということでありますが、このことについて、何か、ご意見があれば出して下さい。抽象的でわかりにくいかも知れません。問いかけが難しすぎますか。抽象的ですか。何かご意見ありませんか。例えば、先程、インドのカルカッタの例を挙げました。このカルカッタには、路上生活者、家のない人が沢山いるのであります。そして、その人達はどんな生活をしてるかというと、道の上で生活したり、軒の下で生活したりしている。食べるものも十分にありません。朝飯にありつけても、夕食にありつけるかどうかわからない。そのような生活、極貧の生活をしている人達がカルカッタには40万人位いると聞いています。その人達がやっとの思いで、手に入れた朝飯、それを全部食べるのかというと、食べないのであります。どうするのかと見ていると、それを、道の上に、花の形に一粒づつ撒いていく。何故そういうことするのか、と聞きますと、今度この世に生まれてくる時には少しでも豊かな人に生まれてくるようにと心に祈りながら、空を飛ぶ鳥たちのためにその餌を撒いているのだというのです。ということは、自分ひとりの幸せではなくて、鳥たちにも、その幸せを分かち合って生きている、ということであります。このように、インドは大変貧しいところでありますが、餓死する人はいない、と聞いております。

それから、インドという国は、不思議な国でありまして、そのような極貧の人達がいる反面、核武装をしている国でもあります。このように、極端に貧富の懸絶した社会にいる人達が、自分だけではなくて、他人にも、しかも、鳥たちにも、食べものを分け与えながら共に生きていく、まさに、共存共栄なのであります。この心が実は福祉の心の原型ではないかと思います。私達は今、日本で非常に豊かに暮らしていますから、この

ような気持ちはおそらく起こらないと思いますけども、このような気持ちも大事にしなければならないと思います。

このような話を聞いて、もし、皆さん、何かご意見がありましたら、おっしゃってください。ひとつのテーマとして出してみたのですが、何かありませんか。もし、自分がこのような非常に貧しい社会に生きたときに、どうするか、ということですね。はい、どうぞ。

(発言) 私は今の話を聞いて、すごく自分のことをおもったのですが、家族が5人いて、みんなでご飯を食べるのですが、例えば、焼き肉をしたとして、やはり、みんなおいしそうなお肉を食べたいと思うのですが、やはり、それを全部自分がとりこんで食べたとしても、それは確かにおいしいかもしれないけど、何かやはりそれでは満たされない。私は、本当に小さい時もそんな感じで、それに気づいたのは最近なのです。たとえば、自分が何か買って帰ってきたら、それがたとえ小さなケーキだったとしても、例えば、妹と半分にするとか、そんなことで、自分の食べる量は確かに半分になるのですが、その分妹が、有り難う、おいしかった、と言ってくれたり、言ってくれなかったとしても、一緒に食べることができた、共有することができたことは、食べられなかった半分より何倍も大きいことだと思うように最近なりました。

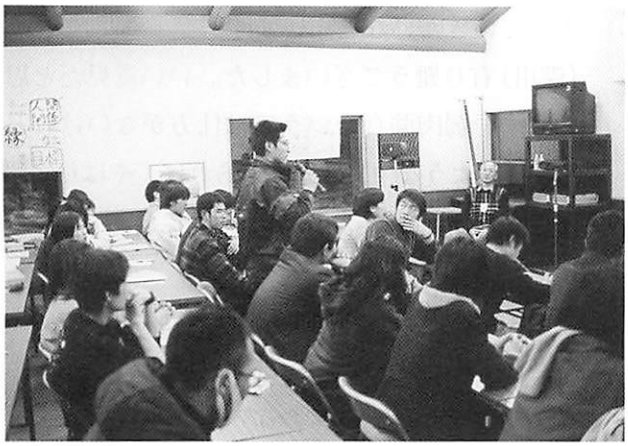
それから、本で読んだのですが、愛することとは、作者は忘れてしまったのですが、その中で、ここに手帳にメモしてあったのですが、与えることは自分のもてる力の最も高度な表現であり、与えることを通じて、私は自分の力や富や権力を実感する、という言葉があったのですね。本当に満たされていると感じている人が、与えることができるのだな、と本当に思います。自分が足りない、足りないと思っていたら、自分をとりあえず満たしてしまおうとしてしまうし、自分が、実は世間的にみたら豊かでもないのですが、自分がこれでいいなあと思っていたら、他の人に分け与えることができて、というのは、どんなにお金持ちで、すごくお金持っていて、だけど、自分のために、自分のために、貯めている人よりも、よっぽど豊かな人だと思うし、そういう意味で与えることは、最も豊かな人でしかできないのだなあとその時考えました。

(深川) 有り難うございました。他に何かありませんか。いいご意見をうかがいました。

(遠藤) 遠藤洋平です。僕は、共存共栄というテーマについて考える時に、宇宙規模でものをみたいなあと考えまして、人間がまず、僕が幸せになるとか、栄えるとかではなくて、まず、日本が栄える。日本が栄えるのではなく、アジアが栄える。アジアが栄えるのではなく、世界中の人間が栄える。そしたら、人間だけでなく、虫も、鳥も、草も、花も栄える、そういう宇宙規模で物事を考えることが、そんなことできるかどうかわからないのですが、将来的にはそういうことを、人間だけではなくて、地球上にいるすべての生物が、うまく栄えていくためにはどういうことができるのかということ、頭のどこかで考えながら、戦争の問題にしても、環境破壊の問題にしても人間が栄えていくため、環境に優しい、それによって人間がより長く生きながらえていけるのではなく、地球上にいるすべての生物が、楽しく生きていけるにはどうしたらいいか、を頭のどこかにおきながら、ひとつひとつ、1日1日を一所懸命生きて行けたら、いいなあというふうに考えてます。

(深川) 有り難うございました。いいご意見だと思います。何か他にありますか。

(川西) 川西と申します。今、遠藤君が言っていた、共存共栄なんですけども、私はそれをきいて、宮崎駿のもののけ姫という映画、有名ですので、おそらく皆さん1回はみたことあるのではないかと思うわけですね、あれは、いわゆる自然界といわれる、もののけ達の世界です。それと人



間界、いわゆる物質社会、便利な社会をめざそうとするグループ、その２つのグループがありまして、その両者の立場をみてきた主人公が、どちらが正しいのか、真実というのはどこにあるのか、正しい姿とはどこにあるのか、というのをみるということでした。

結局は物語としては最終的に、共存共栄といいますか、自然界も人間界もそれぞれに正しいことがあって、それぞれが生きるために、必死で生きているという姿を両方見て、とにかく、お互いが生きること、お互いが境界守って、尊重するというのはちょっと違うかもしれませんが、お互いが違う世界があるのなら、それを侵害しない、それを認める、ということです。というふうなことを私は映画をみて感じたのですが、共存共栄、今の遠藤君の意見を聞いて思ったことです。以上でございます。

(深川) 有り難うございました。他に何かありますか。今のご意見、お互いが生きるということ、それから、遠藤君の地球上の全てのものが生きていくこと、そのことについていろいろご意見あったのですが、一つここで問題を出します。科学技術が発達しましたね。そのために医学が大変進歩しました。医学が進歩するということは、私達、人間にとっては、大変幸せなことなのであります。しかし、その反面、何千万、何億というモルモットや実験動物の命が犠牲にされております。そのことを一体、皆さんはどう考えるのか。実験動物やモルモットの命などは奪ってもかまわない、という考え方もあるかもしれません。しかし、彼らも神様から与えられた命を一生懸命生きているのです。その命を医学の実験のためと称して奪ってしまうのは、罪ではないのか。では、罪だとすれば、その罪は一体、誰が、何処で、何時、どのようにして償うのか、という問題であります。

それから、人間というものは、動物の命、植物の命そしてこの世の中の全ての生きとし生けるものの命を奪って生きています。この生きとし生けるもの全ての命を奪って生きていく人間とは一体何なのか。そのようなことを考えてみる必要があると思うのです。私達は牛肉も食べます。牛肉を食べるためにアメリカでは１日に５千頭の牛が殺されています。このような事実を人間としてどう考えるのか。皆さん、いかがでしょうか。色々な難しい問題があります。生きていくためには牛や豚や鶏を殺すのは当たり前だという考え方もあるでしょうし、それは人間として当然だという考え方もあるでしょう。しかし、牛や豚も、神様から与えられた命を、一生懸命生きようとしてるし、生きようという本能をもっています。それから、一つ大事なことは、野良猫や野良犬にしても、人から捨てられて不幸な境遇にありますが、やはり、生きようという本能的な欲求をもっています。それを例えば、野犬狩りをして殺してしまうことが果たしてよいのかどうか、色々な問題があると思いますが、皆さん、いかがですか。このことについて、どのような考え方でも結構ですからお聞かせください。板倉さん、いかがですか。

(板倉) すごく躊躇するのですが、どんな考え方でもいいとおっしゃったので、遠慮なく申し上げるのですが、すごく宗教的な話だと思うのです。もし、神様を信じるのであれば、聖書に書いてあることは、人間は神様に愛された存在であって、というふうになるので、動物を神様が人間

のために与えてくださっている、という話のもっていきかたになると思うのです。だけど、動物の命はそれで解決できたとしても、クリスチャンが直面する大きな問題として、動物のために、動物の飼料のためにたくさんの人が食料を我慢している、という現象があると思うのです。アフリカとかで、トウモロコシを食べれば生きていける人のトウモロコシを奪って、すごく柔らかい牛肉をつくって、私もさっき、食堂でたくさん肉を食べたから、あまり偉そうなことも言えないのですが、それは、ほんとは身に迫って考えなければいけない問題なのですが、やはり実際の生活の中で忘れてしまっていて、私も、だからといって、ほんとうはそうなのですが、その事実はみえないところにあるものですから、やはりお肉が食べたいと思うし、それを知ったからといって、聞いたからと言って、お肉を食べるのをやめるというのは、実際自分はできてないし、やはり、きれいごとなのかなあと思いながら、闘うところです。

(深川) 有り難うございました。他に何かございますか。どんな意見でもいいですよ、もともと難しい問題なのですから。

(福谷) C班の福谷です。命をたいせつに、わかっていても、やはり魚は好きです。ご飯の時は魚をどんどん食べてしまいます。でも、残さず食べます、と聞いたように、せめて食べる時ぐらいは感謝して食べたいなあと思います。以上です。

(深川) 他に何かありますか、どうぞ、どうぞ、初めてですね。

(中村) A班の中村です。共存共栄を書いた者なのですが、はっきりいって、共存共栄は理想だと思います。実際やはり、弱肉強食。強きものが弱きものを食う、というのが現実社会であって、ただ、乱獲だとかむやみに乱食というのでしょうか、そういう倫理観のない、行動は、人間は、慎むことができる動物だと僕は信じています。だから、共に存在し、共に栄えていくという理想を求めていきたいなと思います。

(深川) 有り難うございました。いい意見だと思います。弱肉強食というのは仕方がないけれども、そのような中で、人間であれば、やはり倫理というものを大切にせよ、ということですね。他に何かありますか。

例えば、資本主義経済社会は競争社会です。そうだとすると、法律にさえ違反しなければ、どんな金儲けをしてもかまわないという考え方もあるかも知れない。しかし、それでは駄目なので、今、おっしゃったように、そのような弱肉強食の競争社会の中でも、やはり、倫理というのを大事にしなければならないのではないかという考え方があります。この辺のことについて何かお考えがあれば、おっしゃって下さい。ちょっと難しすぎたかな。何かご意見ありませんか。

では、問題を変えます。これは昔、このライラで、今井先生がお話になったことであります。サリドマイド事件というのがありました。これは実はスウェーデンで起こった悲劇でありまして、１６歳の少女が、サリドマイドを飲んだために、手のない、あざらしっ子といわれる子供を産みました。その１６歳の少女は、この子はきっと不幸になるに違いないと思って殺してしまうのです。これは勿論、法律的には殺人罪です。そこで、裁判所に起訴されました。ところが、社会の人達が、この少女の心情を非常に哀れに思って沢山の嘆願書を裁判所に出したのであります。その結果、裁判官は、この少女を生涯、監獄につなぐよりは、釈放して更正の道を歩ませた方がよいだろうというので、執行猶予のついた判決を言い渡しました。

このようにして、この問題は、法律的には一応解決されました。しかし、人間の倫理の面では、未だ一切、解決されていません。何故かと言いますと、神様から与えられた赤ちゃんの命が奪われたという事実は厳然として残っているからであります。つまり、法の世界では執行猶予の判決

によって解決しましたが、倫理の世界では未だ未解決なのであります。この問題をどう考えるのか、という問題であります。

今井先生は、その当時、確か、女子学生に質問をされて、「君なら、どうする、その子どもを殺すのか、或いは、生かすのか」という質問をなさいました。ある女子学生は、「殺しても、罪にならないのであれば殺します」と答えました。その他に、二つ、三つの答えがありました。皆さん方なら、どうしますか。手のない子を産んだ時に、殺しますか、生かしますか。他に解決の方法がありますか。その辺をおうかがいしたいのです。いかがですか。はい、どうぞ。

(遠藤) 遠藤洋平です。動物の世界であればそういう生き物は本当にすぐに死んでしまうのかもしれないのですが、僕はそれを生かして、その人も生きていけるのが、人間の社会であると思います。そうすることが、人間が寄り添い合って生きていける、言葉を使って共に生きていけるという、人間が動物であるけれども、他の動物と違う決定的な違いだと思うので、僕は人間である以上、その人も楽しく生きていく権利があると思うし、生きていくべきだと思います。

(深川) 有り難うございました。他に何かありますか。

(末友) B班の末友美紀です。私なら、生きていて欲しいと願います。なぜなら、やはり、障害を持って、ハンディキャップを背負ってきたとしても、だからこそ、ハンディキャップがあるからこそ築ける人間関係ですとか、ハンディキャップがあったからこそ、得られる喜びが子どもにもあるでしょうし、母親にも必ずあると思うので、人とは違う喜びがまたそこで生まれてくると思うので、生きいて欲しいし、私は殺したくないです。

(深川) 有り難うございました。他に何かありますか。

(板倉) 板倉由香です。私の妹は耳が聞こえなくて、1級の身体障害者なのですが、でも、母は、そのときすごく悩んで、責任を感じたのです。父の方の祖母からもすごく責められたりして、全部あんたのせいや、みたいにいわれて、死ぬほど悩んだと思うのです。だけど、やはり、妹がいてくれて私の人生も違ったと思うし、弟もいるのですが、たとえば、もし、妹が殺されていて、2人姉弟だとしたら、ぜんぜん違うものになっていたと思うし、妹がいてくれて良かったことは、本当に数え切れません。腹の立つことも数え切れないですけど。

それは、さっき言ったように、やはり、嫌いなことも自分にとっては良いことだと思うし、昨日の夜、部屋で話をしていて、出てきた話なのですが、どんな人でもいる限りは、必要な人であるし、生まれてきた限りは必要な人であるし、老人ホームの中で働いている方がこの班の中にいらして、その話になったのですが、問題行動をすごくされて、はたからみたら、普通に迷惑なのですね、その人の行動は。だけど、老人ホームで働いている方の立場からしたら、その人が例えば、明日からいなくなってしまったら、ずっとお世話してきた人は生き甲斐がなくなる、世話する人が明日からいないとなったら、生き甲斐がなくなるのですね。だから、逆に、その人のことを助けてあげている、仕事で助けてあげていると普通は思うのですが、老人ホームで働いている人も、逆に老人がいらっしゃるおかげで、喜びをもって、治るのではないかとか希望をもって、毎日仕事をすることができるし、生かされているのだなあというふうに、すごく感じました。昨日、目が見開かれる思いがしました。

(深川) 有り難うございました。他に何かございますか。何でも結構です。いろんな考え方があるかと思います。

(奥田) B班の奥田奈央です。私も、生まれてくる、ということ自体が、すごく奇跡だと思うので、大変なこともあると思うし、私は子どもも産

んだことないし、身体障害者の方とも深いかかわりはないのですが、苦しいこととかもわからないですが、授かったらかには育てたいし、いろんな苦労も一緒に乗り越えていきたいと思います。

(深川) 有り難うございました。先程の問題にちょっと補足しておきます。手のない子どもが生まれた時、君なら殺すのか生かすのか、という質問に対し、ある女子学生は、「その子が苦しまずに死ねるのであれば殺します」とか、「殺しても罪とならないのであれば殺します」という答えがあり、更に、「私はどんなことがあっても、神様から与えられた命を守ります」という答えもあったのです。

あの時の、今井先生の解説は、どの答えが正しいかということではなくて、今井先生のお心は、福祉社会とは一体何か、ということを問いかけておられたのであります。つまり、生かすか殺すかの問題ではなくて、問題は、そのような手のない子どもが産まれた時に、この子は将来不幸になるという考え方自体が問題なのであります。

つまり、現在のような効率一辺倒の社会で生きていますと、手のない子供どもは働くことができない、生きていけない、見捨てられる、結局、不幸になる、したがって殺す、という論理になるのですね。

そうではなくて、これから福祉社会を築こうというのであれば、手のない子供も、身障者も老人も皆でお互いに支え合って生きていく社会、それが本当の福祉社会であって、手のない子どもが不幸になるという考え方は、今の競争社会にある効率の論理に支配された考え方だといわなければなりません。

したがって、新しい福祉社会を築こうとするのであれば、今までの効率一辺倒の考え方を改めて、新しい社会に合った論理を身につけなければならないのではないか、そうでなければ本当の福祉社会は実現しないだろうというのが、今井先生のその時の解説であったと思うのであります。

今日の色々な問題については、一番最後に今井先生からコメントいただきたいと思いますが、その前にもう一つ、幸せということについて、一つの物語を紹介しておきます。これは、今の天皇陛下が未だ皇太子殿下であられた時の話であります。

皇太子殿下が、宇治の黄檗宗の総本山であります万福寺をお訪ねになりました。接待に出られた御老師は、「私は禅坊主だから、この寺が紀元何年に建てられたとか、この扁額は誰が書いたとか、そんな愚劣な話をするわけにはいかない」と言って、皇太子殿下に、「韋駄天」という仏様の話をなさったのであります。

仏様にも色々と位がございまして、一番高い位におられるのが、阿弥陀如来とか、大日如来とか、いわれるように如来という字がつく仏様であります。その次の位におられるのが、普賢菩薩とか、勢至菩薩のように菩薩という字のついた仏様であります。そして、更にその下の位におられるのが、毘沙門天、帝釈天のように天という字の点いた仏様であります。その中に、韋駄天という仏様がおられます。この天の字のついた仏様は、どのような仏様かと言いますと、私達の日常生活万般のことを司る仏様のことを言うのであります。この日常生活万般のことを司る仏様の中に韋駄天という仏様がおられるのであります。この韋駄天という仏様は、どのような役目をもった仏様かといいますと、夜のとばりに終わりがまいりまして、東の空が白んでまいります。やがて山の端に太陽がちらっと覗きます。サッと朝日が大地にさしこんでまいります。その一瞬をとらえまして、仏様の懐から出て、仏様の御使いとして、全世界の家庭を訪れます。そして、今井先生のお宅へ行って、扉を開けて、「この今井家に今日一日仏の幸せがありますように」と祈ります。そして、隣の安平先生のお宅へ行って、

扉を開ける、「この安平家に今日一日仏の幸せがありますように」と祈ります。そのように致しまして、朝日が大地に差し込んできたその一瞬のうちに、全世界の家庭を訪れて仏の幸せを祈り、そして一瞬のうちに舞い戻って、「ただいま全世界の家庭に仏のメッセージを送ってまいりました」ということを復命する役目をもった仏様のことを韋駄天というのであります。

韋駄天というのは、「韋駄天のごとく走る」と言うように、非常に早いことの形容に使われてますが、その本来の意味はこの物語からきているのであります。

御老師は、皇太子殿下に、「あなたは、やがて天子様になられるお方であります。今日の老僧との出会いを大切になさって、この世の中に、毎朝すべての人の幸せを祈る韋駄天という仏のいることを心に留めておかれますように」というお話をなされたそうであります。

皆さん、お聞きになって判りますように、これは、帝王学の根底に流れる思想を説いております。私達、人間でありますから、好きな人もいます。しかし、この世の中には憎い人も嫌な人も色々な人がいます。しかし、色々な人がいるけれども、その全ての人の幸せを毎朝祈る、この韋駄天の心は、天子様にとっては欠くことのできない心であろうと思うのであります。更に、私は、天子様に限らず、この韋駄天の心は、私達みんなの心の中にあって然るべきものだと思います。

特に、会社の社長さんでも、毎朝、自分の部下将兵の幸せを祈る心をもって会社に出てくる社長さんと、社員などは出来るだけ安い給料でこき使って、自分の収入が増えればよいと思って会社に出てくる社長さんとでは、会社の在り方が違ってくるだろうと思います。毎朝、部下将兵の幸せを祈って会社に出てくる社長さんの会社は、おそらく、どんな不況期にも潰れることはないだろうし、隆々と栄えていくだろうと思います。

このように、幸せを祈ることは、人間関係改善の基本なのであります。したがって、会社の社長さんだけではなく、この世に生きている全ての人達が、このような気持ちをもっておれば、この世の中はもっと明るくなるであろうと思うのであります。このことを説いたのが、先程のニティッシュ・ラハリーであります。

「世界中のどこかの片隅に、一人でも不幸の人がいる限り、我々ロータリアンは永久に幸せになることができない。心の中に火を燃やそう」。したがって、すべての人の幸せを毎日祈ろうというのであります。それは、ロータリアンとしての務めでもあるし、更に、私達生きとし生けるもの全ての人の心にあって然るべき問題であろうと思うのであります。私達一人ひとりが自分の心を磨く、即ち、徳性を磨くことによって地域社会の徳性が磨かれる。そして、地域社会の徳性が磨かれることによって国家の徳性が磨かれる。国家の徳性が磨かれたら、あの忌まわしい戦争は起こらないだろう。このような心がニティッシュ・ラハリーのターゲットには籠められている、と理解すればよろしいのではないかと思います。

今日は、幸せということ、それから、感謝ということ、それから、人間の命、生きる、その他色々のことについてディスカッションをしてまいりました。あと10分位時間があります。今井先生、総括として何かお願いできませんか。そうですか、わかりました。明日また、素晴らしいお話が聞けると思いますので、それは、明日の楽しみにとっておきたいと思います。皆さん方、ほかに何か言いたいことがあればおっしゃってください。

このライラの3泊4日は、皆さんの人生に二度と戻ってこない3泊4日間なのです。最後まで楽しんでください。そして、言いたいことがあれば今のうちに言ってください。あとで後悔しないように。

(板倉) 今の話をきいていて、本当にそれはそうだと思います。毎朝すべての人の幸せを祈る。それは本当にできればいいなあと思うけれど、それが、実際問題としては、ちょっと、やはり、難しいところがあるのではないかなあと思ったのです。例えば、そういうふうに、おっしゃるのですけれども、ロータリアンの方も、こんなこというと失礼にあたるのかもしれませんが、たとえば、明日帰って、家が放火犯によって燃えていたとして、その放火犯のために、明日幸せになるように祈れるか、といったら、実際問題無理なのではないかと思うのです。だから、やはり、人間というのは、完璧に人を愛することはできない、限界をわきまえて、やはり、過度になると問題なのですが、自分のことをまず大事にして、それから、他人を愛することができるのかなあとすごく今、思いました。

(深川) 有り難うございました。だけど、板倉さん、クリスチャンの立場からいうと、放火犯も許すのではないですか。

(板倉) 新米なもので…。

(深川) 判りました。お気持ちはよく判ります。他に何かありますか。特になければ終わりましょうか。もう、皆さん、お疲れのようですから。キャビンタイムでお酒も飲みたいでしょう。あまり、長々と喋っているのも失礼にあたると思います。では、これで閉講します。有り難うございました。(拍手)

A班

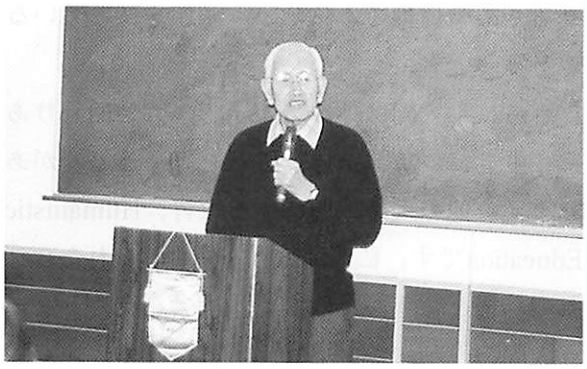
B班

C班

D班

新たな社会へ生きる

国際ロータリー元理事
今井（いまい）　鎮雄（しずお）先生



今回のライラのテーマ「生きる」について、３人の先生からお話をうかがいました。最初は宝山先生から、日本の教育システムについて。昨日は関先生から環境について。深川先生は難しい問題を投げかけられました。人間は、常に混在する問題を抱えながら生きている、ということでしたね。今日は「まとめ」ということで、３人の先生方の講義を踏まえて話をします。

最初に、小学５年生の子どもの詩を紹介します。

「僕は一生懸命勉強して東大に入る／　それから大蔵省へいって／
お母さんを立派な老人ホームに入れてあげる」

皆さん、笑っていますね。でも、世の親は子どもにこう言っていませんか。「一生懸命勉強しなさい。勉強しないと偉くなれない、お金も儲からないよ」。子どもは、「お母さんがそういうなら、勉強する」。親の世代で日本の最高学府といえば、東京大学です。現在は順位が下がっていますが、当時は世界の大学ランキングでも10位以内に入っていました。東大を卒業してどうするか、大蔵省に入る。（今の財務省です。）お母さんは年をとったら住み心地のいいところで暮らしたいといっていたな。よし、お母さんを立派な老人ホームへ入れてあげよう。この小学生は、親が望むとおりのことを詩に書いただけです。それを皆さんが笑うのは、親が子どもに託す希望はそういうものではないよ、という思いがあるはずです。

今井　鎮雄先生
神戸西ロータリークラブ会員
国際ロータリー第2680地区パストガバナー
神戸ＹＭＣＡ顧問
1984－1989　国際ロータリー少年活動委員
1995－1997　国際ロータリー理事
1999－2000　国際ロータリーＲＹＬＡ委員
兵庫県青少年愛護審議会会長
（財）兵庫県青少年本部理事長
（学）啓明学院理事長
（社福）ひょうご渉外福祉事業協会理事長スペシャルオリンピックス日本・兵庫　会長

もうひとつは、高校生の男の子の話です。筋ジストロフィーという病気で、余命がいくばくもないことを知りました。残された時間を人間として立派に生きたいと考え、学校の先生にどうすればいいか相談しました。先生方は、この子にとってよく生きるとは、英語の単語を覚えることでも数学の問題を解くことでもないはずだ。人が生きた証を残すとはどういうことなのだろうと考えこんでしまったということでした。

社会で生きていくために必要な教育、読み・書き・そろばん（いまならコンピューターでしょうか）をTechnical Educationと呼びます。これは

内容が日進月歩しますので、常に新しいことを学ばねばなりませんが、大事なことは、学んでいる人間が、習得した知識や技術は社会に役立たせるための道具であるという認識を持っているかどうかです。

さらに、人間は地球上の全ての人と関わりあって生きている、ということを考える必要があります。他の人を大切にする教育、Humanistic Educationです。私だけお腹一杯食べられたらそれで結構というのではなく、社会を支えるという人間の役割について考える教育です。遠く隔たった国の、見知らぬ「隣り人」を思いやる心を育むことが大切です。

生きるということ

今回のＲＹＬＡで「生きる」ことをあらためて問おうとしたのは、“一人の人間の命は限りなく尊い”ということを自覚することが大切であり、参加者の皆さんに考えていただくためです。

昨日、若い母親がサリドマイド被害を受けたわが子をどのように扱ったかという実例が挙げられました。裁判では、母親は子どもが憎いからではなく、かわいそうだから早く安らかにしてやりたいと思って殺したとの主張でした。それに対して深川先生は、たとえその子がサリドマイド児であっても、与えられた命を大事にするのが人間ではないかとおっしゃいました。

重要なのは、人が他の人の「生」を限りなく尊いものと考えること。生きていること自体が尊いのです。どのような状態にあっても、子どものために祈り、愛を注ぐのが人間だ。一人の人間にはそれだけの価値があるということを、全ての人が認識しなければなりません。

『五体不満足』の著者の乙武洋匡さんは先天性四肢切断で、移動するときは特別な電動車椅子が必要です。彼の日常生活の様子を見て多くの人が、よく頑張っているなと感心します。乙武さんがこの本で言いたかったことは何か。

彼が生まれたとき、お父さんや周りの人は、この子は将来苦労するだろうと考え、母親がどう思うか心配し、しばらく母と子を会わせなかった。しかし、いつまでも会わせないわけにはいかない。自分の産んだ子になかなか会わせてもらえなかったお母さんは、乙武さんを最初に見たとき「まあ、かわいい」とおっしゃったそうです。お母さんのこの言葉には「この子は私の大切な愛する子」という意味が含まれています。最初にお母さんが、まあ、かわいいと言ってくれた、その言葉によって自分はいま生きているんだ、と書かれています。

阪神淡路大震災の直後から、ロータリーは緊急支援を始め、長期にわたって様々な救援活動に取り組みました。震災ボランティアの例をひとつ挙げましょう。

大震災のあと、ＲＹＬＡ修了生も含め、全国から多くの人がボランティアとして被災地に来てくれました。若いボランティアの皆さんには、二つの働きをお願いしました。避難所に入らず自宅にとどまっている高齢の方々を訪問し、救援物資を届け、声がけをしてご様子をうかがうこと。昼間、親が被災の後片付けをしている間、子どもたちの世話をし、震災のＰＴＳＤから立ち直らせ、元気をとりもどせるようなプログラムを行なうことです。

一人の女子学生が、ボランティア活動を通して高齢者の方々と顔見知りになりました。あるお年寄りの自宅を訪問し、今日はリンゴを届けにきました、と声をかけました。壊れた家の後片付けをしていたおじいさんは独り言のように、リンゴを食べる気力もない、家族も亡くし家も壊れて一人になってしまった、もう生きていてもしょうがない、とつぶやいた。それを聞いたボランティアは、その人のこれから先のことを考え、どう慰めていいのかわからず涙が出たそうです。おじいさんはそれに気付いて、私のために泣いているのか、とボランティアに尋ね、彼女が

頷くと、「あなたを泣かさないように、私も元気を出すからね」。ボランティアの学生が私のために泣いてくれている。この子を泣かせないためには、私が元気を出せばいいんだ。死んでもいい、なんて思わないで、生きることを考えよう。「ありがとう。リンゴを食べて元気を出すよ」。このボランティアは、人に生きる勇気を届けたのです。人間が他の人の事を思いやることで、生きる勇気を与えることができるのだろうかと考えるかもしれませんが、このボランティアの働きは、それほど大きな意味を持ったのです。

もうひとつ、震災後のロータリーの働きに「『子どもの死』の意味を考える」というテーマの座談会があります。震災で小さな子どもたちが５６６人亡くなりました。何の罪もない幼な子がこれほど大勢亡くなったのはどういうことなのか。急な呼びかけで、準備も十分整わないまま先生方に集まっていただきました。

須磨寺の小池良三管主。仏教の見地から見た子どもの死について。神戸教会牧師の岩井健作先生は、キリスト教哲学からみた子どもの死について。先日亡くなられた文化人類学者の米山俊直先生は、アフリカの部落の中では人の死がどのように受け止められるかを話してくださいました。関西学院大学の荒川義子教授、神戸大学の鈴木正幸教授と三木市教育委員会の阿部扶早さんも出席、震災のため、親の目の前で亡くなった子どもたちの死は、残された私たちにどんなメッセージを伝えようとしているのかを考えました。それは、私たちが今、なぜ生かされているのか、ともに生きる私たちの仲間とは誰か、を考えることでした。

人間がモノ化して、人が持つ機能とか役割の側面だけで関わる傾向が強くなり、社会が「ともに生きる場」から「機能的なつながりの場」になるにしたがって、生きるということ、あるいは私たちがなぜ生かされているかということについて、あまり考えなくなったのではないでしょうか。人間としての命の大切さや尊厳が重視されなくなったということです。

さて、人類の祖先がいつ現れたかということは、はっきりしません。一番古いといわれる人類の足跡の化石がアフリカのエチオピアで見つかり、それを調べると人類の祖先は300万年前には二本足で立っていたことがわかり、そこから類推して5～600万年位前からすでに人類がいたと言う学者もいます。それから現在までの長い年月、弱い動物である人間は生き延びるために群れをつくり、集団で行動し、助け合いながら生きてきました。

アフリカに現れた人類の祖先の中でそのままアフリカに残った人々はニグロイド。食糧を求めて北へ移動した人々はコーカソイド、白人の祖先といわれます。北上したグループがシベリアを通って下のほうへ降りた人々、あるいは北米へ渡って南米まで続くインディオの人々は、モンゴロイドと呼ばれ、人種の三大区分といわれます。

やがて人類は狩猟採集の時代を経、定住して農業を営むようになり、文化が生まれました。今から５～６千年前、遡っても１万年前です。未来学者のアルビン・トフラーは、著書『第三の波』で、約１万年前に農業革命（第一の波）が起きて農耕文明社会が出現したと書いています。農業を中心に人々が集まって生きていくこの文明は、現在も続いています。農耕文明社会では大家族制度（社会学でいう拡張家族）のもとに、大勢の人が力を合わせて農業に従事します。あの方角から風が吹き始めると冬が来るとか、あそこに雲がかかると雨が降るという、経験をもとに判断のできる長老が尊重されます。

今から250～300年前から、人間は次々と新しい知識や技術を見出しました。万有引力を発見し、蒸気機関が発明され、電力が利用されるよう

になりました。産業革命が始まり、工業化社会が興ります。科学の進歩は技術を発展させ、効率のよい社会を生み出しました。工業化社会では知識と技術が重視されます。人々は村を離れ、労働者として工場の周りに移り住み、家族の形態は「大家族制・拡張家族」から「核家族」へと変化します。

工業化社会はあっという間に進展し、新しい知恵や技術で人々の生活は大きく変化しました。たとえば教育。古くは特別な階級の人々、貴族とかお坊さんとか神主さんとか神父さんは学問をしましたが、一般の人々は子どもの教育にそれほど熱心ではなかった。農耕社会では子どもたちは親のやることを真似ながら学びました。産業社会では科学・技術が進み、人々はその進歩に追いつこうとして「読み書きそろばん」を勉強します。効率のよい社会を作ろうと努力し、その結果、産業社会の特徴である大量生産によって、より安価でより多くのモノを人々へ提供できるようになりました。

アルビン・トフラーが書いているように、人類が狩猟採集の時代から農業革命（第一の波）を経て農耕社会へ、産業革命（第二の波）を経て工業化社会に至り、つい４～５０年ほど前、それが急激に変化しました。新しいコミュニケーション技術（Information Technology）革命（第三の波）による高度情報化社会の誕生です。

ＩＴ革命より以前に生まれ育った私たちと、その後に生まれた皆さんは、考え方が異なると思います。時代が変われば人間の生活も変わり、知識も技術も人間性も異なってきます。同じ時代に生きる人間でも、それぞれの社会やグループ、家庭など環境の影響を受けながら、人間一人ひとりの性格が形づくられます。

文化とパーソナリティ

地域の持つ価値体系は文化と呼ばれ、個人の持つ価値体系はパーソナリティと呼ばれます。この二つは釣り合うようになっているのですが、人間は移動し、大勢の人に出会い様々な体験をしながら生きているので、文化とパーソナリティは、いろいろな組み合わせになるのです。家庭や地域や国など社会の構造と触れ合うことによって、その環境の持つ価値体系が、各自の価値体系に植え付けられます。

よく言われるように、アメリカ人はアメリカで育つからアメリカ人になる、日本国籍を持つ人でも、生まれたときからアメリカに住み、アメリカの慣習の中で育つと、考え方もアメリカ的になる。ある地域の持つ価値の体系が、そこに住む人々の価値の体系を形作ります。いろんなパーソナリティを持つ人が住んでいるようでも、外部のグループと比較すれば、一つの同じ価値体系なんです。

日本は他の国々と海で隔てられた国で、日本に住む人々の間には日本的な考え方が生まれました。その日本的な考え方が一つの体系となり、個人の考え方に反映し、「日本人らしさ」という性格を持った人間が育つ。これを人格（Personality）と言います。日本人がアメリカへ行けば、アメリカの持つ価値体系は日本とは大きく異なるので、最初は戸惑うでしょうね。

私が国際ロータリー理事として、フランスのニースで最初の会議に出席したときです。一日の会議が終わり皆で一緒に夕食をとりました。理事会のメンバーと夫人の30名がレストランで食事をとったあと、帰りのタクシーがなかなかつかまらない。しかたなく別々にホテルへ戻ることにしました。日本人が見知らぬ土地で迷うと困るだろうという計らいで、私たち夫婦は、もう一組の夫婦と一緒に早く来たタクシーで戻りました。

先にホテルに着いても、私は仕事がら（キャンプ・リーダーもするんですよ）心配性なものですから、他の人の帰りを見届けることにしました。次のグループが帰ってきて、おやすみといって

部屋へ戻る。シズオは戻らないのかと聞くので、「後の人が帰ってくるのを待ってるんだ」。そうか、といってその夫婦は引き揚げる。最後のグループがホテルに戻ってきました。「今まで待っていてくれたの？」「仲間だからね」。日本では別に不思議な光景ではありません。シズオ夫婦は最後のメンバーが戻るまで30分も待っていたんだ、日本人は配慮があるな。そんなつもりではなかったんですが、一挙に日本人の株が上がりました。

反対の場合もあります。日本人は女性が座ろうとしているのに、椅子を引いてあげない。女性が座ってから男性が座るのが礼儀というものだ。日本では威張っているご主人が、アメリカに行くと奥さんを一生懸命たてている。レディー・ファーストの国ですから、慣れないので苦労します。ところが付け刃のマナーですから、関西国際空港へ着いた途端、元の亭主関白へ戻ってしまう。

私が始めてアメリカへ行った1950年代、ウィスコンシン州の小さな町で研修を受けました。町の教会の夕拝に出席すると、牧師さんから、どこから来ましたか、と聞かれました。日本ですと答えると、「今日は珍しい日本の方が来られたので、パーティーをしましょう」。全員で１４名ほどで、お茶とクッキーがふるまわれました。いつ来たの、何をしてるの、そんな話をしていると、私の大好きなチョコレートを持ってきてくださったんです。皆さんならどうします？有難うといって、チョコレートを受け取りますよね。ところが、日本人の私は、年上の方へ先に回すのが礼儀だと思っていました。その場で一番若かったので、配っている方に、あちらの方からどうぞ、と言ったんです。でも、若い人がチョコレートをつまんでいる。あれ、私のところには回ってこない。「あなたは、チョコレートが嫌いなんですね」。日本の礼儀作法は、アメリカでは通用しなかった。チョコレートを通して彼我の文化の違いを身にしみて体験しました。

これは単純な例ですが、外国の人々と日本人は異なる価値の体系を持っているということです。アメリカ人はアメリカの価値と文化を大切にし、日本人は日本の価値と文化を大切にします。国や社会の持つ価値体系が個々の人格に影響することも、おわかりいただけると思います。

家族、グループ、地域社会、国、もう少し広い範囲で捉えると東洋と西洋など、価値の体系は違いますね。サミュエル・ハンチントンは『文明の衝突』の中で、文化（価値体系）の違いが摩擦を生む、といいました。「地球社会」とひとくくりにいっても、たとえば最近ではイスラムの国々が持つ価値体系と私たちの価値体系は違うと感じたことはありませんか。違うから悪いとか、どちらがいいとか悪いとかではなく、「異なる価値体系がある」ことを、皆が認識することが大切なのです。

フロイトは、人間の心に三つの要素があるといいます。ひとつはエス、あるいはイドともいいますが、人間が本来持っている自然な欲求。食べたいとか、欲しいという気持ちで、人間以外の動物も持っています。二つ目はエゴ。自我と呼ばれるものです。自我とは欲望。私のものにしたい、人より余計に食べたい、人よりいいものにしたいという欲望・欲求です。三つ目はスーパーエゴ。超自我といわれるものです。これは仲間と一緒に生きることによって生まれます。人間は弱い動物なので、単独では生き延びられない。仲間を作って一緒に生きていく。そのグループの中で一定のルールができ、それにしたがって自分の欲望をコントロールするようになります。人間は欲望が生まれても、社会生活を通して“この程度で我慢しなきゃならないと”か、“このように対処しなければならない”と考えるようになります。社会の価値体系が自らの価値の基準になります。

身近な例としては、家族の中でお父さんやお母さんは子どもに、人に迷惑がかかるからそんなことしてはいけません、とたしなめたり、ご飯を残さず食べていい子ね、と誉めますね。すると子どもは、こんなことをしてはいけないとか、ご飯を残さないのはいいことなんだと理解します。お父さんやお母さんと子どもの間に信頼関係があって、その中で誉められたり叱られたりすると、お母さんはこんなに私を愛してくれているんだ、お母さんの愛に応えよう。他者への信頼に応えるかたちで、人間の本来的な気持ちが超自我を育てます。これが良心と呼ばれることもあります。良心は人に初めから備わっているのではなく、他の人のことを考えるときに、形づくられていくものです。

子どもの頃の体験は特に重要で、お父さんやお母さんが子どもをしっかり受け止めてあげることが大切です。子どもはお母さんに抱かれると安心します。その安心感の中で、自分は受け入れられている、お母さんがしてはいけないということはやめよう、と感じるのです。理屈というよりも、子どもは「感じとる」のです。

少年犯罪が増えたと言われますが、そのうち純粋に犯罪と呼べるのはどの程度でしょう。子どもの置かれた環境が問題であったり、社会がそれを許していたりと、犯罪に至るまでの様々な段階があります。ホームレスの人をいじめる風潮が社会にあるなら、少年がホームレスをいじめても、その社会の大人は少年に何か言う資格はあるでしょうか。事件が起きたあとで、これはだめ、あれはいけないと言っても、なにも解決しません。社会がどのような価値体系を持っているか、そして子どもたちはがその中で育ち、その価値体系に影響されていることを、大人がまず知っていなければなりません。

通信手段の変化は、人の繋がりのあり方を大きく変化させました。最近は大半の人が携帯やパソコンを使って連絡をとりますね。感覚的な繋がりはありますが、パーソナリティを安定させることは難しくなりました。このような環境では、子どもがこういう悪いことをしているから禁止しよう、というやり方では青少年問題は解決しません。もっと基本的な問題、すなわち家族や社会がどのような価値体系を持っているか、が重要です。犯罪が起きて、犯罪者だけを罰しても、根本的な問題は解決しない。社会が価値の体系を見直さないかぎり、何もよくならないのです。

人間のパーソナリティは、環境や時代によって変化します。たとえばA市から集団就職などでB市に移り住んだ青年の犯罪率が、もともとB市に住んでいる青年のそれより高いとしましょう。それは「A市の青年」が悪いのではなく、A市の青年がB市という新しい環境に適応できずドロップアウトし、非行に向かう率が高くなるということです。人間のパーソナリティは横の移動に大きな影響を受け、ときに崩壊し、犯罪につながることさえあるのです。

同様に、社会構造の変化も価値体系に変化をもたらします。例えば私の持つ価値体系と、世代の違う皆さんの持つ価値体系は、違うはずです。同じ日本の文化でも、年配の人と若い人が持つ文化は違います。違うけれども、互いに絆を切ってしまわないで、一緒に話し合う努力、共に考えようとする努力が大切なんです。

20世紀を振り返る

18世紀から始まった産業革命は工業化社会を興し、やがて効率優先の資本主義経済は大量生産・大量消費の時代をもたらして競争社会が生まれ、消費者の購買意欲を高める努力が続いています。私たちは今までそのような社会の中で生活してきました。そこでは人間について考えることは、後回しにされがちでした。ところが20世紀の終わりから、モノの豊かさと真の幸福

は違うのではないかと、人々が気づき始めました。社会のあり方はこのままでいいのかという反省が生まれ、次世代を担う人たちをどう育てるかを真剣に考えねばならなくなったのです。

21世紀に入ってすぐ何人かの学者が集まり、20世紀は人間を幸福にしたかというテーマの研究会を開きました。18世紀、19世紀に較べれば、２０世紀は物質的に豊かになった。しかしそれが人間の幸福といえるだろうか。いろいろ議論された結論は、人間は20世紀に効率の世界を追い求め、欲望を満足させることができたが、幸福になったかといえば疑問が残る、というものでした。

人間の欲望には限界がありません。あれも欲しい、これも欲しい、もっとこうしたい等々、欲望を満たすために莫大なエネルギーが消費され、その結果、地球の資源は枯渇しかかり、環境破壊、温暖化現象が進みました。関先生のお話のように、石油など化石燃料は、埋蔵量を使い果たしてしまえば終わりです。石油や石油製品に大きく依存した今のような生活は、変えねばならないということです。

さきの結論のように、「欲望の充足」と「幸福」は同じものではありません。これが新しい世紀に生きる人間の課題です。東京工業大学の今田高俊教授は、『意味の文明学序説』の中で、次のように書いています。“貨幣と権力によるシステム社会の実現が人間に幸福をもたらすと思い、これを追求し、物質的な所有感心の一定の成果を挙げた。”モノが豊かな社会になったということです。“それゆえに、生きる意味を求める存在への問いかけがないがしろにされ、人間の生活空間に歪みが生じた。”すなわち、生きるとはどういうことかについて考えることを忘れ、とにかくモノがたくさんあるのがよいことだ、新しいモノを作り出すことが大事だという風潮が生まれた。人々が生きる意味、なぜ私が存在するのか、という問いかけをしなくなってしまったといわれます。

今田教授は、生の力と生活世界に立脚した新たな文明、すなわち、生きる意味を追求する文明の可能性を探したい。経済社会がグローバリゼーションの波に飲みこまれ、モノが先行し、生きている人間が忘れられてしまうような社会になった、21世紀は、人間が生きていることの大切さを問い直さなければならない、と書いています。難しいですが、生活空間、すなわち私たちの生きている日々の生活に歪みが生じ、モノさえあればよいと錯覚を起こしているということです。

日本は開発途上国と比べるとモノは豊かになりました。この頃の若い人たちはステーキを食べてもあまり嬉しそうな顔をしないですね。昔の日本の子どもなら、なんでもいいからお腹一杯食べられたら幸せ、と思ったものです。物質的に豊かな社会になると、あまり他人のことを考えなくなるという傾向はないでしょうか。ネパールで５歳の女の子にお菓子をあげると、幼い弟や妹に分けることを考えていました。今の日本ではどうでしょう。

第二次世界大戦は、帝国主義と民主主義という二つのイデオロギーの戦いであったといわれます。明治以降の日本は国土が狭かったので、イギリス等と同じように帝国主義的な考え方をとりました。その戦争が終わったとき、負けた日本は朝鮮半島、台湾、樺太をそれぞれの国に返還し、そこに住んでいた日本人は、日本へ引き揚げました。植民地を手放したのは敗戦国だけではありません。戦勝国のイギリスはインドを独立させ、スリランカを解放、オランダは石油のために占領していたインドネシアを返還、フランスはベトナム、ラオス、カンボジア(仏領インドシナと呼ばれていました)を解放しました。第二次

大戦終戦を機に宗主国は植民地に、自分たちで国を作ってくださいと返還し、独立させました。民族自決主義が謳われ、資源や労働力を搾取されていた国々は次々に独立し、新たな国家が生まれました。かつての植民地は宗主国の政治権力からは解放されましたが、経済的にはまだその支配下にありました。

第二次大戦直後の1945年10月、国際連合（国連）が正式に発足しました。国連は、失敗に終わった国際連盟の二の舞をしないように、新たなあり方を考えました。国連が国や政府の代表（Governmental Organization）だけの集まりなら、それぞれが国益優先で自国の利益を代表することになり、国連決議は国力の強い国の意見が通ってしまう。国力の強い国が他の国に対して権力を振るってはいけない。そこで人間の幸福を追求する非政府組織＝ＮＧＯ（Non－governmental Organization）グループからも代表を出してもらい、世界の動きを「国」ではなく「人間」の見地からともに考え、発言してもらおうとしました。これが国際連合を創設する重要なポイントでした。国連に加わっているＮＧＯの主なものには、世界仏教連合会、世界キリスト教協議会、赤十字そして国際ロータリーなどがあります。

1945年11月、パリに各国を代表する政治家や著名な指導者が集まりましたが、そのうちの大半がロータリアンでした。文化、科学、芸術など人間に関わるテーマについて研究・協議し、それがユネスコ（国際連合教育科学文化機関）になりました。ユネスコの創設に多くのロータリアンが貢献したということは、ロータリーの理想がユネスコに活かされているといえます。

ロータリーには「ポリオ・プラス」というプロジェクトがあります。地球上からポリオを一掃しようとする壮大なもので、実行はたいへんで経済的にも多額の経費がかかります。それを誰が応援したか。「もしロータリーが人間一人ひとりのことを真剣に考えるならば、国連が応援しますよ。国連が応援すれば、各国も応援するでしょう」。ロータリーは個人の小さい集まりであるにも関わらず、このように国際的な視野から期待され、その活動を国連も応援してくれています。

日本政府がポリオ・プラス・プロジェクトに多額の寄付をしてくださったので、ロータリーの代表の一人として政府へお礼にうかがいました。当時の首相は橋本龍太郎さんでした。橋本さんは、ロータリーはすばらしい団体ですね、でも政治家はなかなか入れてもらえませんね、そんなことをおっしゃっていました。

新たな社会へ

21世紀を迎えたいま、どうすれば調和のとれた新しい世界を作ることができるでしょう。自国の安全を自国だけではとうてい守ることができなくなり、国ですら自国民の安全を保障できなくなりました。では国としての安全保障をどのように構築すればよいのか。世界の人々の安全すなわち平和をどのように考えればよいか、が世界的な課題になり、国連の中に「人間の安全保障委員会」が設置されました。これを最初に提唱したのは日本です。

1998年（平成10）に小渕首相（当時）が「人間の安全保障基金」の設立を発表、2000年に森首相（当時）が国連ミレニアムサミットで「人間の安全保障委員会」設立を呼びかけ、2001年、国連に「人間の安全保障委員会」が設置され、その共同議長にノーベル経済学賞受賞者のアマルティア・セン教授と、難民高等弁務官を務めた緒方貞子さんが選ばれました。セン教授は、これからの経済学は生産を中心に置くのではなく、人間を幸福にする経済のあり方を考えるべきだと発表し、1998年にノーベル経済学賞を受賞されました。国益をめぐって紛争するのではなく、全ての人間がともに幸福になれる方向を探ろうとい

う研究をされています。緒方さんは、ご存じのように若いときにロータリーの奨学生としてアメリカへ留学、政治学を勉強されました。第８代難民高等弁務官として、国連という国際関係の調整の場で平和をもたらすために活躍された方です。

世界が行き詰まってしまう前に新しい論理を考えなければならない。効率や生産を追求する社会から、人間一人ひとりの生活を大事にする社会へ。そういう気運が生まれてきました。

ブータンは、インドと中国に囲まれた小国です。近隣から侵略される危険があるというので、最近まで鎖国に近い政策をとっていました。ブータンは、周囲の先進工業国の状況をみて、工業発展や経済競争だけでは、国民の幸せは得られないと気づいて、「生きること・人間とは何か」を追求する国になろうと考えました。国民の豊かさを国民総生産ではなく「国民総幸福量」で表し、伝統文化や自然環境を大切にしよう。効率優先ではない国のあり方を考えよう。「足るを知る」という生き方ですが、仏教の思想が影響しているようです。

たとえば山の中にバスを通す場合、住んでいる人には便利になるだろうが、道をつけるために木を伐採しなければならない。森林を切り拓くと資源(Natural Resource)を壊すことになる。水資源にも悪影響が出るのではないか。それでは将来、住民が困るだろう。真の豊かさを考えるなら、森林は残そう。では、道を作るのはこの地点までにしよう。自然のサスティナビリティ(継続性)をポリシーとして、ブータンの発展のあり方を考えよう。プリミティブで分かりやすいのですが、ブータンはそれをナショナル・ポリシーとして２１世紀の国家のあり方を考えることで、世界の関心を集めています。

最近、ロハス（Lifestyle of Health and Sustainability)という言葉がよく聞かれます。ライフスタイルのひとつで、人間の生き方を健康と環境の継続性という二つの側面から捉えるものです。アメリカなどでもロハスという生き方を選択する人が増えてきました。関先生のお話にあったようにエコクラブ、自然を守るためのＮＰＯが世界中に生まれていますが、ブータンはそういう点でも注目を浴びています。これは世界的な変化の兆候の一つですね。

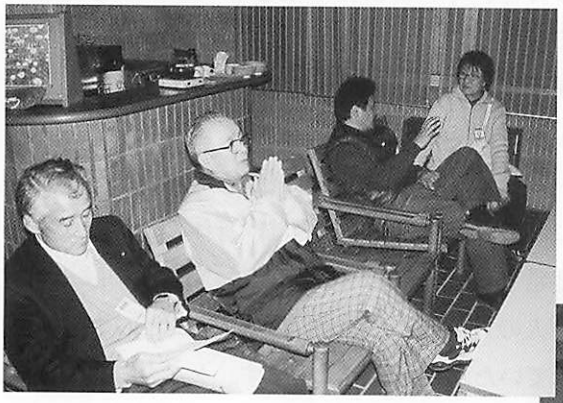
掛水ガバナーは、四国ではお遍路さんをおもてなしする心がある、これは大事なことなので、ロータリーがＮＰＯ団体をバックアップしようと思っているのですよ、とおっしゃいました。そのようなＮＰＯの支援は他の地域ではなかなかできないものですから、ぜひそのお考えを大事にしてくださるよう、ガバナーにお願いしました。

さきほどの『意味の文明学序説』で今田教授がいわれるように、ケア（Care）の本質は生きることの意味を確認すること、相手に関心を払うことです。他人のことを思いやることによって、人は自分の生の意味、生きているという実感を得るのです。相手のことを思い、人のお世話をすること、それは自分が生きていることを実感することです。ケアすることは、その対象が持つ存在の権利のゆえにかけがえのないものです。みんなが互いにケアすることによってその結果、一人ひとりが成長し、自己実現を助長することになります。福祉の目的は、身体の不自由な人が健常者と同じ仕事をすることではありません。一人の人間として、生きていることの喜びを感じていただくことが大切です。ケアとは、対象の存在の権利を認めることであり、自分の欲求を満たすために他人を利用することではありません。お世話をするということは、その代償を考えることではありません。生活の中にその意義を見出すことです。ケアにおいては他者の内在が重要です。その人のように感じること、ともに生きることが大事なのです。

２０世紀までは生産を中心とした社会が権力、政治、経済を動かしてきましたが、これからは皆が豊かになることを目指そう、それには一人ひとりの連携が重要だ、と言われています。２１世紀は、効率の社会から人間の自己実現の社会へと変わらねばならない。それが新しい人間のあり方・方向性ではないでしょうか。

ＲＹＬＡセミナーのすばらしいところは、今回のように時代の先進的な課題に取り組もうとする姿勢です。皆さんはもう一度、「生きる」とはどういうことか、人間の生きる意味とは何かという視点から、自分の価値体系を問い直してみてください。

これからの人生で皆さんは様々な問題に出会い悩むこともあると思います。そんなときに、“たしかＲＹＬＡセミナーで、生きることの大切さについて皆で考えたな、ロータリーの願っている価値の体系とはこういうものだと話しを聞いたな”と思い出していただければ有難いと思います。ＲＹＬＡで学んだことを生活の中で検証し、心に刻んで歩んでいってください。



閉講式

閉講のあいさつ

国際ロータリー第2670地区
ガバナー 掛 水 俊 彦
(高知北RC)

みなさん、こんにちは。こんにちは、というのもおかしいですけども、おつかれさまでございました。ご紹介いただきました、2670地区の掛水でございます。もう、3泊4日、ほとんど、最終段階でございます。あっという間にすみました。反対に長かったというふうに考えている方もいらっしゃるかもしれません。しかし、皆さんの印象はどうでしょうか。ひとつお聞きしたい。

この後で感想文をかきますので、ぜひ、ここでひとつお聞きしたいことがございます。ちょっと、お手を拝借というところでございますが。今井先生のあとでご挨拶をするのは非常に勇気がいります。本当に勇気がいります。できたら、消えてなくなりたいぐらいですけども、しかし、そうもいきませんので、あえて、恥を忍んでもうしあげますけども、3泊4日の会をかえりみて、全般的にみて、みなさん、よかったと思われる方、手をあげてください。ほとんど、全員といっていいでしょうね。

それでは、次に、期待以上であった方は、手をあげてください。そうですか。帰ったら友達に話したいか、友人に話したいか、という人いらしゃったら、学生さんですか。社会人？(場内爆笑)わかりました。これは私の願望ですが、年をとってもっと先になって、ロータリアンになりたいか、という方、もし、いらっしゃったら、手をあげてください。なりたい、有り難うございました。本当に、なんといいますか、皆さんの印象ききました。最初の日に私は皆さんに、2つのお願いをといいますか、ひとつは、指導者の、リーダーとして何かをつかんで欲しい、ということをお話ししました。同時にあまにもロータリーが理解されてないので、ロータリーを理解してください、ということをお願いしました。

その2つ、どうでしょう、この会が役に立ったでしょうか。私は勝手にプラスになったと考えさせていただきます。しかし、与島の3泊4日というものは、皆さんの生涯の中で素晴らしい一コマになったと、一途であったと、いうことはおそらく、何年か経ったあとでもこのように思うのだろうと思います。

私は、ロータリーはどんな会ですか、と聞かれましたら、自分のもってる職業を天職として、大切にし、素晴らしい友達を選んで、それから、周囲の地域社会、この人達に愛の手をさしのべるところだと、そういう団体であると、そういう人の集まりであると、いうことを私は素人のみなさんにはそういう話し方をしております。そのへんのところをひとつご理解してかえっていただきたい。それから、お二人の講師の先生、外部からきていただきました、宝山先生、素晴らしいお話だったと思います。最初に関先生のことをお話しますけども、科学者の立場からもお話になりました。地球を生き延びさせるためには、どのような運動がこれから必要か、というようなことにもふれまして、非常に、参考になったと思うのですが、さきほど、今井先生からも、ちょっとお話がありました。四国八十八カ所の問題ですけれども、これは、四国八十八カ所とお遍路さんのおもてなしのネットワークを作ろうと、非営利団体のＮＰＯを作ろうという動きでございます。これを中心になっているのが、昨日お話になった、関先生、この方も3人のうちのひとりなのです。一所懸命、やられております。そういう

ことも、ひとつ、みなさん、ご理解いただきたい。素晴らしい、大学の先生であるけれども、そういう行動力ももった先生であるということを、みなさん、知って頂きたいと思います。それから、もうひとりの、ほうざん先生ですが、これにつきましては、みなさん、いろんなことを考えになったと思いますが、私もほんとに、この人の素晴らしいなというフレーズが随所にみられた、ということを非常に幸せに思っております。

ちょっとだけ簡単にいくつか紹介させていただきます。これらの先生のお話を思い出していただいて、これから帰った時に何かに思い出していただいたら、幸いです。生きていてよかったと思うことですけれども、若い時は、生きるありがたさがわからなかったけれども、年をとって、いろいろ体験して初めてわかった、ということもありました。これはおそらく、みなさん、あと何十年かたったら、お考えになることだと思います。それから、人生で大事なことは人との出会い、人間に幅を、深みを作ってくれる、ライラで出会った人を生涯、大切にしてください、ということでございました。ひとつ、心の底に留めておいていただきたいというふうに思います。

それから、人との出会いは6秒で決まる、初めて目をあわせて、それから、近寄って、握手する、この6秒間のつながりが、人とのつながりの始まりであると、いうことをお話になった。素晴らしい6秒間、わずか6秒間ですが、素晴らしい6秒間になると思います。それから、好きな人と結婚するのが、素晴らしい、これは皆さん、あてはまると思います。が、結婚した人をさらに好きになるのは素晴らしいということもいいました。

みなさん、おぼえてらっしゃいますか。もうちょっと、ひとつふたつ付け加えますと若者にも厳しい言葉をおくりました。ニート、フリーターに対して。好きな仕事が無い、自分にむかない、やりがいがない、そういう若い人達がいるのです。甘えるなと、生きることは社会に世話になることである、おかえしするために、生きているのだ、社会につくせ、働け、というふうにお話になった。子どもの甘えは親の責任でもある、ということでございます。

どうか、これから結婚して、子どもをもつ時代がくると思いますので、そのへんも、心の隅にとめておいていただきたい、そして、生きていく上で大事なことは、夢をもって欲しいということです。人間は死ぬ時が一番、大切である、人生、よかった、といって死にたい、とこのように先生は最後におっしゃった。

もう一度かみしめていただきたいと思います。21世紀というのは、みなさんがこれから活躍する時代でございます。おそらく、これからの30年、40年、50年、活躍する舞台です。ロータリーアンとして、活躍していただいたら、本当に嬉しいと思います。私は、たったの4日間でしたけれども、どうか、これからの人生に生かしてほしいというふうに考えております。最後になりますけども、この3泊4日間につきまして、私が最初に申し上げました、今井先生、深川先生を中心にして、この辺のそれから、ロータリアン、たいへん、お世話になりました。それから、講師の先生、立派にお話をして頂きました。それから、まず、主役のみなさんにもよくきていただきました、ということを心から感謝したいと思います。

私は昨日のお話の中で幸せって何だろう、といわれた時、私だったら、板倉さんにいったかな、僕は幸せというのは、感謝すること、僕はそう思ってます。みんな、それぞれ持っていると思います。どうか、それぞれの幸せをもって帰っていただきたいと思ってます。小豆島のロータリークラブのみなさんにも大変お世話になりました。有り難うございました。ご苦労様でした。感謝の言葉を贈って、閉会のご挨拶にしたいと思います。有り難うございました。

閉講のあいさつ

国際ロータリー第2680地区
ガバナーエレクト　加　藤　隆　久
（神戸RC）

みなさん、おつかれさまでした。私、2680地区のガバナーエレクトの加藤隆久でございます。昨年、このライラに参加をさせていただいて、この与島という素晴らしい場所で、また、素晴らしい講師の先生方と、一緒に本当に一体となって学んでおられる姿、私は非常に感銘をいたしまして、今年はぜひ、前日参加をしようと思っていたところが、ペッツというのがございまして、つまり、会長エレクトセミナーですね。

私は、3月18日にそれがございまして、その会長エレクトのみなさんに、今年のＲＩの会長のテーマであるとか、それから、今年のこれからの私のこの強調事項、いろいろそのところで進めていくことにつきましてのお話をしたわけですが、どうしても、来れない方がおられまして、その来れない方の補講をしなくちゃいけない、ロータリーは大変厳しいところですから、その補講をうけないと会長になれないという、こういうちゃんと規約があるわけです。そこで、3名の方が、でられなかったわけですから、その補講がございまして、今年は私も昨日実は、こちらへやってきたわけです。

先日、この国際ロータリーの国際協議会というのが、アメリカのサンディエゴでございました。今サンディエゴというのは非常に有名になりまして、ＷＢＣの世界一になった、日本が世界一になったところが、サンディエゴの球場でございました。そして、王監督以下が泊まっていたホテルが我々の会場でございましたから、そこで、2月16日から23日まで研修がございまして、10階の本会議と14階のセッションがございました。そこでですね、2006年、7年度の会長は、今の会長は、スウェーデンのビルヘルムカールフェルムステンハマーさんという会長さんでそのテーマは、ちょうがの奉仕というService aboved self, とあったわけですが、この2006年、7年のＲＩの会長は、ニュージーランドの方でありまして、ウイリアムビルボイドという方でありました。その会長のＲＩのテーマが、リーザウェイ、というのがテーマでした。そして、ボイドさんは、強調事項というのがございますが、それは、ひとつには、継続性。これは、ライラでもそうだと思いますが、みなさん、やはりこれをずっと継続していくということは非常に継続は力であるということ、これは非常に重要なことである。それから、水の保全ということ、前のステンハマーさんのときからいわれておりますが、水ぐらい大切なものはない。水は命ですね。ところ

余島のライラに参加して詠める歌

二六八〇地区ガバナーエレクト　加藤隆久

余島の夜いま忘れをる幾千の星の光りのまたたきを知る
朝まだき余島の海辺散歩する波の音にぞ母の声聞く
去年（こぞ）のいのち今年（ことし）の生きるテーマは若者たちの思考ゆさぶる
若き友出会ひ学びて語り合ひ奉仕の理想求め進めや

が、我々の日本の国においては、それこそ水道をひねったら、湯水のごとくつかう、というので、水は空気と同じように、そういうふうに思っている。しかし、この与島においても、今井先生がここを選ばれて、最初にこういう立派な野外センターにされる時に、一番、困られたことは水であったということ。井戸が、でたらしいのですが、それを、ひかれたときのご苦労というのは、大変なものであったと思うのです。今、我々がここで、こうやって、研修ができますが、本当にこの島から、十分に水がでてくる、こんな有り難いことはないのですね。だけど、日本の国には水が豊富にありますから、それこそ、外国へいきますと、水不足といいますか、これに困っている人が非常に多いわけでありまして、この、砂漠地帯では、学校にもいけずに、何マイルも離れたところに水くみにいかないかんという、そのために学校にもいけない、しかも、水がないものですから、病気にもなる、伝染病がおこる、そういう国がたくさんある。だから、やはり、ロータリーは水保全ということをこれを強調事項にやはり、ボイドさんもされておりました。

それから、保健と飢餓ですね、日本の国において飢餓なんてすでに、食べ物が有り余っている国ですから、そんなことは、ちっとも考えられない。私もいつでしたか、カルカッタのマザーテレサの死を待つ人の館へいきましたけども、あそこへいったら、日本の女性がこのＹＭＣＡにいったら、マザーテレサの本があったと、それを読んだら、貧しいということが書いてあった。貧しいということは日本の国ではわからなかった。そこで、彼女は、すぐさま、短絡的といいますか、そのカルカッタへいった。カルカッタはご承知のように、200万人ぐらい路傍生活者がいるのです。路傍で生まれて路傍で死んでいく人。それはやっぱり、マザーテレサはこれではいかんというので、その人達を拾ってきて、そして、そこで、死を待つ人の館というのを作りまして、そこは、何にも病院とか治療する施設ではない、ベッドがひいてある、そして、シスターがおられまして、そこで、きれいさっぱりしてその人達に、何をするかというと安心立命を話してあげる。今日のような話。路傍で生まれて路傍で死んでいく人、悪い言葉でいえば、虫けら同然なのです。しかし、その精神的安心立命を与えてあげる。これは素晴らしい。ただそれだけの建物なのですが、そういう人達がたくさんいると、そういうそれはその貧しさからくるところがあります、飢餓。それと、これロータリーで非常に前から重要視されているのは、識字率ということであります。

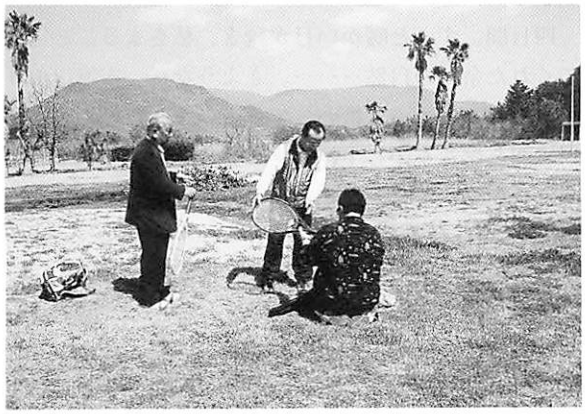
識字率の向上、日本の国は、こんな識字率といったって、ほとんど100%、今99.9%がですね、日本の人は識字率。男性が99.8%、女性が99.7%というのですね。そういうところが、中国は80.1%、インドでは、58%。アフガニスタンは識字率が38%だというふうにいわれてます。そして、また、ニジェールなんて、17%といわれています。先進国でもアメリカはかなり、識字率が低いというのです。それは、やはり、ヒスパニック系の人は多国籍民族ですから、アメリカは、わりあいに先進国の中では、識字率が低いといわれています。そういうようなことで、識字率の向上という、それとロータリーの家族ということ、これを強調事項としてビルボイドさんは、リーザウェイ、やはりですね、物事を率先してやるという、だから皆さんも、ライラで学ばれたことを率先しておやりになるということは、非常に大切なことです。そこで、私は、2680地区で、ガバナーエレクトとして何かテーマを考えようということです。私は、こういうふうに思うのです。

これをライラの皆さんにも申し上げたい。やはり、今日皆さんはここに集まられてふれあいということが、非常に重要だと思うのですね。そこで、ずっと、素晴らしい先生方からいろいろ学ばれた、また、今井先生や、深川先生から本当に

素晴らしい心にしみるお話を聞かれました。そして、今日聞かれたら、だんだんロータリーがどんなものかこういうことがわかってきた。それをひとつみなさん、若い人達に、教えていただきたいと思うのです。

最後に、今井先生が、あなた、歌ができたか、といわれましたので私は昨日こちらへまいりました時に、夜、きました。

与島の夜　今　忘れおる　幾千の　星の光の　瞬きをしる、星が本当にきれいだった、それから、浜さんたちは4時半に寝たそうですが、私は4時半に起きましたので、朝まだき与島の海へ散歩する、波の音にぞ母の声聞く。優しい波のおとですね。それから、去年はテーマが命、今年は、生きるでした。今年の“生きる”のテーマは若者達の思考を揺さぶる、とこれからレポート書かなくてはいけない、大変だと思うのです。最後に、若きとも出会い学びて、語り合い、奉仕の理想、求め進め、これを感想として終わらさせていただきます。今日はどうも有り難うございました。



参加者感想文

●A班

カウンセラー　福島　秀孝

今回ＲＹＬＡセミナーでＡ班担当カウンセラーの福島です。講師の先生や今井先生深川先生の、わかりやすい講義や指導を受け、受講生と共に有意義な４日間を過ごさせていただきました。今回の「生きる」というテーマについて皆で考え話し合ううちに、だんだんうちとけて仲がよくなり、２日目のカウンシルファイヤのあとキャビンタイムでは朝の４時まで話しこみ、「生きる」というテーマについて何かを分かってもらえたと思います。

最初はスタートが遅くマイペースなＡ班でしたが、その分深く考えているように思え、最後の夜は朝５時まで仲よく話しをし携帯の番号やメールの交換をし今後の連絡方法を話し合っていました。受講生の今後の成長と健康を祈念し第28回ＲＹＬＡセミナーＡ班担当カウンセラーとしての感想文とさせていただきます。どうもありがとうございました。

カウンセラー　永田　恵子

私達は、今どの様な時代を生きているのでしょうか。二十世紀、二度の大戦後、米ソを中心とした冷戦を越え今、デモクラシーを唱えるアメリカ一国を中心にグローバクゼーションのかけ声に合わせて、世界が大きくうねっています。しかし中東各地の戦争は今も続き、アフリカの飢餓、中国やインドの発展に供なうエネルギーや環境問題等、いつまでたっても平和で豊かで幸せな世の中にはなりそうもありません。そうはいっても私達は、等しくこのかけがえのない地球上に生を営んでいるのであります。全てのこの時を共有している私達一人一人が責任を持って、良い社会を建設していく様努力をしなければなりません。自分をいとおしむと同じく他人を思いやり、その輪を広げて全世界の国々が平和で豊かになります様、若い人々と共に生命のつきるまで考えて行きたいと思います。その為には想像力が必要です。他人のいたみ、他国の苦しみを自分の事に引き寄せて思う、想像力です。四日間のセミナーの講義を聞いて私は強くこの事を考えました。

日常では思いえがく事もい重い事柄に目をむける機会を与えて下さった事に心より感謝いたします。四日と言う短かい期間ではありましたが、常に寄り添って私を励まし見守もって下さった福島お父さん、有難とう。

力不足の私の基で共に学んで下さったＡ班の受講生の皆さん、有難とう。

それぞれの場に戻られて、この経験が少しでも血肉になってさらなる成長されます事を心よりお祈りいたします。

四日間、ずっと暖かい日が続き、私をまるごと包んでくれた余島の自然……。さようなら。末筆になりましたがセミナーに携わって下さいました先生方に深い感謝と御礼を申し上げます。

西松　佑花

このセミナーに参加する事は、突然決まったことだったし、自分の中でも、どのようなセミナーなのか理解できていないのもあって、班の人たちとは仲良くできるだろうか。とか、自分だけ浮いてしまわないだろうか。とか、不安な気持ちで参加しました。でも、同じ班には、同い年の子や、同じような感じで参加した子もたくさんいました。だから、話し合いの時でも、気を使わないで、意見交換ができ、そして、難しい議題に対して、自分の考えはなんとなくできていても、それを口に出して自分の言葉にして表現するのは、とても難しい事なんだと思い、誰かが発表しているのを真剣に聞く事ができました。ここに来なければ、出会わなかった人、聞けなかった話、意見。そういうものに触れ合えた事は、これからの自分を少し変えてくれる気がします。ありがとうございました。

濱野　貴子

３泊４日ならぬ１泊４日のＲＹＬＡを終えて、一番感じたのは人との距離でした。遠い近いに関わらず、色々な意見を持った人と接し、それぞれの距離がある事が分かりました。最初は遠かったＡ班の距離は、４

日間の間に泣いて抱き合えるくらいになりました。この短い期間で、深く心をつなげる事ができるのはＲＹＬＡならではだと思いました。

ＲＹＬＡに参加して、自分の事をまた一つ理解できた様な気がします。それと同時にたくさんの疑問もでてきました。自分は何から目を背けてきたのか、人との付き合いの上で何が苦手なのか、何が得意なのか等。それは、今から帰ってゆっくり考えようと思います。それが、ＲＹＬＡで見つけた些細な課題です。

私が属していたＡ班は、男女共にのんびりとしていて、でも話し合う時は真剣に熱く、私にはとても心地よい場所でした。そして何より、出た意見をすぐに否定しない事、何分も、何時間も考えて話し合える事。それが班の人全員に見られたので、本当にこの、のんびりと深く話し合えた事が嬉しかったです。

中村　泰規

〝第28回ライラセミナーに参加して〟

景観豊かな余島での３泊４日間の第28ライラセミナーを受講し、大変貴重な経験をさせて頂きました。第１日目宝山先生は自己中心的な態度が著しく目立つ合理化社会のコミュニケーション能力の欠如について第２日目関先生は豊かさ追求の矛盾から廃棄問題を取り上げ、エコ運動へ発展している現状。深川先生は、倫理上の問答を挙げられ参加者それぞれの方に実際に考えさせる。最終日は今井先生が21世紀における社会発展における価値体型を説明して頂きました。

私は医療関係へ従事している者ですが、医療、福祉を取り巻く環境は老令人口の増加、医療費圧縮と厳しい状況ばかりですが、あらためて、厳しくなるこれからだからこそ、患者さんへの良心的関係維持発展が必要であることを再確認し、今回セミナーのそれぞれの先生方の教えを胸に、早速、職場で実現していきたいと思いました。

今回のセミナーでお世話になりました関係各位の皆様に最後に深く感謝申し上げます。

野瀬　千央

私は今回初めてライラセミナーというこの企画に参加しました。どんなかんじなのか、何をするのか、全く分からない状態で、不安や戸惑いもいくつかありました。

テーマが『生きる』ということでしたが、普段、普通に生活していて生きるということを考えることもなかったし、誰かと話すこともありませんでした。そん中、小と問われた質問の答えにすごく困りました。

班の人たちと話合いをしているうちに、自然に打ち解けて、自分の経験や体験を話して理解を深め、テーマの答えを導き出そうと一丸となっていました。それぞれが、さまざまな経験をしており、自分の話をしたとき、友達の話を聞いたとき、いろいろな思いで、数人が涙しました。そのことにすごく感動し、嬉しく思いました。

宝山透逸先生は、関義雄先生、今井鎮雄先生の講義を受け、たくさんの納得や考えることが出来、来て良かったと思いました。

また、たった三泊四日という短い時間で、本当に仲良くなれたＡ班のメンバー、カウンセラーのパパさんママさんに出会うことができ、考えを尊重し合う事ができ、この班で良かったと思っています。

答えは決して一つではなく、さまざまな人たちの意見も聞け、いろいろ考えることができました。

本当にこのセミナーに参加して、『生きる』ということを考えることが出来て良かったと思いました。

島田　光明

３泊４日の研修を終えて充実感で一杯です。先生方の色々な話を聞かせて頂いて、勉強になった面も、もっと自分たちで考えたかった面もあります。

今回の研修で色々な考え方があるのだなと思いました。年齢相がＡ班は近かったので、とても一緒に居やすかったです。しかし、それに対しての甘えもあったせいか、最初はあまり話すことができませんでした。反省することはたくさんあるけど、得たものも多かったと思います。話す内容はどうであれ、Ａ班の話し合おうとする姿勢に感動しました。みんなで話す中で、お互いがお互い理解しようと務めている姿を見ていると心にグッときました。何事に対しても努力することは素晴らしいと思いました。私は今年社会人として働きだしたのですが毎日忙しくて考えることを忘れていたような気がします。年下の子たちには、自分みたいにあまり考えない人になってほしくないと思いました。私も忙しさに流されず考える力をつけたいと思います。職場に戻って、みんなで何かをする大切さを大事にしていきたいと思いました。

最後にカウンセラー、関係者の皆様にこのような機会を与えて下さってとても感謝しています。どうもありがとうございました。

小河　瑞恵

今回、この合宿で私が強く感じたこと、それは、出会いってすごく不思議なものだということです。私自

身、はじめはいったいどうなるのか、あまり人付き合いが得意でなかったためもあり、不安で一人ぼっちである気がしました。しかし、そんな心配はまったく無意味でした。もうその日のうちにそんな不安なんてどこかへ吹き飛び、この大自然の中ということもあるのでしょうか。最初の話合いから、とても密度の濃い、なんだかこういう感想文では表現しきれないような感情の渦が、自然とみんなクロから流れ出て、心を通い合わせることのできる話し合いがもてました。日、一日と、自分でもびっくりするくらい周りの人が私にとってすごく大切な人達となり、生きるために大切なものについての話し合いでは、こんなに多種多様な考えがあり、それを自分の言葉で、発表する、自分の意見を言う、ということがこんなに重要で、人と向き合って話をする際に必要不可欠なことなのだなと、身をもって体験することができました。私達が必死で話し合って導き出した結論が、まわりの人にあまり的していなかったとしても私達にとって本当に満足できる考えを発表できました。この合宿で、学ぶこと、発見など多くの貴重な体験をしましたが、今日、この最後の日に思うのは、大切な仲間や友達ができるっていうことは本当に幸せなことだし、この出会いによって、その仲間と共に、泣いて、笑って、時間を共にできるということをとても尊いものに感じました。こんな短い期間で自分をさらけだし、それを受けとめてくれる多くの友を得られたことが、この合宿での私の最高の収穫です。

矢号　明

今回の第28回ＲＹＬＡセミナーに参加させてもらって、感想としては、今までなにげなく生活してきたことが、はずかしく思いしらされてしまいました。今回、初めて出会った人との会話の中で、今まで自分の思っていた事・考えていた事・行動等がマイナスしこうであったと気付くことができました。

セミナーに参加して充実できましたが、少しやりのこした事があるような気にもなりました。

松本　光世

「生きる」って何だろう。参加パンフレットを見て、漠然と考えながら余島に到着しました。日頃頭に浮かんでくるささいな事をもう一度思い出しながら……。

オープニングパーティでなごやかに食事をした後のキャビンタイム、カウンセラーの方の導きがあり、キャビンのみんなと顔合せをし、「生きる」について話してみました。誰からともなくたわいのない話がはじまり、間もなくそれがとても深いものとなり戸惑いを感じる程でした。自らの体験や友人のこと等、話をする者も聞く者も自然と涙が流れ、数時間前に出会ったはずなのに何年も前から知り合いであったかのように、心を開いて話し合いは続きました。

Ａ班は男４名、女６名、日常であまり出合わない年齢の仲間でした。彼らの話を聞くことは、驚きや発見の練続で思いもよらぬ考えが沢山でてきました。思索の時間、バズセッションで考え、皆で発表したことはこのメンバーでしかでてこなかった結果だと思います。

間違っていること等一つもなく、全ての意見が正しいし、結論も出ない、でもそのことについて議論することで仲間の人間性や考え方が短期間にわかり、楽しい４日間でした。

宝山先生の、人間死ぬときが大切。いい人生だったと思いたい。という言葉、今井先生の人の心で生き続ける人でありたいという言葉、人生の中で大きな目標にしたいと思います。

合計睡眠時間５時間の３泊４日、とても充実し、考え続けたセミナーでした。この仲間と時間を与えてくださった関係者の皆様、ありがとうございました。

赤松　大輔

今回のＲＹＬＡセミナーについての私の感想は新しい発見があったことです。それは講師の方の今回のテーマである〝生きる〟ということについての講義、特に関先生の環境問題も人の生きるということに身近に結びついていると言う考え方は、環境問題や人の生き方を考える時に新しい発想やアイデアを産む可能性を感じました。

又、宝山先生の講義では、先生のいままで生きてこられた中で感じられたことや出会われた人の話しを通じて人生を生きるとはどういうことかということや、生きたいと思う意志、決意の大切さを感じました。

そのほかには、キャビンタイムでの同じ班の受講者どうしの話し合いでは自分は社会人８年めですが学生の方や自分よりも年上の方もおられて他の人の意見を聞くと学生の方の意見の中には自分の学生のころの考え方と同じ所もあるし時代が変わったなと思う意見もあり時代の変化などを考えるととても楽しくすごせました。社会人になると若い人と意見を言い合うという場もあまりなく、新鮮な気持ちで議論できました。

以上、とりとめのないことですが感想としたいと思います。

守光　優

私はこの企画に参加させていただくまで、「生」というものに関して深く考えたことはありませんでした。ですので、なぜ生きるのか、どう生きるのかなど、4日間かけてじっくりと考えることができた今回のセミナーは非常に新鮮でした。特に生きるために大切なものについて、ひとりで考える時間を載いた「思索の時間」は、たった一時間でしたが、私にとってＲＹＬＡのプログラムの中でも最も有意義な時間のひとつでした。もちろん、班でのミーティングにおいて、ここまで深くつっこんだ率直な意見の交わし合いができたことも大変貴重な体験でしたし、他者の考えを聞くことで様々な視点から「生」を見つめることができたと思います。その上でもう一度ひとりになった頭を整理することで、じっくりと自分なりの結論を導き出すことができました。

また、3日間午前中に行われた素晴らしい先生方の講義では、新たな発見があったり、納得させられたり、驚かされたり、目の覚めるようなことばかりであっというまに時間が過ぎていくようでした。

そして大自然に囲まれたこの余島では、ただそこにいるだけで心洗われるような思いでした。ここで感じたこと、学んだことは、この先の人生において本当に大きな意味を持つと思います。今のこの感動を忘れることなく、気持ちを新たに、日々を過ごしていこうと思っています。

最後になりましたが、お世話になった講師やスタッフの皆さま、そして班の皆、ありがとうございました。

●B班

カウンセラー　白石　正明

約5年ぶりのカウンセラーを経験して、これほどライラが充実した時が無いぐらいB班は、まとまりが非常に良く、楽しい3泊4日でした。受講生自身もこのライラの良さを満喫したのではないかと思います。一日目のキャビンタイムから全員なかよく自己紹介で始まり、レクリエーションのサッカー、釣り、ベースボールと色々な組み合わせで親睦が出来上り、キャビンタイムを楽しく、食事も楽しく、またフォーラム、バスセッションをよりエンジョイ出来たB班ではないかと思います。「洋平・佑介・剛弘・健司・結布子・奈央・美紀・麻美・葵」受講生の方々本当に楽しい28会のライラでした。このライラの時を忘れずに地元に帰れば色々と仕事、勉強と忙しい日々だろうと思いますが、心のほんの角こにカウンセラーのお母さんのことやお父さんのことを思いだしてください。また、次回この余島で合うことを楽しみにしています。本当にありがとう。心より感謝しています。

カウンセラー　吉岡　喜久子

男性4名、女性5名の名前を模造紙に書きながらどんな受講生と出会い、又私にどんな仕事が出来るのかとの不安から余島でのライラセミナーがスタートしました。その一抹の不安が解消するのにほとんど時間がかからない程、よく語り深く触れ合った3泊4日間でした。一人一人がそれぞれの生活体験を通して人間として光り輝くものを持ち、真摯に生きている姿に、「近頃の若者は……」ととかく言われがちな昨今の中にあって次世代を担うにふさわしい人物の存在に大いに安堵も致しました。今回のテーマ〝生きる〟ということを美しい余島の自然の中でこの仲間達と熟考出来たことは私の人生において貴重な体験でした。人との出会い、そしてその温もりを通して深くつちかったこの絆をいつまでも大切にしたいと思います。彼らの人生においてこの四日間が光り輝くものとなることを祈りつつ、ぜひまた近い将来このすばらしいファミリーと再会を願いながら、しっかりと一人一人の顔を胸に焼きつけました。

川元　佑介

今回、第28回ＲＹＬＡセミナーに参加して、最初、会社でこのセミナーの話を聞かされた時は、全然と言っていいほど興味を持てませんでした。それは、自分がロータリーという存在を知らなかったこととテーマや目的が意味あるものなのかどうかわからなかったからだと思います。いざ参加当日をむかえ、余島野外活

動センターに着いてみると、同じセミナーに参加されている自分と年齢の近い方たちロータリアンの方々が気軽にあいさつをかわしているのを見て、少しは楽しめるかなと思いました。開講式を終え自分とこれから3拍4日を共にする仲間、そして班を支えてくれるカウンセラーの二人の顔を合わして不安な半面、なにかしらの期待もいだきました。初日から、うちとけたとはいえなかったのだと思いますが、二日、三日と過ごす中で確実にうちとけたと思います。そんな仲間たちと共に先生方々の講義を受け、またレクリエーションや寝食を共にして、お互いにそれぞれの話をする事で、仲間との良い関係をきづけたと思いますし、また個々の人間とゆうことでそれぞれの考え見解を本人の体験談をふまえて話を聞くことで自分自身の尺度の幅を広げることができたと思います。

今回、このセミナーに参加できた事と出会えた方々に感謝の気持でいっぱいになりました。この経験はこの時でしか体験しえない、また、出会えれなかったであろう方々との出会をこれから大切にしていきたいと思います。ありがとうございました。

奥田　奈央

たったの4日間でできた強い絆。これ程の短期間で心を許し合い、話し合えた仲間が他にいるだろうか。私の記憶の中では、おそらく初体験のことであろう。

なんとなく参加したライラであったが、予想以上に得るものが多かった。年齢や性別を超えた仲間と話し合う中で、自分の未熟さや愚かな考え方に気付くことができ、また自分を見つめ直すと共に他人の心を理解しようと努めることができるようになった。

ただひとつ、三日間のフォーラムでは、発言する気が失わせる様な無責任な質問が多かったことにがっかりした。本当に人の気持ちを考えることができる人ならば、できた発言であろうか。もう少し考えて頂きたかった。

最後に、フォーラム以外は本当に心から、すばらしいと思える内容だった。参加できて良かったし、この出会いに感謝している。本当にありがとうございました。

佐藤　剛弘

三泊四日のライラセミナー本当にありがとうございました。最初は、業務命令での参加という事もあり、全く気のりしていませんでしたが、B班のメンバーのすばらしい仲間達のおかげで、色々な話ができ、改めて若い人達の様々な考え方など吸収する事ができました。

ただ、一つだけとても気になったのが、三日目の夜のフォーラムにおいて、余りにも宗教的な感じで、「もし、四肢のない子供が生まれた場合、殺しますか、どうしますか。」とあまりにも簡単に言われ、更に三分程度の時間での速答を求められましたが、身近にその様な実体験を持つ者としては、正直、嫌悪感を覚えました。フォーラムでの質問内容はとても重い内容で、そんなにいとも簡単に答えるような内容ではないと思います。それができないのは能力がないからと言われればそれまでですが。また、このフォーラムでは一部の受講生の一人舞台の様な感じで、とても嫌な雰囲気でした。この一点だけが、本当に残念でなりません。せっかくB班というすばらしい仲間に出会う事ができ、本当に良かったという思いが半減したような気がします。ライラセミナーは、参加している受講生の為のものではないのですか。二十八回も続いているすばらしいものなのに、どこか主催者側のエゴになっている部分がないでしょうか。もう一度原点回帰をして欲しいと思います。今後の受講生の為にもぜひ良いものにして欲しいと思います。

身勝手な事ばかり書きまして申し訳ございません。

最後に、B班のメンバー及びカウンセラーのお二人に本当に感謝を申し上げます。本当に良き出会いの機会をいただき、心があつくなりました。ありがとうございました。

鵜篭　麻美

あっという間に四日間のセミナーが終わりました。正直、何も分からないままの参加でしたが、多くの人と出会い多くの事を学びそして今後の課題を見つけることができました。

今回のセミナーのテーマであった「生きる」ということに真剣に向き合い、仲間と意見を交わし考えることで、改めて、「生きる」ということのすばらしさ、奥深さを感じました。

また、多くの人と出会ったことで、様々な意見を知り、様々なお話を聞くことができました。この経験は、今から教師という職につく私にとってとても良いものとなりました。

最後に、四日間共に生活をしたB班8名とカウンセラーの先生方に心から感謝致します。「みんなと同じ班で良かった。たくさんの感動をありがとう。こんな素敵なみんなに出会えた私は、本当に幸せです。今度会う時は、2倍も3倍も成長できているようそれぞれ頑張ろうね。ありがとうございました。」

末友　美紀

気が付くと4日目、とても充実したライラセミナーでした。今回、7年ぶり2度目の参加で、前回と自分はどう変わったか見つめ直したいと思い参加を申し込みました。

どういう友達と知り合えるのだろうと不安いっぱいでしたが、B班のメンバーはみんな思いやりのある仲間ばかりで、すぐに仲良くなれました。また、カウンセラーの2人のあたたかさで本当の家族のような絆が生まれました。B班に出会えたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

今回の講義、フォーラムを通じて、「生きる」という言葉の重さに悩まさせられました。特にフォーラムで生きるか死ぬか殺すかの選択をすぐに決定するということはどうしても判断することが出来ませんでした。

今回のセミナーでとても残念に思うことがありました。それはフォーラムです。というのは、宗教的思想がとても入っていたということです。話を聞いていて、不快感を感じてしまい、「思いやり」について考えさせられる部分がありました。

このセミナーを終え、やはり、B班のメンバーにめぐり合えたこと、これが一番の幸せと感じました。

最後に、スタッフの皆様、このような素晴らしい出会いを提供して下さり、本当にありがとうございました。これからも素晴らしい出会いのあるライラセミナーが末永く続くことをお願い申し上げます。

遠藤　洋平

「人とのつながり」

私はＲＹＬＡセミナーに初めて参加しました。このセミナーはとても素晴らしいものであったと思います。またこのセミナーの最も良いところは班をつくり、カウンセラーを置くシステムにあると思います。「生きる」というテーマに基づき議論したり、時にはみんなでバカ言い合いながら笑い転げる、そうするなかでカウンセラーを中心として班としてのまとまりができ、個々人の仲も深まっていきました。その結果、セミナーに参加することで自己の思考を深めることに加え、よき思い出、またかけがえのない多くの友を得ることができました。今回のテーマが「生きる」であり、班として「生きる上で大切なこと」は「人とのつながり」であるという共通の意見がでました。そして実際このセミナーを通して、ここでしか出会うことが出来ないB班の面々と出会えたこと、解り合えたことは「人とのつながり」を体と心いっぱいで感じることが出来、大きな喜びとなりました。

またもう一つの出会いとしては、2日目に講演して下さった宝山秀逸先生との語らいが挙げられます。2日目の昼食後、個人的に私の生き方への悩みの相談に乗って下さり、多くの助言をして頂きました。その際、宝山先生は終始優しい眼差しで、じっくりと納得の行くまで話を続けて下さり、とてもうれしかったです。

以上のように、このセミナーを通して、様々な議論ができたこと、多くのかけがえのない出会いがあったことが、私にとって最も素晴らしかったことです。最後に、3泊4日ずっと私達を見守り続けて下さったカウンセラーの白石正明さん、吉岡喜久子さん本当にありがとうございました。また私を推せんして下さった尼崎中ＲＣの皆様、本当に楽しかったです。ありがとうございました。

川西　健司

社員研修の一環として参加させていただいたライラセミナー3泊4日間。スーツを着用し向学心と緊張感をもちつつ余島のセミナーハウスに足を踏み入れた。だが、その二時間後には研修会というやや「重苦しい」雰囲気から脱却し、笑いと感動の輪の中に自分がいた。そこには8人の仲間と愛情あふれるカウンセラーの「おやっさん」と「お母さん」、総盛11人のチームメイトと出会っていたからである。

初日から我々イレブンは「両親」を囲み、時間を共有することでお互いを信頼し合い、チームとしての結束力を育んでいくことが出来た。講義、プログラム、フォーラム等イベントでも学ばせていただいたが、何よりこの11人で過ごした時間というものが私の心の中に炎を灯してくれた。

自分たちを、息子、娘として親身という言葉では物足りない程の想いで見守ってくれた「おやっさん」。社会人としても大先輩であり常にメンバー全体を見てくれていた看護士さん。若き志を抱いた教師。明るくメンバーを支えてくれた「お姉さん」。野望を抱く「建築家」。元気いっぱい就活中の学生。人生に迷いつつ思いやりを大事にする女の子。人生体当たり気合十分の料理野郎。落ち着き安定感抜群のジュエリスト。そして、メンバー全員のことを細かく気遣ってくれた肝っ玉「かあさん」。

私は三月で、9年間の時間を過ごした東京から故郷香川に戻って、新しい環境で新しいスタートを切ることに正直、尻ごみしていました。しかし、このすばらしい10人と出会ったことで、自分の心の中にこの仲間が入ってきたことによって、一歩踏み出すエネルギーと勇気をもらうことができました。

すばらしき仲間たちよ、君たちと過ごした4日間は忘れない。デカくなってまた会おう友よ。

渡部　葵

初めてライラセミナーに参加して、来る時は不安でドキドキしていました。1日目は、班に慣れるか不安だったけど、日が立つにつれてとても楽しかったです。班の人と別れてしまうのがとてもさみしいです。

二日目のフォーラムですが、みんなでの話し合いのはずなのに、同じような人ばかりが発言して、しかも宗教の話になるのはおかしいと思いました。皆が手を上げないのなら、適当に合てるとか出来たはずです。皆が話せるような雰囲気がなかったように思われて残念でした。

この三泊四日の間に本当に多くの仲間ができて最高でした。先生方の講義もためになることばかりで〝生きる〟ということを本当に考えさせられました。様々な人の話、体験談を聞き、少し視野が広がったのではないかと思います。この出会いを大切にして、これからも〝生きて〟いきたいと思います。

橋本　結布子

初めてのライラセミナーで、色々な事を学び、考えることができたと思います。ライラセミナーに来て一番良かったと思えることは、班の皆に巡り合えたことです。本当に出会って良かったと思える人ばかりでした。

だけど正直な感想を言うと、楽しいと思ったことばかりではありません。不満に思ったことがあったのも事実です。キャビンタイムの時間。質問の内容に不快なものがありました。あの時間は受講生にとって良い時間が過ごせたとは思えません。〝両手のない子供が生まれました。生かしますか？殺しますか？〟私にはいとこで左手の薬・中・人差し指が生まれつきないです。ハンディキャップがあり、差別を受け、大変な思いをしていますが、何より明るく生きています。その質問、失礼な事とは思いませんか？　疑問に思います。

だけど、仲間とは本当に楽しい思い出が作れた。一生付き合える友人ができたことに、私はＲＹＬＡセミナーに参加した意義ができたと思います。ありがとうございました。

●C班

カウンセラー　高橋　千寿子

三泊四日のセミナーのテーマ「生きる」に私自身の今後の身の処し方の方向を見つけたいとの思いも持って参加しましたが、班の若者とのふれあいは想像以上の収穫を得ることができました。ひとりひとり、年令も、職業も違う方達が、班として振りわけられ同一行動を行い、討論をする時、そこにすでに仲間としてお互いを受け入れあい、認めあうやさしい子供達に頭の下がる思いでした。一日一日、貴重な日々でした。「お母さん」と呼んで私に常に気づかいをしてくれたC班の若者からあふれる愛を感じました。ありがとう。

そして何かひとつでも得たことがあったならと希望します。私自身の課題も少し目標が見えてきた様な気がします。

C班の子供達へ

健康に気をつけて･しあわせな日々を送って下さい。

ほや　また！！

母より

カウンセラー　安行　英文

さて、いつもの「出会い」からライラが始まったのですが、思うのは毎回の新鮮さと人の温もりを体感できることです。今回のテーマ「生きる」は、私にとっても受講生にとっても大変考えさせられるテーマでした。人間は例えば三つのスタイルで生きていると言われます。一つは、植物の「カブ」のような生き方で、ただ必要な水と空気と適温だけで何ら行動をしない最低限の生き方、もう一つは、「勝つか」、「負けるか」の競争の世界に身を置いて、他との調和よりも弱肉強食の生き方を選ぶ、もう一つは、自分の像を自ら彫りきざんでいく生き方であると思う。これらの生き方から分かるように明らかに最後の生き方、自らが自分自身で彫刻をほっていく生き方が人生においての重要な位置になってくるということです。

この場合作りあげる像には、どうしても、周りの人たちとの協力が必要なのは言うまでもありません。人は一人では生きていけないのです。機会を大切にしよう。誰かのためになる事をする機会、自分が何かの一部であると感じる機会、社会の中で何かに貢献して他の人の喜びを共有したい機会、このような機会を求めて、私たちは生きているのです。

ライラの必要性は増々高まっていると、今回も参加させていただき強く感じました。

出会いをありがとう。

田中　加代子

ライラセミナーに参加して感じた事は沢山ありますが、私にとって一番ためになった事は、仲間との出会いです。

全く異なる環境で生まれ育ち、全く違う状況に置かれている人達が集まり、集団で生活する。こんな経験は初めてでした。考え方の違う人と話すことによって、自分の考えや価値観が見えてくるということに気づくこともできました。

また、「生きる」というテーマで講演を聞いたり、バズセッションとして、自分が生きていることの意味を考えることができました。自分がこれからどのような行動をするか、どのような人生をおくるか、ただ何もない人生をおくることのむなしさをじっくり考えることができただけでもこのセミナーに参加した意味があったと思います。

最後に、このセミナーで出会った仲間を大切にしていきたいと思います。

ありがとうございました。

長谷　順二

生きるというテーマの元に、それまでに全く関係の無い人間が集る。初めに考えたことは、そのようなことが可能なのか？満足のいく議論はできるのかといった不安等が大きくあった。結果から答えるなら、自分の予想を大きく超える成果を得られたと感じる。

住んでいる場所、職業、年齢がバラバラであるＣ班のメンバーであったが、カウンセラーの二人の元、少しずつ団結を始め、まるで以前からの知り合いであったかのように笑い合える。時には、夜遅くまで語り合い、普段では考えることがないであろう議題を熱くなり、真剣に話し合う。この経験は、自分にとって、仲間を通して、他人の存在の大切さを再確認できる貴重な時間であった。

バズセッションや、講師の先生方の話しの中から、これからの自分を見つめることができたこと。今井先生の講義から、生きることとは、自分だけを見るのではなく、大きな視点で見つめることを学べた。

今回のＲＹＬＡで得た仲間や経験は、これからの自分の人生、自分の周りの空間においてプラスになるであろう。Ｃ班のメンバー、カウンセラー、他の受講先、そしてＲＹＬＡを企画していただいているロータリアンの全ての人に感謝して、このＲＹＬＡセミナーを終了したい。ありがとうございました。

米重　絵理

“生きるを考えて”

３泊４日のＲＹＬＡセミナーに参加し、私にとっては驚きの連続でした。様々な講師の先生方の話から刺激を受け、班の仲間から刺激を受け、いろいろな考え方を聞くことができとても充実した時間を送ることができました。最初『生きる』について考える時正直何も思いつくことができませんでした。それは私が恵まれた環境・体・気持ちを持っていて日常で『生きる』を実感し、改めて考える必要がなかったからです。しかし様々な刺激から『生きる』について考え、そして常に感謝の気持ちを忘れず、この世に生を受けた事それ自体が幸福であると感じました。

このようなセミナーに巡り逢えた縁を本当に幸せに思い、また感謝したいと思います。

木田　景子

大変お世話になり、本当に心から感謝しています。ありがとうございました。

カウンセラーの、お父さんお母さん。Ｃ班のみなさん、一人一人に支えて頂きました。〝生きる〟をテーマにみんなが意見を出しあい、お互いに色々な事を感じることができました。初めは、班の中にとけこめるかとても心配しましたが、価値観の違うみんながお互いのことを思いやる気持ちが、すごく伝わってき、日ごとに信頼が高まり仲良くなれました。この４日間、色んなことを学び勉強になりました。今の感想を、何年か後の感想ではまた違うと思います。今自分にとって、すぐに役立つ思いと、今後何年か後に役立ちこと等。私は一生かけてこの体験を大切にしていこうと思います。またお父さんお母さん、Ｃ班のみんなに出会えることを楽しみにしています。一人一人の生活環境も変わったりするとは思いますが、いつまでもＣ班の心は一つだと願っています。ありがとうございました。

板倉　由佳

私は余島に来て、まず自然の素晴らしさに感動しました。中でも妻恋岬から見たエメラルドグリーンの鮮やかな海、晴れ渡った空、大きく開けた視界に点在のする島々の風景には本当に言葉もなく、ただうれしいという思いに満たされ幸せな時間を過ごすことが出来ました。

グループで生活しなければならないということで、信仰を持ち始めたばかりの今の私にとっては難しく感じられることが多くありました。いくら立派な信仰を持って毎日を喜んで生きられるようになったとしても、違う考えを持つ同年代の人達と行動することが出来なければ意味がないのではないか、という問題に真剣に対面することになり、これから先どのようにして人間関係を作っていけば良いのかを考え始める良いきっかけを掴むことができたように思います。

講演の内容はどれも学ぶべきところが多く、またロータリアンの方々とお話する中でも考えさせられることがありました。特に心に残ったのは、渡辺和子さんの修道院でのお話です。同じ仕事をして成果は同じように上がるけれども、真心を込めてするかどうかで世界は確実に変わっていくのだという言葉を信じたいと思いました。日常生活の中で１つ１つ、心を込めてすることを増やしていきたいです。

この３泊４日を通じて、自分はこれから謙虚であること、そして感謝することをもっと考えていかなければならないと思いました。貴重な成長の糧を得ることができたと思います。推薦して下さったクラブの方々、スタッフの方々、ＹＭＣＡセンターの方々、そして講師の先生方、本当にありがとうございました。

伊藤　秀樹

会社の上司に言われ、不安の中で余島の方へやってまいりました。この年になり、まさか『生きる』というテーマで、身知らぬ男女が真剣に話しをするとは思いも寄りませんでした。この会に参加することによって、生きるということ、本当の幸せとは？ということを学ぶことが出来ました。また仲間との話し合いで相手の意見を尊重すること、自分の考えとは違うことを聞き、新しい発見もありました。

三泊四日という短い期間でしたが、人とのディスカッションで学ぶこと、いろいろな人の人間模様が垣間見れて非常に刺激的な四日間でした。また地元に帰り、もう一度見つめ返したいと思います。ありがとうございました。

福谷　洋介

あっという間の３泊４日でした。

「生きる」をテーマに、朝は講義を聞き、昼は交流を深め、夜は語り合いました。

普段は、なかなかこうした機会はないので、話の一つ一つがとても新鮮でした。

「生きているという事はお世話になっている事、生きていくという事はお返しをする事」講義の中で、そんな言葉がありました。

今、私達が当たり前と思っている一つ一つの事は、世界から見ればとても恵まれているという話を交え、いろんな人達の力で生かされている存在である自分を知り、感謝する気持ちを持ち、人との出会いや縁を大切にして夢を持ち、死ぬ時にいい人生だったと言えるような生き方を！と話して下さいました。

生きる意味や幸せ等日々をなんとなくぼーっとしていたら、ほとんど考える事がないテーマでも話し合いました。

どれだけ、生きるという事の意味を考えてきただろうかー。一人一人の想いや考えを聞いていて、私は思いました。

日々があわただしく過ぎていく中で、自分の事を見つめ直す事ができた３泊４日となりました。

本当にありがとうございました。

このセミナーを通じて考えた事や感じた事を、生きる意味を模索する青年や、これから大人になる子供達に伝えて、共に力を合わせて住みやすい社会にしていきたいと思います。

井上　麻衣

今回のセミナーを受講する前は「生きる」というテーマは難しいテーマだと思いました。しかし、実際に講義やバズセッションを通して考えてみると、人間関係や目標、出会いといった自分の身のまわりにあるものが生きる上で大切なものだと知り、左程難しいものではないと思いました。けど日頃そういった事を改めて考えることもなく生活しているので今回のセミナーを受講したことは自分にとってとてもプラスになったと思います。

また、あたりまえのようにある自然や空気、水といったものが生きる上でどれだけ大切で重要なのか余島の自然にふれることで実感することができ良かったです。

今回のセミナーを通して出会った友達やカウンセラーの方々からは多くを学べたと思います。自分と違った考え方や価値観を持った人を否定するのではなく、

受け入れ自分を見つめなおすことが大切だと思いました。

神田　敬仁

このセミナーを通じて、日常生活では気付かないことに気付いた感じでした。テーマである「生きる」というのは、一人一人の考え方が違うので一つの答えにまとめるのは、とうてい不可能です。みんな、違う生き方をしているのだから、そして、まだ生きてる途中なので何年か経ったら、また答えは変わってくるでしょう。生きるということは、地球という星をみんなで維持していかないと、いけないでしょう。水がないと生きていけませんし、空気が無いと生きていけません。そして、何より大切なのは、人がいないといけないでしょう。一人では無理でも何人か、力を合わせれば大きな岩を動かすこともできるでしょう。ピラミッドなどがなぜ、あの時代で完成されたのかは、おわかりのように、大量の人がいたからこそ、実現できたのでしょう。これからも、人の出会いを大切に、生きていきたいと思いました。

●D班

カウンセラー　石川　美佐子

〝ライラに出席して〟

ライラセミナーにカウンセラーとして、九名の受講生のお世話をさせて頂きました。

一人一人が、このセミナーに色んな思いを抱き、この余島に渡り、三泊四日寝食を共にし、第二十八回のテーマである〝生きる〟に付いて熱き四日を共に過ごし、日常生活の中では考えもおよばない若い人達の考え方、生き方を見せて頂き、私も今迄生きて来た時代、時間を改めて、ゆっくり考える事が出来ました。近年は物質面が充分程満され、不自由の知らない平和な毎日を過ごし、本来の幸せを物質で満足させ、心の満足、心からの幸せ、人と人とのふれあいの大切さを認識させられ、これからの自分自身の生き方、感じ方、人と物への思いやりを意識しながら、回りの人達への心配り、愛情、思いやり、幸せを願い、感謝をしながら、日々の生活を送りたいと思いました。受講生達は、素直で明るく、四日間をまるで家族の様に過ごさせてくれ、おだやかで、心地良い余島ライラでの生活でした。このまま、お互いに、いつもの生活に戻るのですが、離れる事を淋しく思います。地域社会に戻り、各自が何かの形で、会得した事が役立てる様に希望し、再会した時に、又、ライラの続きのコミュニケーションとデスカッションが出来たら、いいなぁーと思います。皆さん元気で、又、何処かで逢いましょう！

カウンセラー　徳梅　明彦

今回のセミナーのカウンセラーを引き受けるにあたって、自分自身多少の悩みがありました。２年連続ということで、前年の受講生と比較をしないか？また自身がライラになれてしまって自分の思い描く理想に受講生を導いてしまうのではないか？

開講初日、与えられたD班の顔ぶれを見、オープニングパーティーの様子を見て、その悩みや不安が一掃されました。全員がその場の状況に応じて、誰となくその場のリーダーが自然と生まれる。また残りの受講生はそのリーダーに従い協力し合う、本当に素晴らしいD班でした。「ゴンちゃん」「センセイ」「ユカちん」「店長」「マッちゃん」「シゲちゃん」「マキ」「ピーちゃん」「みっちゃん」そして「ママリンコ」、49歳の受講生「パパリンコ」を可愛がってくれて本当にありがとう。「諸君は素晴らしい」これからの人生をどうか胸を張って生きていって欲しいと思います。

感謝。

山崎　美智

私は、現在大学院生の身であり、政治の中でも特に国際政治を学んでいる。政治とは何か、外交とは何か、国際政治とはいかなる物か。まさに毎日が、「こむつかしいこと」の思索の時間である。

今回のセミナーに参加するにあたり、「生きる」というテーマに、多少ならず戸惑いを感じていた。私にとって人間が「生きる」ということは、これまでの私の思考の中では前提条件とも言い得る自明のことであっ

たからである。この、すべての思考を支える根源的な問いかけは、むしろ、哲学や倫理学においての探求の対象であると、考えていたようである。

今回のセミナーの中で、人の言葉ではなく、学問として哲学などの中で学ぶという行為によらず、「生きる」というテーマに自分の言葉で向き合ったことが、私にあっただろうか。私にとって、このテーマに自分の言葉で取り組み、仲間とこのテーマについて深く語り合う機会を与えられた事自体の持つ意義が、非常に大きかったと考えている。

セミナーの中で、普段は、見過してしまっていた重要なテーマについて長い時間をかけて考えることができた。更に、寝食を共にした仲間と共に、様々な意見交換をし、共に学びあうことができた。貴重な体験ができたと思っている。また、このように重要なテーマについて語り合った友は、わずか4日の期間で、多くの事を話し合い、理解し会えた旧知の友のような感覚さえ持つことができるようになった。

重要なテーマについて考え、仲間の様々な意見に触れ、学び合うことが、できたこのセミナーに厚く感謝している。

中瀬　浩子

最初は、あまり人見知りせずにグループの仲間とうまくやっていけるかが不安だった。けど、その日の夜のキャビンタイムですっかり一日で作った友達とは思えないほどの仲の良い仲間を作ることができた。それには本当にビックリした。

カウンセリングのママとパパとのおしゃべりがすっごく好きで、今日でお別れになるのが大変残念だ。

毎日夜遅くまでしゃべってお酒やお菓子をたくさん食べて仲間とふざけあって、この3泊4日でたくさんのいい思い出ができた。

このＲＹＬＡに来て本当に心から良かった。

今日でみんなと別れてしまうけど、連絡を取り合って一年に一回ぐらいは会ってまた、どんちゃん騒ぎしたい。

こんな経験は初めてだったし、この思い出はずっと忘れないと思う。

山根　健佑

今回、このセミナーを受講して、いろいろな人達と出会い、また、たくさんの意見を聞けたことが一番のお土産になったのではないかと思います。この3泊4日はとても早く過ぎていったし、同じ班の人に聞いても同じく早かったと答えた所に、このセミナー全体の成功が見えてきたのではないかと思います。そして、お土産をしっかり愛媛に持って帰り、日常生活の至る所で活用できたら、個人としてのセミナーの成功があるのではないかと考えます。

同世代くらいの人達と、生活を共にする経験というのは、なかなかないことだと思うし、このセミナーを紹介して下さったロータリークラブの人に感謝したいと思います。また、D班の班員の意言とか、腹を割った話し合いとかができたことが本当に幸せでした。全然自分の意言なんかは幅が狭いと感じることができました。これからは幅広い視野を持ち、何事にも積極的取り組み、どんなことにもリーダーシップを持っていきたいと思います。

今日のセミナーを企画してくださった今井先生以下、ガバナー、お世話になったカウンセラー、D班のみなさん。本当に感謝しています。ありがとうございました。

松田　紳吾

今回、セミナーに参加して一番考えたことは生きることの意味でした。班の人とも話し合っていろんな意見を聞き、考え方の幅が広がったと思います。いろんな年代の人がこうして集まることで、経験談を聞かしてもらったり、自分のことを話すことで、お互いに糧になるんだと思いました。僕が今回で得たもの、自分の生きる意味というのは、自分を含め、自分の周りの人の幸せを考えることだと今は思います。自分や相手のことをどれだけ考え、行動し、その結果から次に生かすことができるか。その繰り返しだと思います。これから生きていく上で、喜びも哀しみもたくさんあると思いますが、与えられた環境の中で、自分に今何ができるかをよく考え、行動していきたいと思います。あと、余島はすごくいい所なので、また機会があれば来たいです。白タヌキ見れて良かったです。

カウンセラーのお二人には、大変お世話になりました。貴重な話も聞かせてもらったし、何もわからないところを導いてくれ、感謝しています。人は、こういう出会いがあって成長していくんだと実感しました。3泊4日ありがとうございました。また会えることを楽しみにしています。

大谷　英

今回のセミナーに参加して、たくさんの人と出会い、大変貴重な講義を聞くことができ、同じ班のメンバーと本心で語り合えた事は、今までにない素晴らしい経験となった。

〝生きる〟というテーマについて語り合ったわけだが、普段、何気なく生活を送っている私にとって〝生きる〟という事をこんなに深く考えたことはなかった。改めて考えてみると、一言で〝生きる〟と言っても様々な角度からとらえる事ができ、簡単に言い表す事が出来ない、とても大きなテーマだという事に気が付いた。(気付かされた)

自分自身が思っていた〝生きる〟という事は全体のほんの一部にしかすぎず。同世代の仲間の考えを聞く事により少しだけかもしれないが成長できたように思う。

このセミナーに参加し、自分にプラスとなった部分に自らが気付き、これからの生活に生かしたい。

千鳥　祐香

今回、ライラセミナーに参加するまでは、「生きてて良かった」とか「死にたい」と思うほど嫌な感情を持った事がほとんどありませんでした。私はただ生きているだけで生きている有難みがわかってなかったなぁと講義を聞いて感じさせられました。

また、バズセッションで「あなたは生きる為に何が大切だと思いますか。」というテーマに班のみんなで真剣に考え、話し合う事で様々な意見にふれ「生きる」という事を強く考えさせられました。また自分とは違う考え方も出て、生きる事に対して幅の広い考えを持つ事が出来ました。

最後に、今回のライラセミナーは私にとって大変考えさせられる物で、人間としてすごく成長出来たと思います。目標も見つけられその事にも考え努力していきたいと思いました。

廣瀬　麻希

今回初めてＲＹＬＡセミナーを受講して、一番印象に残ったのは、やっぱり３日目のフォーラムでした。バズセッションでも、普段考えることのないことを皆で話し合って、皆の意識の高さや真剣さに自分もどんどん引き込まれていきました。

最初は、面倒だと感じていたフォーラムの準備作業も、皆でアイデアを出し、意見を言い合う内に楽しくなってきました。発表する機会もグループの皆に与えてもらい、すごくいい経験になりました。緊張したけど、本当にいいグループに恵まれ、心強かったです。

また、カウンセラーの方にも恵まれ、キャビンタイムもグループ全員で毎日部屋に集まりゲームをしたり、久しぶりに家族団欒をした気分でした。

三泊四日、講義もすごく考えさせられる内容で、このキャンプで感じたこと、学んだことを忘れないよう、これから自分と向き合う時間を作ろうと思いました。

川間　重則

このＲＹＬＡセミナーを受講し、多くの事を学ばせて頂きありがとうございました。

人と人との出会いの重要さとコミュニケーションの大切さがこのセミナーの中で一番の財産になったと思います。

もちろんセミナーの講師の方々にも色んな事を教えて頂きました。

「生きる」というテーマを聞かされた時はかなり重いセミナーになるのかと思っていましたが、人として生きて行く為の大切な事なので今後の人生の中でさまざまな、問題に当たると思いますが、人として基本的な事をいうことに気付いた様な気がします。

宝山先生の講演の中で教育について先生自信が提案された事に子を持つ親の立場からも非常に関心を持ちました。

関先生の環境の講演についても私が働いております会社でもＩＳＯ１４０００を取得している関係上、興味深い講演でした。

バズセッションに関しては、テーマの生きる為に何が大切ですか？という問いに各班非常に共通している点などがあり、又各班様々な視点でテーマについて発表しており、なるほどなあと思いました。

今井先生の講演は長い人生経験及び色々な所で活躍されており、今後の人生で活かせる講演でした。

スタッフの方々にも大変お世話になり、声もかけて頂き、非常に楽しい３泊４日でした。

小出　美香

第28回のＲＹＬＡセミナーに参加することになり、余島に着くまでは、不安だらけでしたが、四日間が終了した今では、参加できたことを大変嬉しく思います。

四日間をふり返ってみると、初日はみんなと齢も上だったりで何を話したら良いか考えたりもしたけど、あだ名を決めて、呼び合ったりするうちに、Ｄ班の11人がファミリーという感じですごく楽しかったです。毎日のキャビンタイムが楽しくてもう、今日が帰る日だというのがさみしく思います。でも、もう会えなくなるわけではないので、これからも余島での出会い、『生きる』ことを考えられたことと、人生のプラスにしていきたいと思います。

最後に私にこのセミナー参加のチャンスを与えて下さったロータリーの皆様に感謝したいと思います。

受講生名簿

2670地区

受講生名簿

No.	氏　名	クラブ	性別	勤務先・学校
1	山根（やまね）　健佑（けんすけ）	今治南	男	今治工業高校
2	野瀬（のせ）　千央（ちひろ）	松山北	女	松山東雲女子大学
3	渡部（わたなべ）　葵（あおい）	〃	女	松山東雲女子大学
4	神田（かんだ）　敬仁（ゆきのり）	大　洲	男	ダイキ㈱
5	西松（にしまつ）　佑花（ゆか）	松山南	女	愛媛調理専門学校
6	福谷（ふくたに）　洋介（ようすけ）	徳島プリンス	男	福祉作業所いちのさと
7	鵜篭（うごもり）　麻美（あさみ）	高松グリーン	女	穴吹学園
8	十鳥（じゅうとり）　祐香（ゆか）	〃	女	穴吹学園
9	大谷（おおたに）　英（あきら）	〃	男	ドコモサービス四国
10	田中加代子（たなかかよこ）	〃	女	ドコモサービス四国
11	赤松（あかまつ）　大輔（だいすけ）	〃	男	㈱双葉興業
12	川西（かわにし）　健司（けんじ）	高松西	男	㈱川西水道機器
13	米重（よねしげ）　絵里（えり）	高松南	女	香川大学
14	中村（なかむら）　泰規（やすのり）	高知西	男	細木病院
15	小出（こいで）　美香（みか）	高知西	女	㈲専蔵
16	井上（いのうえ）　麻衣（まい）	高知西	女	細木病院
17	佐藤（さとう）　剛弘（たけひろ）	高知東	男	内田脳神経外科
18	島田（しまだ）　光明（みつあき）	高知東	男	もみのき病院

●カウンセラー

福島　秀孝　　高松グリーンＲＣ

白石　正明　　高松グリーンＲＣ

高橋千寿子　　高松グリーンＲＣ

石川美佐子　　高松グリーンＲＣ

2680地区

受講生名簿

No.	氏　名	クラブ	性別	勤務先・学校
1	廣瀬（ひろせ）　麻季（まき）	神　戸	女	神戸山手IAC
2	濱野（はまの）　貴子（たかこ）	〃	女	神戸ローターアクト
3	中瀬（なかせ）　浩子（ひろこ）	〃	女	神戸ローターアクト
4	橋本（はしもと）結布子（ゆきこ）	〃	女	神戸ローターアクト
5	矢号（やごう）　明（あきら）	津　名	男	㈱三和製作所
6	山崎（やまざき）　美智（みち）	西宮甲子園	女	大阪大学大学院
7	近藤（こんどう）　洋平（ようへい）	尼崎中	男	京都大学
8	板倉（いたくら）　由佳（ゆか）	尼崎西	女	京都大学
9	木田（きた）　景子（けいこ）	小　野	女	神戸製鋼
10	守光（もりみつ）　優（ゆう）	高　坂	女	学　生
11	今田（いまだ）　和規（かずのり）	姫路南	男	関西福祉大学
12	松田（まつだ）　紳吾（しんご）	〃	男	関西福祉大学
13	川元（かわもと）　祐介（ゆうすけ）	神　崎	男	夢こんだ
14	奥田（おくだ）　奈央（まおう）	〃	女	家事手伝い
15	長谷（ながたに）　順二（じゅんじ）	神戸中	男	オリンピア
16	松本（まつもと）　光代（みつよ）	伊　丹	女	オリジン電機商事㈱
17	川間（かわま）　重徳（しげのり）	川　西	男	オリジン電機商事㈱
18	小河（おごう）　瑞恵（みずえ）	神戸須磨	女	神戸女子大学
19	末友（すえとも）　美紀（みき）	神戸西	女	神戸ローターアクトクラブ

●カウンセラー

徳梅　明彦　　あわじ中央RC

安行　英文　　三田RC

永田　恵子　　神戸垂水RC

吉岡喜久子　　伊丹RC

《第28回ＲＹＬＡセミナー運営委員会》

ガバナー	掛水俊彦	(第2670地区 高知北RC)
	石井良昌	(第2680地区 尼崎西RC)
顧問	今井鎮雄	(第2680地区 神戸西RC)
	深川純一	(第2680地区 伊丹RC)
	安・平和彦	(第2680地区 姫路RC)
アドバイザー	三宅洋三	(第2670地区 高松RC)
	本山新三	(第2680地区 篠山RC)
ディーン	松崎和博	(第2670地区 高松グリーンRC)
副ディーン	秋山紀史	(第2680地区 神崎RC)

■国際ロータリー第2670地区

新世代委員長
岡内紀雄 (高知西RC)

ライラ委員長
松崎和博 (高松グリーンRC)

ライラ委員
日野博夫 (高松RC)
白石正明 (高松グリーンRC)
佐伯直治 (小豆島RC)
篠原成行 (北条RC)
別役重具 (高知東RC)
西松繁夫 (松山南RC)
猪野恵一郎 (松山南RC)
西眞一 (徳島東RC)

■国際ロータリー第2680地区

新世代委員長
井奥寛泰 (姫路南RC)

ライラ委員長
秋山紀史 (神崎RC)

ライラ委員
山口徹 (神戸RC)
大森英夫 (伊丹RC)
鈴木博正 (芦屋川RC)
加藤拓 (伊丹RC)
徳梅明彦 (あわじ中央RC)

●主　催●

ＲＩ第2670地区
ＲＩ第2680地区
ＲＹＬＡ運営委員会

ＲＹＬＡ運営事務所

2670地区　ガバナー事務所
〒780-8663 高知県高知市鷹匠町1－3－35 三翠園ホテル6Ｆ
TEL：088-802-1823　FAX：088-802-1824
E-mail：ri2670@sky.quolia.com

2680地区　ガバナー事務所
〒661-0002 兵庫県尼崎市塚口町1－13－1 アビリティ塚口203号室
TEL：06-6424-6780　FAX：06-6428-3346
E-mail：governor05-06@ri2680.org